

特別史跡

一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅳ

第15・25次、第24次調査

1993

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

口 絵 1 第15・25次, 第24次調査



全 景 (北から)

口 絵 2 第15・25次調査



主殿(SB405)、離座敷(SB406)、門(S1415)遺構 (東から)



第15・25次調査区全景(第15次調査分は既に整備してある) (北から)



元様式染付器台と赤絵皿



SK 450一括出土遺物

口 絵 4 第24次調査



▲ 第24次調査・庭園 SG 829

◀ 第24次調査出土
不遊環青磁花生



序

特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡の発掘調査事業も、昭和47年4月に福井県が朝倉氏遺跡調査研究所を設立し、本格的に着手してから20年を超えました。これまで平地部の主要な遺構の朝倉館や一族の屋敷、武家屋敷、町屋、寺院、城戸などの発掘調査が終了し、朝倉館や中の御殿跡、新馬場や出雲谷の武家屋敷跡の報告書はすでに刊行されています。

今回の報告書は第4冊目になりますが、対象地としては城下町で最も重臣の屋敷が集中している地区の一面をとりあげました。新馬場の東側と北側にあたりますので、すでに発行されている報告書IIとあわせてごらんいただくとよろしいかと思えます。東北部で発掘された中規模の武家屋敷跡は、昭和57・58年度に原寸で立体的に復元整備されており、その整備報告書も刊行されています。

これらの地区は比較的遺構の残存状況もよく枯山水の平庭も検出され、また種々の花器や茶器、文房具なども数多く出土し、武家屋敷内での優雅な文化的生活がしのべられます。この報告書が戦国時代の城下町の構造や生活の実態を知る上で、いささかでもお役に立ちますれば幸いです。

なお、事業の実施にあたり、懇切なるご指導とご高配をいただきました文化庁をはじめ関係各位の皆様、ならびに終始かわらぬ暖かいご支援をいただきました城戸ノ内をはじめとする地元の皆様に対し、心から感謝申し上げます。

平成5年3月

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
館長 藤原武二

目 次

口 絵	3
序	11
目 次	13
図版・表目次	14
I. 調査事業概要	
1. 調査目的	3
2. 調査経過	3
3. 調査方法及び組織	5
4. 経 費	7
5. 本報告書について	8
II. 第15・25次調査	
1. 調査概要	11
2. 遺 構	15
3. 遺 物	25
4. 小 結	37
III. 第24次調査	
1. 調査概要	43
2. 遺 構	47
3. 遺 物	53
4. 小 結	65

図 版 目 次

口 絵 (カラー)

1. 第15・25次、第24次調査(全景)
2. 第15・25次調査(遺構)
3. 第15・25次調査(遺物)
4. 第24次調査(遺構・遺物)

図 面

第15・25次調査		第24次調査	
第1図	土層図	第30図	第15・25次調査遺物(16)
2	遺構平面詳細図(1)	31	第15・25次調査遺物(17)
3	遺構平面詳細図(2)	32	第15・25次調査遺物(18)
4	遺構平面詳細図(3)		
5	遺構平面詳細図(4)		
6	遺構平面詳細図(5)		
7	遺構平面詳細図(6)		
8	遺構平面詳細図(7)		
9	遺構平面詳細図(8)		
10	遺構平面詳細図(9)		
11	遺構平面詳細図(10)		
12	遺構平面詳細図(11)		
13	井戸実測図		
14	石積施設実測図		
15	第15・25次調査遺物(1)		
16	第15・25次調査遺物(2)		
17	第15・25次調査遺物(3)		
18	第15・25次調査遺物(4)		
19	第15・25次調査遺物(5)		
20	第15・25次調査遺物(6)		
21	第15・25次調査遺物(7)		
22	第15・25次調査遺物(8)		
23	第15・25次調査遺物(9)		
24	第15・25次調査遺物(10)		
25	第15・25次調査遺物(11)		
26	第15・25次調査遺物(12)		
27	第15・25次調査遺物(13)		
28	第15・25次調査遺物(14)		
29	第15・25次調査遺物(15)		
		第33図	土層図
		34	石垣立面図
		35	遺構平面詳細図(1)
		36	遺構平面詳細図(2)
		37	遺構平面詳細図(3)
		38	遺構平面詳細図(4)
		39	遺構平面詳細図(5)
		40	遺構平面詳細図(6)
		41	遺構平面詳細図(7)
		42	第24次調査遺物(1)
		43	第24次調査遺物(2)
		44	第24次調査遺物(3)
		45	第24次調査遺物(4)
		46	第24次調査遺物(5)
		47	第24次調査遺物(6)
		48	第24次調査遺物(7)
		49	第24次調査遺物(8)
		50	第24次調査遺物(9)
		51	第24次調査遺物(10)
		52	第24次調査遺物(11)
		53	第24次調査遺物(12)
		54	第24次調査遺物(13)
		55	第24次調査遺物(14)

写 真 (モノクロ)

第15・25次調査

- PL. 1 調査区全景航空写真
 2 調査区全景
 3 調査区全景
 4 調査区主要部
 5 調査区主要部
 6 土塁 (SA 383, 266, 267, 384他)
 7 門と溝 (SI 279, SI 415他)
 8 建物と庭 (SB 405・406とSG 420他)
 9 建物 (SB 407~409他)
 10 諸施設 (SA 392, SK 451他)
 11 石組井戸 (SE 428~435, 905他)
 12 石積施設 (SF 436~443)
 13 石積施設 (SF 444~446他)
 14 石積施設 (SF 907, 908他)
 15 A地区Ⅰ期整地層出土遺物
 16 A地区Ⅰ期整地層, Ⅲ期整地層出土遺物
 17 A地区Ⅲ・Ⅳ期遺構出土遺物
 18 A地区Ⅲ・Ⅳ期遺構, Ⅳ期遺構出土遺物
 19 A地区Ⅳ期整地層出土遺物 (1)
 20 A地区Ⅳ期整地層出土遺物 (2)
 21 A地区Ⅳ期整地層出土遺物 (3)
 22 A地区Ⅳ期整地層, B地区Ⅲ期遺構出土遺物
 23 B地区Ⅲ・Ⅳ期遺構 (SK 450) 出土遺物
 24 B地区Ⅲ期遺構 (SK 452) 出土遺物 (1)
 25 B地区Ⅲ期遺構 (SK 452) 出土遺物 (2)
 26 B地区Ⅲ期遺構出土遺物
 27 B地区Ⅲ期遺構, 同整地層出土遺物
 28 B地区Ⅲ期整地層出土遺物
 29 B地区Ⅲ・Ⅳ期遺構, Ⅳ期遺構出土遺物
 30 B地区Ⅳ期整地層出土遺物 (1)
 31 B地区Ⅳ期整地層出土遺物 (2)
 32 B地区Ⅳ期整地層, 表土出土遺物

第24次調査

- PL. 33 調査区全景
 34 調査区全景・土塁 (SA 265・SS 260)
 35 礎石建物 SB 830・SB 831
 36 礎石建物 SB 835他
 37 庭 SG 829他
 38 土壇・石敷・盲暗渠 (SX 867・SK 853他)
 39 柵列 SA 846他
 40 門・土塁 (SI 821・SA 263)
 41 溝・柵列・石敷 (SA 857・SD 827他)
 42 石積施設・井戸 (SF 851・SE 848他)
 43 庭・甕埋設遺構他
 44 Ⅰ期遺構面・整地層出土遺物 (1)
 45 Ⅰ期遺構面・整地層出土遺物 (2)
 46 Ⅱ期遺構面・整地層出土遺物
 47 SE 847出土遺物 (1)
 48 SE 847出土遺物 (2)
 49 SE 847出土遺物 (3)
 50 SE 849出土遺物
 51 Ⅲ期各遺構出土遺物
 52 Ⅲ期遺構面・整地層出土遺物 (1)
 53 Ⅲ期遺構面・整地層出土遺物 (2)
 54 Ⅲ期遺構面・整地層出土遺物 (3)
 55 Ⅲ期遺構面・整地層出土遺物 (4)
 56 Ⅲ期遺構面・整地層出土遺物 (5)
 57 Ⅲ期遺構面・整地層出土遺物 (6)

挿 図

第15・25次調査

- 挿図 1 周辺地形図
2 第15・25次調査グリッド設定図
3 武家屋敷門 SI 415内面土層図
4 建物 SB 405の柱据え刻線間の寸法
5 SE 434出土手水鉢実測図
6 SX 462出土銅盤実測図
7 B地区Ⅲ期整地層出土銅銭

第24次調査

- 挿図 8 第24次調査区位置図
9 第54, 10・11, 24次調査区遺構模式図
10 第24次調査グリッド設定図
11 庭跡 SG 829平面図・立面図
12 井戸 SE 847平面図・立面図, 石積施設
SF 851平面図・立面図
13 井戸 SE 848出土漆器椀・曲物
14 Ⅲ期遺構面・整地層出土の土師質皿
15 第Ⅰ期遺構配置図
16 第Ⅱ・Ⅲ期遺構配置図
17 第Ⅰ期遺構主要部断面図
18 第24次調査出土の土師質皿
19 第77次調査出土の土師質皿

表

第15・25次調査

- 表 1 第15・25次調査遺構一覧表
2 時期区分表
3 A地区検出の井戸・石積施設一覧表
4 B地区検出の井戸・石積施設一覧表
5 第15・25次調査出土遺物一覧表
6 SK 452出土大甕一覧表
7 陶磁器の生産地別比率
8 陶磁器の生産地別器種構成

第24次調査

- 表 9 時期別遺構一覧
10 第24次調査出土陶磁器組成表
11 一乗谷朝倉氏遺跡出土陶磁器組成表

付 図

- 付図 1 一乗谷朝倉氏遺跡地形図
2 第15・25次調査遺構全測図
3 第24次調査遺構全測図

I、調査事業概要

I. 調査事業概要

1. 調査目的

一乗谷朝倉氏遺跡は、戦国大名朝倉氏が、その領国支配の拠点とした所であって、ここには、当主の館を中心として、山城・上下の城戸・一族の居館・家臣団屋敷・町屋・寺院等が一体となり、極めて良好に遺存している。この良好に遺存する遺跡を国民共有の文化遺産として保護を計るため、昭和46年、278 haという広大な区域を国の特別史跡として指定し、同時に遺構の集中する平地部の内、人家集中地を除く約25haを公有化することを決定した。

遺跡保護の目的は、単に遺構を物理的に保存することに止まらず、遺跡を究明し、その成果を公表し広く一般の人々の知的向上に資することにあるといえよう。そのため、遺跡の発掘調査は欠くことのできない基礎作業として位置付けられる。また、こうした遺構を保護すると共に、見学者に公表するための遺跡整備事業が必要となる。こうした事業を計画的に進め、「遺跡をして自らを語らせる」ことをテーマに『史跡公園』化計画を立案、着手した。

発掘調査は、この事業の基礎として、計画的かつ継続的に現在も実施している。

2. 調査経過

本遺跡が、朝倉氏五代の居城跡であることは、古くより知られており、近世の地誌等にもその記述がみられる。降って、昭和5年7月8日には、朝倉館跡及び湯殿跡・諏訪館跡・南陽寺跡、1.4 haが国の史跡及名勝に、西山光照寺跡1.6 haが国の史跡に指定され、その保護が計られることとなった。第二次世界大戦後に至り、管理団体であった足羽町は、朝倉遺跡の唐門の修理（昭和38年）、一乗谷初代孝景墓（英林塚）の覆屋建設（昭和40年）の事業を実施すると共に、昭和42年には、これらの史跡の保存と活用を計るため、朝倉氏遺跡整備事業委員会を設け、環境整備事業3ヶ年計画を立案し、着手した。また、同年12月11日には、山城跡・上下の城戸跡等が国の史跡として追加指定され、その指定面積は、6.8 haに拡大した。事業は、まず、良好に残る庭園跡の整備から始められ、翌43年には、朝倉館跡の発掘調査が実施され、極めて良好に遺構が残ることが確認され、遺跡の重要性が高まった。

一方、昭和44年には、当遺跡を含む一乗谷地区の農業構造改善事業が始まり、谷の奥部、上城戸以南から着工され、ここにおいて多量の遺物や遺構が露呈し、遺跡は破壊の危機に直面することとなった。事の重大さに気付いた知識人や文化財関係者は、この事業の中止を求め、奔走し、遺跡の中心となる城戸ノ内住民の同意を得て、上下の城戸により区画された「城戸ノ内」と山城を含む周囲の山林の278 haという広大な地域を国の特別史跡として格上指定し、保存することを決定し、昭和46年7月29日に、その旨が告示された。そして、住民の居住地を除く農地の大半は一括全面買収され、以前からの公有化地と合せ、約25haを公有化し、保護することとなった。

この広大な遺跡の保存と活用を計るため、管理団体（足羽町は昭和46年に福井市に合併され、福井市がこれを引き継いだ）が実施してきた発掘調査・環境整備事業を福井県が分担し、管理団体と共同して

諸事業に当ることとなった。そこで県は、まず、昭和47年3月、この事業の指針となる「朝倉氏史跡公園基本構想」を策定し、同年4月、その実施機関として教育庁に「朝倉氏遺跡調査研究所」を開設し、事業の本格的推進の基礎を固めた。また、昭和49年3月には、「基本構想」の実施に向け、「一乗谷朝倉氏遺跡整備基本計画」を策定した、諸事業は、これらに基いて、計画的かつ継続的に実施されている。

これまでに実施した諸事業の概要は、以下の通りである。

- 第1次5ヵ年計画（S. 42～46）〔発掘調査面積 6,780㎡〕

内容 当初は3ヵ年計画として足羽町が開始したが、後に延長された。これを第1次と位置付ける。湯殿跡・諏訪館跡・南陽寺跡の各庭園の修復整備、および朝倉館跡の発掘調査・整備を主な内容とする。また、遺跡基本図（1/1,000）の作成も合わせて実施。
- 第2次5ヵ年計画（S. 47～51）〔発掘調査面積 18,989㎡〕

内容 朝倉館跡の発掘調査および武家屋敷跡・寺院跡等の発掘調査を通じ、遺跡の概要の解明を主眼とする。合わせて、これらの検出遺構を平面整備する。第1～20次調査がこれに当たる。
「一乗谷石造遺物調査報告書I」刊行（S. 49）
「特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘整備事業10周年記念展」（於、県立岡島美術記念館）開催（51年10月）
- 第3次5ヵ年計画（S. 52～56）〔発掘調査面積 29,310㎡〕

内容 第2次5ヵ年計画により検出された武家屋敷を主とする平井地区、寺院・町屋群を主とする赤淵・奥間野地区の面的調査を実施し、城戸ノ内の概要を解明する。また、その平面復原整備を実施する。第21～40次調査がこれに当たる。また、懸案となっていた出土遺物等の展示を目的とする資料館を開館（昭和56年8月20日）。
「環境整備事業報告書I」刊行（S. 52. 3）
資料館展示図録「一乗谷」刊行（S. 56. 8）
- 第4次5ヵ年計画（S. 57～61）〔発掘調査面積 16,513㎡〕

内容 赤淵・奥間野地区を中心として面的調査の拡大を計り、これを通じて城戸ノ内の町割の計画のあり方の解明を目指す。これらを平面復原整備すると共に、武家屋敷を立体復元整備する。第41～56次調査がこれに当たる。史跡公園センター開設（昭和58年5月15日）。
「県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書」刊行（S. 58. 3）
「朝倉氏遺跡発掘調査報告I 朝倉館跡の調査」刊行（S. 59. 3）
開館5周年記念特別展「一乗谷と中世都市 一まちなみとくらしの復原」開催（S. 61. 8）
同図録「一乗谷と中世都市」刊行（S. 61. 8）
同シンポジウム「一乗谷と中世都市 一都市の構造と生活の復原」開催（S. 61. 8）
- 第5次5ヵ年計画（S. 62～H. 3）〔発掘調査面積 21,553㎡〕

内容 上城戸等の要所の調査を通じ遺跡の全体像の解明を目指す。また庭園跡の再調査を実施する。なお、その結果を加えて、庭園跡は平成3年5月28日、「一乗谷朝倉氏庭園」として国の特別名勝に格上指定された。平面復原整備と共に、平成3年度から町並立体復原を主とする史跡等活用特別事業に着手（4ヵ年を予定）。第57～76次調査がこれに当たる。

- 「一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅱ」刊行（S. 63. 3）
- 「一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅲ」刊行（H. 2. 3）
- 「一乗谷朝倉氏遺跡環境整備報告Ⅱ 一武家屋敷立体復元事業」刊行（H4. 3）
- 企画展「朝倉文化と茶の湯」開催（S. 62. 8）
- 第2回企画展「石の鬼 一乗谷の笏谷石」開催（S. 63. 8）同図録刊行
- 第3回企画展「一乗谷のくらしと木」開催（H. 元. 8）同図録刊行
- 第4回企画展「一乗谷と越前焼」開催（H 2. 8）同図録刊行
- 開館10周年記念特別展「朝倉の遺宝」開催（H. 3. 8）同図録刊行

3. 調査方法及び組織

調査は、国庫補助事業として、福井県が直接実施している。その実施機関として、福井県教育庁朝倉氏遺跡調査研究所（昭和47年4月1日～昭和56年8月19日）、及び、これを改組した福井県立朝倉氏遺跡資料館（昭和56年8月20日～。なお、平成4年4月1日から、名称が一乗谷朝倉氏遺跡資料館となった）が設置され、その任に当たっている。また、その指導のため、朝倉氏遺跡調査研究協議会が設置されている。

本報告書に関係する年度における組織を以下に示す。

○昭和50年度（第15次調査時）

朝倉氏遺跡調査研究協議会

- 会 長 青園謙三郎（福井テレビ 社長）
- 委 員 石田 昇（城戸ノ内町 町内会長）
- 〃 大久保道舟（県文化財専門委員会 委員長）
- 〃 黒板 昌夫（国土館大学 教授）
- 〃 田治 六郎（大阪公園協会 理事長）
- 〃 戸塚 文子（評論家）
- 〃 松下 圭一（法政大学 教授）
- 〃 水上 勉（作 家）
- 専門委員 伊藤 滋（東京大学 助教授）
- 〃 岸谷 孝一（東京大学 助教授）
- 〃 木原 啓吉（朝日新聞 編集委員）
- 〃 近藤 公夫（奈良女子大学 助教授）
- 〃 重松 明久（福井大学 教授）
- 〃 鈴木 嘉吉（奈良国立文化財研究所 平城宮跡発掘調査部 部長）
- 〃 田畑 貞寿（千葉大学 助教授）

朝倉氏遺跡調査研究所

- 所 長 河原 純之（考古）
- 次 長 藤原 武二（造園）

文化財調査員 水藤 真（文献）
" 水野 和雄（考古）
" 小野 正敏（考古）
" 岩田 隆（考古）
" 吉岡 泰英（建築史）

○昭和52年度（第24・25次調査）

朝倉氏遺跡調査研究協議会

会 長 青園謙三郎（福井テレビ 社長）
委 員 梅田 豊一（城戸ノ内町 町内会長）
" 大久保道舟（県文化財専門委員会 委員長）
" 黒板 昌夫（国士館大学 教授）
" 戸塚 文子（評論家）
" 水上 勉（作 家）
専門委員 伊藤 滋（東京大学 助教授）
" 岸谷 孝一（東京大学 教授）
" 木原 啓吉（朝日新聞 編集委員）
" 近藤 公夫（奈良女子大学 教授）
" 重松 明久（福井大学 教授）
" 田畑 貞寿（千葉大学 助教授）
" 坪井 清足（奈良国立文化財研究所 所長）

朝倉氏遺跡調査研究所

所 長 河原 純之（考古）
次 長 藤原 武二（造園）
文化財調査員 水藤 真（文献）
" 水野 和雄（考古）
" 小野 正敏（考古）
" 岩田 隆（考古）
" 吉岡 泰英（建築史）

○平成4年度（本報告書作成）

朝倉氏遺跡調査研究協議会

会 長 青園謙三郎（福井テレビ 会長）平成5年3月2日逝去
副 会 長 近藤 公夫（神戸芸術工科大学 教授）
委 員 石井 進（国立歴史民俗博物館 教授）
" 石田 昇（朝倉氏遺跡保存協会 会長）
" 木原 啓吉（千葉大学 教授）
" 岸田 清（城戸ノ内町 自治会長）

委員	小林健太郎（滋賀大学 教授）
〃	田畑 貞寿（千葉大学 教授）
〃	玉置 伸悟（福井大学 教授）
〃	坪井 清足（大阪文化財センター 理事長）
〃	平井 聖（昭和女子大学 教授）
〃	松浦 義則（福井大学 教授）

一乗谷朝倉氏遺跡資料館

館長	藤原 武二（造園）
次長	大塚セツ子（事務）
主任文化財調査員	水野 和雄（考古）
〃	岩田 隆（考古）
〃	吉岡 泰英（建築史）
主査	南 洋一郎（考古）
〃	佐藤 圭（文献）
〃	月輪 泰（考古）
嘱託	舟澤 茂樹（学芸）
〃	高野 正春（事務）

また、発掘調査・遺物整理は多くの補助員、作業員の協力により進めることが出来た。その名を以下に記す。

補助員 （発掘調査・遺物整理） 南洋一郎、川村俊彦 （事務） 吉越強

作業員

（発掘調査） 石田カズキ、石田艶枝、石田はまを、石田ミヨ子、伊與ふじ子、梅田みさを、奥田恵美子、奥田末子、奥田まつえ、奥田ユリ、小林澄子、小林ヒサヲ、田中和子、田中トシヲ、谷口惣次郎、戸田起世子、平井茂左衛門、福岡敏子、福岡まつ子、福岡遊蔵、福岡義信、藤田武志、前田しなえ、三崎チエ子、山口堅、山口さだを、山下喜美子、吉川サグ子

（遺物整理） 朝倉八重子、石田隆代、上田優子、佐飛康子、杉本直子、田中直美、辻岡幸子、長谷川和子、平井悦子、藤田恵美子、安田春代

4. 経 費

本報告書に関係する各年度の発掘調査経費及び印刷製本費は以下の通りである。

○昭和50年度（第15次調査）

発掘調査経費 22,000千円 [発掘調査面積 4,450㎡ 内第15次調査 2,400㎡]

○昭和52年度（第24・25次調査）

発掘調査経費 20,000千円 [発掘調査面積 4,600㎡ 内第24・25次調査 4,400㎡]

※なお、第25次調査には県道改良工事に伴う事前調査として
200㎡が加わっている。

○平成4年度（本報告書）

報告書印刷製本費 2,000千円

5. 本報告書について

内 容 本報告書は、国庫補助事業として福井県が昭和50年度、及び昭和52年度に実施した第15次調査、第24・25次調査の報告である。各年度毎に事業概報として速報を公刊しているが、その内容については本報告書が優先する。また、第15次調査区と第25次調査区は、一つの屋敷を分割調査していることもあり合せて取り扱う。また、県道改良工事に伴う事前調査として第25次調査内で実施した約200㎡もこれに含んでいる。本書の構成は、3章からなり、Iは、全体の調査概要、IIは第15・25次調査、IIIは第24次調査について記す。

執 筆 本報告書は各調査時の諸記録等を基に、館長藤原武二の指導の下、以下の分担により執筆し、編集は月輪泰が当った。I 吉岡泰英、II-1 吉岡、II-2 水野和雄、II-3 月輪泰、II-4 水野・月輪、III-1・2 南洋一郎、III-3 岩田隆、III-4 岩田・南

図 面 遺構実測図原図の内、第15次調査については当時の研究所員及び調査補助員南洋一郎（当時）が当り、第24・25次調査についてはアジア航測（株）に委託し、空中写真測量により作成したものである。遺物実測図の作成は、担当者と共に遺物整理作業員もこれを助けた。なお、版下は主として執筆者が作成した。また、挿図として使用した地形図は、昭和44年度に足羽町がパシフィック航業（株）に委託して作成した基本図（1/1,000）及びこの集成図による。

その他 本報告書の遺構図に用いた座標は「第VI系」である。

また、遺構番号の頭に付した記号は以下の分類によるものである。

S A：土塁・塀・柵，S B：建物，S D：溝，S E：井戸，S F：石積施設，S G：庭園，S I：門
S K：土壇，S S：道路，S V：石列・石垣，S Z：暗渠，S X：その他

II、第 15 ・ 25 次 調 査

断をはさみ、同年9月26日に終了した。この調査では、屋敷の明確な北境界を確認するに至らず、次の調査を待つこととなった。第25次調査区は、福井市城戸ノ内町字平井及斉藤地係であり、先の第15次調査を受けて、その北に設定されたものである。南北約55m、東西約45m、面積約2,400㎡の範囲で、昭和52年8月3日に調査を開始し、同年11月8日に終了した。

調査区の位置する一乗谷川西岸の字平井地係を中心とする地区の地形をみると、西の山裾と一乗谷川までの間は、ほぼ平坦で、全体は水田化されている。その平坦地の幅は約100mで、中程やや東寄りに南北方向の石垣が若干雁行しながら存在し、これを境として、西の山裾部が東の川寄りに比べ、0.6～1.2m程高くなっており、さらに一乗谷川に沿って帯状の幅10m程の小区画の水田は、0.3～0.5m程下る。一乗谷川水面はこの1.5～2.0m下となる。ちなみにこの中央部の海拔高は西山裾部の水田が52.8m、南北石垣の上部の水田で52.4m、下部の水田で51.5m、一乗谷川沿の水田で50.8m、水面は49m程であり、また、この付近の一乗谷川の勾配は15～20%である。水田の規模は、大きなもので1,200㎡程、小さなものは60㎡あまりと差が大きいが、300㎡、いわゆる1反程のものが平均的である。水田耕土は、0.1～0.15m程度と比較的浅く、山裾からは、山からの地下水が若干浸出する所も散見されるが、比較的水田の水放けは良い。ここで報告する第15・25次調査区は、こうした地区の内、中央やや東寄りの石垣から東、一乗谷川との間、幅35～45m、南北約120mの範囲で、大小合せて16区画の水田から成る。最も高い西南の水田で海拔高約52m、最も低い東北の水田で約50mである。

調査グリッドは、この地区にみられる土塁の痕跡を伝えると考えられる高まりや水田畦畔に基いて先の第10・11次調査時に設定したものを踏襲した。

第15次調査は、南北に約66mと長く、かつこの調査区の西はすでに第10・11次調査を実施し、その平面復原整備を実施しており、また東は一乗谷川であることから、その発掘排土地は調査区の南北に設定せざるを得ないこと等から、調査区を南北に2分して調査を実施することとした。まず、南半からベルトコンベアーを使用し、耕土除去を始めた。一部建物礎石や井戸・石積施設等の遺構で床土上面にて検出されるものもみられる。また遺物もこの床土面に若干みられる。しかし、調査で目指すのは、この床土下の遺構・遺物を主としていることはいうまでもない。耕土・床土除去後、本格的な遺構検出を開始し、南半部の概略の遺構を検出後、北半部へ移った。北半部では、きわめて良好に遺存する建物跡・庭園跡が検出され、この建物全体を解明するため、一部調査区を北へ拡張した。ほぼ1.5ヶ月で概略調査を終え、一旦、一乗小学校体育館建設に伴う緊急調査のため約1ヶ月中断し、その後、土層実測図作成、遺構写真撮影、そして遣り形測量を用いた実測図作成と調査を進め、下層遺構等確認の補足調査を実施し、調査を終えた。

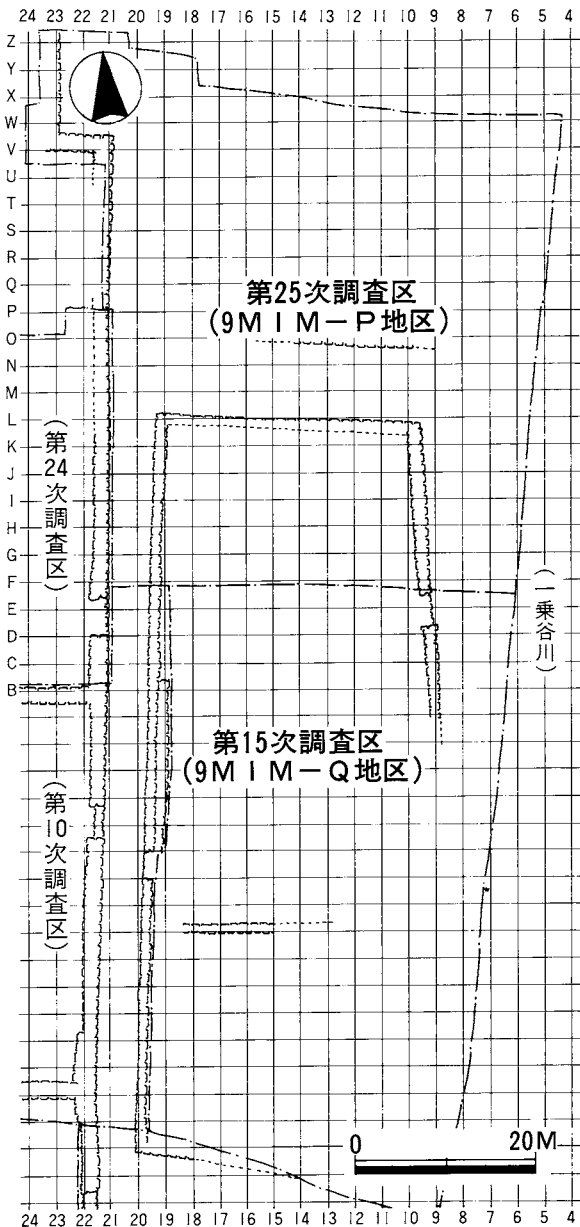
第25次調査は、まず、調査区南半に存在した第15次調査廃土を機械により除去し、次いで、調査区の耕土・床土をベルトコンベアーを使用して除去した。先の第15次調査により検出されていた屋敷境界となる土塁を確認し、全体の屋敷割を明らかにした後に、その屋敷内の遺構検出を行うこととした。その結果、ほぼ中央に幅約8mの東西方向道路が存在し、南は第15次調査で検出した屋敷の一部となり、北は別屋敷となることが判明した。また、南半の屋敷は良好に遺構が残るが、北半の屋敷は後世の水田化に際して削平を受け、ほとんど遺構は残らないことが明らかとなった。また、この地区の中程を南北に貫く道路跡を本調査区の西境界として考え、先行する第10・11次調査、第15次調査、第24次調査で検出されていた道路とこの西側石垣の検出を実施した。北西端では石垣が西へ折れ曲ることが明らかとなったため、調査区を西北に拡張することとし、その結果、ほぼ道路幅分(約6m)西へ矩折れとなり、北

へ延びていることが判明した。こうした概略調査に約2ヶ月を要し、遺構写真撮影、下層遺構の確認等の補足調査を実施し、遺構平面図をヘリコプターを用いた空中写真測量により作成し、土層図・石垣立面図等は手書により作成し、調査を終えた。

こうした調査の結果、町割の基本となる道路や、屋敷を区画する土塁等が明らかとなり、また、一部後世の削平部がみられたもののきわめて良好に残る遺構群等が検出され、当初の目的をほぼ達成することが出来たといえよう。なお、こうした調査成果を受け継ぎ この地区の調査範囲も広がり、町割の構造等がかなり明確になって来ている。

調査日誌抄

第15次調査 (1975年5月16日～9月26日)



挿図2 第15・25次調査グリッド設定図

- 5・16 調査開始。ベルコン搬入。グリッド設定、地区抗打。調査区を南北に2分し、南半より耕土除去を始める。
- 5・21 排水路を兼ね南北道路側溝 S D 268 を掘り下げる。
- 23 E15で播鉢出土、底に穴有。
- 24 石積施設 S F 440 一部検出。建物 S B 407・408 の南辺を検出。
- 27 井戸 S E 431・435、石積施設 S F 443 検出。
- 28 南半の耕土除去終了し、床土下の遺構検出に着手。
- 29 溝 S D 387、石積施設 S F 445・447 等を検出。土壇 S K 452 を検出、内部は焼土で、多量の大甕片有。
- 30 井戸 S E 431 を確認。S K 452 内に大甕が設置されていたことを確認。
- 6・2 土塁 S A 383 の北面石垣を確認。
- 3 溝 S D 387・391 等を検出。
- 4 南北土塁 S A 266 の東面石垣を確認。井戸 S E 358、石積施設 S F 448 検出。
- 5 ベルコンを北半部へ移動。
- 6 北半部の耕土除去開始。
- 10 建物 S B 407・408 のほぼ全容判明。
- 11 北半部耕土除去終了。床土下の遺構検出に着手。
- 12 庭園 S G 420 の一部を検出。溝 S D 393・394 を検出。
- 13 建物 S B 405 一部検出。
- 14 井戸 S E 430 検出。
- 17 建物 S B 405 の規模判明、保存はきわめて良好。
- 19 通路 S S 386、溝 S D 387 検出。
- 20 井戸 S E 429 検出。
- 24 建物 S B 405 の全容解明のため、調査区を一部北

- へ拡張。東土壘 S A 384 検出。
- 26 建物 S B 405 内より井戸 S E 428 検出。
- 30 溝 S D 388, 掘立柱列 S A 392 検出。
- 7・2 ピットより鉄細茶入・小壺, 硯等一括出土。遺構検出をほぼ終了。
- 3 一乗小学校体育館建設に伴う緊急調査 (第16次) のため, 本調査は一時中断する。
- 28
- 29 調査再開。土層実測図作成。(～31)
- 8・1 土層観測用畦を除去。(～5)
- 6 遺構清掃。(～8)
- 9 写真撮影。(～11)
- 12 遣り形を設定。実測図作成開始。(～9.3)
- 9・4 補足調査。(～16)
- 17 補足調査部実測。(～24)
- 25 清掃
- 26 写真撮影。第15次調査終了。

第25次調査 (1977年 8月3日～11月8日)

- 8・3 調査開始。ベルコン搬入。第15次調査廃土及耕土除去に着手。
- 25 表土除去ほぼ終了。グリット設定。地区杭打。
- 29 遺構検出に着手。
- 31 東土壘 S A 384 の検出を始める。
- 9・1 東土壘 S A 384 の北端を確認。北土壘 S A 891 の検出に着手。
- 2 北土壘に平行する溝 S D 896 検出。
- 5 建物 S B 903 検出。北土壘に平行して北に石列 S V 894 を検出。この間が東西方向道路 S S 944 と推定される。
- 6 溝 S D 900, 石積施設 S F 909 等を検出。
- 7 石積施設 S F 910 等を検出。
- 8 石積施設 S F 909 には溝 S D 943 が付属することが判明し, この溝より銅碗出土。
- 10 井戸 S F 905, 溝 S D 898 等検出。
- 14 北半部確認のため断ち割りトレンチを設定。削平のためほとんど遺構は残っていないことを確認。
- 17 調査区北西辺に屋敷境界確認のためのトレンチを設定。
- 21 南北道路の西側土壘 S A 892 は調査区北端近くで西へ折れることが判明。この矩折部確認のため調査区を北西に一部拡張。
- 26 西側土壘 S A 892・893 の全容を確認し, 土壘の幅・高が明らかとなる。また矩折入隅部で暗渠 S Z 914 を検出。
- 28 道路矩折部を東西に横断する溝 S D 901 を検出。この溝上に笏谷石の蓋がかけられていたことが判明。
- 30 遺構検出を終了。清掃。(～10.5)
- 10・6 写真撮影
- 7 補足調査に着手。
- 11 北土壘 S A 891 脇より和鏡出土。
- 14 東土壘 S A 384 の幅確認のためのトレンチを設定し, 下層で石垣を検出。
- 10・15 先に検出した下層石垣 (土壘 S A 384) に伴う下層遺構確認作業に着手。
- 20 補足調査終了。清掃。
- 21 補足調査に伴う写真撮影。
- 25 24次調査も含めた空中写真測量実施。
- 26 石垣立面図, 土層図等作成。
- 11・8 調査終了。

2. 遺 構 (第1図～第14図, P L. 1～P L. 14)

第15次調査区は、9MIM-Q 地区の東半分であり、西半分は報告書IIで報告されている第10・11次調査区である。第25次調査区は、9MIM-P 地区の東半分であり、西半分は本報告書で報告されている第24次調査区である。ここで詳述する第15・25次調査区は、道路 S S 975・260・944 と東の一乗谷川とで画された A・B 地区内についてである。なお、第25次調査区の北半分では、一部で道路 S S 260 やその矩折部分、隣屋敷の土塁 S A 892 などが検出されたが、この屋敷は平成5年度に発掘調査することになっており、また、大半の部分が一乗谷川の氾濫で削平されていることもあって、今回の報告では省略することとした。A 地区 (第15次調査区の北半分と第25次調査区の南半分) は、東西約30m、南北約60mの武家屋敷であり、遺構の残存が極めて良好であった。B 地区 (第15次調査区の南半分) は、土塁を巡らした武家屋敷とみられる時期から、多数の石積施設が並ぶ小規模建物の時期まで町並が多様に変遷しているようであり、一乗谷城下町の構成を考える上で極めて貴重な遺構であるといえよう。

種別	番号	時期	摘要	延	S G 420	III・IV	坪庭	石列	S X 466	III・IV	
道路	S S 260	II・III・IV	第10・11次で検出	石列	S X 421	III・IV		暗渠	S Z 467	III・IV	S A 384に開く
土 塁	S A 266	II・III・IV	"	"	S X 422	III・IV		土 塁	S A 891	II・III・IV	石段かもしれない
"	S A 267	III・IV	"	"	S X 423	III・IV		石 段	S V 894	II・III・IV	道路端
側 溝	S D 268	II・III・IV	" 一部検出	"	S X 424	III・IV		側 溝	S D 896	II・III・IV	S S 944の側溝
"	S D 271	III・IV	" 検出	"	S X 425	III・IV	S F 440付近	溝	S D 897	III・IV	
"	S D 273	II	"	"	S X 426	III・IV		"	S D 898	III・IV	S E 905の排水
門	S I 279	II・III・IV	"	石列	S X 427	III	S F 441付近	"	S D 899	III・IV	
井 戸	S E 358	IV	"	井 戸	S E 428	III・IV	武家屋敷の主殿にある	"	S D 900	III・IV	S X 920の排水
土 塁	S A 383	III・IV	武家屋敷と町屋群を隔てる	"	S E 429	III・IV	浅く水があふれる	建 物	S B 903	III・IV	武家屋敷の礎(石敷)
"	S A 384	II・III・IV	武家屋敷の東辺を限る	"	S E 430	III・IV	S B 416井戸屋形内	S B 904	III・IV	(礎石)	
"	S A 385	III・IV	S B 405の目隠し堀	"	S E 431	III・IV	井戸屋形内カ	井 戸	S E 905	III・IV	
通 路	S S 386	III・IV	S I 279に接続	"	S E 432	III・IV		石積施設	S F 906	II・III	S A 266に接する
溝	S D 387	III・IV	S S 386の側溝	"	S E 433	III・IV		"	S F 907	III・VI	
"	S D 388	III	蒸掘り	"	S E 434	III	石製手水鉢出土	"	S F 908	III・VI	
"	S D 389	III・IV	S S 386の側溝	"	S E 435	III	天端石残っている	"	S F 909	III・VI	排水溝 S D 943をもつ
通 路	S S 390	III・IV	S E 431への石段あり	石積施設	S F 436	III・IV	北辺は作りかえ	"	S F 910	III・VI	} 並んでいる
溝	S D 391	III・IV	S S 390の側溝	"	S F 437	III・IV	S B 405と一体	"	S F 911	III・VI	
堀	S A 392	III・IV	目隠し堀	"	S F 438	III・IV	排水溝をもつ	"	S F 912	III・VI	
溝	S D 393	III・IV	S A 385に沿う	"	S F 439	III・IV		暗 渠	S Z 915	III・VI	S D 898にともなう
"	S D 394	III・IV	S B 416(井戸屋形)付近	"	S F 440	III・IV		"	S Z 916	III・VI	S D 897にともなう
"	S D 395	III・IV	S Z 467に注ぐ	"	S F 441	III		石 列	S X 917	IV	
"	S D 396	III		"	S F 442	III・IV		"	S X 918	IV	
"	S D 397	III		"	S F 443	III		"	S X 919	IV	
"	S D 398	III	S F 438の排水溝	"	S F 444	III		石 組	S X 920	III・IV	水溜カ、S D 900に接続
"	S D 399	III・IV	S B 405の雨落溝	"	S F 445	III		石	S X 921	III・IV	
"	S D 400	III・IV	S B 405の雨落溝	"	S F 446	III		石 敷	S X 922	III・IV	S B 903の石敷床面
"	S D 401	III・IV	S B 406の床下を流れる	"	S F 447	III		"	S X 923	III・IV	
"	S D 402	III・IV		"	S F 448	III・IV		石	S X 924	I	礎石カ
"	S D 403	III		土 塚	S K 449	III・IV		"	S X 925	III・IV	
"	S D 404	III・IV		"	S K 450	III	鉄輪壺、石硯、銅板出土	"	S X 926	I	
建 物	S B 405	III・IV	武家屋敷の主殿(礎石)	"	S K 451	III	襖ピット群	"	S X 928	I	
"	S B 406	III・IV	" 小座敷(礎石)	"	S K 452	III	"	"	S X 929	I	礎石あり
"	S B 407	III・IV	東南隅に張り出し部(礎石)	"	S K 453	IV	"	"	S X 930	IV・後世	道路 S S 944にあり
"	S B 408	III・IV	方形建物、床面焼土つまる	石 敷	S X 454	III	襖ピットもあり	"	S X 931	IV・後世	"
"	S B 409	III	(掘立柱)	"	455		欠番	"	S X 941	IV・後世	"
"	S B 410	III・IV	(礎石)	石 列	S X 456	III		溝	S D 943	III・IV	S F 909の排水溝
"	S B 411	III	(礎石)	"	S X 457	III・IV		道 路	S S 944	II・III・IV	東西道路
"	S B 412	III	狭倉(礎石)	"	S X 458	III・IV	S X 417付近	"	S S 945	II・III・IV	一乗谷川沿いの南北道路
"	S B 413	III	(礎石)	溝	S D 459	III	S X 454石敷付近	土 塁	S A 978		第29次調査で検出
柵	S A 414	III・IV	柵カ	石 列	S X 460	III・IV	溝の削平カ	石 列	S X 1099		"
門	S I 415	III・IV	武家屋敷の裏門(礎石)	"	S X 461	III		"	S X 1101		"
建 物	S B 416	III・IV	井戸屋形(礎石)	土 塚	S X 462	III	襖ピット	"	S X 1102		"
堀 カ	S X 417	III・IV	= S A 895	ガラ石	S X 463	後世	一乗谷川の河原(發掘中している)	石 列	S X 1113		"
"	S X 418	III・IV	礎石上の礎だまり	石 垣	S V 464	"	一乗谷川の護岸石積				
"	S X 419	III・IV	S D 400の崩れカ	石 敷	S X 465	III・IV	S D 404付近				

表1 第15・25次調査遺構一覧表

検出した主な遺構は、道路および通路5、土塁や堀・柵列9、溝27、暗渠5、井戸10、石積施設20、礎石建物11、掘立柱建物1、門2、庭1、土壇6、石敷面4、石列19などである。これらは大きく4時期に大別することができる（表1・2参照）

I期は、朝倉氏が一乗谷に勢力基盤を伸張しはじめた宝徳2年頃から、文明年間を経て、永正初年頃までの約50年間をあてる。この時期の遺構は、下層の調査が極端に制約されている現状では、あまり明確なものはないが、それでも町割の規制を受けない下層面が若干ではあるが検出されている。II期は、斯波・甲斐氏を越前から追放し、加賀一向一揆を撃破し安定期に入った朝倉政権が、京の都に優るとも劣らない町作りを開始した時期で、永正年間から天文までの約40年間をあてる。道路面や土塁の基盤の様相から町割作定期開始の状況が把握される。III

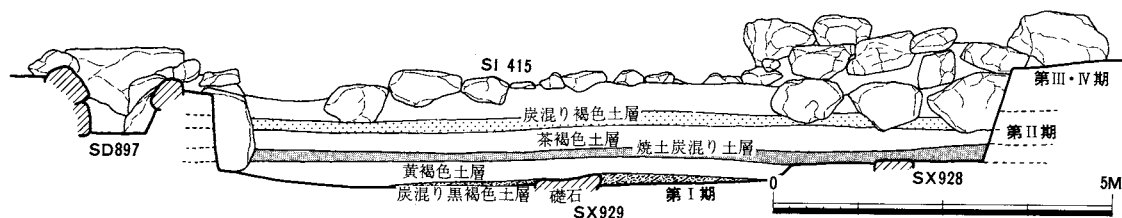
期は、II期とIV期の中間の時期で、天文から弘治までの約25年間をあてる。II期よりも新しく、IV期よりも古い面が多く検出されている。IV期は、足利義秋を迎えるため朝倉義景館を大改築したのを中心として永禄初年頃から、織田信長との戦いで敗北し焼亡した天正元年までの約15年間をあてる。床土直下の諸遺構は、削平されていない限り、全てこの時期のものとする事ができる。

時期区分の具体例としては、武家屋敷東辺土塁に開いた門 SI 415 の内側に設けた土層観察用トレンチでみることにする（挿図3）。それによると、まず炭混り黒褐色土層に覆われて礎石 SX 929が検出されている。土塁が設けられる以前の遺構であり、町割作定期以前のI期のものとみることができよう。次に、茶褐色土層や炭混り褐色土層で整地が行われた後、土塁 SA 384 の石垣が積み、武家屋敷の区画（A地区）が成立したものと思われる。これがII期であり、土塁はその後IV期まで存続したものと捉えることができる。溝 SD 897 や門 SI 415 は、II期の土塁の基底部を埋めて整地された面から検出されており、III・IV期にわたって使用されていたことが分かる。

以下、遺構について詳しく述べていくが、まず町割等にかかる道路や側溝、土塁を記述したのち、A地区の武家屋敷、B地区の順で報告する。なお、ここで使用する方位は、通例にならい谷地形を重視して、谷の入口を北、奥を南とする大まかなもので、地図上の方角と若干異っている。正確には、側溝 SD 268 と地図上の南北線は、側溝が、北で東へ約10度振れている。

期	町割	年代	関連記事
I	作定期前	1450 宝徳2年 享徳 康正 長禄 寛正 文正 応仁	「一乗城畔」
		1471 文明3年 1482 # 14年 長享 延徳 明応 文亀	「一乗谷移城」 「一乗谷大焼亡」
II	作定期(1)	1507 永正3年 大永 享禄	「朝倉屏風新調一雙画京中」
III	作定期(2)	1543 天文12年 弘治	「朝倉孝景館新造」
IV	作定期(3)	1567 永禄10年 元亀	朝倉義景館改築
		1573 天正元年	朝倉氏滅亡

表2 時期区分表



挿図3 武家屋敷門 SI 415 内面土層図

SS 260 この南北方向に走る道路は、町割の骨格をなすもので、1.2/100から2/100の勾配で北へゆるやかに傾斜し、両側には武家屋敷が整然と配されている。幅員は、道路横断溝 SD269 付近で3.7m、SD268とSD896の接続する付近で4.2mと、他の幹線道路と比べて狭く作られている。また、西の武家屋敷の排水を道路を横断する溝で行う手法は、この地区の特徴となっている。この道路は、北方の調査区の端で矩折となっている。すなわち約5m西へずれ(ちょうど道路幅1本分程度)、再び北へ延びていることが確認された。この部分は、見透しをさける意味をもつ「矩折」という道普請で、東西道路SS944とSS260が交叉する中心点から、矩折部までの距離は約30m(1尺=30.3cmで100尺)を測る。路面は、直径1cm前後の川砂利を叩きしめた状態で敷いている。砂利敷面は、3面以上重っており、道路横断溝SD273を付け変えてSD271が作られていることから分かるように、最低新旧2つの遺構面も確認されている。Ⅱ期からⅣ期にわたる遺構である。

SS 975・944 東西道路SS975は、調査区南辺に位置しておりSS260とT字形に接続している。幅員は7.2mと広く、一乗谷川を橋で渡れば山城へ登る蛇谷地籍の山道に接続している。SS944もA地区の北辺に位置する東西道路で、SS260とT字形にとりついている。道路面はかなり削平を受けているが、土塁の痕跡とみられる石列SV894を境にして、北は攪乱の礫が多いのに対して、南の道路と考えられる幅員7.2mの区域は全くといってよほど礫が見られず、きれいな砂利混りの砂質土であるというきわだった違いをみせている。この道路の東正面には、一乗谷川の対岸に位置する朝倉館の西南隅にある隅槽跡がみえ、西正面には、武家屋敷の土塁SA265がみえる。SA265の土塁石垣は、この道の正面にあたる部分だけに巨大な石(径1~2m)を用いており、朝倉館方面から歩いてきた者にその貫禄をみせつけているかのようである。SS975とSS260の交叉する中心点からSS944とSS260の交叉する中心点までの距離は、90.6m(1尺=30.3cmで300尺)を測る。以上、この地区の道路は幅員に広狭があったり、T字路が多くみられたり、矩折があったりして非常に使用しにくい道普請であることが分かる。防禦面を重視して工夫された結果のものといわざるをえない。このような道普請は、従来、近世城下町特有のものと考えられてきたが、すでに戦国時代に遡ってこの一乗谷城下町で成立をみていることは驚きという他はない。

SS 945 A地区東辺を南北に走る道路である。一乗谷川に沿って設けられていたとみられるが、河川の氾濫で砂利敷面や幅員などは確認できなかった。武家屋敷東辺土塁SA384に開かれた門SI415に接続していたものと考えられる。

SD 268・896 SD268は、道路SS260の側溝であり、西側武家屋敷3軒分の排水をSD269・271・273・274の道路横断溝から受ける機能を果している。また、SS260そのものも若干東にむかって傾斜しており、路面上にたまった水をこの溝に集めるようになっている。溝は、幅約0.4mで大略3段に石積みながされている。下の第1石目は小さく、東へずれ、頂部も平坦にそろっている。古い時期の溝の天端石と考えられる。この溝内の底と上面には焼土が認められ、その中間には砂が堆積していた。第3石目は、B地区の西側では小振りの石で、天端もそろった感じはしない。天端となる石が欠損している可能性も残されている。北流してA地区にさしかかると、天端石も平坦でよく残っている。SD269から北へ78.8m(1尺=30.3cmで260尺)の所で、SD268は東へほぼ直角に折れ、SD896となる。SD896は、A地区の武家屋敷の溝SD898・943の排水を集め、一乗谷川へと流れ下っていた。しかし、東端は一乗谷川の氾濫のため攪乱されていて不明となっている。溝のコーナーから土塁SA384の外側までの距離は丁度30m(1尺=30.3cmで約100尺)を測る。

SA 266・267 SS 260 の東側を南北方向に走る土塁である。石垣に使用されている石は比較的小さく、対面する土塁 SA 261 の巨石と比べて対照的である。幅は1.3mと狭い。土塁の北端から48.5m、南端から30mの距離の所に（1尺=30.3cmで160尺・100尺）門 SI 279 が開いている。Ⅲ・Ⅳ期になると、SA 266 の土塁内側中央部で約20mにわたって、幅約1.2mの土塁 SA 267 が拡幅されている。なお、Ⅳ期の井戸 SE 358 が掘られた頃まで、この土塁 SA 266 が存在していたかどうかは不明である。

SA 383 A 地区と B 地区とを限る土塁である。B 地区の西半分（通称オコヤシタ）をⅢ期に整地のため約0.5m盛土した時、同時に築かれた土塁である。そのため、北側と南側との土塁基底で約0.5mの段差が生じている。この土塁は、幅約1.3mあり、長さ17.2m分検出した。西方の土塁 SA 266 とは約3m切れており、東方は河川の氾濫等でどこまで延びていたかは不明となっている。検出土塁の東よりの所には石段が設けられており、B 地区の通路 SS 390 から A 地区の井戸 SE 431 へ水を汲みに行くことができるようになっていた。遮蔽を目的とする土塁本来の意味からは、かなりルーズな作りの土塁ではあるが、武家屋敷の門 SI 279 や建物配置等を考慮に入れると、Ⅲ期以降、武家屋敷（A 地区）の南辺を限る敷地境になっていたものと考えざるをえない。

SA 384 A 地区の東辺を限る南北土塁で、長さ34m分検出したが、南端は一乗谷川の氾濫で削平されていた。土塁の幅は1.4mで、石垣には比較的大きな石を使用している。土塁北端から南へ19.8m（1尺=30.3cmで65尺）の所に武家屋敷の裏門 SI 415 が開いている。この土塁が、SA 266 や SB 405 などと平行関係にないのは、一乗谷川の川筋に制約を受けた結果とみられる。

SA 891 武家屋敷（A 地区）の北辺を限る東西土塁である。土塁内側の石垣が検出されなかったため、これが土塁であるのか、石の段差遺構になるのかは不明という他ない。溝 SD 898 の末端が1.4m分暗渠 SZ 915 構造になっていることや、SD 943 が開渠のままになっていることなどから、簡単な塀のようなものが設けられていた可能性も残されている。

SA 978 発掘区南端の SS 975 北側の東西土塁である。西端で北へ折れ曲り SA 266 となる。削平が著しく、長さ6.5m分しか検出できなかったが、B 地区南辺を限る土塁である。

A 地区

土塁 SA 266・383・384・891 で区画された地区で、南北57.6m（約190尺）、北辺で東西29m（約95尺）の規模の武家屋敷である。『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡環境整備報告Ⅱ、一武家屋敷立体復元事業』の報告書では、この区画の北半分を1軒の武家屋敷とみているが、本報告では、南半分も含めた A 地区全体を1軒と捉えている。

SI 279 SA 266 にとりつく門遺構である。土塁を3.4m切って、掘立柱の棟門を設けている。掘立柱穴は、一辺0.2m、深さ0.8mの角穴で、柱根は残存していなかった。柱と柱の間隔は2.42m（8尺）である。一部分に細かい礫が固くしまった状態で敷かれていた。道路横断溝 SD 271・273 が門に直交しているが、Ⅱ期の溝 SD 273 が門の前に位置していたため、道路をかさ上げたⅢ期以降に若干南へずらして SD 271 をつけかえ、門の通行に支障のないように配慮していることも分った。また、対面する「新馬場」屋敷の門 SI 278 と少しずらした位置に門 SI 279 を築いているのも特徴的である。A 地区における門は、次に述べる SI 415 と2カ所しかなく、この門が通路 SS 386 と繋がっていることなどから、「表門」と考えることができよう。

SI 415 土塁 SA 384 にとりついた門である。門の幅は、約3mあるが、礎石や掘立柱穴も検出されず、

規模や構造は不明であった(挿図3参照)。門を入った左手には庭SG420が位置しており、正面には武家屋敷の主殿SB405の井戸や洗い場のある土間へ続いている。武家屋敷の主人や使用人が使用する通常門「裏門」とみることができよう。

SS386 SI279に続く通路である。幅2.3m、長さ12.7mにわたって固く叩きしめられた砂利面が検出された。通路の両側には縁石が一段高く並べられ、南の縁石を利用して溝SD387が通路排水として築かれている。北の縁石列は、途中から北へ直角に折れ建物への導入を促している。通路の中央部にも、通路を二分するように石列が1本配されており、この石列を境にして北の通路は南の通路より約5cm高く砂利面が敷かれている。通路正面には、SD387に接続する溝SD389があり、その後方は掘立柱の柵列SA392で遮蔽されている。通路の東南隅には、やや大ぶりの敷石面があり、南方へ延びていて、その中央に井戸SE431が穿たれている。

SA392 SS386の目隠し塀である。掘立柱穴は、一辺13~15cmの方形で、深さは68~75cmあり、一列に並んで6カ所で検出できた。柱根は角柱で全ての穴に残存していた。柱と柱の距離は、北から南へ1.34m、1.34m、1.2m、1.34m、1.34mと寸法を用いていたことが分かる。1.34mは、1尺=30.3cmの曲尺では4.4224尺であり、中世に用いられた1尺=29.633cmの和銅大尺では4.5220尺となる。

SB407 SS386のすぐ北に位置する東西3.76m、南北7.52m(2間×4間)の礎石建物である。この建物の南辺には、幅1.06m(3.5尺)の縁がとりついており、東南隅には1間四方の小建物が張り出してとり付いている。縁の西1間分には河原石の狭間石が並んでおり、SS386からこの縁に直接上ったものともみられるが、柵列SA392などとは、北で4度東へ角度の振れが生じている。

SB408 一辺3.76m(2間四方)の正方形の平面をもつ建物である。建物の周囲には、礎石大の平石を一列に並べているが、柱を据える礎石と分かる石がどれかは不明である。建物内部床面には焼土や炭が堆積しており、Ⅲ・Ⅳ期の建物と考えられる。建物の方位はSB407とほぼ同じである。

SB409 SB408よりも一時期古い掘立柱建物で、東西3.76m、南北4.7m(2間×2間半)の規模をもっている。建物方位はSB407・408と同じである。

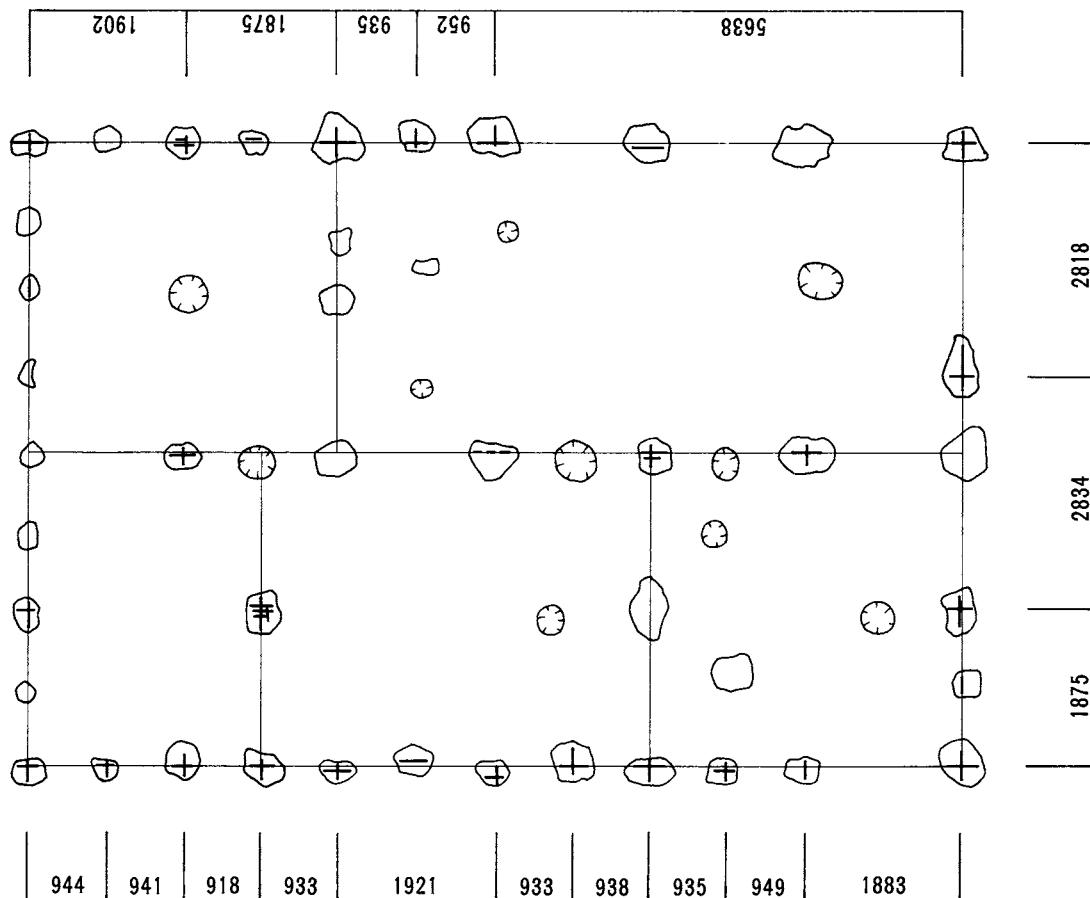
SB410 Ⅲ期の溝SD396を廃棄して建てられた礎石建物であるが、一乗谷川の氾濫にあって、礎石が3・4石しか残存していなかった。

SB416 井戸SE430に付属する建物で、溝SD393・394に挟まれて建てられている。東西4.7m、南北は2.8m分(2間半×1間半以上)を検出した。建物の西北隅には溝らしき石組がみられ、SD393に接続していた可能性も考えられる。井戸SE430を中心とした井戸屋形と想定できる。

SB405 A地区の中央、やや北よりに位置する建物で、武家屋敷の中心となる主殿に比定できる。この建物は、一乗谷川の氾濫を示すと思われる茶褐色砂質土層が遺構面に厚さ0.3mも堆積していたため、きわめて保存状態が良好であった。東西11.29m、南北7.52m(6間×4間)の規模をもつ礎石建物で、東西方向に棟通りを考えることができる。礎石は43個、礎石抜き跡10個が検出できた。礎石は、基本的には、建物の四周と棟通りに半間づつ配しているが、北辺東側の3間分と南辺東隅の1間分、東辺の南2間分は、1間置に礎石を配している。また、東辺の北隅部礎石だけは1間半の間隔になっており、出入口と考えられる。ほとんどの礎石上面には、柱を据えつける際に用いられた「一・+」などの線が刻まれている。線刻間の距離をスティール巻尺で計測したが、多少のバラつきが認められた(挿図4参照)。しかし、全体としてみれば、1間=188.16cm=6.21尺(1尺が30.3cmの曲尺として)の竿で割り切れるようである。ただし、中世に多く用いられたと考えられる和銅大尺の1尺=29.633cmでもかなりの完数

で割り切れ、曲尺か和銅大尺かの検討は、今後の資料の増加に期待せざるをえない。例えばSB405の南辺全長11.295m（6間）、北辺全長11.302m（6間）、東辺全長7.527m（4間）という実際の長さを曲尺の1尺=30.3cmで割ると、6.2128尺、6.2167尺、6.2104尺となり、和銅大尺の1尺=29.633cmで割ると、6.3527尺、6.3566尺、6.3502尺という数値がえられる。1間を曲尺の6.21尺で割りつけたか、和銅大尺の6.35尺で割りつけたとみるか、微妙な選択となろう。

次に、主殿SB405の部屋割を検討してみると、まず東西中央の棟通りで南北2間幅で2分される。南半は西から1.5間（3間）、2.5間（5間）、2間（4間）の3室に分割され、北半は西から2間（4間）、それに井戸や洗い場、囲炉裏と考えられる長径2.2m、短径約1mのピット等が位置する4間の空間に分割される。各部屋には床受けの束石もあることから床を張った部屋であったと考えられるが、井戸や囲炉裏をもつ4間の空間だけは、土間であったものと思われる。南半の西から6畳の前室、10畳の主室、8畳の奥の間、北半の西から8畳の納戸、土間（4間×2間）の台所と、各部屋の機能が想定される。SB405の南辺、溝SD399に沿って礎石らしき石が2個存在することから、SB405の南辺に縁がとりついていた可能性も考えられる。また、西辺の北から2間目には、幅1.2mにわたって石列がL字形に張出しており、この内側には白い砂利が認められた。縁入りの出入口と考えられよう。建物の西辺南端には、石積施設SF437も設けられている。西辺礎石列を中心に、こぶし大の河原石が列状に積み上げられているのは、床下の目隠しを意識した施設と考えられる。なお、西辺を除く建物の周囲には、雨落溝SD399・400・401が設けられており、東辺南端にはSB406の建物が繋がっている。



挿図4 建物SB405の柱据え刻線間の寸法（スティール尺での計測値、上が北 単位mm）

SB406 SB405の東南隅に接続した一辺2.82m（1間半）の正方形の礎石建物である。その東辺と南辺には、幅約0.45m（1尺=30.3cmで1.5尺）の縁がとりついている。この4畳半小座敷の西辺床下には、SD399からの雨水を受けるSD401が流れている。建物の東側には坪庭SG420が配されていることから、主殿SB405に付属した茶会用等に使用された座敷と考えられる。

SG420 小座敷SB406と土塁SA384との狭い空間に配された坪庭である。天端の平らな巨石を庭石として10個ほど伏せた状態で配置しており、その周辺には砂利が敷かれていた。砂利面は、SB406の東縁の下まで敷かれている状態がよく分かる。庭の南西部は、砂利が敷かれておらず、庭石に囲われた範囲が一段高く盛土されていた。おそらく低木などが植栽された植込み（築山）と推定される。この庭は、小座敷SB406から観賞できるよう、一体に配されたもので、紹鷗四畳半の茶室の図にみられる「面坪ノ内」に相当する遺構と考えることができる。

SB903 主殿の北に位置する東西5.65m（3間）、南北6.02m（3.2間）の規模をもつ礎石建物である。この建物の四周は、直径0.5m程度の扁平な石を並べており、礎石がどれかにははっきりしない。石列が途切れた南辺の東側が出入口と考えられる。入口を入ると内部には、直径0.2m程度の石がL字形に敷き詰められており（SX922）、建物を東西に2分する棟通りと考えられる位置に、礎石とみられる多少大きな石が配されている。SB903の石敷のみられない西南部には、低い床（転根太）が存在した可能性が大である。蔵遺構ではないかと想定しているものである。

SD387・388 SD388は素掘りの溝であるが、一時期古く、通路側溝SD387が作られた際廃棄されたものと思われる。いずれも東方の一乗谷川へ排水する目的で設けられた溝である。

SD397・398 石列SX422と土塁SA267で囲われた場所は、遺構面もみられず、厚く泥が堆積していた。溝SD397や398の排水もここに注がれており、沼の様相を呈していた。

SD393～396 これらの溝は、屋敷中央部の水を一乗谷川へ排水するために設けられたもので、暗渠SZ467に繋がっている。

SD399～401 主殿SB405の雨落溝で、門SI415の北に設けられた暗渠SZ916に繋がっている。なお、SD399と393の間には、SB405の目隠し塀SA385がある。柱間の距離は3.6mである。

SD898～900 方形の浅い水溜SX920からの水や、井戸SE905の水を排水する。北辺土塁SA891に設

No.	上面内径	深さ	底の木組	天端石枠	主な出土遺物
428	0.62	2.07	なし	あり	越前焼甕・壺・播鉢、土師質皿、青磁碗・鉢、染付碗・皿、石盤・バンドコ
429	0.68	(1.4)	なし	なし	越前焼甕・壺・播鉢、土師質皿、青磁片、染付器台、鉄釘、銅銭
430	0.88	2.25	なし	あり	越前焼甕・壺・鉢・播鉢、土師質皿、白磁片、鉄の木部、鉄製鉄先、バンドコ
431	0.9	2.3	なし	あり	越前焼甕・壺・鉢・播鉢、鉄釉碗・壺、土師質皿、染付碗・皿、炭、鉄釘、銅銭、砥石・盤・バンドコ
905	0.6	2.2			鉄釉碗、土師質皿、染付皿、朝鮮製瓶、銅銭

No.	長 辺	短辺	深 さ	段 数	主な出土遺物
436	1.15	0.65	0.7	5	灰釉皿、白磁皿、染付碗、鉄釘、銅銭
437	0.9	0.75	0.66	5	越前焼甕、土師質皿
438	1.26	0.88	0.52	5	越前焼甕・壺、鉄釉碗、土師質皿、染付碗・皿、小柄
906	1.3	1.1	1.0	5	越前焼甕・播鉢、土師質皿・土釜、青磁碗、銅銭
907	1.7	1.05	0.2	(2)	越前焼甕、鉄釉碗、灰釉皿、土師質皿、青磁碗・皿、白磁皿、染付皿、鉄釘、石製品
908	1.8	0.9	0.2	3	土師質皿、鉄釘
909	1.48	0.9	0.5	2	越前焼播鉢、土師質皿、青磁碗、白磁碗、染付皿、鉄滓、銅椀、バンドコの蓋
910	1.4	1.1	0.58	4	
911	1.3	0.85	0.5	4	
912	0.9	0.8	0.32	2	越前焼甕・お歯黒壺・鉢・播鉢、土師質皿、白磁皿

表3 A地区検出の井戸・石積施設一覧表

けられた暗渠SZ915で、道路側溝SD896に流している。

SE428～431・905 A地区で5基の石組井戸を検出した。井戸上面の踏石も比較的よく残っており、SE428からは井戸上面に据えられた梓石も一部完形で出土した。この井戸は主殿の土間に掘られており、洗い場の石敷もよく残っていた。SE905の井戸は、井戸屋形を復元しているが、発掘では、その礎石や掘立柱などは検出できなかった。

SF436～438と906～912 A地区で10基の石積施設を検出した。石積施設SF437は、主殿SB405の西南隅に設けられており、他のものが、土塁や屋敷境近くに位置するのと対照的であった。第40次調査のSF1617から「金隠し」の板材が発見されたこともあって、石積施設の大半が「便所」遺構と認識されるに至っている。SF437は、「晴」の空間に設けられていることから、便所であったとしても「来客用」あるいは「座敷便所」的性格を有し、常日ごろは使用しないものであった可能性が強いといえよう。SF910と911は、2基並んでおり、男女別があった可能性も残されている。SF909は、溝SD943がとり付いており、便所内にたまった尿などの上澄液を排水する一種の水洗式便所であった可能性も考えられる。

B 地区

A地区の南、土塁SA383、266、978と一乗谷川とで区画された地区である。II期に土塁SA266や978で一応の区画がなされ、III期には一乗谷川側に小規模建物が多く建てられ、西側や北側には、SB411や412など町屋らしからぬ建物が建てられ、III・IV期になると一乗谷川の氾濫を受け、東半分の遺構が大きく削平されたものとみられる。

SB411 III期の礎石建物で、東西8.47m（4.5間）、南北5.65m（3間）の規模である。上層に遺構が残存しているため、建物の全貌は明らかにできなかった。

SB412 これもIII期の礎石建物で、東西4.52m（2.4間）、南北3.76m（2間）の正方形に近い規模を有している。建物の周囲には、直径0.2m程度の河原石を束石として並べている。建物の内部のうち、東南部を除く部分には、越前焼大甕片を多量に含んだ焼土層が投棄された状態で検出された。この建物は甕蔵と考えられる。

SK452 SB412の甕蔵内部は、建物範囲ぎりぎり、深さ約0.5m掘り下げられていた。その底からは、越前焼大甕の底部が並んだ状態で4個体分検出できた。越前焼大甕を埋め、口縁部だけを0.3～0.5m出した状態で何かを貯蔵する施設であったものと想定される。SB412が廃棄される際、大半の甕を抜いたものと思われるが、そこへ大量の焼土や炭、甕片を投げ込んだ状態が考えられる。なお、復元できた大甕類は、合計14個体であった。

SK451 III期の甕ピットである。7個以上の越前焼大甕の抜き跡である。甕底は全く出土しなかった。なお、西方向にまだ出土するかどうかは未調査のため不明であった。

SX454 III期の石敷遺構である。III・IV期の井戸SE433は、III期面を重上げして作られており、III期の時、井戸SE433の洗い場としてSX454は使用されたものと考えられる。溝SD459もその時の遺構と考えられる。SX454の石敷内東北側にピットがあり、越前焼の甕が据わっていたものとみられた。

SX462 越前焼大甕のピットで、4個のうち3個は甕の底が据えられた状態で出土した。この付近は、ガラ石が多く、その間に焼土がところどころで散見できた。一乗谷川が氾濫して攪乱された様相を呈している。なお、筋状になったガラ石層の間に、越前焼大甕の破片がある程度のまとまりをもって5カ所

で確認されている。

SK449・450 SK449はⅢ・Ⅳ期の土壇である。SK450は、Ⅲ期の土壇で、とくに南側の土壇からは、鉄釉徳利形瓶や石硯、銅椀他の遺物が一括して出土した。

SS390 土塁SA383の南辺に沿って走る通路であり、幅約0.4m分に石が敷かれている。通路は、東端で幅約1.3mになって北方へ折れ、土塁SA383の石段に続き、井戸SE431に行くことができるように作られている。長さ約11.3m分検出できた。

SD391 この溝は、通路SS390の側溝で、土塁SA383に沿って東から西へ流れていた。西端は、土塁が切れているため、北方へ折れているが、どこへ排水するかは不明となっている。溝幅は、約0.2mで、非常に浅く作られている。

SA414 SB411が廃棄された後に作られた掘立柱の柵列である。柱穴は3カ所に一直線で検出された。その柱間隔は、2.12m（7尺）等間である。

SX424～427 石列であるが、屋敷境になるか、建物の東石なのかよく判らない。

SX427 この石列は、土塁SA383の東方に続いている。土塁そのものの石垣は大きめの石を使用しているが、この石列は小さな石を並べたものである。A地区とB地区を区画する意味をもっていたものと思われる。

SV464 甕蔵SB412の東方、一乗谷川近くに石垣が検出された。この石垣は、一乗谷川の氾濫で上面などは削平をうけていたが、深く積まれているようである。旧一乗谷川の護岸石積の遺構とみられ、この付近まで、B地区の遺構が存在していたものと想定された。

SE358・432～435 B地区で5基の石組井戸を検出した。SE358は、第10・11次調査時に検出されたもので、土塁SA266の土塁内に築かれている。壁土が多く投げ込まれており、Ⅳ期に属するものであろう。SE432は、天端踏石も残されていたが、底までは掘り下げられなかった。SE433は、B地区では深さ3.4mと最も深く、石の積み方もほぼ垂直で丁寧に仕事がなされていた。SE434は、調査区の最も南で検出された井戸である。天端石は欠損しており、天端近くまで石の積み方が垂直であることから、かなりの削平が考えられる。この井戸内に投げ込まれていた遺物の中で、特に注目すべきものとしては、石製の手水鉢があげられよう。長径62.5cm、短径55cmの山石の上面を平らに削り、直径30cm、内径22.5

No.	上面内径	深さ	底の木杵	天端石杵	主な出土遺物
358	0.58	2.8	なし	?	越前焼甕・播鉢、灰釉皿、壁土多し
432	0.84	(2.0)	不明	?	越前焼甕・壺・鉢・播鉢、鉄釉碗、土師質皿・脚付碗、青磁碗、砥石・バンドコ
433	0.75	3.4	なし	あり	越前焼甕・壺・鉢・播鉢、鉄釉茶入・小壺、土師質皿、染付碗・皿、木製品、鉄釘、銅銭、石製盤・茶臼・バンドコ
434	0.9	2.07	なし	あり	越前焼甕・壺・鉢・播鉢、鉄釉碗・茶入・小壺、土師質皿、青磁碗・皿、白磁皿、木片、鉄釘、銅銭、石硯・砥石・鉢・盤・手水鉢・茶臼・バンドコ
435	0.52	2.03	なし	なし	土師質皿、木片、鉄釘、壁土多し

No.	長辺	短辺	深さ	段数	主な出土遺物
439	1.35	0.8	0.8	2	越前焼甕・鉢・播鉢、土師質皿・壺、白磁皿、鉄釘
440	1.48	0.8	0.48	3	越前焼甕、土師質皿・壺、鉄釘、バンドコ、壁土
441	1.3	0.7	0.51	2	越前焼甕・壺・播鉢、土師質皿、青磁碗、白磁皿、染付皿、朝鮮製陶器、鉄釘、銅銭、バンドコ、炭
442	1.3	0.9	0.4	2	越前焼甕・壺、土師質皿・丸皿・土釜、鉄釘、銅銭、骨片
443	1.32	1.2	0.58	3	越前焼甕・播鉢、土師質皿・土釜、青磁碗・皿、鉄釘
444	1.26	1.1	0.25	(1)	越前焼壺、灰釉皿、土師質皿、青磁皿、白磁皿、染付皿、炭
445	0.88	0.84	0.5	4	越前焼鉢・播鉢、土師質皿、瓦質香炉、白磁皿、染付碗、鉄釘一括、銅銭、石製品、炭
446	1.15	1.0	0.6	3	越前焼甕・壺・播鉢、鉄釉壺、土師質皿、鉄釘、銅銭
447	(1.2)	1.2	0.5	3	越前焼甕・播鉢、土師質皿、鉄釘・小札、炭
448	1.3	0.9	0.8	5	

表4 B地区検出の井戸・石積施設一覧表

cmの穴を深さ13.75cmまで丁寧にくり抜いている。円形穴は、上面の平坦面より3.75cm高く削り残してあり、金森宗和好みの手水鉢とすることができよう。SE 435 は、天端石は残存していたが、非常に小ぶりの作りであったため、側石の実測はできなかった。この井戸は、焼土で完全に埋められており、壁土も非常に多く出土した。井戸底は、いずれも地山を少しくぼめた素掘りとなっている。

SF 439～448 B地区で10基の石積施設を検出した。SF 424 から447の6基は、ほぼ一直線上に並んでいる。石積施設（便所）の特長としては、土塁や柵、敷地隅に接して設けられている例が多いことから、これらの6基も小規模建物の裏庭に整然と配されていたものと思われる。しかし、建物跡や区画する柵や溝は、一乗谷川の氾濫によって削平され、不明となっている。SF 442 は、Ⅲ期の面で検出されたが、天端の石はⅢ・Ⅳ期の面にみられた。SF 439・440の平面は、他の石積施設よりも若干大きく、石列S X 425・426で囲われた空間（建物が建っていたかもしれない）に伴うものと考えることができそうである。

3. 遺物 (P L.15~P L.32, 第15図~第32図)

ここで取り扱うのは、遺構の報告に従い、第15次調査と第25次調査で出土した遺物のうち、道路S S 975・260・944と一乗谷川で区画されたA・B地区内から出土した遺物群である。四方を土塁で囲む武家屋敷=A地区と、その南に隣接する土塁で囲まれた武家屋敷から多数の石積施設を伴う小規模屋敷群に改変されたB地区では、屋敷の性格が多分に異なり、この両者間に遺物からみた場合に、どのような違いが見られるのか興味もたれた。またA地区では、町割に先行する下層の調査が一部行われており、当該時期の遺物の様相を知るための資料も得られた。これらの点については、後述の本文や小結で触れることにする。

遺物は、総数24,341点を数える。その内訳をA・B両地区に分けて示したのが表5である。表に示した数量は破片数であるが、なかには越前焼大甕に代表されるように、多数の破片数をもって1個体と明かに判明する場合は1点と数えた場合もあり、厳密に各々の個体数に比例する数値とはなっていない。しかし、総点数の量からみて、大略の出土数の傾向を把握する上で支障はないものと考えられる。

以下、従来の報告書に従い、時期の古いものから遺構・整地層の順に遺物の報告を進めるが、ここでは遺構の報告に準じて、A地区、B地区の順に記すことにする。

なお、本項における遺物の分類について、越前焼大甕と播鉢は『県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書』(1983)の小野分類、土師質皿は『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告書I』、染付は「15, 16世紀の染付碗, 皿の分類とその年代」(『貿易陶磁研究No.2』小野正敏1982)、硯は「日本石硯考」(『考古学雑誌70-4』水野和雄1985)の分類を基準とした。

器種	区画 A		区画 B		器種	区画 A		区画 B		器種	区画 A		区画 B		
	破片数	%	破片数	%		破片数	%	破片数	%		破片数	%	破片数	%	
日本製陶器	越前焼	甕	2,325		2,147	中国製陶器	碗	140		97	金銀銅製	釘	56		42
		壺	402		152		皿	111		43		鐵	1		0
		鉢	151		69		鉢	32		5		錫	1		0
		播火鉢	592		330		壺	4		4		鎌	1		0
		その他	47		3		香炉	13		2		刀子	1		0
	小計	15		2	その他	20		3	小柄	0		2			
	小計	3,532	23.0	2,703	30.1	小計	320	2.1	154	1.7	小柄	1		1	
	瀬戸・美濃焼	碗	134		40	白磁	碗	2		2	銅製	鐵	65		87
		皿	2		2		皿	416		111		銅	1		2
		壺	15		17		杯	29		6		分銅	0		1
茶入		8		4	梅瓶		6		1	鐵		1		0	
その他		15		6	その他		7		3	鐵砲		1		0	
小計	174	1.1	69	0.8	小計	460	3.0	123	1.4	その他	45		36		
陶器	碗	17		15	磁器	碗	135		38	石製	硯	12		13	
	皿	76		31		皿	354		83		茶臼	2		27	
	鉢	18		3		杯	14		2		バンドコ	122		50	
	その他	6		10		その他	8		0		鉢	44		2	
	小計	117	0.8	59		0.6	小計	511	3.3		123	1.4	風炉	1	
土師質	皿	9,421		5,247	朝鮮製陶磁器	計	1,291	8.4	401	4.5	木製品	盤	36		27
	釜	46		53		碗	3		2	硯		17		12	
	土鈴	4		1		壺	22		2	その他		87		46	
	その他	10		3		その他	35		12	計		321	2.1	186	2.0
	小計	9,481	61.7	5,304		59.1	小計	60	0.4	16		0.2	鐵	1	
土器	燈	0		7	陶磁器類の計	計	14,797	96.3	8,596	95.8	漆	1		0	
	瓦香炉	4		5		碗	22		2	堆	1		0		
	火鉢	19		1		壺	35		12	その他	14		5		
	その他	16		7		小計	60	0.4	16	0.2	計	16	0.1	5	0.1
	小計	39	0.3	20		0.2	計	14,797	96.3	8,596	95.8	埴	0		5
信丹近世	楽焼	1		0	木製品	埴	3		9	土製	壁	3		9	
	波焼	4		0		炭	1		0		炭	1		0	
	その他	98	0.6	24		0.3	米	53			4	米	53		4
計	13,446	87.5	8,179	91.1	計	57	0.4	18	0.2	計	57	0.4	18	0.2	
合計	15,365	100	8,976	100	合計	15,365	100	8,976	100	合計	15,365	100	8,976	100	

表5 第15・25次調査出土遺物一覧表

A 地区

I 期整地層出土遺物 (P L. 15・16, 第15・16図)

屋敷の北東部、土塁 S A 384 付近と S A 891 南部に設定した深掘りトレンチから出土した遺物である。

越前焼 甕・壺・鉢・播鉢がある。(1)は、外反した口縁に幅の狭い口縁帯をもつ I 群の甕である。(2)は、口縁帯が退化して外側に名残をみせ、内側が凹線に変化した II 群の甕である。(4)は、口縁帯がなくなり、外側の凸帯状の稜と内側の段に変化した III 群 a, (3)は、口縁外側の稜が単純化された III 群 b の甕である。(5)は撫で肩の胴から口縁が立ち上がる中甕である。(6)は、丸い口縁に 1 条の沈線を巡らす I 群の鉢, (7)は、口縁を内傾して切る播鉢型の鉢である。(8)は、口縁下の内側を強くなでてくびれを作り出す播鉢である。(9)は、口縁断面が四角く、口縁から少し下がって沈線が巡る III 群 b の播鉢である。I 群の甕、播鉢の出土は少なく、甕口縁部が 2 点、鉢は(6)だけであった。II 群も同様に少ない。III 群がやや多く見られるものの、IV 群も同数以上出土している。

瀬戸・美濃焼 鉄釉は、碗と茶入がある。(10)は、張りのある肩から短い口縁の立ち上がる、いわゆる大海茶入で、回転糸切痕の残る底部を除いて、全体に釉が施される。

灰釉は、皿と鉢がある。(11)は、口縁が端反りの皿で、高台内に輪土鎮痕を残す。(12)は、器壁が厚く、胴が内湾気味の皿で、外面半ば以下は露胎となる。(13)は、口縁の内側に蓋受状の段をもつ鉢である。内外面とも胴部以下が露胎で、外面に強いロクロ目を残す。

土師質土器 (14~16)は、C 類の皿である。(16)は、肘に押し当てて成形したようで、内面に布目痕が残る。器形は、B・C・D 類があり、灯明皿は C 類に多い。

丹波焼 壺(25)が出土した。肩の張った大壺で、断面が丸く、外反する口縁をもつ。7~8 段の紐土はぎ作りで成形され、器面の内外面は細かい横なでの調整痕を残すが、口縁は丁寧になでる。胴下部の継目に、篋状の幅約 1 cm の凹線が認められる。口縁から肩へ、青味を帯びた鮮緑色の自然釉がかかる。肩部に、粗略な篋描きをもつ。一乗谷での出土は極めて少なく、一般の流通品とは考え難い。

中国製陶磁器 青磁は、碗と皿がある。(17)は、口縁外側に雷文帯をもつ碗である。(18)は、線描蓮弁文の碗で、見込に吉祥文の押印がある。全体に釉が施され、高台内のみ拭き取る。(19~21)は、口縁の外反する稜花皿である。見込に印花文をもつ。

染付も碗と皿がある。(22)は、口縁が外反する八角形の碗である。稜に沿う縦の界線で 8 面を区切り、各面に花草文を描く。(23)は、見込に玉取獅子を描く B₁ 群の皿である。(24)は、見込に花草文を描く皿で、外面は無文である。

石製品 (26)は砥石である。3面に細かい擦痕がみられる。仕上げ砥である。

その他 (27)は、炭化米である。粃殻付のまま焼けており、藁や竹材片も部分的に見られる。

III 期整地層出土遺物 (P L. 16, 第16図)

III 期の遺構を覆う整地層から出土した遺物である。

越前焼 (28)は、播鉢形の鉢で、口縁内側に段がつき、扇状の櫛描き文をもつ。(29)も播鉢形の鉢で、片口があり、口縁内側に篋記号をもつ。(30)は、口縁が内湾する鉢である。(31・32)は、III 群 b の播鉢である。(31)は、内面に指 1 本を押し当てて作る片口部である。(33)は、器壁の厚い播鉢で、口縁直下まで密に引かれた播目の中に、播目と同じ櫛で扇状の刻文をもつ。

中国製陶磁器 (34)は、桜高台の白磁皿である。乳白色の釉がかかり、外面腰部以下は露胎である。

(35)は、底部が碁笥底の染付皿C群である。胴部外面に芭蕉葉文、見込に捻花文を描く。(36・37)は、口縁が端反りの皿B_i群で、胴部外面に唐草文、見込に十字花文や玉取獅子を描く。(38)は、坏である。高台内に「大明年造」が書かれる。

S D 389出土遺物 (P L. 17, 第17図)

以下、S F 909まではⅢ・Ⅳ期遺構の出土遺物である。屋敷の西門から延びるS S 386の突き当りにある南北溝から出土した遺物である。越前焼甕・鉢・播鉢、灰釉皿、土師質皿、青磁・白磁・染付の碗・皿類などが出土した。

越前焼 (39)は、薬研である。どっしりと安定したつくりで、上面と台部側面に同じ篋記号が刻まれている。溝底は摩耗して滑らかである。同じ篋記号をもつ輪部の周縁部も摩耗が顕著である。

S D 394出土遺物 (P L. 17, 第17図)

屋敷南部の建物群(S B 407~409)の北を東流する溝から出土した遺物である。越前焼甕・壺・播鉢、土師質皿、白磁皿、鉄釘、バンドコなどがある。

朝鮮製陶磁器 (40)は、径約18cmの広い底部から胴が膨らみ、頸部で径約4cmとくびれる徳利形の壺である。器壁は0.3~0.4cmと薄く、チョコレート色の胎土は堅く焼き締まる。表面には、やや緑がかかった灰褐色の釉がかかる。

S D 395出土遺物 (P L. 17, 第17図)

屋敷中央東部を東流する溝から出土した遺物である。

瀬戸・美濃焼 (41)は、胴が直線的に開く碗である。外面腰部以下に錆釉が施される。

土師質土器 (42)は、底部中央を指で突き上げたA類の皿である。(43)は、C類、(44・45)は、D類である。

中国製陶磁器 (46)は、幅広の蓮弁を篋で描き出す青磁碗である。(47)は、桜高台の白磁皿である。見込の土鎮痕は、研磨される。(48)は、波濤文帯とアラベスクを描くD群の染付碗である。(49)は、碁笥底の皿で、外面に文様をもたないC群Ⅳである。(50~52)は、見込に十字花文を描くB_i群の皿で、図示した以外にも数個体分あり、セットとして使用していたようである。

S D 897出土遺物 (P L. 17, 第17図)

屋敷の主屋S B 405の北辺を東流し、土塁S A 384を暗渠S Z 916でくぐる溝の出土遺物である。

越前焼 (53)は、胴径約40cmを測る小形の甕である。肩は撫で肩で、やや開き気味の頸が直線的に立ち上がる。(54)は、口縁断面の四角いⅢ群bの播鉢である。

瀬戸・美濃焼 (55)は、口縁が端反りの皿で、見込にカタバミの印花をもつ。

中国製陶磁器 (56)は、外面口縁下に雷文帯を巡らす染付碗E群である。内面には界線を巡らす。(57)は、底部が厚く、高台内を強く挟む碗で、ややくすんだ青味を帯びた釉が施されている。

この他、珠洲焼甕片や朝鮮製の徳利形壺などが出土した。

S D 898出土遺物 (P L. 17, 第17図)

屋敷の北西部、井戸S E 905から北流する溝から出土した遺物である。

中国製陶磁器 (58)は、胴部外面に片切彫の鐏のない蓮弁文、内面に篋状工具による縦の条線が巡る青磁碗である。明瞭ではないが、見込に印花文をもつ。(59)は、見込に十字花文を描くB_i群の染付皿である。この他、越前焼火桶や鉄釉碗、灰釉皿、銅銭(熙寧元寶)なども出土した。

S D 899出土遺物 (P L. 17, 第17図)

屋敷の北西部、S D 900とS D 898を繋ぐ東西溝から出土した遺物である。

瓦質土器 (60)は、底径約6cmの香炉である。脚を3カ所に貼り付け、外側を丁寧に篋磨きする。

中国製陶磁器 (61)は、胴部外面に片切彫による鐫のない蓮弁文をもつ青磁皿である。見込には、不明瞭ながら双魚文の印刻が見られる。(62)は、腰がなく、胴がラッパ状に開く白磁の坏である。

この他、越前焼甕・播鉢や銅銭(天聖元寶、元祐通寶、熙寧元寶)などが出土した。

S D 900出土遺物 (P L. 17, 第17図)

屋敷の北部中央、S B 903の西側を北流する溝から出土した遺物である。

土師質土器 (63)は、壺である。器形は土釜の鐫を外した形であるが、鐫の痕跡は全く見られない。

中国製陶磁器 (64)は、青磁香炉である。底部は輪高台で、腰部下面に形骸化した脚が3カ所貼り付けられる。(65・66)は、底部が碁笥底の染付皿C群である。共に、外面に波濤文帯と芭蕉葉文、内面に捻花文を描く。(65)は、豊付脇の砂目跡を丁寧に研磨している。

この他、越前焼甕・播鉢、白磁皿、染付碗等が出土している。

S D 943出土遺物 (P L. 17, 第17図)

屋敷北辺の石積施設S F 909から流れ出る溝から出土した遺物である。

金属 (67)は、銅椀である。仏教法具の六器に似るが、胴部の1カ所に板状の銅材を鉄鋸で固定しており、後述する(207)と同一形態であったと考えられる。この他、鉄釘をはじめ器形の分からない鉄製品が錆びて一塊になったものが出土している。

S E 430出土遺物 (P L. 18, 第18図)

屋敷の中央に位置する井戸から出土した遺物である。

金属・木製品 (68)は、鉄製の鋏先と、台となる木部である。鋏先は、やや開いた耳から刃先に向けて幅の狭くなる、いわゆる先細りで、刃先は四角い。木部との接合部は、約0.8~1cmの深さを測るV字状の溝になっている。木部は、鋏先の形状に合わせてU字状に先細りとなる。頭部の両側に、鋏先の耳部を受ける出張りが削り出されている。朝倉氏遺跡における鋏の出土例は、他に第40次・第46次調査の2例があるが、いずれも鋏先の形態が異なる。木部は、第46次調査のものが同一形態である。

この他、越前焼小壺や口縁の内湾する大振りの鉢、III群aの播鉢等も出土した。

S E 431出土遺物 (P L. 18, 第18図)

屋敷の南辺中央にある井戸から出土した遺物である。

越前焼 (69・70)は、口縁の肥厚化したIV群の大甕である。肩部に「本」と格子目の凹字スタンプをもつ。(71)は、卵形の胴に(93)と同様の口頸部が着く壺の胴部である。肩部に「(1)」の篋記号を刻む。(72)は、口縁の内湾する鉢である。内面胴部下位に横方向の細かい段が巡る。

瀬戸・美濃焼 (73)は、徳利形の鉄釉壺である。くびれた頸部からラッパ状の口縁が開く。ロクロ目の残る内面には、かせた下地釉が施される。

中国製陶磁器 (74・75)は、見込が高台内に凹む蓮子(レンツー)碗で、文様構成などから、順にC群V, C群IIIに分類できる。

この他、笏谷石製の長方形脚付盤等がある。

S E 905出土遺物 (P L. 18, 第18図)

屋敷北西部の井戸から出土した遺物である。

瀬戸・美濃焼 (76)は、鉄釉天目茶碗の底部である。高台は削り高台で、高台内を内反りに削る。

中国製陶磁器 (77)は、見込に玉取獅子を描く、B₁群の皿である。

朝鮮製陶磁器 (78)は、(40)と同器形の徳利形壺の口縁部である。ラッパ状の口縁の端部を外に折曲げ、玉縁風に作る。2次的に火を受けて、表面の釉はかきつき、灰緑色を呈する。

金属 (79~82)は、銅銭である。順に開元通寶、天聖元寶、元豐通寶、景德元寶である。(82)の孔は、文字の一部を削る径約0.9cmの円孔である。類例は、新安沈船の出土銭にもみられ、輸入される以前に、既に加工されていた物かもしれない。

S F 909出土遺物 (P L. 18, 第18図)

屋敷北辺中央の石積施設から出土した遺物で、越前焼播鉢や、土師質皿、青磁碗、染付皿等がある。

中国製陶磁器 (83)は、白磁碗である。腰部が大きく膨らみ、口縁は端部で外反する。

S K 453出土遺物 (P L. 18, 第18図)

屋敷南辺土塁 S A 383に穿たれたⅣ期の土坑(埋甕施設)で、越前焼甕をはじめ、壺や播鉢、白磁・染付類が廃棄された形で出土した。

越前焼 (84)は、口縁の肥厚する大甕であるが、肥厚は完全でなく、Ⅳ群bの段階とみられる。肩部に、「本」と格子目の凹字スタンプを巡らせ、「(I)」の窠記号も刻まれる。内外面とも、胴から口縁にかけて表面がはじけたように荒れている。

Ⅵ期整地層出土遺物 (P L. 19~22, 第19~22図)

Ⅲ・Ⅳ期遺構とⅣ期遺構を覆う整地層から出土した遺物である。

越前焼 甕は、Ⅳ群が大半で、Ⅲ群が多少含まれる。(85)は、口縁帯が退化し、外側の稜と内側の段に変わるⅡ群の甕である。S B 406付近から比較的まとまって出土した。(86)は、口縁帯がなくなったⅢ群の甕である。(88)は、Ⅲ群からⅣ群に変化する過渡期に位置づけられる甕で、(87)は、更にその直前の形態と考えられる。(89)はⅣ群の甕である。(90)は、中甕である。肩に「(T)」の窠記号をもつ。

壺は、口縁内側に窠で縦溝をつけた片口をもつ、いわゆるお歯黒壺(91)や、径約30cmの胴部に短い口縁のつく(92)、直立する頸部をもつ(93)等が出土した。(94)は、窠記号をもつ小壺の肩部破片である。

鉢は、口縁に1条の沈線が巡るⅡ群(96)や、内湾気味に立ち上がる口縁端部を外に捻りだし、内側のやや下がったところに弱い凹線を巡らす(97)、播鉢形で片口をもつ(98)、口縁がすばまる深鉢(99)、腰部内面に窠記号をもつ(100)、播鉢形で口縁内側に「干」の窠記号をもつ(101)、口縁のあまり開かない(102)、口縁の内湾する(103)等がある。

播鉢は、(106・107)等に代表されるⅣ群が多く出土した。(105)は、口径約29cm、高さ約6cmの浅い播鉢で、内面は胴部、見込とも縦横斜に播目が引かれている。

瀬戸・美濃焼 鉄釉の天目茶碗は、口縁下のくびれが弱い(108)や、くびれの強い(109・110)がある。(108・110)は、高台が輪高台で、腰部以下に錆釉が施されるが、(109)は、高台内を内反りに削り、腰部以下は露胎とする。(111・112)は、鉄釉の肩衝茶入で、底部に回転糸切痕がある。(113)は、徳利形の鉄釉壺である。回転糸切痕の残る底部は、露胎である。(114)は、茶入の蓋である。鏝の裏面以下は露胎で、小さな底部に回転糸切痕が見られる。(115)は、口縁に片口をもつ鉄釉の播鉢である。

灰釉は、碗、皿、茶入等がある。(116)は、スタンプで線描蓮弁文風に文様をつける灰釉碗である。(117)は、輪高台の中に輪土鎮痕を残す碗の底部である。(118)は、腰部が腰折れで、底部が削り高台の皿である。(119)は、底部が碁笥底の皿である。(120)は、口縁が端反りの皿で、胴部外面にロクロ目を残し、高台内に土鎮痕が残る。(121)は、胴上部に最大径をもつ大海茶入である。(122)は、鉢の底部である。粘土玉を貼り付けた脚をもつ。(123)は、瓶子の底部である。

土師質土器 (124) は、平坦な底部から口縁が直立する丸皿の両側を指で挟みつけた、いわゆる耳皿である。(125) は、胴を球形につくる小壺である。(126) は、口縁下から鏝にかけて平行線の篋記号をもつ土釜である。(127) は A 類のヘソ皿、(127~132) は C 類、(133・134) は D 類の皿である。

中国製陶磁器 青磁は、碗・皿のほか、香炉、壺が出土した。碗は、口縁外側に界線をもつ(135)、雷文帯をもつ(136)、波濤文帯をもつ(137)のほか、胴部外面に弱い鎬の蓮弁文をもつ(138)、片切彫りによる幅の広い蓮弁文をもつ(141)、線描蓮弁文の(140)、5条1単位の櫛描文をもつ(139)等がある。また(142)は線描蓮弁文碗、(143)は無文の碗の底部である。概ね、線描蓮弁文碗と無文碗が多く、他は図示した以外に数点出土したにすぎない。皿は、口縁が外反する(144)、菊皿風の(145)、外面に界線と櫛描文をもつ(146)、稜花皿(147)、外面が無文で、胴部内面に篋状施文具で条線を引く(148)等が出土した。(149・150)は、腰部が腰折れの坏である。重ね焼きのため、見込の釉を輪状に拭き取り、高台畳付も露胎とする。(151)は、盤である。凸帯で区切られたなかに印花を施すが、全体の器形は不明である。(152)は、口縁が朝顔状に開く瓶の口縁部である。断面には、漆による補修痕が見られる。(153・154)は、酒会壺である。(155)は、高台内を内反りに挟む香炉、(156)は、高輪台の香炉で、ともに形骸化した脚が3つ貼り付けられる。

(157)は、青白磁の梅瓶である。底部と胴部の接合部の内面は、明確な段となる。外面は、腰部に2重界線、胴部に渦文が配されている。

白磁は、皿、坏が出土した。(158)は、碁笥底の皿である。(159)は、桜高台の皿で、見込の土鎮痕は研磨される。高台内には、2次的に黒色漆が塗られる。口縁が端反りの皿は、大形の(160)と小形の(161)がある。(162)は、腰部に張りのある坏である。見込は、(149)同様に釉が拭き取られる。

染付では、碗、皿類の他、器台が出土した。(163~166)は、C群の蓮子碗である。(167)は、見込を広く平坦に取った碗で、胴が直線的に開くD群の碗である。皿は、B₁群が多い。外面胴部に唐草文をもち、内面胴部に花草文を描く(168)、見込に玉取獅子を描く(170・171)、同じく花草文を描く(173)、外面に密な唐草文、内面にアラベスクを描く(169・172・177)等がある。この内(170)は、露胎の高台内に赤色漆で「三」を記す。また見込に十字花文を描く(174~176)は、セットで使用されたようで、A地区における出土量は多い。(178)は、口縁が端反りの坏である。(179)は、小形の梅瓶などとセットになる元様式の染付器台である。直径約5.2cmの円形の穴をもつ甲板を鷺足が支えた卓の形で、幕板には方圏、足には唐草風の葉、下部の台の足には波状の文様が描かれる。

朝鮮製陶磁器 (180)は、竹を模した花生である。横断面は楕円形であるが、節などを写実的につくる。胎土は緻密で、淡いチョコレート色を呈する。懸花生と思える。

金属 (181)は、直径約6.6cm、重さ43.45gを測る銅鏡である。鈕座は亀で、上部に双鶴、下部に菊花を配する。縁は、やや内傾する細縁である。屋敷北辺の石積施設S F 908付近から出土した。(182)は、刀装具の責金である。銅製の板材を曲げて、下端で接合する。(183)は、鉄砲の鉛玉である。不整形の球で、直径約1.3cm、重さ11.05gを測る。朝倉氏遺跡での出土例では、小玉の類である。この他図示しなかったが、銅銭が37枚出土している。

石製品 (185)は、小形の長方硯である。裏面は平坦で、側面が直立する1 B cタイプである。(186)は、笏谷石(火山礫凝灰岩)製のバンドコ(行火)である。前面にやや上向きの窓が開き、内部を四角くくり抜いたもので、底部側面に脚を削り出している。朝倉氏遺跡における出土例は極めて少ないタイプである。(187)は、平面がD字形のバンドコの蓋である。(188)は、底部に3カ所脚の付く鉢である。

外面と胴部内面の屈曲部より上は、器面を丁寧に削り、内面底部は、粗いノミ痕を残す。(189)は、珪化木である。盆石として用いられたものであろう。

その他 (184)は、堆黒の破片である。黒色の漆を幾層も重ねて固め、彫刻を施す。

B 地区

Ⅲ期各遺構、Ⅲ期整地層、Ⅲ・Ⅳ期各遺構、Ⅳ期遺構、Ⅳ期整地層の順に記す。

S E 434出土遺物 (P L. 22, 第22図)

B地区の南端で検出した井戸から出土した遺物である。

越前焼 Ⅲ・Ⅳ群の甕や、壺、鉢、播鉢がある。

(190)は、片口をもつⅢ群bの播鉢である。

瀬戸・美濃焼 鉄釉碗や茶入、壺がある。(191)は、鉄釉壺の底部である。ロクロ目を残す内面には厚く釉がかかり、回転糸切痕が残る外面には錆釉が施される。

石製品 (192)は、I B cタイプの长方硯である。裏面には、割れた後に砥石として使用した擦痕がある。(193)は、底部に3脚をもつ笏谷石製の鉢である。(194)は、笏谷石製の捏鉢である。内外面とも丁寧に削る。挿図5は、手水鉢である。石材の上面を平坦に削り、中心をずらして鉢部をつくり、内側を円筒形に掘りくぼめる。後に流行する草庵風の佗茶には不可欠の道具である。

S K 450出土遺物 (P L. 23, 第23図)

B地区南西隅の土坑S K 450の一括出土遺物で、ほとんどが完形品に近い状態で出土した。

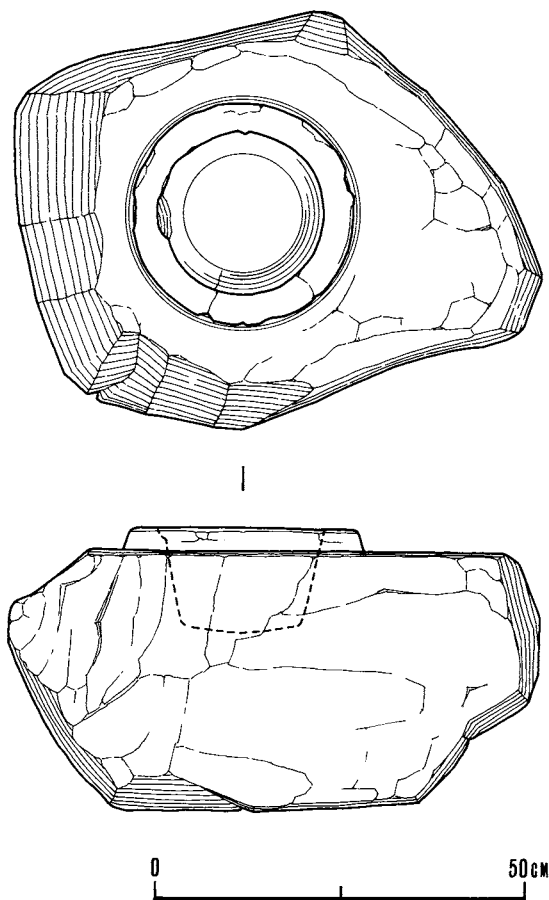
瀬戸・美濃焼 (195~199)は、徳利形をした鉄釉の瓶である。胴下部に最大径があり、頸部は指1本が入る程度にすぼまる。この内、(196)は、最大径がやや上位にあり、底部に回転糸切痕がみられる。(200)は、回転糸切底の小さな壺である。(201)も、回転糸切底の小壺である。形態から茶入とも考えられる。

(202)は、内面胴部に幅約3cm程の条線を密に引き、見込みに菊花の印花をもつ灰釉皿である。高台内に、輪土鎮痕が残る。(203)は、口縁が端反りの皿である。(204)は、見込にカタバミの印花をもつ小皿で、底部は碁笥底である。

中国製陶磁器 (205)は、底部が碁笥底の染付皿C群である。見込に人形化した「壽」が描かれる。

金属 (206・207)は、銅製碗である。(206)は、仏教法具の六器であろう。(207)は把手を鋏留めしており、高台が低く、高台内に小さい「大」の線刻がある。

石製品 (208)は、脚をもつ长方硯、I B aタイプで、内面硯尻を2次的に掘り下げ海にしている。頭



挿図5 S E 434出土手水鉢実測図

部上面に一旦割れて剥離した痕があって、漆で接合しており、この時に硯尻を海に改造したものと考えられる。(209)は、裏面の平坦なI B cタイプの长方硯である。裏面は平滑にするが、ノミ痕が残る。また、裏面には黒色漆が薄く付着しており、黒漆塗の硯箱に納められていたものと見られる。石材は、小豆色で、所々に虫喰い状の白斑がある。(210)は、笏谷石製の球状石製品である。頂部を凹ませ、中央に径約0.5cm、深さ約1.3cmの穴を穿つ。用途は不明である。

S K452出土遺物 (P L. 24・25, 第24・25図)

B地区北東部の埋甕群から出土した遺物である。

No.	胴径(㎝)	口径(㎝)	高さ(㎝)	へら記号	スタンプ	横断面形	備考
211	91	86.6	90.6	1㇇	本・格子目	楕円	漆補修
212	91.5	89(72)※	87	王	本・格子目	楕円	漆補修
213	86.3	80.6	—	㇇-	本・格子目	円	漆補修
214	92	83	—	—	本・格子目	楕円	漆補修
215	86.8	85(76)	92.8	△	本・格子目	楕円	
216	87	84.6(68)	—	山 ²	本・格子目	楕円	漆補修
217	91.4	83.5(75.2)	—	1㇇	本・格子目	楕円	
218	90	86.4	—	ホ	本・格子目	円	
219	87.8	84.6(75)	—	T㇇	本・格子目	楕円	
220	89.8	82	—	H	本・格子目	楕円	
221	85.1	80.3(75.5)	—	㇇	本・格子目	楕円	
222	90	86	—	㇇ ₁	本・格子目	楕円	

越前焼 大甕が12個、中甕が

2個、小甕が1個出土した。表6は、大甕の観察表である。大甕は、全て口縁が肥厚するIV群で、口縁の肥厚しきった(211・212・215・217~222)はIV群cタイプで大半を占め、肥厚の少ない(214)はIV群a、頸部に厚みのない(213・216)は、両者の中間に位置するIV群bタイプである。大甕の中には、破損部を漆で接合補修したものもある。いずれの甕の内面にも内容物を攪拌した

表6 S K452出土大甕一覧表

擦痕は見られない。(223・224)は、肩部の下位に最大径をもち、外傾した頸部をもつ中甕で、この器形を小形化したものが(225)と考えられる。中甕・小甕には、肩部のスタンプが見られない。(226)は、粗雑な作りの小壺である。内面に鉄錆が付着しており、お歯黒壺と思われる。

中国製陶磁器 (227)は、碁笥底の皿の中では珍しく口縁が端反りの皿である。胴部内外面に蓮池魚草文を描き、見込には意匠化された法螺貝が描かれる。

S K451出土遺物 (P L. 26, 第26図)

B地区西南部の埋甕群から出土した遺物である。

越前焼 大甕は、III群とIV群が混在する。(228・230)はIII群c、(229・231)はIV群の大甕である。ともに、肩部に「本」と格子目の凹字スタンプをもつ。口縁が最も肥厚するIV群cは、出土していない。(232)は、大甕III群と同形態の口縁の中甕で、肩部のスタンプは見られない。

S X462出土遺物 (P L. 26・27, 第26・27図)

B地区の中央、南東寄りに位置する埋甕群付近から出土した遺物である。

越前焼 大甕は、III群とIV群が混在する。(233)は、III群aの大甕である。肩の屈曲が強く「く」字状に曲がり、外面の調整は粗い。肩部には、凸状の「大」と凹字の格子目スタンプがつく。(239)は、肩がやや丸くなるIII群bの大甕である。表面の調整は粗く、肩部に凹字の格子目スタンプがつく。(234・235)は、III群cの大甕である。(236・237)は、IV群cの大甕である。(238)もIV群であるが、前者に対して頸部が薄く、屈曲が強い。

金属 銅製盤（挿図6）が、埋設された大甕の中から出土した。直径約34cmを測る円盤で、縁の立ち上がりは、約1.8cmを測る。

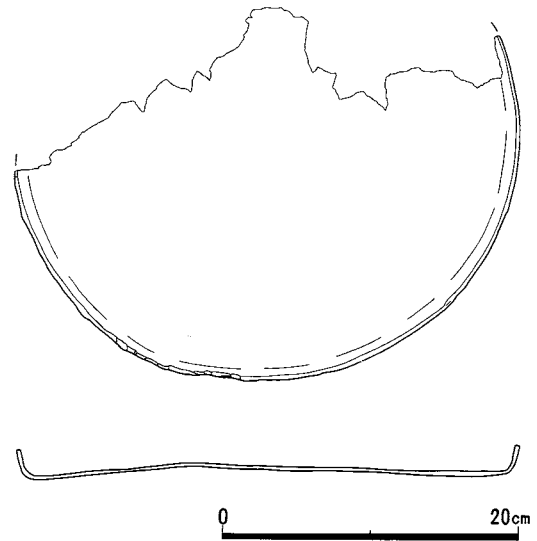
S F 443出土遺物（P L. 27）

埋甕群S K 452の南に位置する石積施設から出土した遺物である。

越前焼（240）は、（85）と同じ口縁形態のII群の大甕である。（241）は、同一個体の肩部破片である。肩は屈曲が強く、凹字の「本」と格子目スタンプがつく。

土師質土器（242）は径約7.5cm、（243）は約9.3cmを測るC類、（244）はD類の皿である。

中国製陶磁器（245）は、線描蓮弁文の青磁碗、（246）は、青磁の稜花皿である。



挿図6 S X 462出土銅盤実測図

III期整地層出土遺物（P L. 27・28、第27・28図）

III期の遺構群を覆う整地層から出土した遺物である。

越前焼（247）は、胴部に最大径をもつお歯黒壺で、底部が厚く安定している。口縁に片口をもつ。撫で肩の肩部に篋記号をもち、縦方向の耳が一对貼り付けられる。（248）は、脚付の鉢である。脚の形状は不明であるが、脚の貼り付く部分の腰部に、粘土紐による梅樹が表現されている。（249）は、口縁内側に扇形の櫛描きをもつ播鉢形の鉢、（250）は、口縁の内湾する小振りの鉢である。播鉢は、III群とIV群が混在する。（251・252）はIII群a、（253・254）はIII群bの播鉢である。

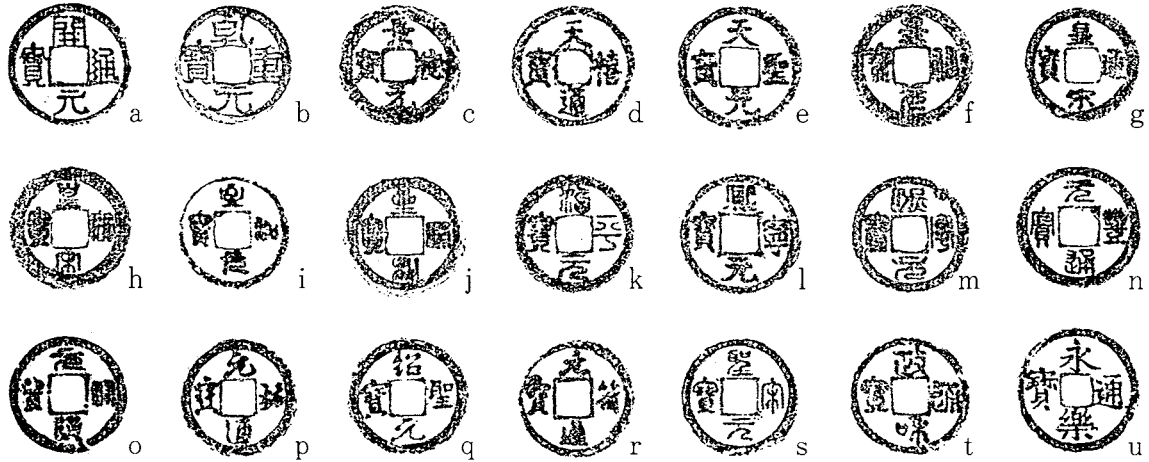
瀬戸・美濃焼（255）は、鉄釉の天目茶碗である。底部は、輪高台を削り出す。外面腰部以下は、錆釉が施される。（256）は、広い底部をもつ徳利形の鉄釉壺である。ロクロ目を残す内面と外面底部には錆釉が施される。（257）は、口縁が端反りの灰釉皿で、見込にカタバミの印花をもつ。（258）は、灰釉の卸皿である。口縁部だけに釉がかかる。

土師質土器（259）は、胴の立ち上がりの急な皿である。内外面とも丁寧になで調整する。図示できなかったが、わずかに脚の痕跡がある。（260～262）はC類の皿である。（263）は、土釜である。（126）同様、口縁から罫にかけて、2本の平行線が篋書きされる。

中国製陶磁器 青磁は、線描蓮弁文碗や稜花皿等がある。（264）は稜花皿で、見込中央の釉を丸く拭き取る。（265）は、胴の内湾する皿、（266）は、腰部が腰折れで、胴が外反する皿である。

白磁は、碗と皿がある。（267）は、口縁が玉縁の碗である。横田・森田分類案（横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』1978）によるIV-1類である。（268）は、口縁が端反りの皿である。内面胴部に篋で弱い条線を引く。乳白色の透明な釉は貫入が多く、口禿となる口縁端部に、鉄分を多く含んだ釉を施す。（269）は、底部が桜高台の皿である。見込の土鎮痕は丁寧に研磨される。

染付は、碗・皿がある。（270）は、見込の平坦なD群、（271）は、見込が高台内に凹むC群の蓮子碗である。皿はB₁群が多く、見込に玉取獅子を描く（272）、胴部外面に密な唐草文、見込にアラベスクを描く（273）等が見られる。



挿図7 B地区Ⅲ期整地層出土銅銭(縮尺3分の2)

金属 (274) は、分銅である。上部に紐穴があり、重量は約21.85g(約5.82匁)である。(275) は、鉄釘である。角釘で、先端を平たく潰している。(276) は、小柄である。挿図7は、S K451北東部の炭層からまとめて出土した37枚の銅銭の内の21枚である。すべて渡来銭で、鑄造の古いものから開元通寶(a)、乾元重寶(b)、景德元寶(c)、天禧通寶(d)、天聖元寶(e)、景祐元寶(f)、皇宋通寶(g・h)、至和元寶(i)、至和通寶(j)、治平元寶(k)、熙寧元寶(l・m)、元豊通寶(n)、元祐通寶(o・p)、紹聖元寶(q)、元符通寶(r)、聖宋元寶(s)、政和通寶(t)、永樂通寶(u)である。

石製品 (277) は、平面が楕円形のバンドコである。底部の左右両側に脚を削り出し、前面に5窓が開く。(278・279)は、2～3条以上の溝状研痕のある砥石で、玉砥石に似ている。(280)は、1条の溝状研痕のある砥石で、これら3点はS K451付近から出土した。(281)は長さ約16.5cm、幅約3.6cmを測る角柱状の砥石で、S X465の南から出土した。

その他 (282) は、埴塼である。口径約9cm、内側の深さ約1.5cm程の皿状の器形を呈し、S K451付近から出土した。

S E432出土遺物 (P L. 29, 第29図)

以下S F440までは、Ⅲ・Ⅳ期遺構の出土遺物について記す。S E432は、B地区の西辺中央に位置する井戸で、越前焼Ⅳ群の甕、播鉢や鉄釉碗、土師質C・D類の皿、バンドコ、砥石等が出土した。

越前焼 (283) は、口縁内側に篋で縦溝をつけて片口とする壺で、肩に篋記号をもつ。内面の底部に鉄錆状の付着物がある。

土師質土器 (284) は、底部に牛角状の脚をもつ碗である。胴部立ち上がりの屈曲は強い。

中国製陶磁器 (285) は、胴部内外面が無文で、見込に印花をもつ青磁碗である。底部は厚く、高台内に土鎮痕を残す。

S E433出土遺物 (P L. 29, 第29図)

B地区中央西寄りに位置する井戸の出土遺物で、越前焼甕・壺・播鉢やバンドコ、石製盤等がある。

瀬戸・美濃焼 (286) は(195)等と同器形の鉄釉瓶である。(287)は、肩衝形の茶入で、釉は内面にも均一に施される。底部は回転糸切痕がのこる。

中国製陶磁器 (288) は、見込に如意雲、胴部外面に馬と花草文、高台内に年款をもつ染付碗である。見込は平坦であるが、文様構成は、饅頭心(マントーシ)碗E群Ⅸと共通する。(289)は、高台内に「正

徳年造」を書く坏である。

石製品 (290) は、茶臼である。目は8分画で、1画内に17～19条引かれている。

S F 439出土遺物 (P L. 29, 第29図)

B地区の北部中央西寄りに位置する石積施設の出土遺物である。少量の越前焼類の他、土師質C・D類の皿、白磁皿などが出土した。

土師質土器 (291) は、壺である。手づくねで成形され、口縁部のみで調整を施す。

S F 440出土遺物 (P L. 29)

S F 439の東に接する石積施設の出土遺物である。越前焼甕・壺類、土師質C類の皿等がある。

その他 (292) は、土壁である。裏側に木舞の痕跡があり、木舞と表面間の厚さは、約3cmである。

S E 358出土遺物 (P L. 29, 第29図)

土塁S A 266上に穿たれたIV期の井戸から出土した遺物である。越前焼甕・壺・播鉢等が出土した。

越前焼 (293) は、IV期の播鉢である。内面の腰部から見込周辺部の摩耗が顕著である。

瀬戸・美濃焼 (294) は、見込が広く口縁が端反りの皿である。

IV期整地層出土遺物 (P L. 30～32, 第30～32図)

III・IV期遺構とIV期遺構を覆う整地層から出土した遺物である。

越前焼 大甕はIV群が多い。(295)はIV群の大甕で、地区内南東隅でまとまって出土した。(296)は、頸の短い中甕で、肩部に篋記号をもつ。(297)は、口縁断面が逆三角形を呈する、頸をもたない壺である。(298)は、直立する頸と捻り返しの口縁をもつ壺である。(299・300)は、お歯黒壺である。

鉢は、口縁が内湾する(301)、口縁の開きが少なく、口縁断面の丸い(302)、播鉢形で、口縁内側に扇状の櫛描をもつ(303)、同じく内面に篋記号をもつ(304)等がある。

播鉢は、IV群が最も多く見られた。(305)はIV群で、播目は隙間なくびっしりと引かれている。S F 439の南で、地面に据え置かれた形で出土し、底部は打ち抜かれ、中に径15cm大の扁平な石が置かれていた。(306)はIII群a、(307・309)はIII群bで、(308・310～312)はIV群である。

瀬戸・美濃焼 鉄釉・灰釉の碗・皿等が出土した。鉄釉碗は、口縁下のくびれが顕著な(313)、くびれの少ない(314)、小振りの(315)等がある。いずれも外面腰部以下に錆釉が施される。(316)は、胴が直線的に開く鉄釉皿である。(317)は、口縁が外に折れる鉄釉香炉である。外面胴部から内面口縁下にかけて施釉され、以下は露胎である。(318)は、灰釉碗である。釉は均等にむらなく施される。高台内に輪土鎮痕がある。(319)は、口縁を6カ所摘んで輪花風につくる皿で、見込に印花をもつ。この他胴部が肥厚する(320)、口縁が端反りの(321)がある。(322・323)は、瓶の口縁部と脚部である。同一個体の可能性もある。(324)は、底部に3足を貼り付ける香炉である。釉は、銅緑釉であるが、二次的に火を受け、白っぽくかすれる。銅緑釉製品の出土例は少なく、朝倉館で美濃妙土窯の資料と類似する皿が8個体分出土している程度である。

土師質土器 皿や土釜、土鈴等が出土した。皿は、口縁の直立するG類の丸皿(326)、手づくねのB類(327)も出土したが少なく、C類(328～330)やD類(331)が大半を占める。

瓦質土器 (325) は、瓦燈の身である。内面には指頭痕を残すが、外面は丁寧に篋磨きされる。瓦質では、この他瓦燈数点と香炉や火鉢類が出土した。

中国製陶磁器 青磁は、碗・皿等がある。碗は、口縁が大きく開く無文の(332)、胴外面に不規則な縦の櫛描文をもつ(333)、外面に、界線と間隔の広い線描蓮弁をもつ(334)、線描蓮弁文碗(335・336・

340)、染付C群と同器形で、胴部外面に線描の芭蕉葉文をもつ(337)等があり、底部片(338~340)は、見込に印花をもつ例である。皿は、胴部外面に片切彫による蓮弁文をもち、口縁が外に折れる(341)や、稜花皿(342)等がある。(343)は、胴部外面に縦の鐫文を巡らす壺である。頸部は短く、口端部の釉は、蓋を合わせて焼いているため拭き取られ、露胎としている。

白磁は、碗・皿・坏がある。(344)は、見込が平坦で、腰部に多少張りのある碗で、足の長い高台が付く。(345)は、口縁が端反りの皿で、重ね焼きのため、見込の釉を高台大の輪状に拭き取る。(346)も口縁が端反りの皿である。(347)は、腰がなく、高台からラッパ状に胴の開く坏である。

染付も碗・皿がある。(348・350)は蓮子碗C群、(349)は饅頭心碗E群である。(351~353)は、碁笥底の皿C群である。(354)は、見込に花草文を描くB₁群の皿である。

赤絵 (355)は、広い見込と端反りの口縁をもつ、染付B₁群と同タイプの皿である。外面は、高台脇に界線を引いて牡丹唐草文を描き、内面は口縁下と見込に界線を引き、胴部と見込に花草文を描く。赤色の上絵具で花びらや輪郭を描き、花央や輪郭内を緑色絵具で塗りつぶしている。

朝鮮製陶磁器 (356)は、碗である。灰色を呈する胎土は、緻密で堅く焼き締まり、無釉の器面は茶褐色を呈する。見込にロクロの回転を利用した篋描文をもつ。

金属 鉄釘や銅銭、小柄(357)などが出土した。

石製品 (358)は、小形の長方硯で、脚のないI B cタイプである。(359)は、平面がD字形のバンドコである。底部は側面に沿って脚が削り出され、前面には縦長の4窓が開く。(360)は、(210)と同形態の球形をした石製品である。両者の出土地点は比較的近く、(360)は、S D 402の北側から出土した。

表土出土遺物 (P L, 32, 第32図)

A・B両地区の遺構面全体を覆う床土、耕土など表土から出土した朝倉時代の遺物である。

越前焼 甕はIV群が大半を占め、播鉢もIV群が多い。(364)は、内面口縁下に凹線を巡らし、扇形の櫛描をもつ播鉢形の鉢である。(362・363)は、III群bの播鉢である。

瀬戸・美濃焼 (364)は、口縁下のくびれが弱い鉄釉の天目茶碗である。腰部以下に錆釉が施される。(365)は、胴が大きく外反する腰折れの灰釉皿である。腰部以下は露胎で、削り出しによる高台は、輪高台につくる。見込に土鎮痕が残る。

中国製陶磁器 (366)は、腰がなく、高台豊付から直線的に胴が開く青磁の皿である。(367)は、見込に印花をもつ青磁皿で、見込から口縁に向かって片切彫の刻線が引かれる。(368)は、鉢の胴部である。

(369)は、口縁が端反りの白磁皿である。高台内には、四角く囲んだ中に「福」が書かれる。(370)は、底部が碁笥底の輪花皿である。灰色がかかった透明な釉は貫入が多い。

(371)は、染付皿である。やや厚手の底部に低い高台がつく。やや青味がかかった釉は貫入が多く、見込には花樹文が描かれる。

4. 小 結

a. 遺 構

前項では、第15・25次発掘調査で検出した遺構を個別に記載してきた。ここでは、これらの遺構が全体としてどのような関係で存在していたのかについて、若干の考察を加えてまとめたい。

この地区は、領主朝倉義景の住いする朝倉館から一乗谷川を隔てた西側に位置しており、城下町の中でも中枢部に相当する場所であったと考えられる。屋敷地も約1,000㎡から2,500㎡もの広大な面積を与えられており、朝倉氏の家臣の中でも有力な武士達が住いした閑静な屋敷街を形成していたようである。

道路と町割について

この地区には、道路S S 260が南北に走っており、それに東西道路S S 944と975の2本が「T字形」とりついて、街の区画が形成されていた。道路は、①道路を幅1本分ずらした「^{矩折}」がみられる。②通常道幅は一定であるのが基本であるが、徐々に幅員を狭くしている箇所がみられる。③道路は直線であるが、「ショーゲドン」屋敷の門あたりで「く字形」に屈折しており「^{遠見遮断}」を意図している。などの特徴を有している。以上のような道のあり方は、従来から近世城下町特有のものであるとされてきた道普請の実態が、戦国時代にすでに発生・展開していたことを明確に物語るものであった。いいかえれば、領国経営に重点を置いて普請されたはずの近世城下町に、①～③のような防禦中心の戦国普請の遺制がなおも採用されていることは、驚きというほかないであろう。

道路面は、道全体に薄く砂利を敷き、叩き締めた普請が城下町内では一般的であったようである。同じ時期の勝山市平泉寺の僧坊跡を繋ぐ縦道・横道、一乗谷城下町への導入路である「朝倉街道」の大手道にあたる東大味から鹿俣への峠道、さらには滋賀県の観音寺城や安土城などの道路が、河原石や山石を敷きつめた石畳道であるのと対象的であるといえよう。道路に面した屋敷の石垣は、見栄のためか巨石を積んでいるにもかかわらず、土塁内側や隣屋敷との境界はさほどの巨石を用いず、積み方も荒い点興味が引かれる。さらに、土塁石垣積みが各屋敷ごとに実施されていることも、1軒ごとの石の積み方の相違から認められ、領主による道普請のための縄張りを実施された後、各自実施したことが判る。

A地区について

前項では第15次調査区の北半分と第25次調査区の南半分を合わせた東西約30m、南北約60mの敷地を1軒の武家屋敷（A地区）として記述を進めてきた。しかし、昭和57・58両年に実施したこの武家屋敷の立体復元事業（『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡環境整備報告II』）では、A地区の丁度北半分（東西約30m×南北約30m）を1軒の武家屋敷地として扱っている。発掘調査事実と立体復元に際しての考え方に齟齬がみられ、後世この復元屋敷が史実として語られる危惧も考えられるので、考古学の立場から若干の考察を試みておきたい。まず第1点は、正門である。これは掘立柱の門S I 279 遺構を約30m北へ移動して正門としたもので、この位置には、もともと門遺構があったわけではない。第2点は、復元に際しては四辺を土塁で圍繞しているが、発掘の結果では北辺に土塁のあった形跡は認められなかった。道路S S 944とは段差があるので、目隠し塀や生垣状のもので区切っていたかもしれないのである。また南辺土塁も、掘立柱の目隠し塀S A 385で主殿をさえぎってはいたものの敷地境を示すほどのものではないのである。ましてや塀中門に比定する遺構も確認はされていない。第3点は、3畳敷の離座敷につい

てである。復元建物を考古学的に論じるのは難しいが、遺構のあり方からみて溝S D 399を^竈跨いで主殿と繋った4.5畳の座敷と考えている。坪庭S G 420遺構との関連で、この座敷が茶の湯の席として使用されたことは明らかであるが、4.5畳の茶室の出現時期は安土・桃山時代以降とする従来の説のみで3畳台目を採用するのはいかがなものであろうか。戦国時代には4.5畳の座敷はすでに普及しており、現在1.5畳分の吹き抜け床が雨で濡れ、雪が積ってしまう現実を目のあたりにして、3畳台目の必然性は少ないものと考えられるのである。第4点は、便所についてである。SF 910・911 2基の便所遺構を、復元では1棟の杉皮葺屋根の建物としている。そして両側に汲取りもしくは小便用の空間も作られている。最近、便所遺構の考古学的発見が相ついでおり、佐賀県名護屋城跡のように金隠しの位置から、入口に向けて当時の人が使用したことの明らかな事例も報告されるようになってきた。しかし、便所に小便専用の空間があったか、汲取りのための場所が設けられていたかなどは不明である。筆者は、汲取りは簡単に渡し掛けた床板や金隠しをはずす程度のもではなかったかと考えている。『洛中洛外図屏風』などの絵画資料にも、汲取のための専用空間は描かれていない。また、主殿の西南隅に繋っている便所遺構S F 437は、近世の座敷便所のように、来客用などの特別な時に室内から使用した便所と考えることもできるかもしれない。第5点は、「^晴と^藪」についてである。一乗谷城下町においては、領主の館はもとより、武家屋敷、寺院、町屋にいたるまで、敷地内における建物配置や建物内における遺構に、表向空間「晴」と内向空間「藪」の意識が貫徹している。A地区では、門S I 279、通路S S 386、建物S B 407・408、主殿S B 405の南半分、座敷S B 406、坪庭S G 420など、主に敷地南半分にある遺構が「晴」空間で、主殿S B 405の北半分、便所S F 910・911、井戸S E 905、蔵S B 903、東辺に設けられた門S I 415など、主に敷地北半分にある遺構が「藪」空間とみなすことができよう。「復元武家屋敷」として立体復元した敷地のみでは、あまりにも「晴」空間がなさすぎるものと思われる。

まとめ

A地区は、一乗谷川の氾濫の際Ⅲ・Ⅳ期面に砂が堆積したため、遺構の残存状況は極めて良好であった。また、Ⅱ期の町割時に作られた土塁のさらに下層からS X 924・926～929など町割以前のⅠ期の礎石なども検出され、城下町成立の鍵をにぎるものとして注目された。30m×60mの規模は、一乗谷では中規模の敷地とみられるが、この程度の武士であっても茶の湯の座敷や坪庭を有している点興味あるところである。B地区は、もとはA地区と合わせて1軒の敷地であったかもしれないが、後には東側に便所遺構が列をなして並んでいることから町屋あるいは使用人達の長屋風の建物が建てられ、一乗谷川の氾濫でかなり削平されてしまったと考えられる。C地区は、大半が一乗谷川の氾濫で、削平されてしまったようである。

b. 遺 物

前項では、A・B両地区で出土した個々の遺物について、出土遺構や出土層ごとに分けて説明を加えてきた。ここでは、A・B両地区における遺物の構成や、機能分担などについて概括してみたい。

両地区における出土遺物の内訳は、既に表5で示したとおりであり、総数はA地区が15,365点、B地区が8,976点であった。この内の陶磁器類(近世以降は除く)に限って、生産地別の構成比を示したのが表7である。これを概観すると、両地区とも土師質皿を主とした土師質土器が最も多く、越前焼と合わせた地元産で90%前後を占めている。次いで中国製陶磁器を主とした輸入陶磁器、残りが瀬戸・美濃焼を主とした国産陶器類である。

個々を見てみると、土師質土器は60%余りの値を示している。一乗谷では、朝倉館、中の御殿(第4・13次)、南陽寺(第64・65次)、中惣(第68次)で90%を越す値を示す以外は、寺院・武家屋敷・町屋を問わず、ほぼ60%前後に集中しており、A・B両地区の場合も、後者の一般的な数値を示したものと考えられる。越前焼は、A地区が24%、B地区が31.5%で、一乗谷の一般的な比率の30%前後に納まっている。ただし、土師質土器を除いた比率は、SK451・452、SX462など大甕埋設遺構が検出されたB地区で82.7%となり、一般的な比率の60%~80%を多少上回る。瀬戸・美濃焼は、A地区が2%、B地区が1.5%で、一般的な比率(1~4%)のなかでは比較的低い数値となり、瓦質土器・その他は、A地区が0.3%、B地区が0.2%で、平均的な数値を示している。中国製陶磁器は、一般的比率6~8%と比較して、A地区が8.8%と多い部類、B地区が4.7%と少ない部類になる。瀬戸・美濃焼と中国製陶磁器の比率を比較すると、A地区が1:4.4、B地区が1:3.1となり、A地区における中国製品の優位が窺える。朝鮮製陶磁器は、A地区が0.4%、B地区が0.2%で一般的な数値を示したものと言えよう。

単位面積(1m²)当りの出土破片数を見ると、A地区が8.17点、B地区が9.52点で、ややB地区の方が多いが、典型的な町屋地区の調査である第36次調査や、寺院跡の調査である第17次調査での数値が20前後を示すのに比べれば半分以下である。B地区は、Ⅲ・Ⅳ期において一乗谷川の氾濫で東半が削平されており、本来は多少大きな数値が得られたものと思えるが、推測にとどめざるをえない。

以上のように、陶磁器の生産地別構成比率等の比較では、A・B両地区とも一乗谷における一般的な出土傾向の範疇で捉えることができるが、両地区間に微妙な差がみられたことは注意すべきであろう。

次に、陶磁器を産地・器種別に機能分担を含めて見よう。

まず、越前焼は、貯蔵や調理などの機能を分担している。甕は、Ⅳ群の大甕が主体である。A地区では(53・90)等の中甕のほか、少数ではあるがⅡ群の(85)等も出土している。B地区では、SK451・452やSX462等のように埋設された甕があり、何らかの生産に関わるものと思える。いずれもⅢ期の遺構ではあるが、SK

		A 地 区		B 地 区	
地	土師質土器	—	64.5	—	61.9
	越前焼	67.7	24.0	82.7	31.5
			(88.5)		(93.4)
日	瀬戸・美濃焼	5.6	2.0	3.9	1.5
	瓦質土器・他	0.8	0.3	0.6	0.2
			(2.3)		(1.7)
外	中国製陶磁器	24.7	8.8	12.3	4.7
	朝鮮製陶磁器	1.2	0.4	0.5	0.2
			(9.2)		(4.9)
総破片数		5,218	14,699	3,268	8,572
発掘面積		1,800m ²		900m ²	
破片数 / m ²		8.17		9.52	
地区の性格		武家屋敷		町屋(?)	

(左欄は土師質土器を除いた比率)

表7 陶磁器の生産地別比率

越前焼	A地区		B地区		瀬戸・美濃焼	A地区		B地区		青磁	A地区		B地区		白磁	A地区		B地区		染付	A地区		B地区	
	A地区	B地区	A地区	B地区		A地区	B地区	A地区	B地区		A地区	B地区	A地区	B地区		A地区	B地区	A地区	B地区					
甕	65.8	79.4	鉄釉碗	46.0	31.3	碗	43.8	63.0	碗	0.4	1.6	碗	26.4	30.9										
壺	11.4	5.6	皿	0.7	1.6	皿	34.7	27.9	皿	90.4	90.2	皿	69.3	67.5										
鉢	4.3	2.6	他	13.1	21.1	鉢	10.0	3.3	坏	6.3	4.9	坏	2.7	1.6										
播鉢	16.8	12.2	灰釉碗	5.8	11.7	他	11.5	5.8	他	2.9	3.3	他	1.6	—										
他	1.7	0.2	皿	26.1	24.2																			
			他	8.3	10.1																			

表8 陶磁器の生産地別器種構成

451とS X 462でⅢ・Ⅳ群が混在するのに対し、S K 452は全てⅣ群で構成される点で異なる。壺は甕に比べて量が少ないが、台所の貯蔵具としては、やはり越前焼が最も多い。壺の内(91・226・247)等小型で片口をもち底部がしっかりした作りのものは、お歯黒壺に用いられた。播鉢は甕に次いで出土量が多いが、各屋敷における必要量が一定していたようで、A・B両地区とも他調査地における10~20%の値に納まる。Ⅳ群が主体であるが、(251~254)や(306~309)等Ⅲ群も混在する。

瀬戸・美濃焼は、碗や皿が主体である。鉄釉は碗が最も多く、喫茶用と思える天目茶碗が大半である。喫茶に関するものには(111・200・201・287)等茶入もあり、その他用途は分からないが、S K 450一括遺物中にみられる徳利形の壺がある。灰釉は皿が主体で、(11・55)等口縁が端反りの皿が最も多いが、中には(319)の様に桜花皿風の皿もある。碗は青磁の写しで、線描蓮弁文の(116)や無文の(117)等がある。他に1点のみであるが銅緑釉の香炉も出土している。

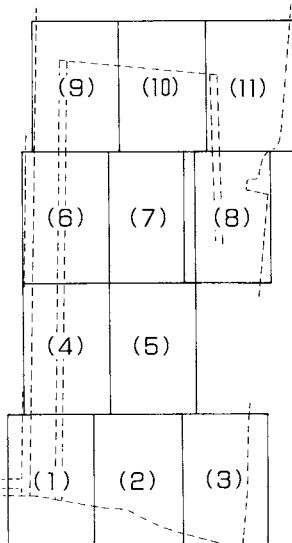
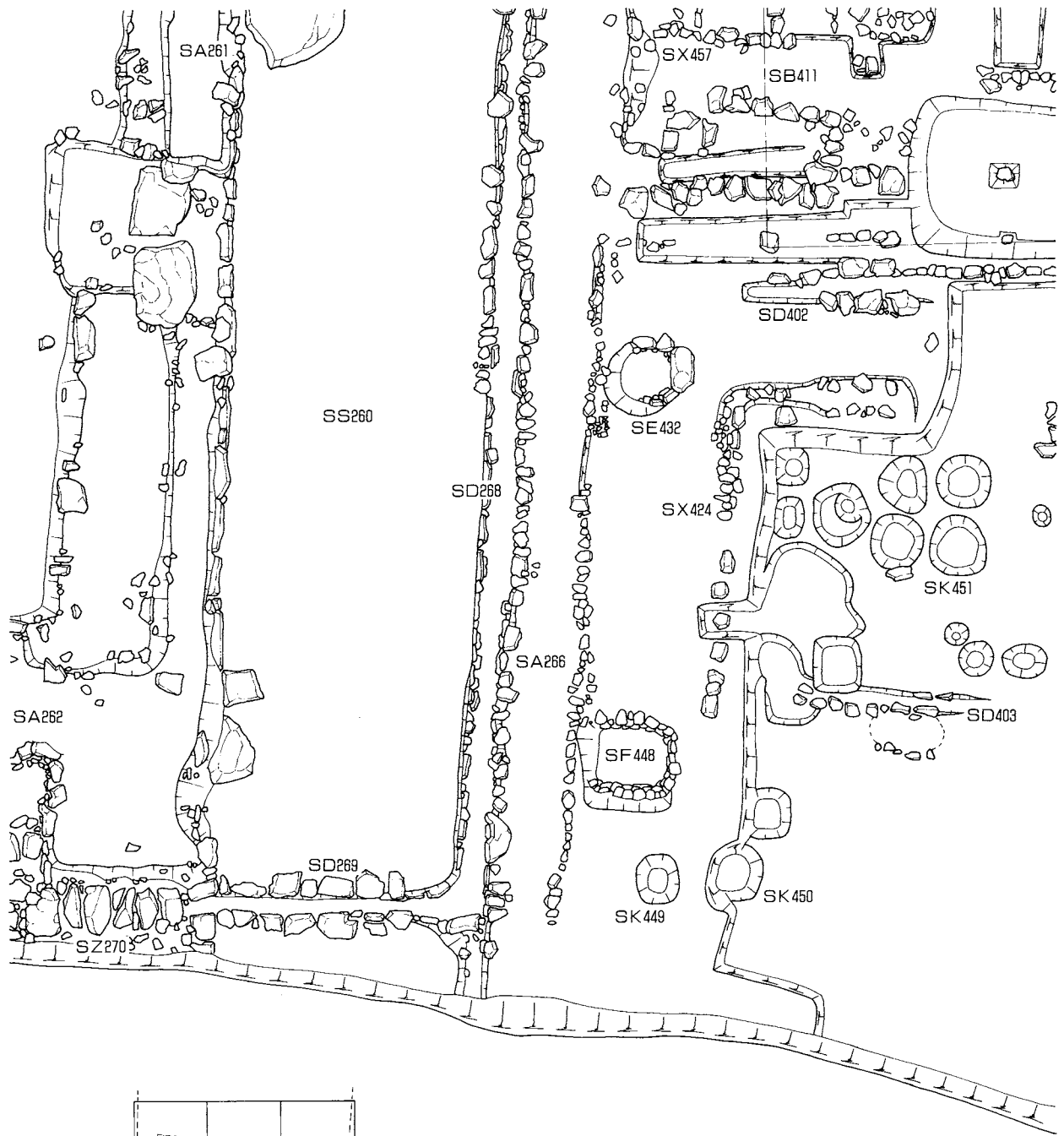
土師質土器は、前述のように皿が最も多く、坏・皿等飲食器の他、灯明皿にも用いられている。土釜は煮炊具であるが、いずれも(126・263)等小振りのもので、B地区でやや多く出土した。

瓦質土器は、火気に関する瓦燈・火鉢・香炉があるが、火鉢は笏谷石製品が補完し、香炉は青磁・灰釉が主体であるため、全体に占める出土量は少ない。

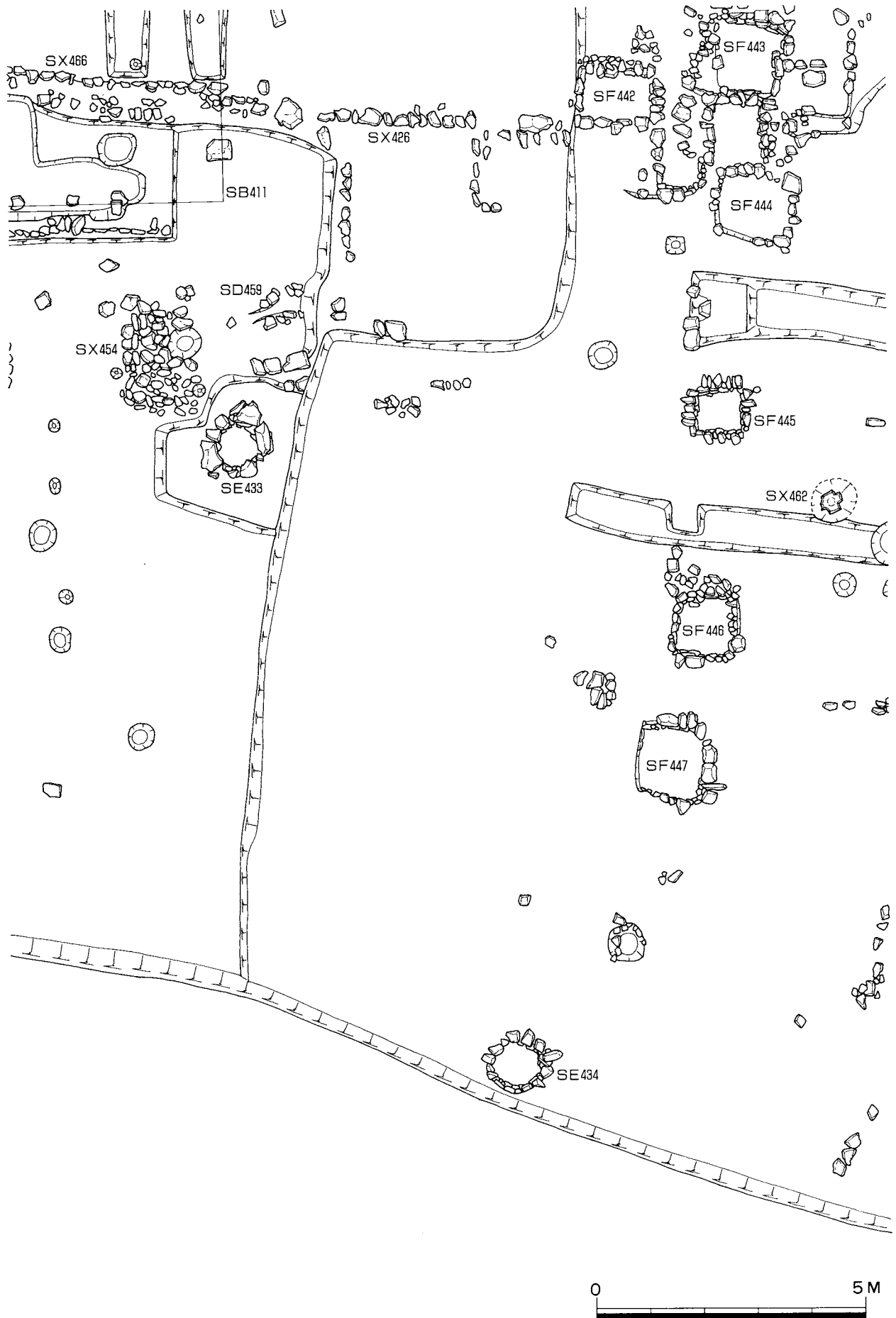
中国製陶磁器は碗・皿等食膳具が主体である。青磁は碗が多く、B地区では特に比率が高いが、皿は30%前後で比較的差が少なく、A地区では碗の少ない分、鉢や香炉が多くなっている。タイプ別では、碗は(18)等線描蓮弁文碗の他(135・143)等胴部が無文の碗が多く、皿は(19)をはじめとする桜花皿が多い。白磁は皿が大半で、A・B両地区とも90%余りを占める。(160)等口縁が端反りの皿が大半を占め、(159)等桜高台の皿も見られるが、菊皿は数点が出土しただけである。染付は、皿が70%近くで最も多く、碗は約半数の30%前後で、この傾向はA・B両地区に共通する。タイプ別では、碗は(163・166)等C群の蓮子碗が多数を占め、饅頭心E群の碗は(349)の他、数片が確認されただけであった。皿はB1群が主体で、A地区では見込に十字花文をもつものが多くみられた。

以上、陶磁器類の構成と機能分担について概要を述べた。これらの時期的なまとまりをみた場合、他の調査地と大きな違いはないが、中国陶磁器では上記のように新しい時期の遺物が少なく、越前焼では甕・播鉢ともⅣ群が主体ながら、各々Ⅲ群が比較的多く混在しており、全体に古い様相を示す遺物が目立っている。このことは、A地区の下層で町割に先行する遺構面(I期)が確認され、越前焼I群の甕・播鉢も出土しており、この地区が町割実施以前から続く生活地区であった事を反映したものである。また、町割にのる2遺構面とこれに先行する遺構面と間には、遺物の変化が漸移的であり、時間的に大きな空白があるとは考えられなかった。

第2図 遺構平面詳細図(1)



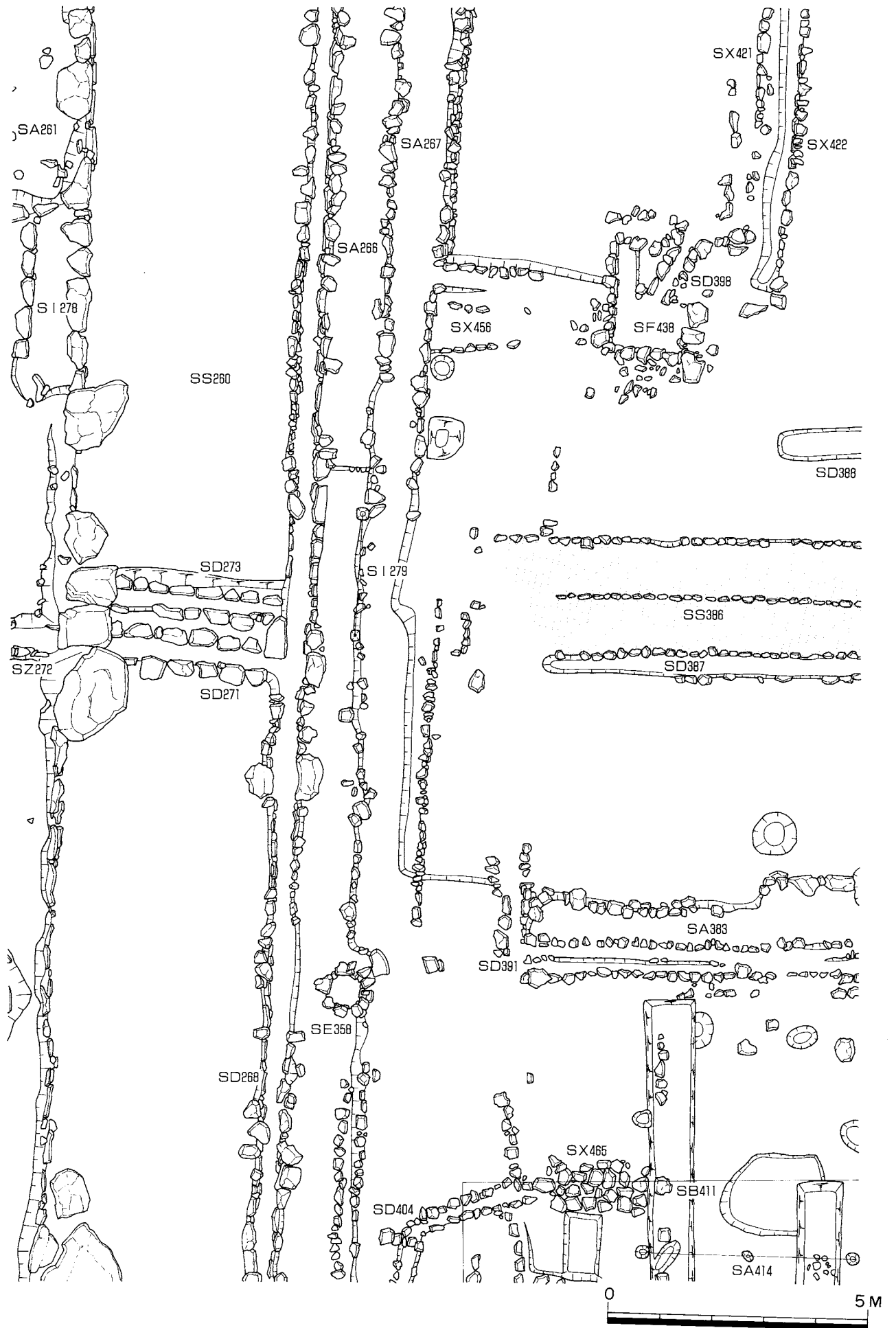
第3図 遺構平面詳細図(2)



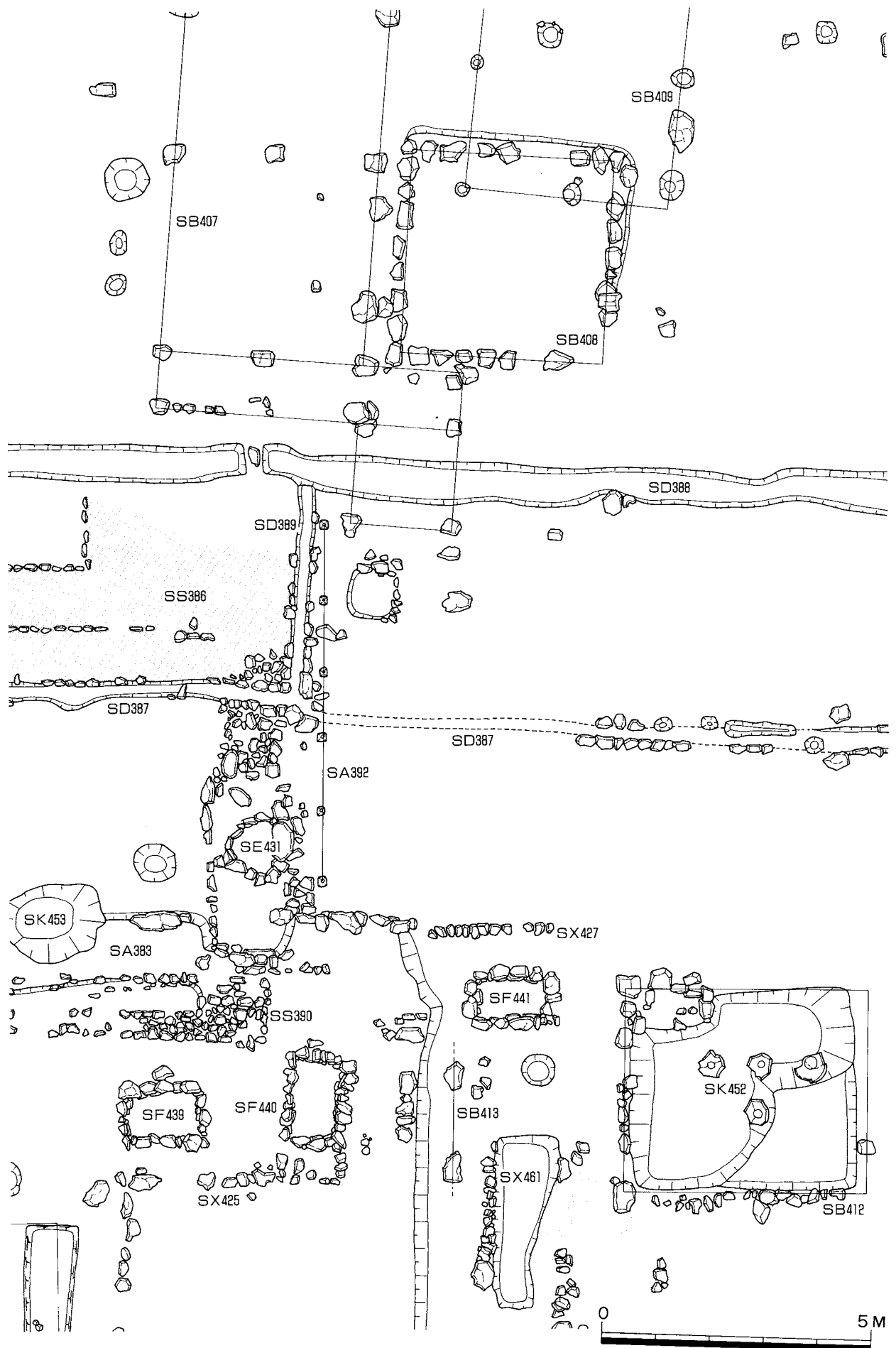
第4図 遺構平面詳細図(3)



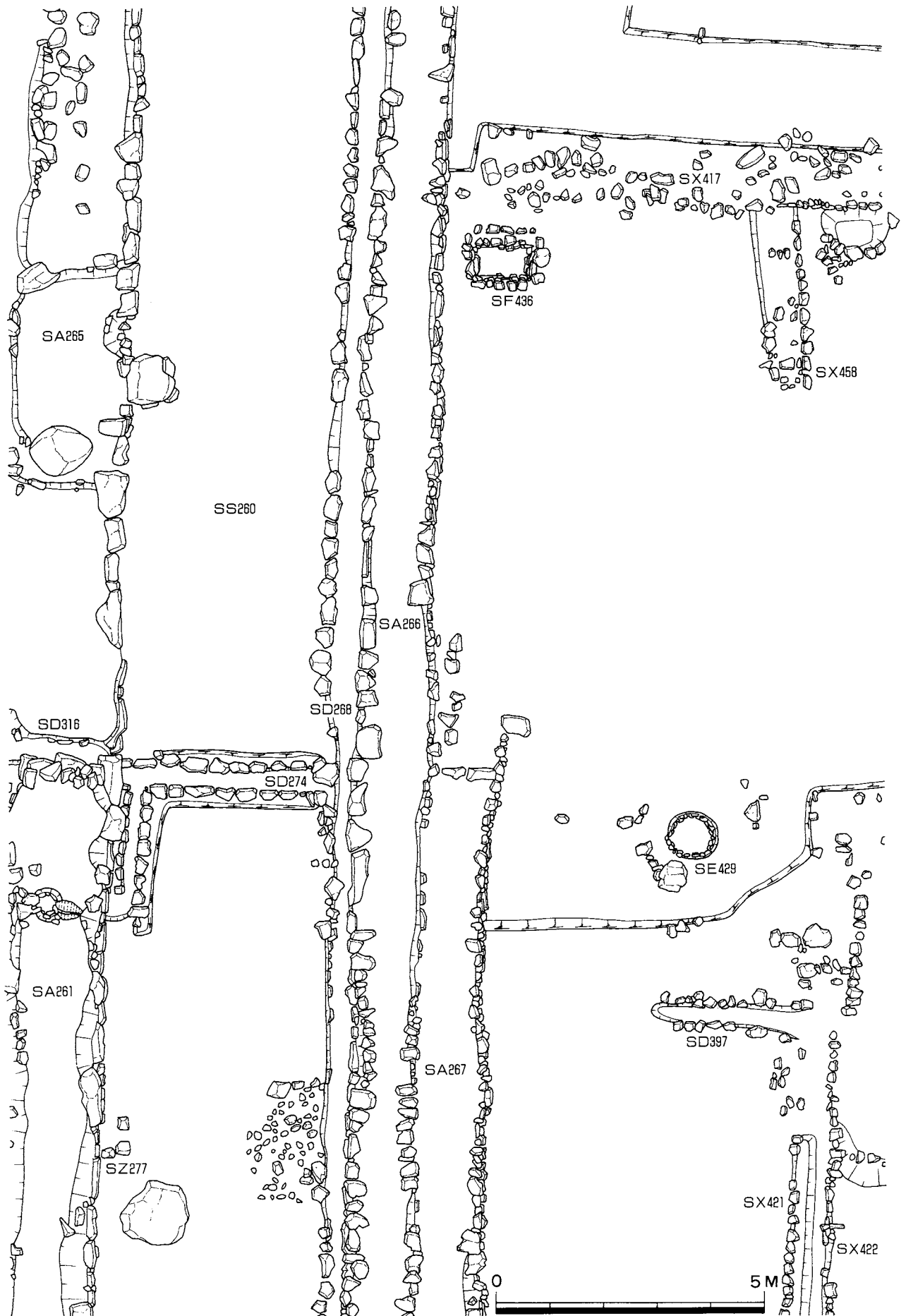
第5図 遺構平面詳細図(4)



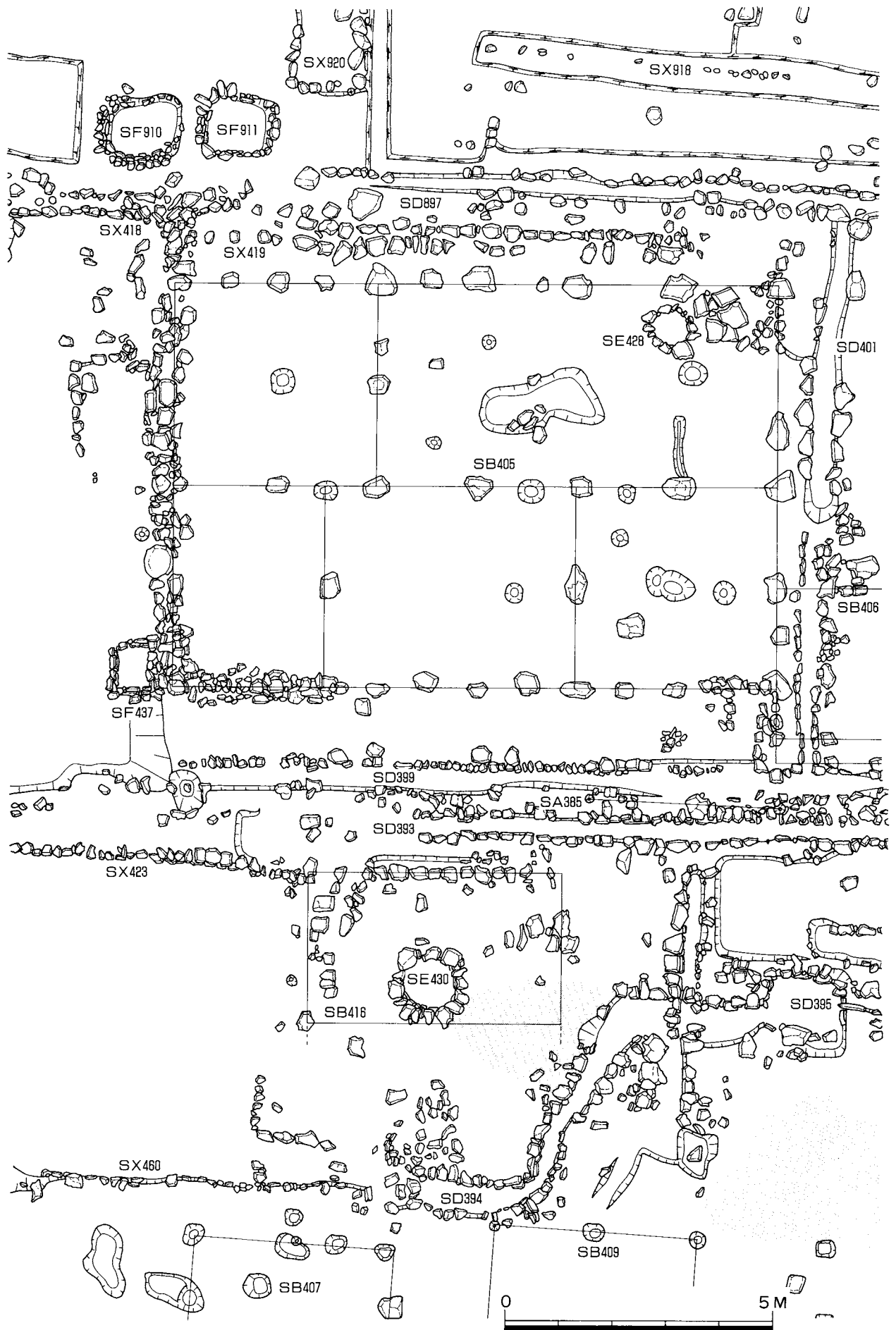
第6図 遺構平面詳細図(5)



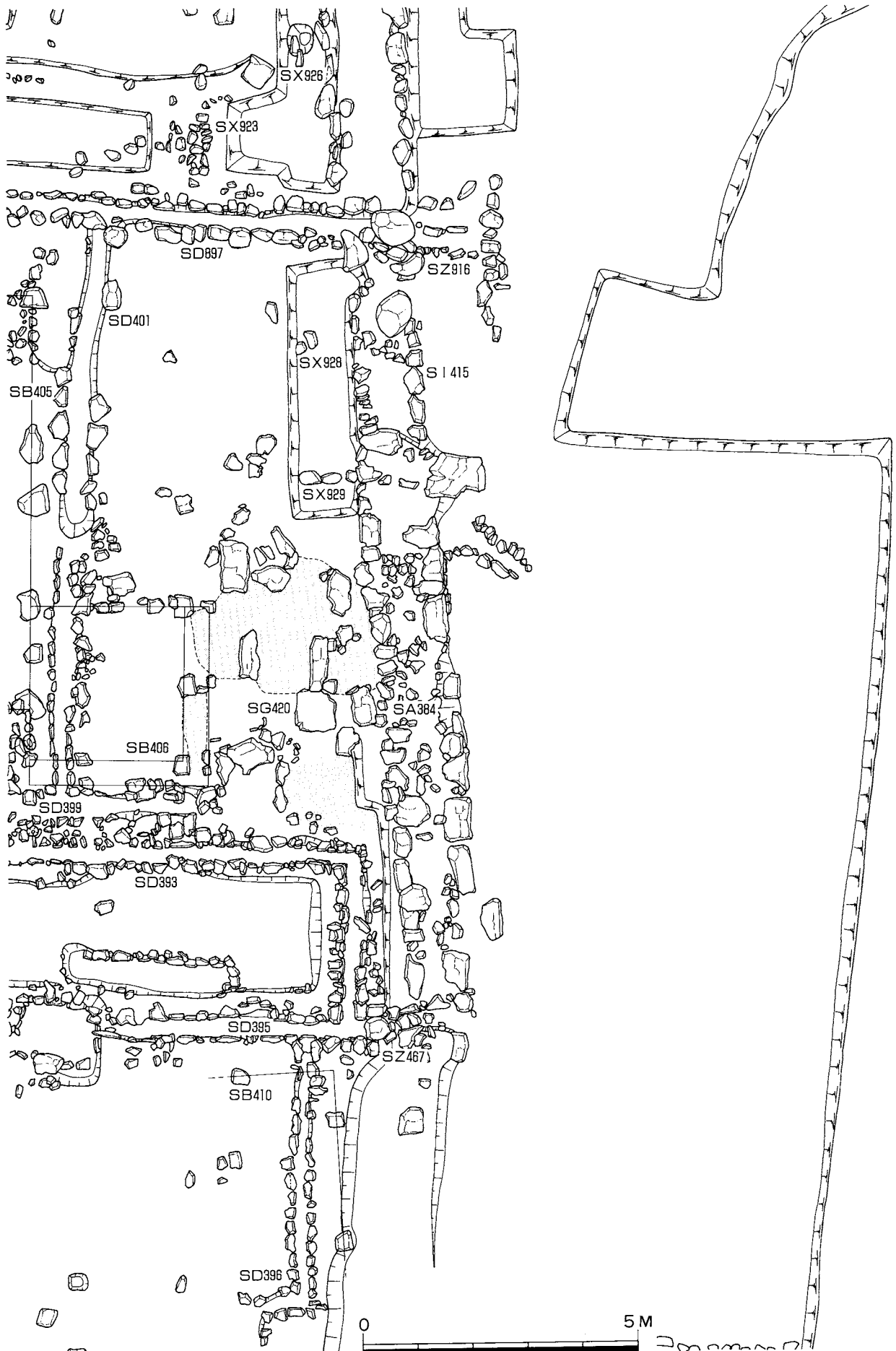
第7図 遺構平面詳細図(6)



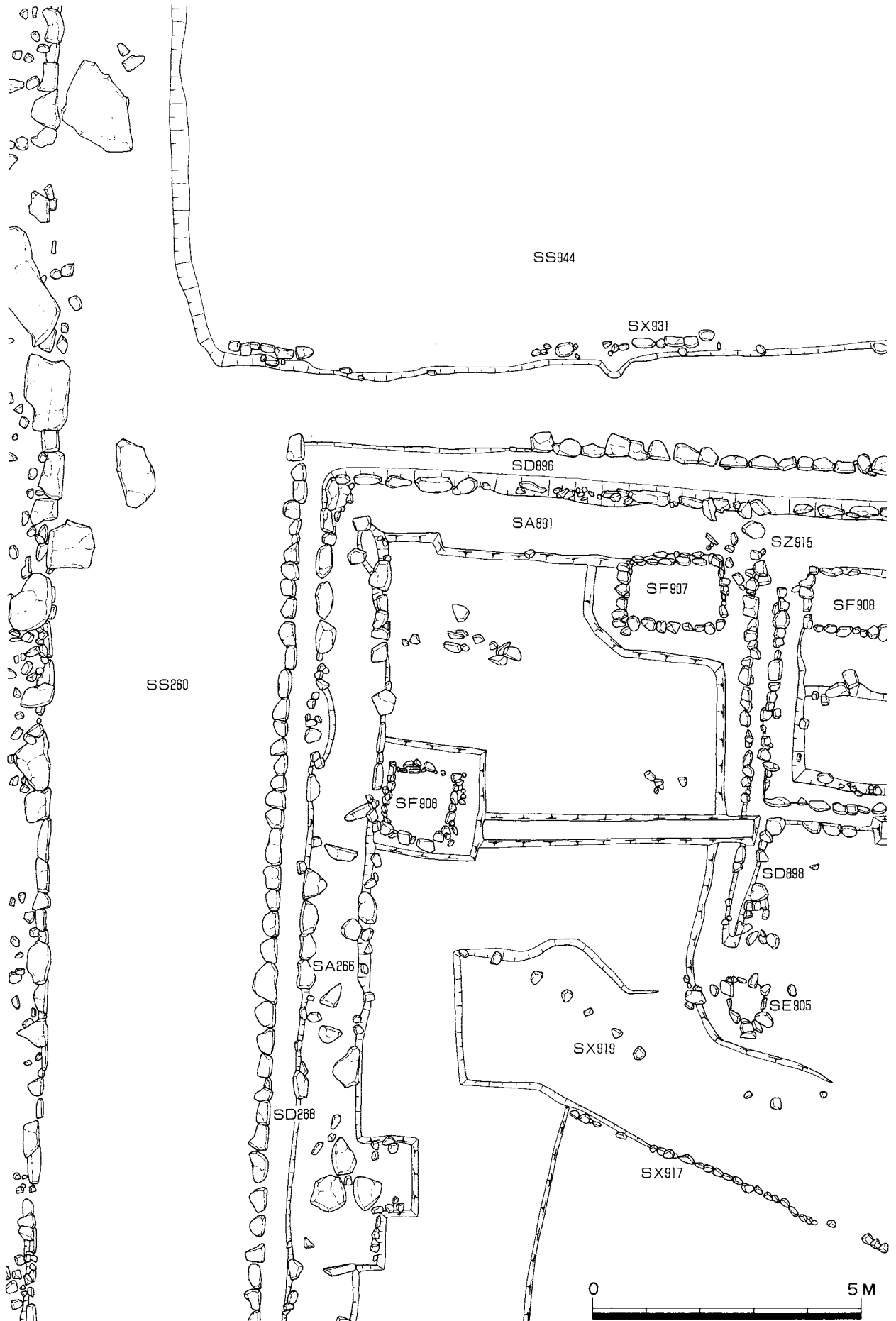
第8図 遺構平面詳細図(7)



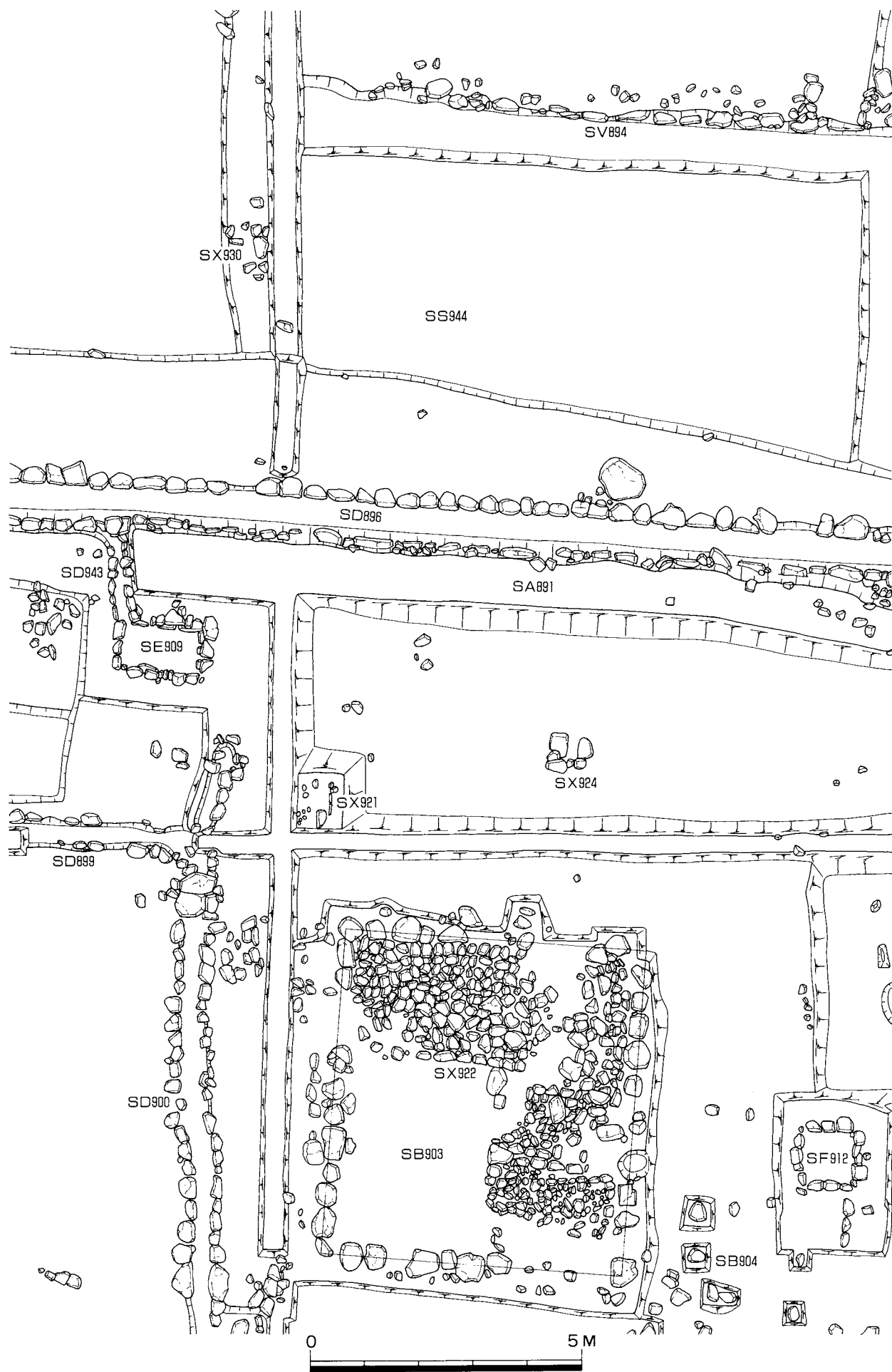
第9図 遺構平面詳細図(8)



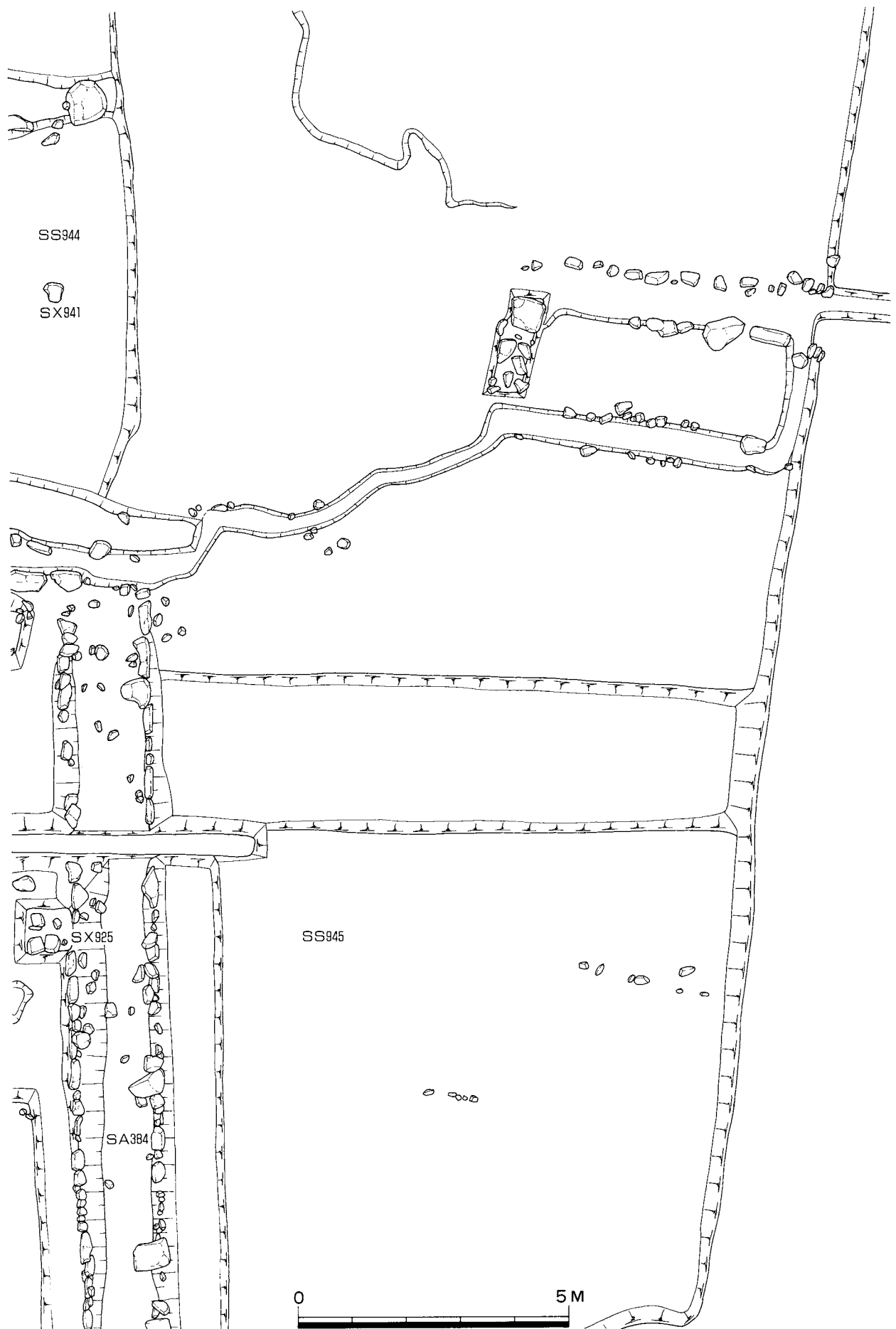
第10図 遺構平面詳細図(9)



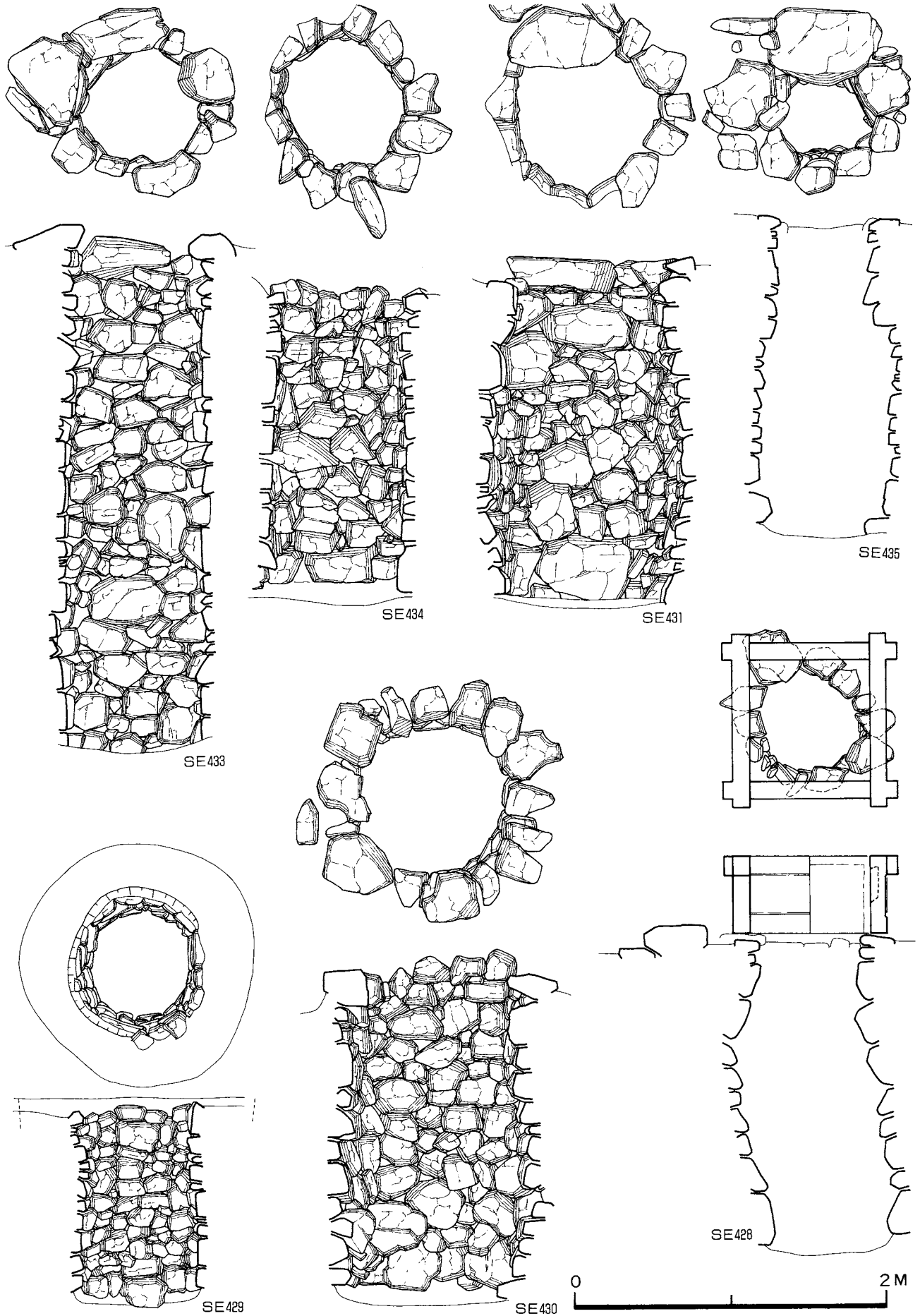
第11図 遺構平面詳細図(10)



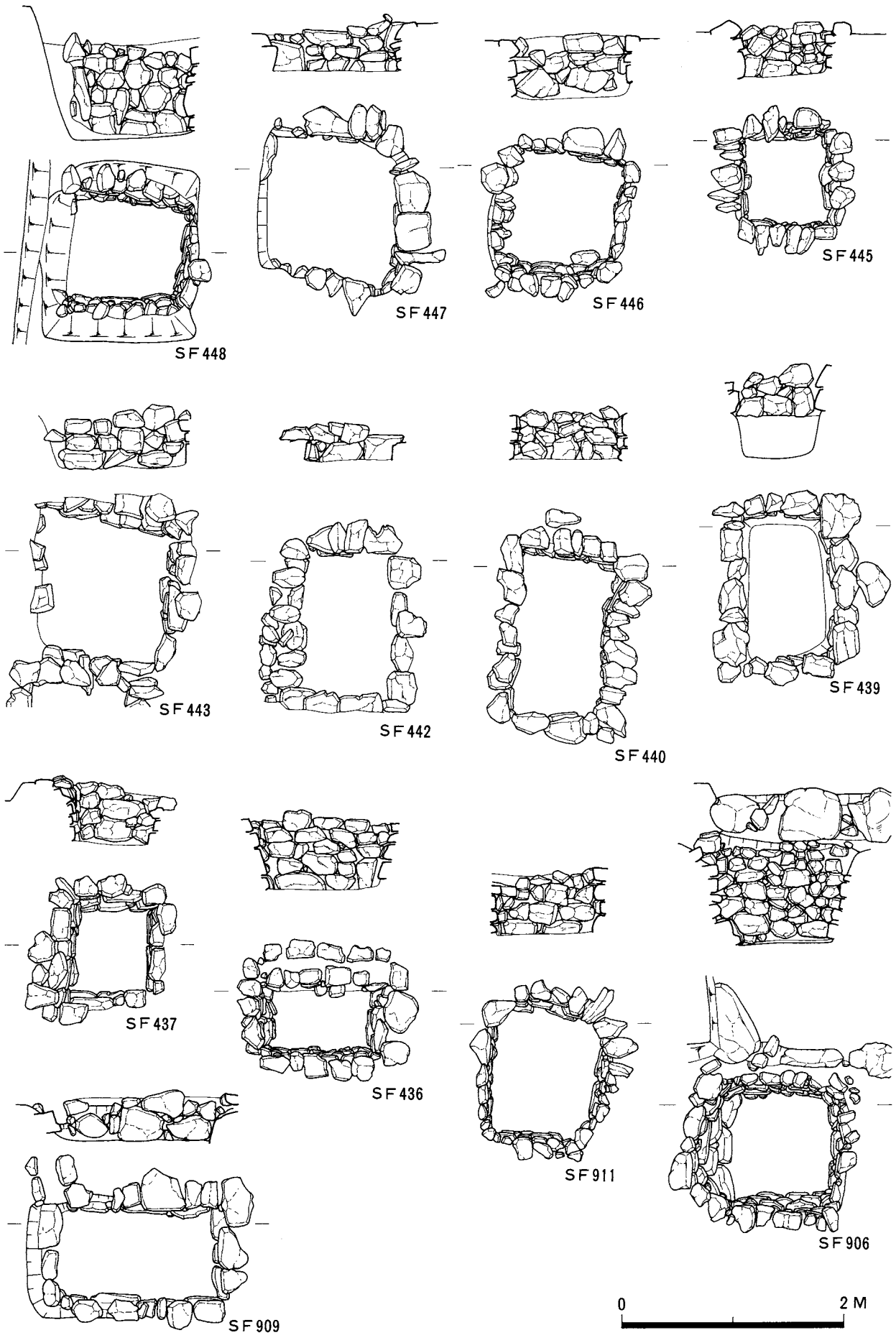
第12図 遺構平面詳細図(1)



第13図 井戸実測図



第14図 石積施設実測図



第15次調査区

第25次調査区



調査区全景



第15次調査区
(西南から)



第15次調査区
(南から)



第15次調査区
(北から)

調査区全景



第25次調査区
道路矩折部
(北から)



第25次調査区
(北から)



第25次調査区
(東北から)

調査区主要部



第15次調査区
A地区南半部
(東から)



第15次調査区
A地区中央部
(東北から)



第15次調査区
B地区北半部
(東から)

調査区主要部



第15次調査区
B地区西半部
(東から)



第25次調査区
A地区西北部
(東から)



第25次調査区
A地区北半部
(東から)

土 壘



◀ S A 383
(西から)
▶ S A 266・267
(北から)



◀ S A 384・891
(北から)
▶ S A 266
(北から)



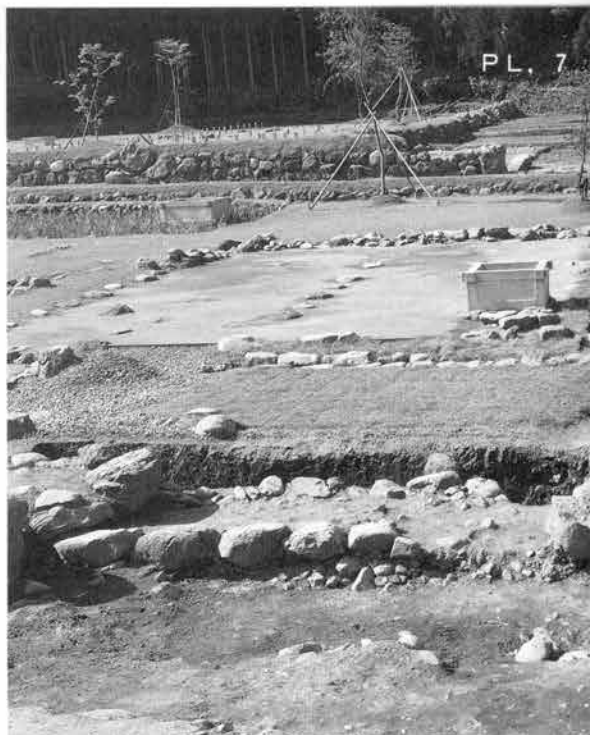
◀ S A 384
(南から)
▶ S A 892・893
と道路矩折部
(東北から)



門と溝



- ◀ S I 279
(東から)
- ▶ S I 415
(東から)

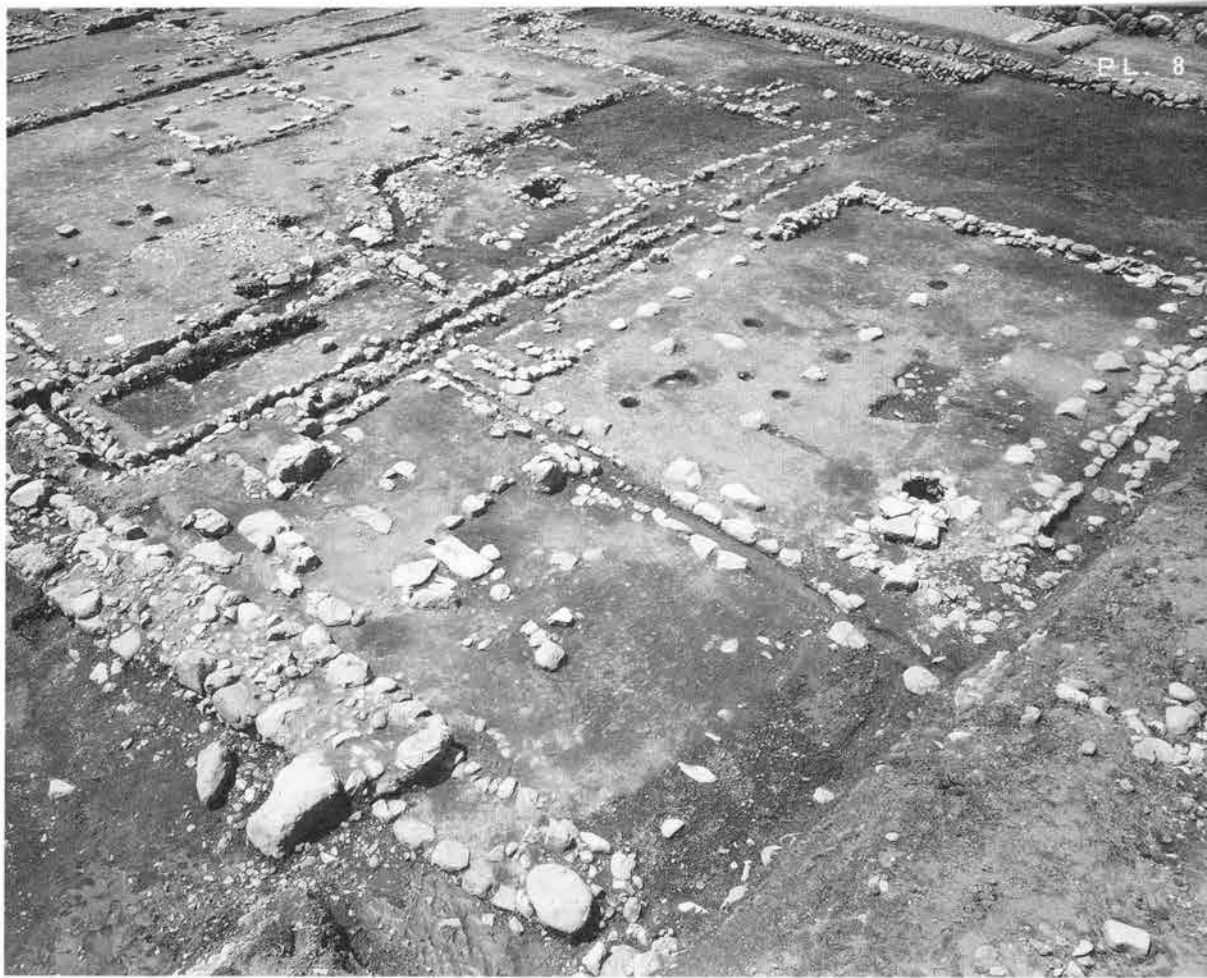


- ◀ S D 395 ・ S Z 467
(東から)
- S D 897 ・ S Z 916
(東から)
- ▶ S D 898 ・ S Z 915
(北から)



- 主殿 S B 405 の
南の溝群
(南から)

建物と庭



S B 405・406と
S G 420
(東北から)



S B 406と
S G 420
(北から)



S B 405西辺の
方形石列

建 物

礎石建物 S B 407・408
掘立柱建物 S B 409
(南から)



S B 903と
石敷 S X 922
(東から)



S B 412と
埋甕 S K 452
(北から)



諸施設

◀目隠し塀 S A 392
(北から)

▶通路 S S 390の
石段
(北から)



◀埋甕 S K 451
(南から)

▶道路 S S 944
(東から)



◀多くの遺物が出
土した S K 450
(南から)



▶町割以前の
礎石 S X 929
(西から)



石組井戸

◀ S E 428

▶ S E 429



◀ S E 430

▶ S E 431



◀ S E 433

▶ S E 434



◀ S E 435

▶ S E 905



石積施設



S F 439・440



◀ S F 436
▶ S F 437



◀ S F 438
▶ S F 441



◀ S F 442
▶ S F 443



石積施設

◀ S F 444
▶ S F 445



PL. 13

◀ S F 446
▶ S F 448



◀ S F 906
▶ S F 909



◀ 左から
S F 907
・908・909
▶ S F 909



石積施設

◀ S F 907
▶ S F 908



◀ S F 912
▶ S F 910



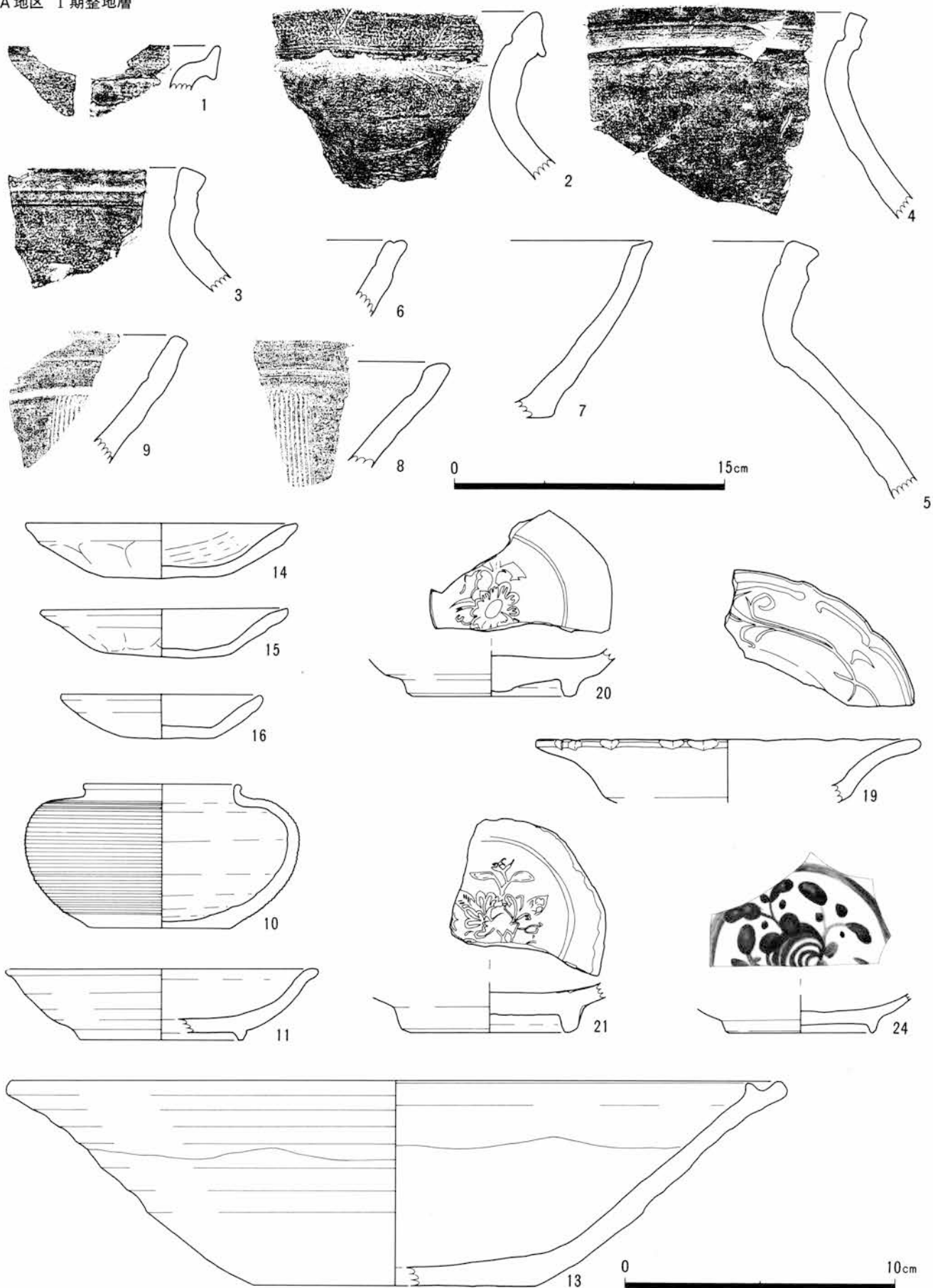
◀ S X 920
▶ S F 911



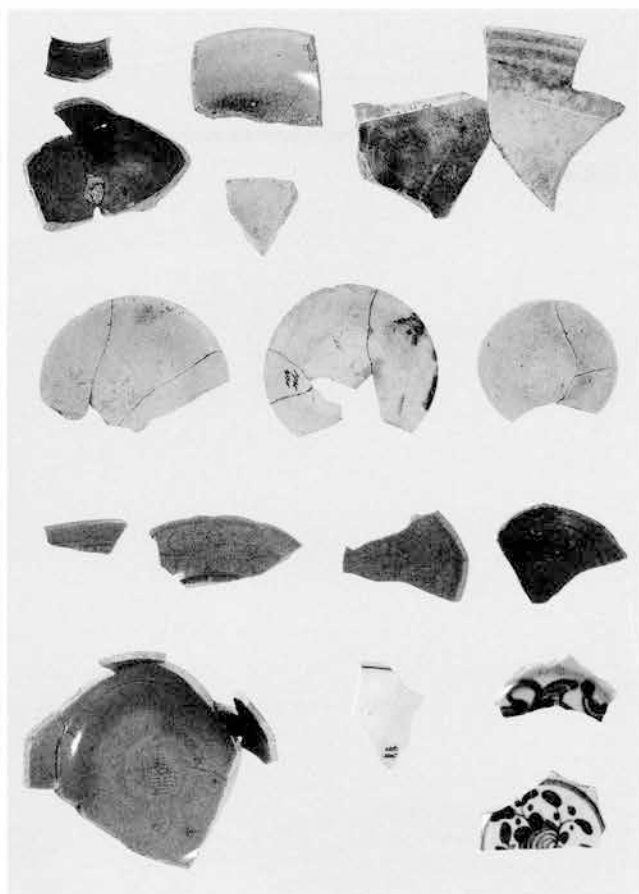
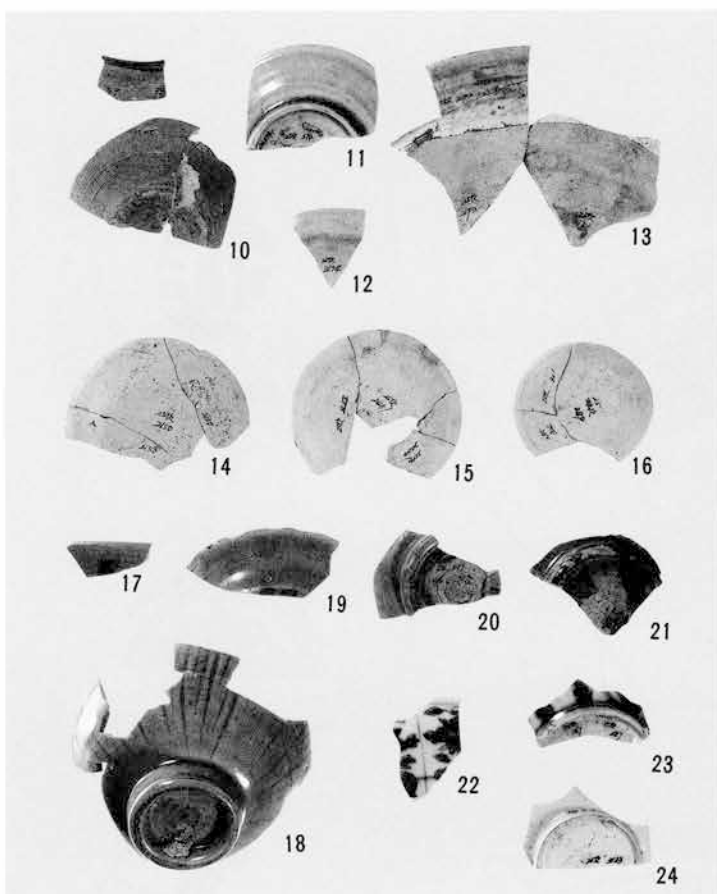
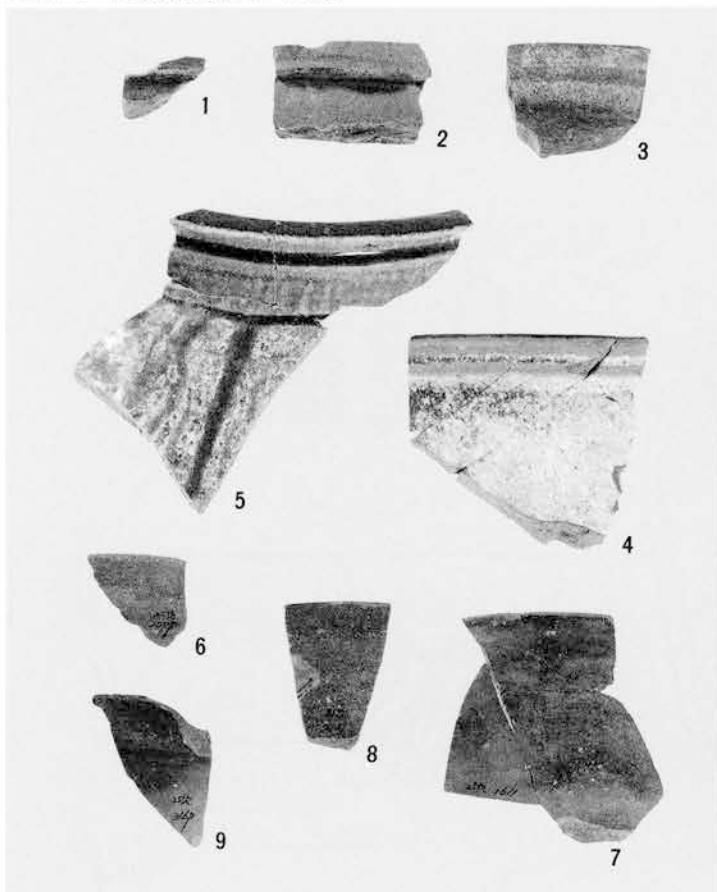
手前から S F 910・911
S X 920



第15図 第15・25次調査遺物(1)
A地区 I期整地層

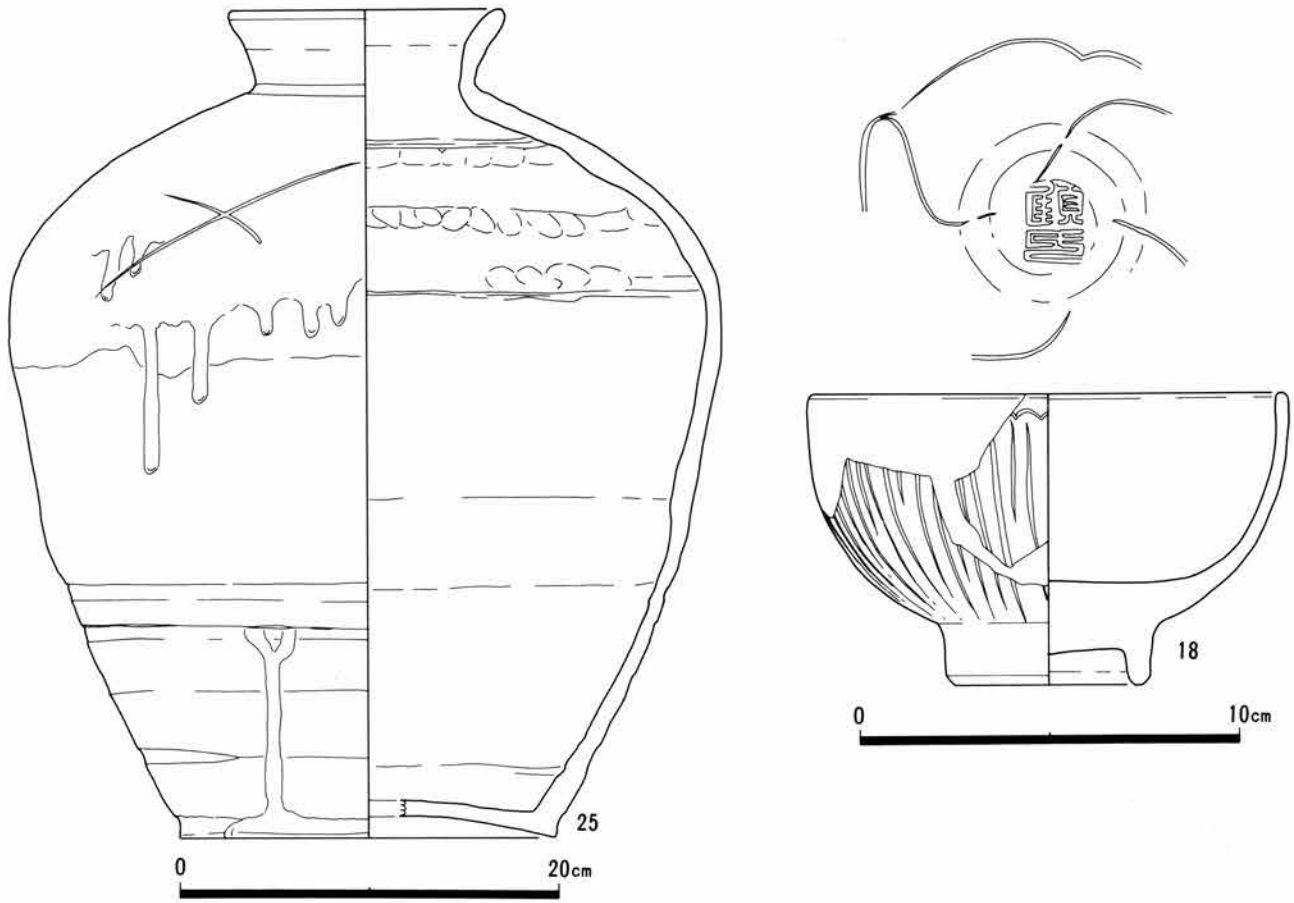


越前焼 1~5 鉢 6・7 播鉢 8・9 鉄釉茶入 10 灰釉皿 11 鉢 13 土師質皿 14~16 青磁皿 19~21 染付皿 24

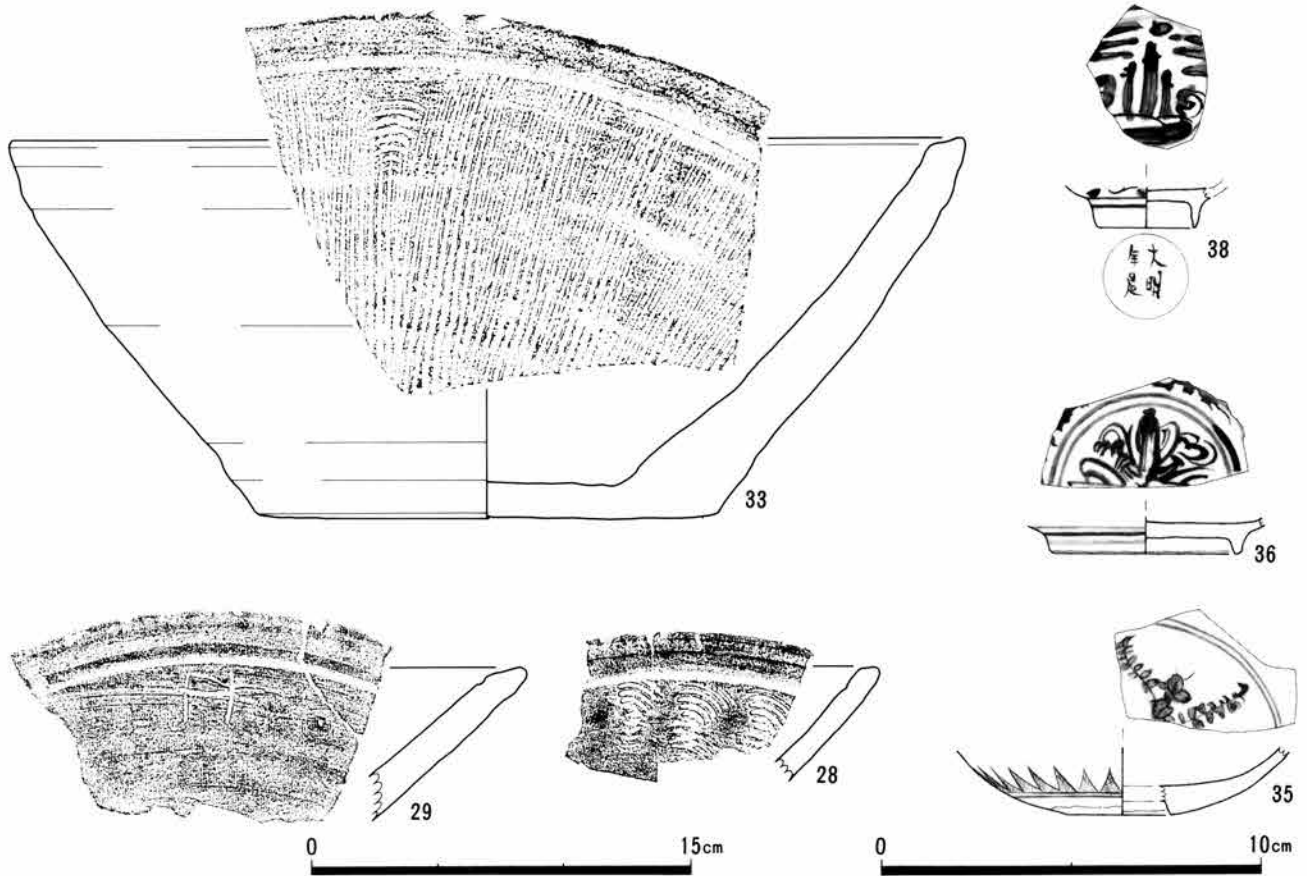


I期整地層 越前焼甕 1~5 鉢 6・7 播鉢 8・9 鉄釉茶入 10 灰釉皿 11・12 鉢 13 土師質皿 14~16 青磁碗 17・18 皿 19~21 染付碗 22 皿 23・24

第16図 第15・25次調査遺物(2)



III期整地層



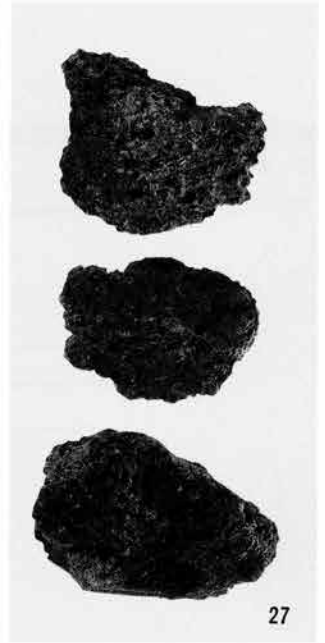
青磁碗18 丹波焼壺25 越前焼鉢28・29 播鉢33 染付皿35・36 坏38



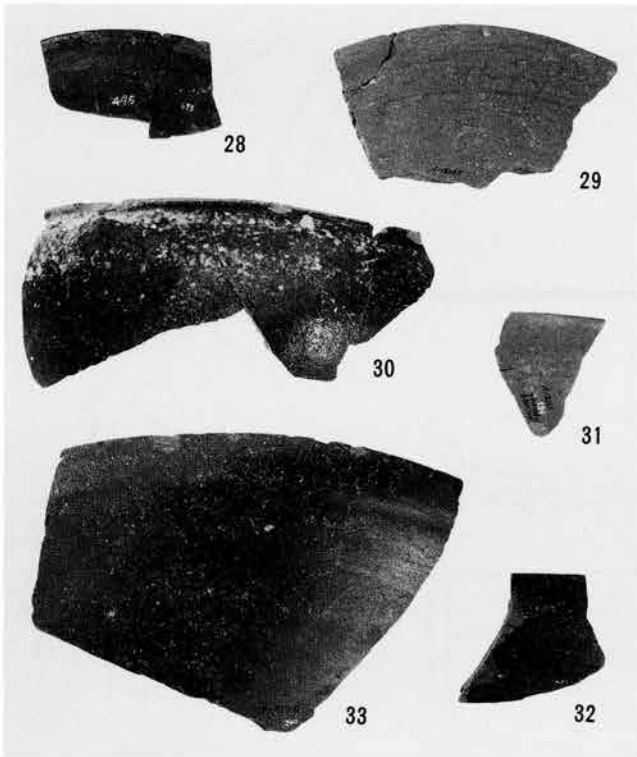
25



26



27



28

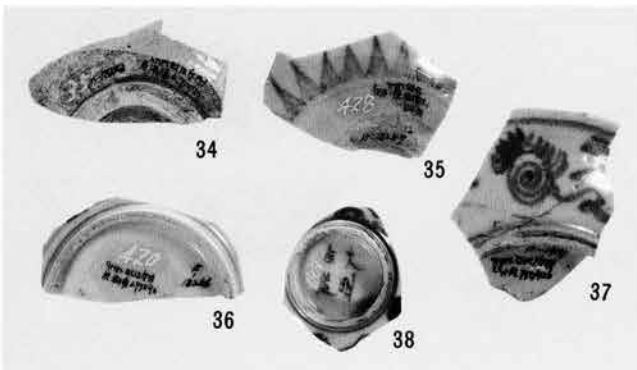
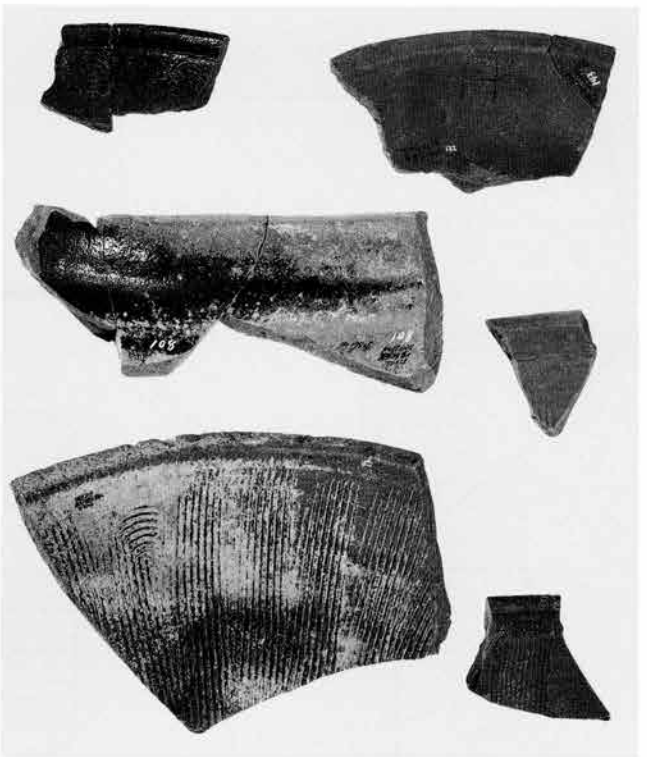
29

30

31

33

32



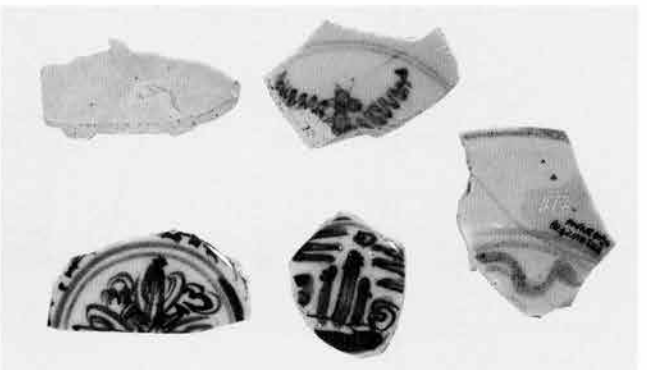
34

35

37

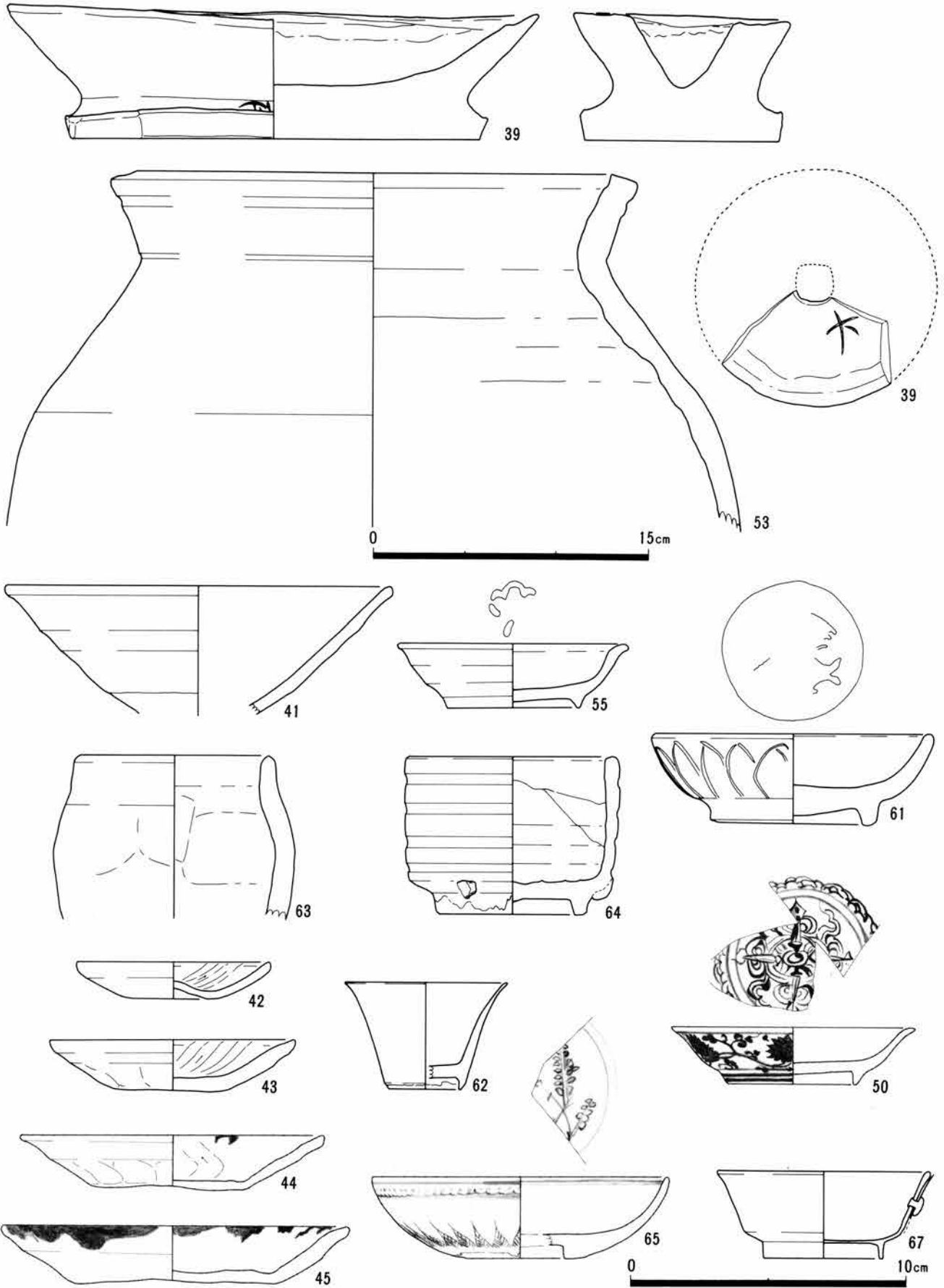
36

38



I期整地層 丹波焼壺25 石製品砥石26 その他炭化米27 III期整地層 越前焼鉢28~30 播鉢31~33 白磁皿34
 染付皿35~37 坏38

第17図 第15・25次調査遺物(3)
III・IV期各遺構



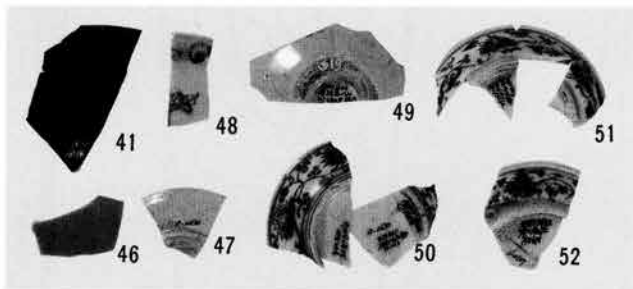
越前焼薬研39 甕53 鉄釉碗41 灰釉皿55 土師質皿42~45 壺63 青磁皿61 香炉64 白磁坏62 染付皿50・65 金属銅椀67



39



53



41

48

49

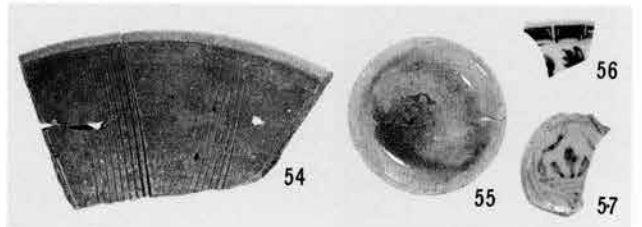
51

46

47

50

52

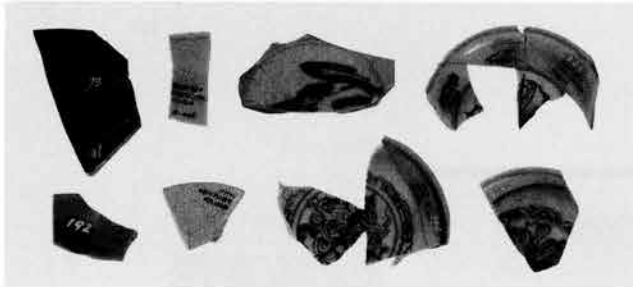


54

55

56

57



42

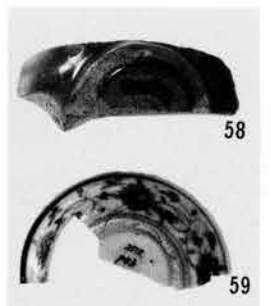
43

44

45



40

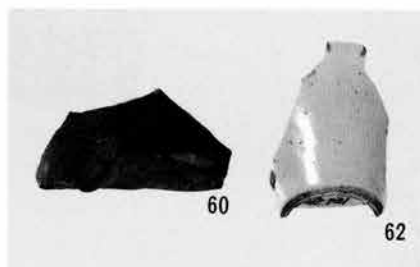


58

59



61

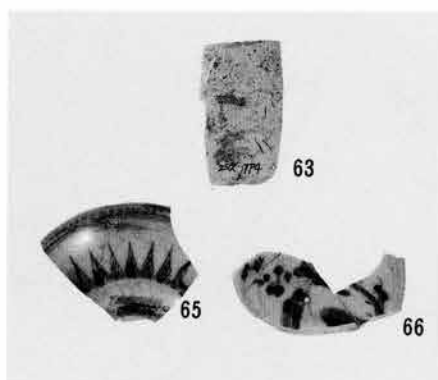


60

62



64



63

65

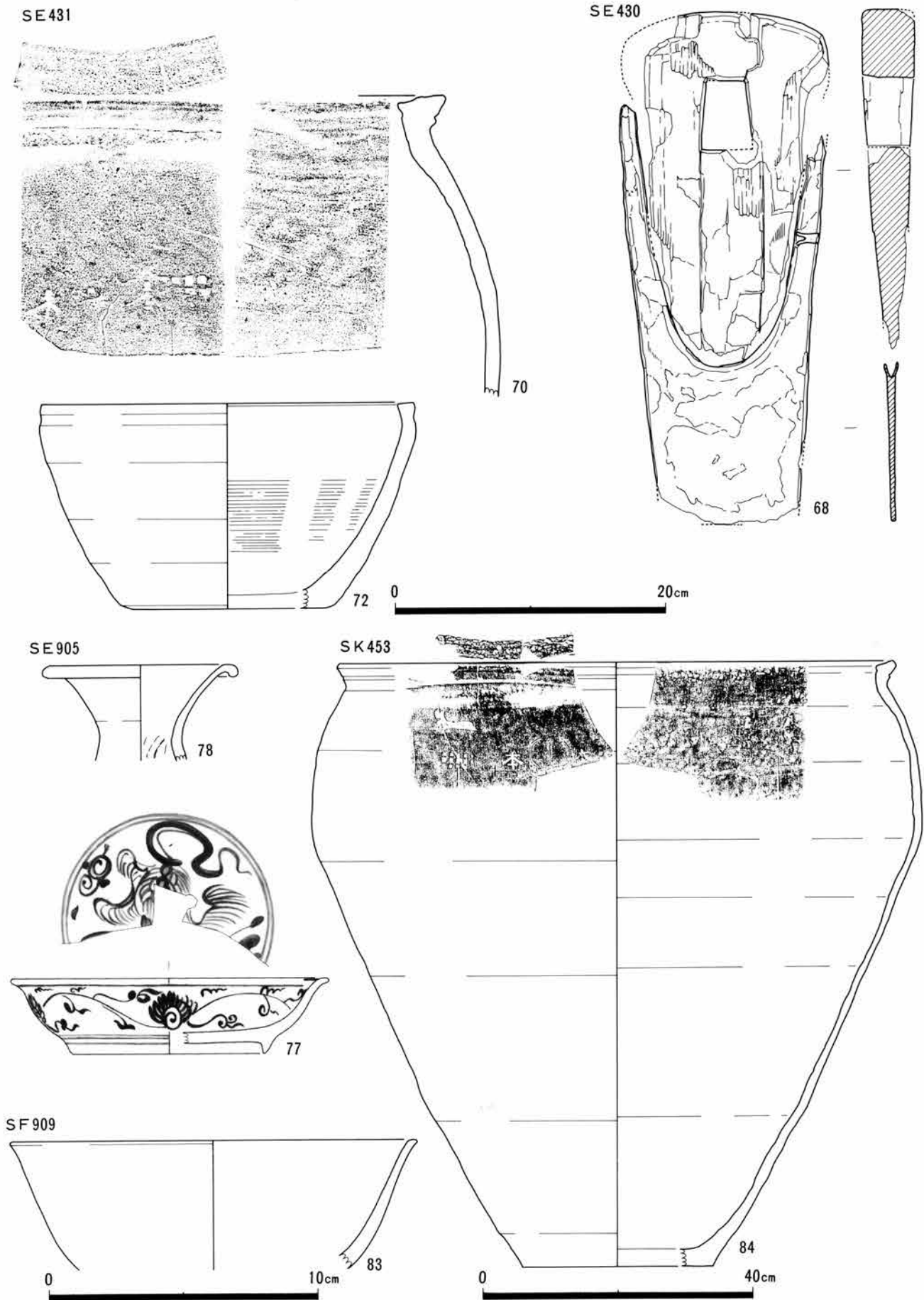
66



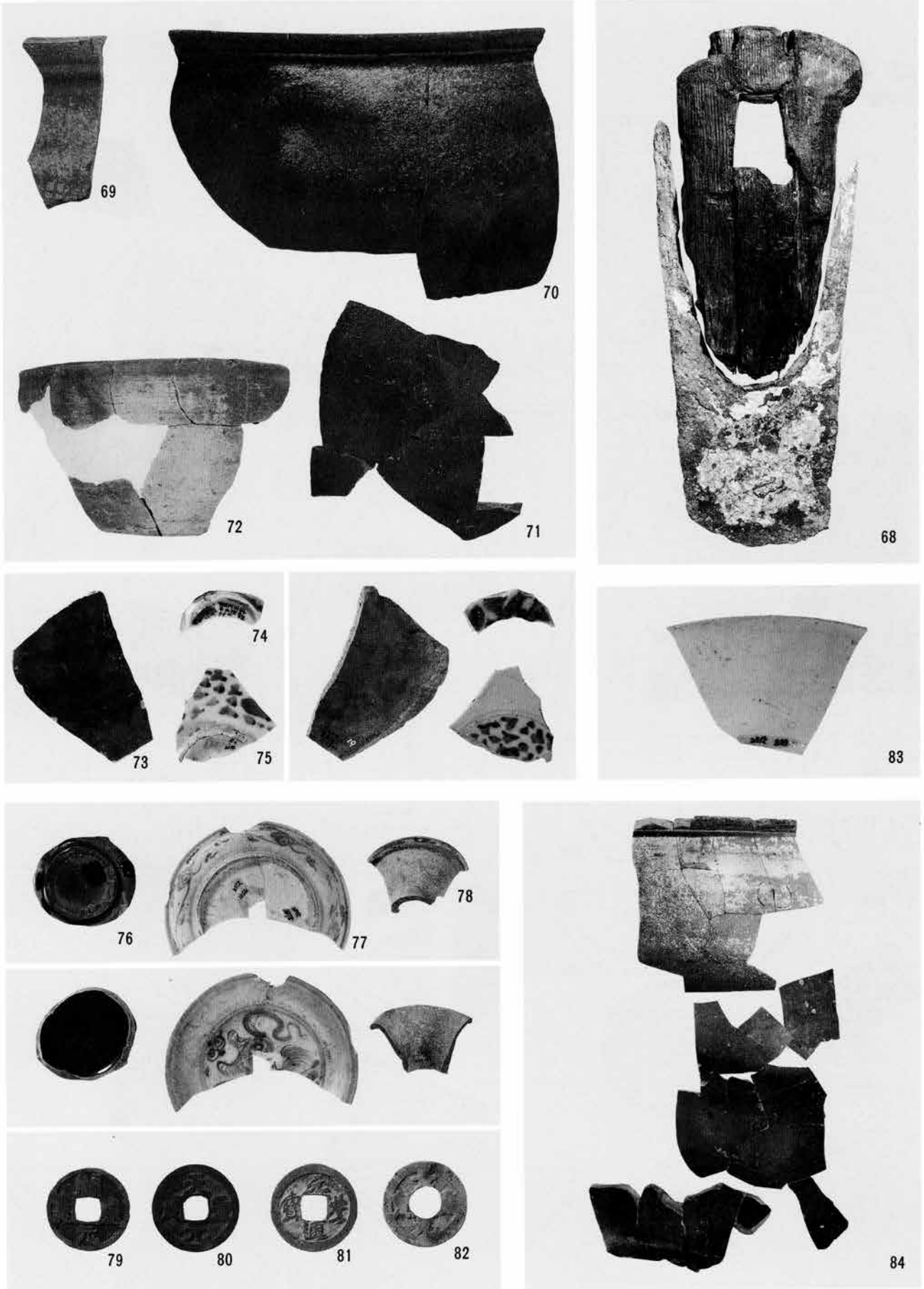
67

S D 389 越前焼菜研39 S D 394 朝鮮壺40 S D 395 鉄釉碗41 青磁碗46 白磁皿47 染付碗48 皿49~52
S D 897 越前焼甕53 播鉢54 灰釉皿55 染付碗56・57 S D 898 青磁碗58 染付皿59 S D 899 瓦質香炉60 青磁皿61
白磁坏62 S D 900 土師質壺63 青磁香炉64 染付皿65・66 S D 943 金属銅椀67

第18図 第15・25次調査遺物(4)



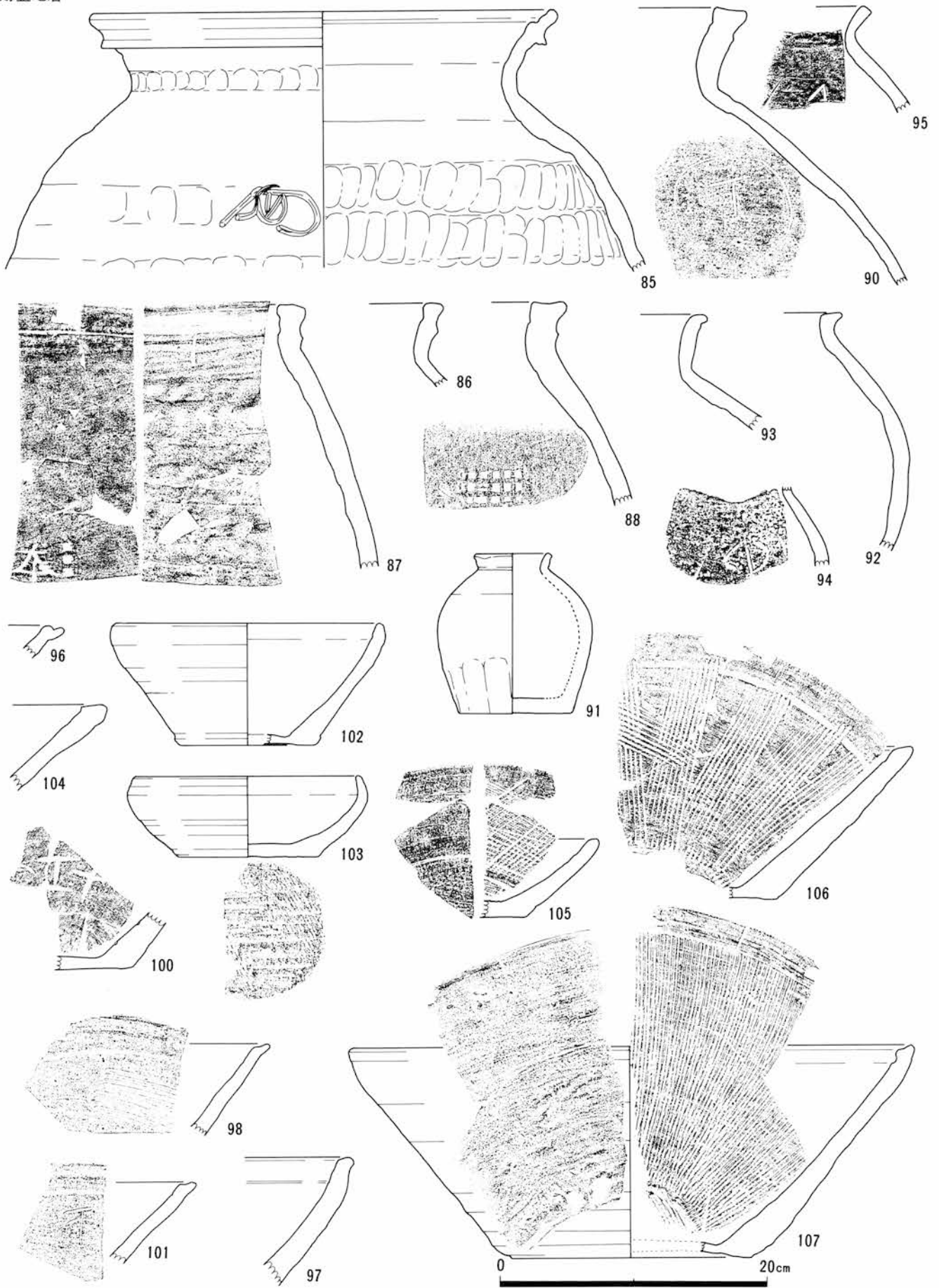
鉢68 越前焼甕70 鉢72 染付皿77 朝鮮瓶78 白磁碗83 越前甕84



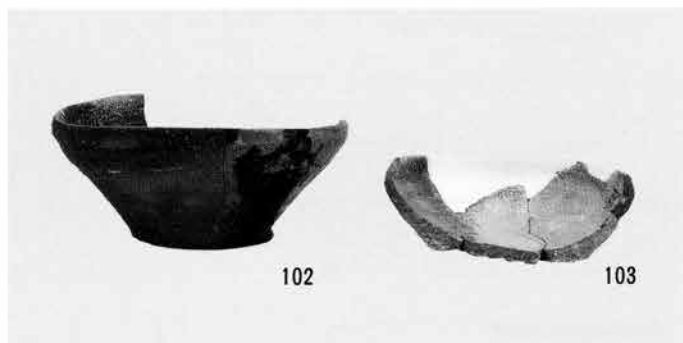
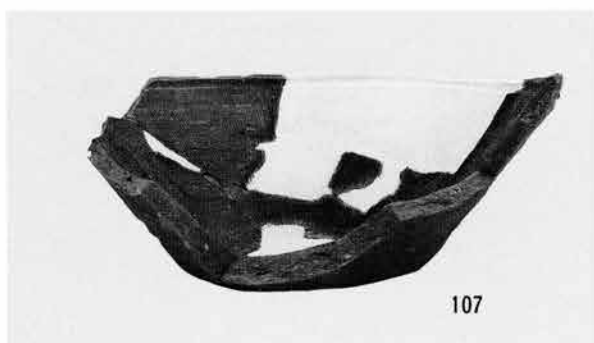
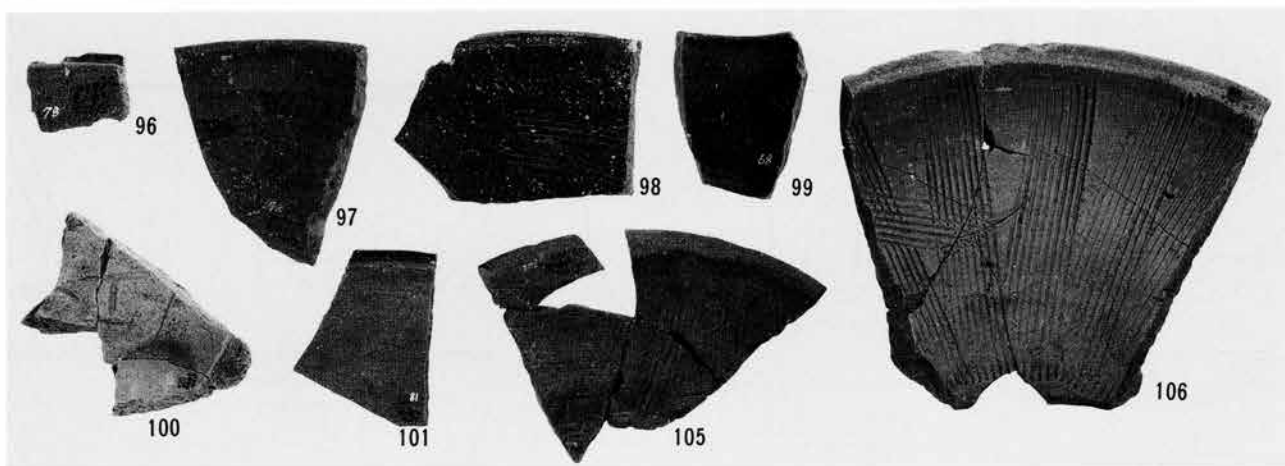
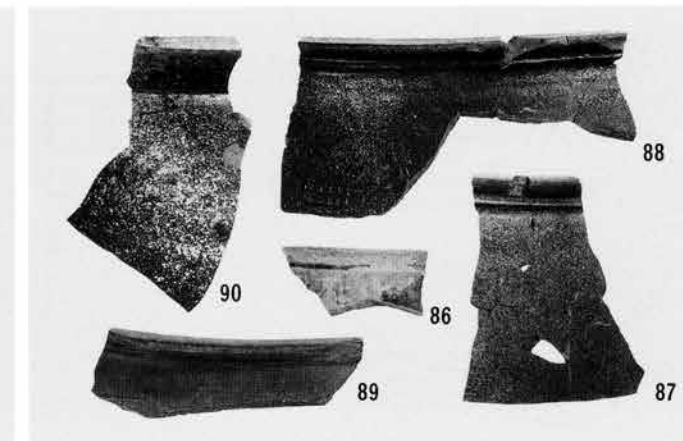
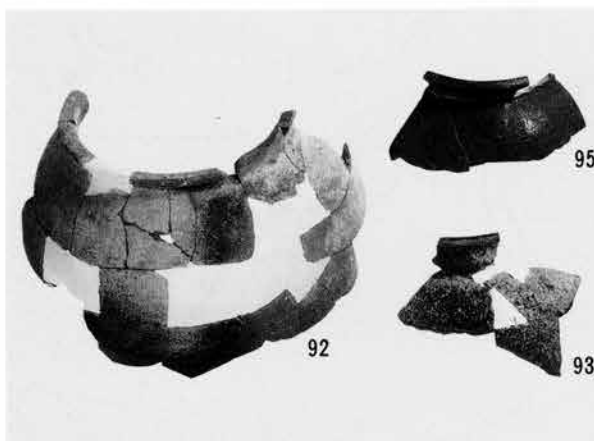
S E 430 鐵68 S E 431 越前焼甕69・70 壺71 鉢72 鉄釉瓶73 染付碗74・75 S E 905 鉄釉碗76 染付皿77 朝鮮瓶78
 金属銅銭79~82 S F 909 白磁碗83 S K 453 越前焼甕84

第19図 第15・25次調査遺物(5)

IV期整地層

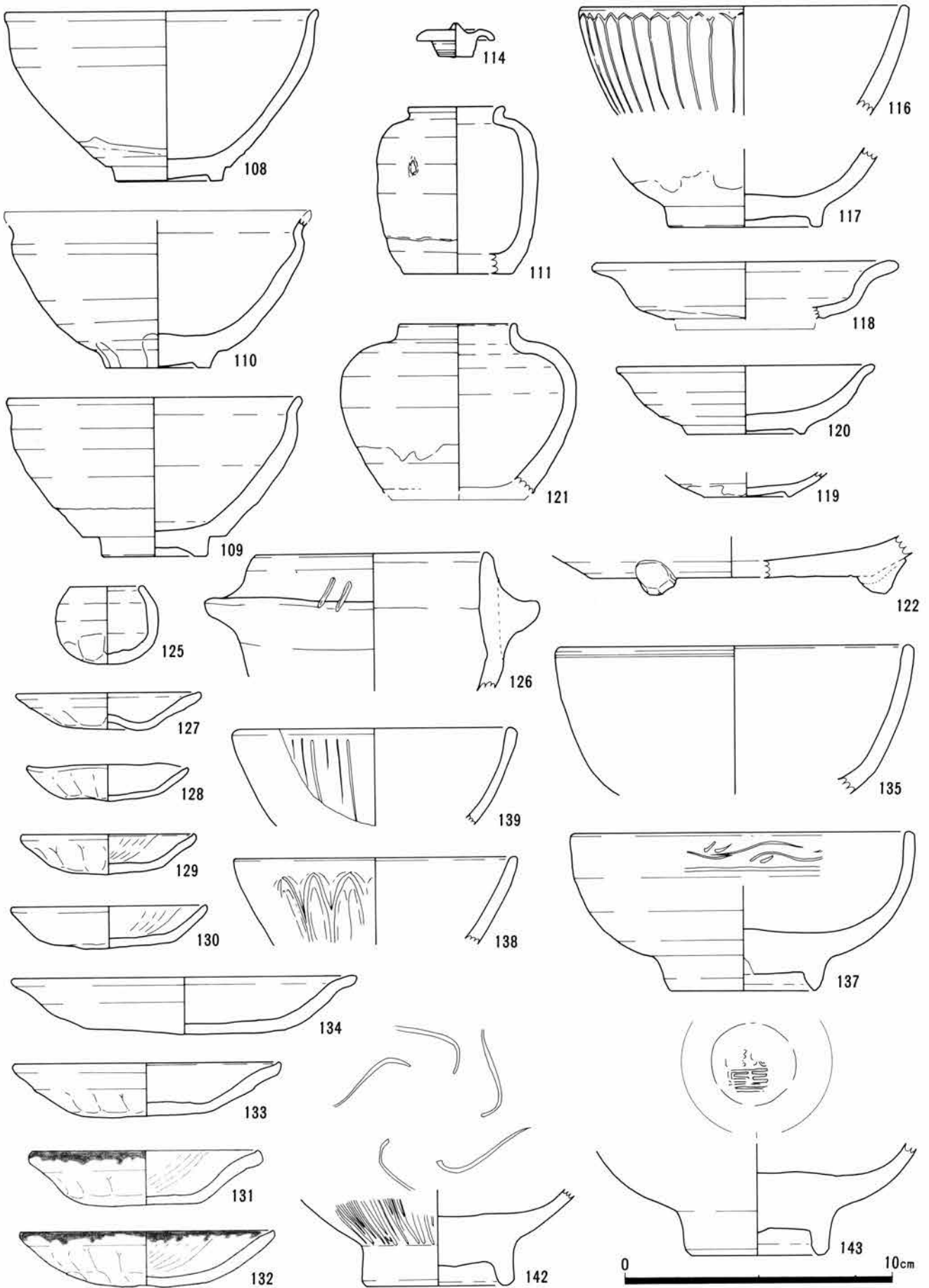


越前焼甕85～88・90 壺91～94 鉢96～98・100～104 播鉢105～107 丹波焼壺95

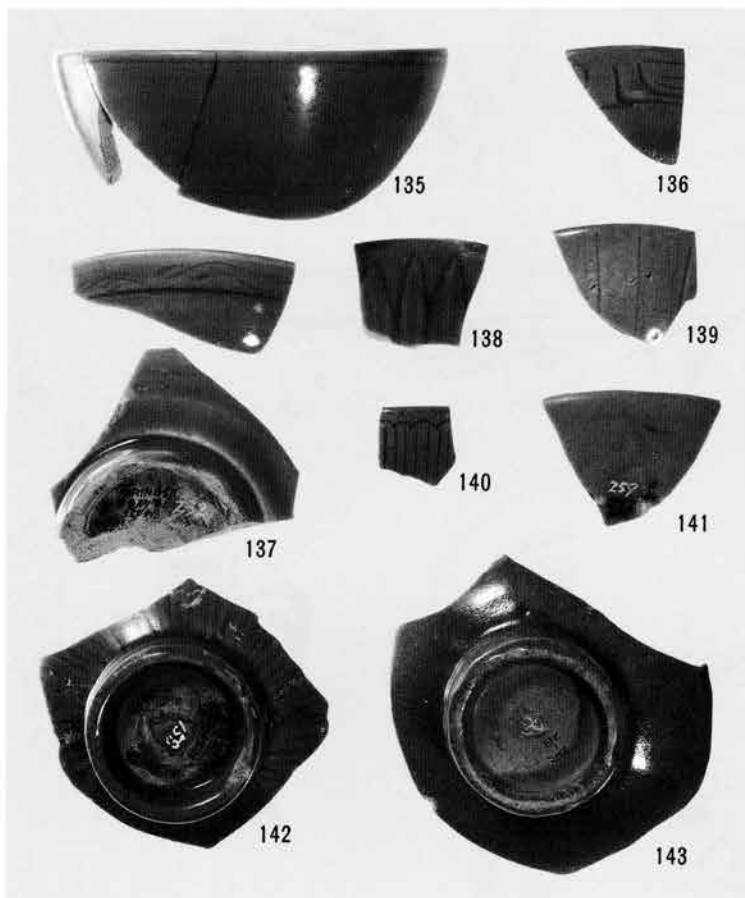
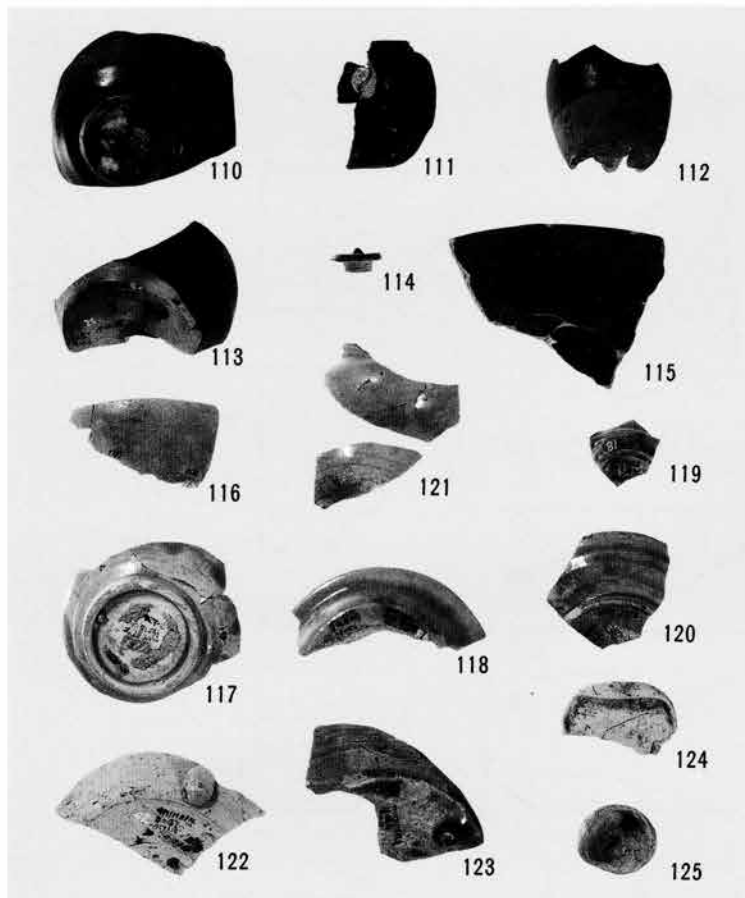


IV期整地層 越前焼甕85~90 壺91~93 鉢96~103 播鉢105~107 丹波焼壺95

第20図 第15・25次調査遺物(6)

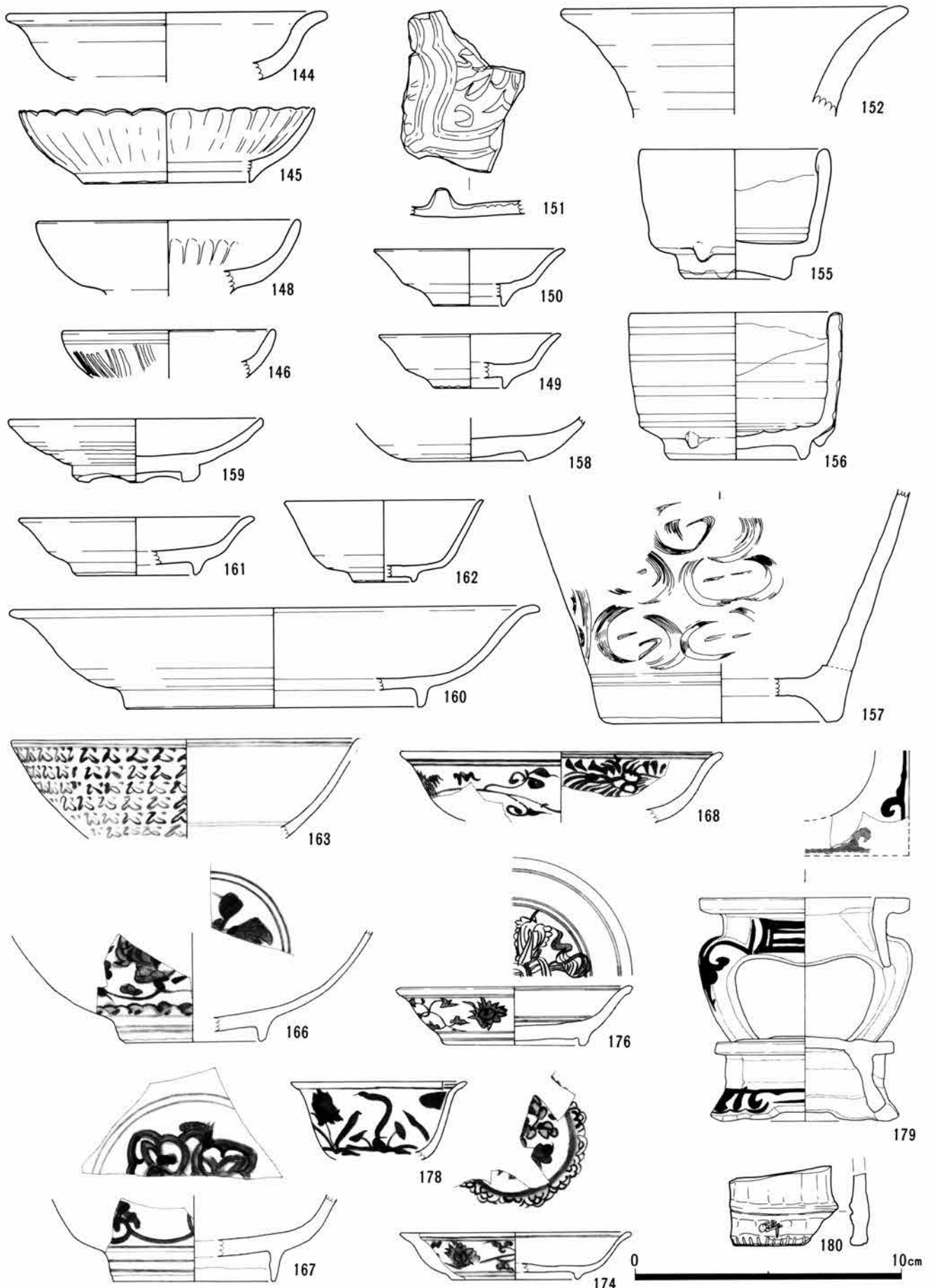


鉄釉碗108~110 茶入111 蓋114 灰釉碗116・117 皿118~120 茶入121 鉢122 土師質小壺125 土釜126 皿127~134
青磁碗135・137~139・142・143

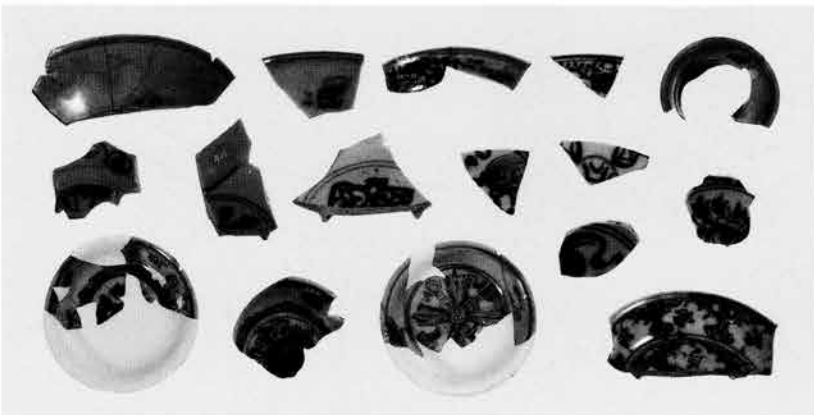
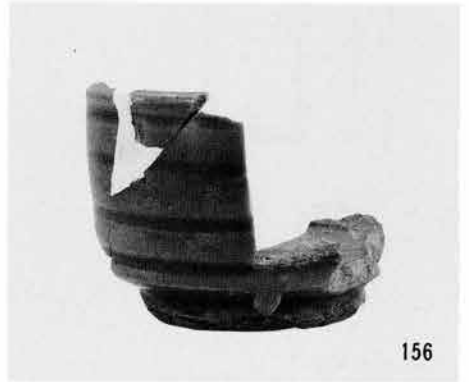
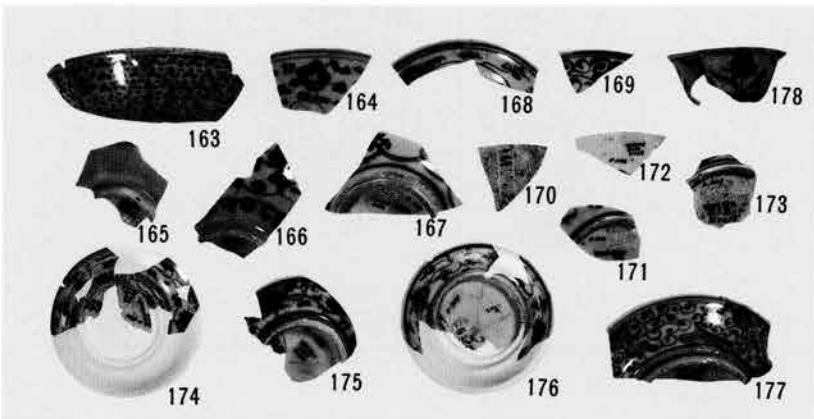
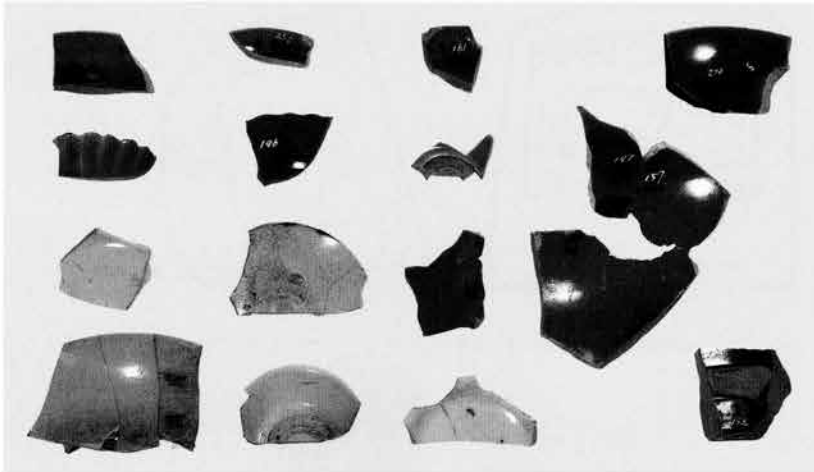
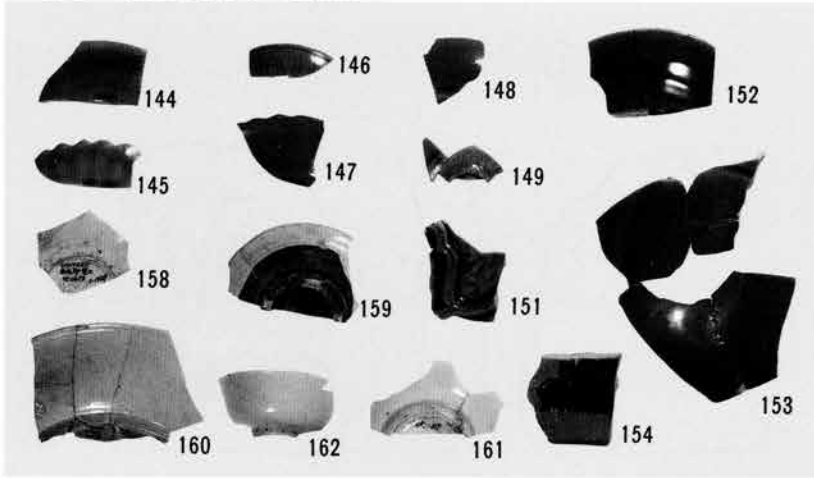


IV期整地層 鉄釉碗108~110 茶入111・112 壺113 蓋114 搗鉢115 灰釉碗116・117 皿118~120 茶入121 鉢122 瓶123 土師質耳皿124 小壺125 土釜126 皿127・131・132・134 青磁碗135~143

第21図 第15・25次調査遺物(7)

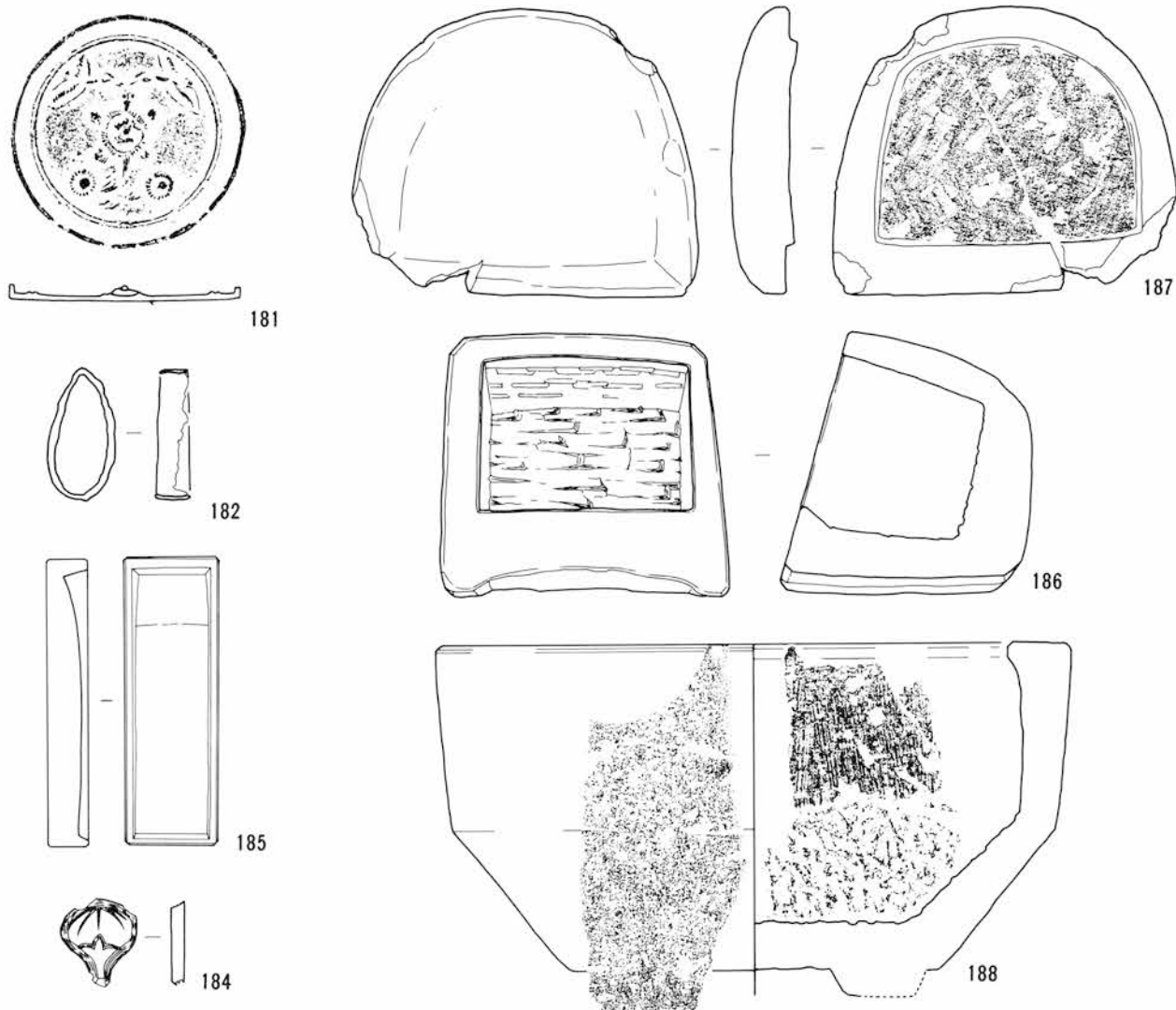


青磁皿144~146・148 坏149・150 盤151 瓶152 香炉155・156 青白磁梅瓶157 白磁皿158~161 坏162 染付碗163・166・167
 皿168・174・176 坏178 器台179 朝鮮(?)花生180

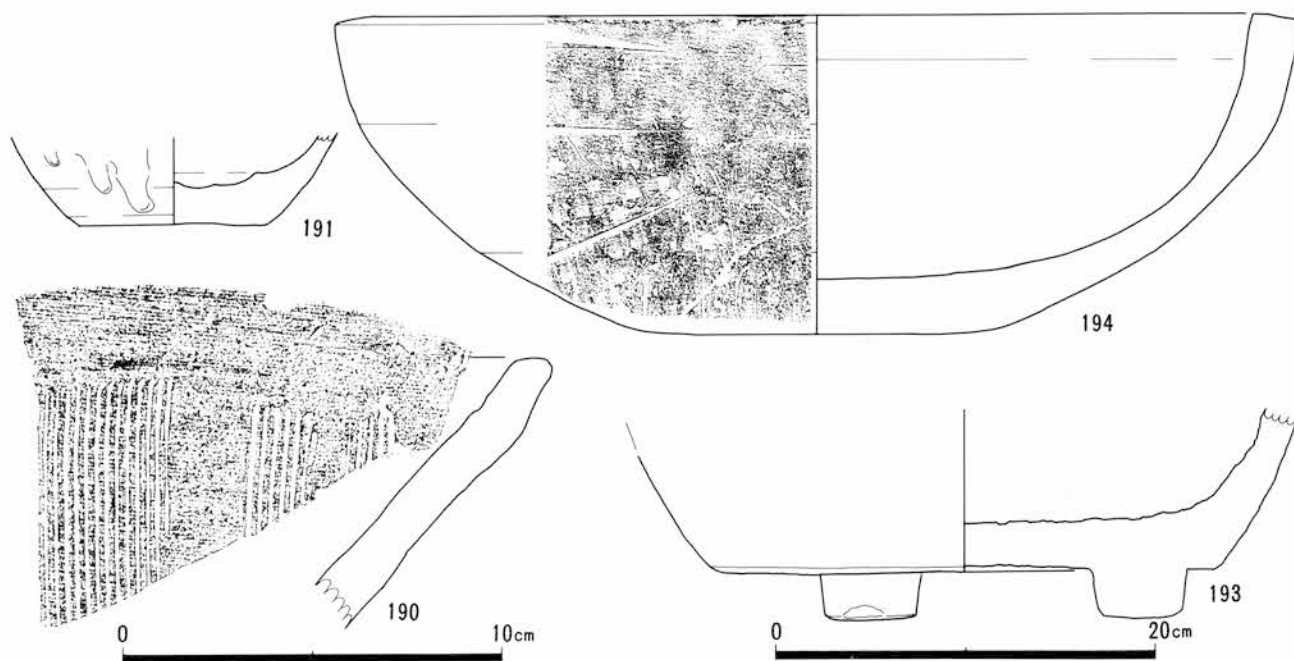


IV期整地層 青磁皿144~148 坏149 盤151 瓶152 壺153·154 香炉155·156 青白磁梅瓶157 白磁皿158~161 坏162 染付碗163~167 皿168~177 坏178 器台179 朝鮮(?)花生180

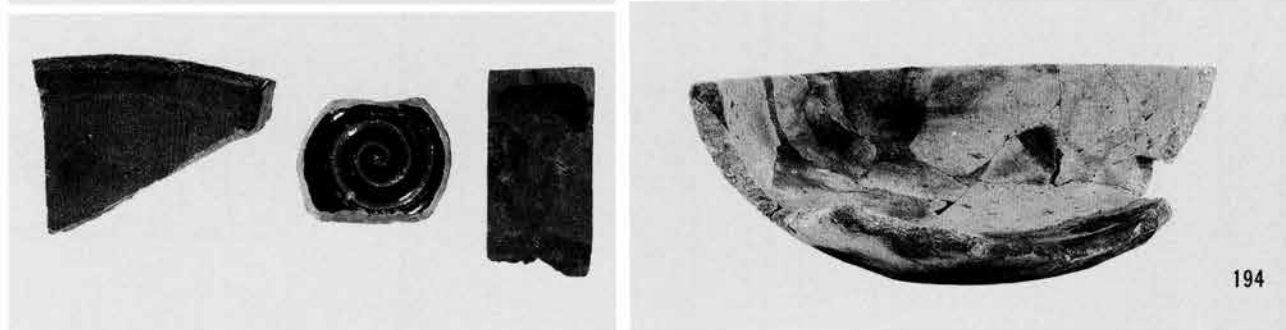
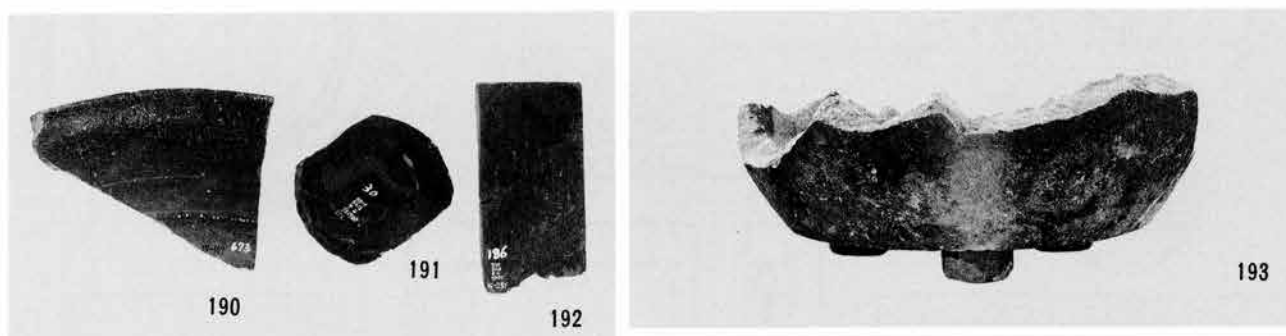
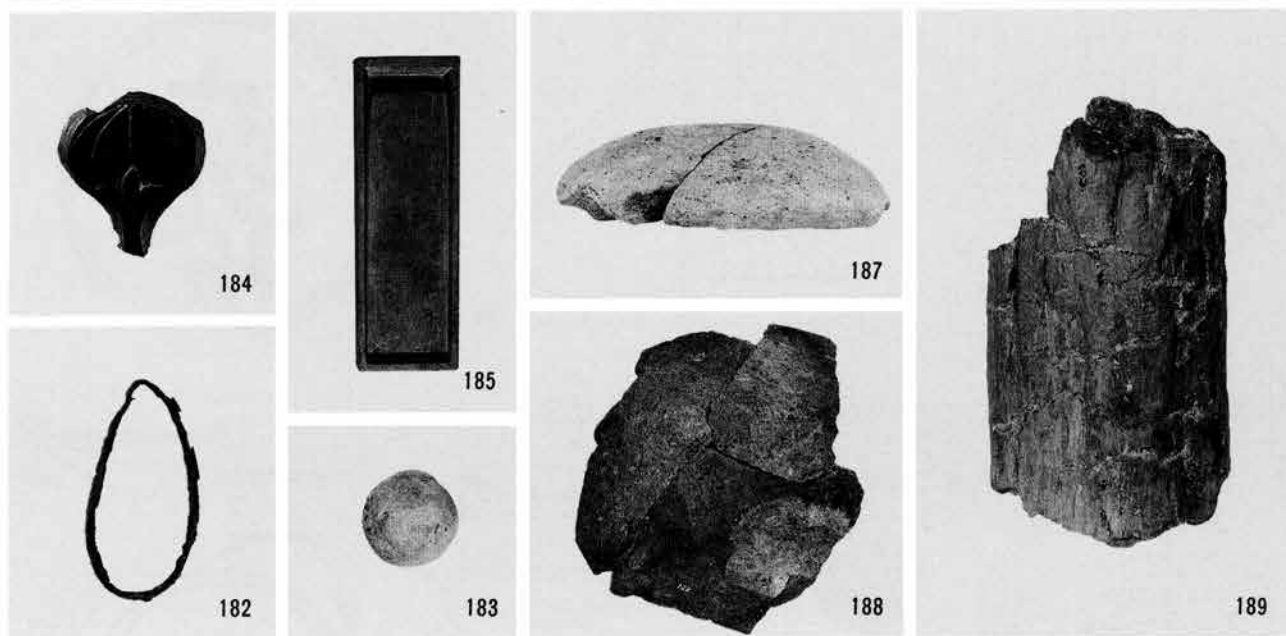
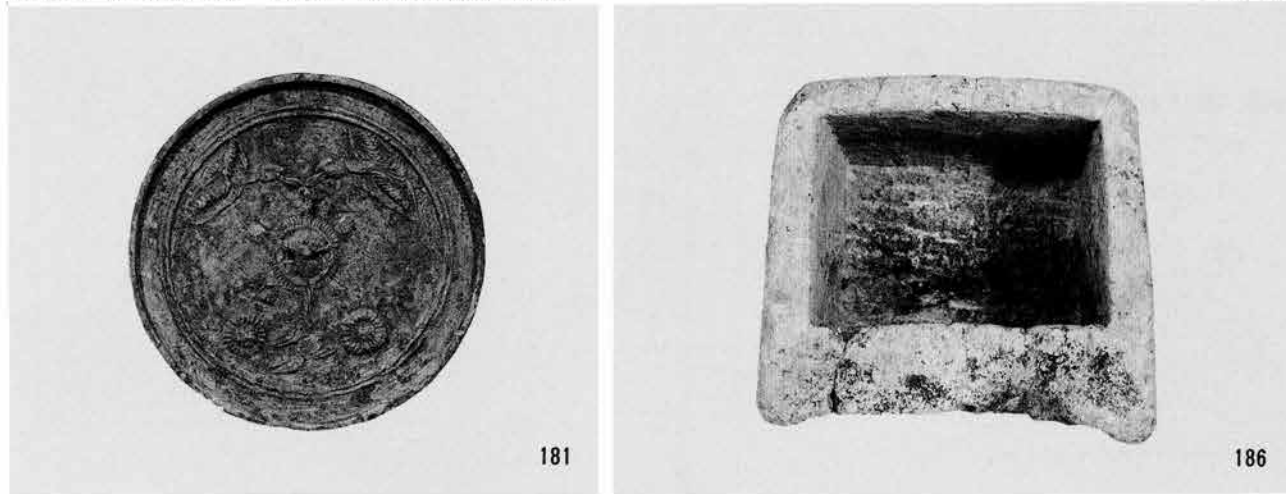
第22図 第15・25次調査遺物(8)



B地区 SE434

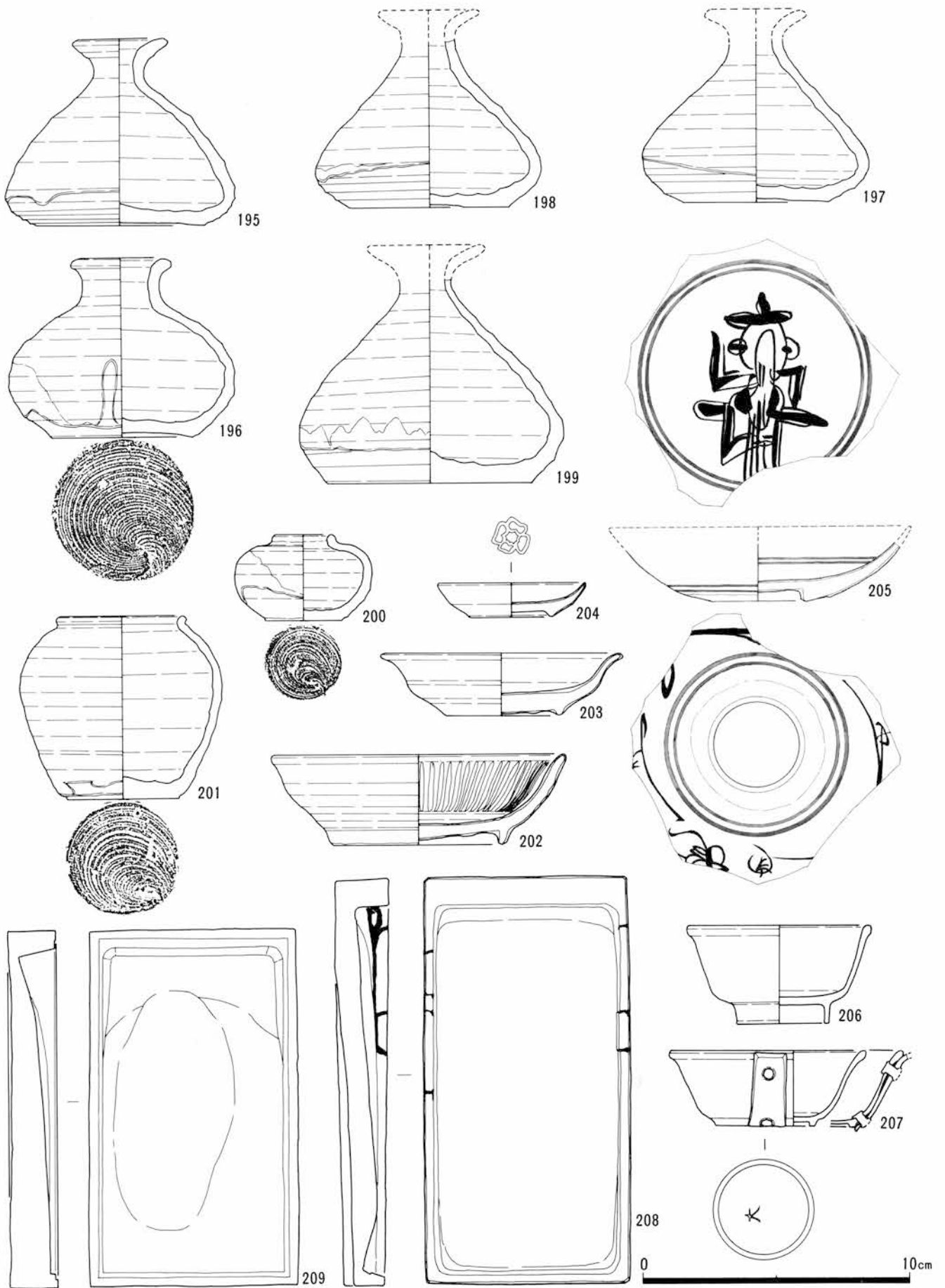


金属銅鏡181 貴金182 その他堆黒184 石製品硯185 バンドコ186・187 鉢188 越前焼播鉢190 鉄袖壺191 石製品鉢193 捏鉢194



A地区IV期整地層 金属銅鏡181 貴金182 鉛玉183 その他堆黒184 石製品硯185 バンドコ186・187 鉢188 盆石189
 B地区SE434 越前焼播鉢190 鉄釉壺 191 石製品硯192 鉢193 捏鉢194

第23図 第15・25次調査遺物(9)



鉄釉瓶195~199 小壺200・201 灰釉皿202~204 染付皿205 金属銅碗206・207 石製品碗208・209



195



200



202



196



201



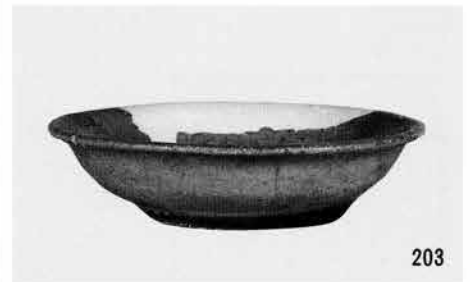
204



197



206



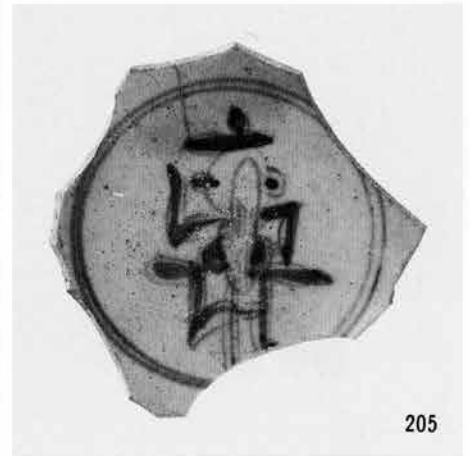
203



198



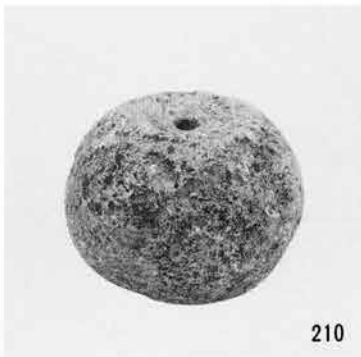
207



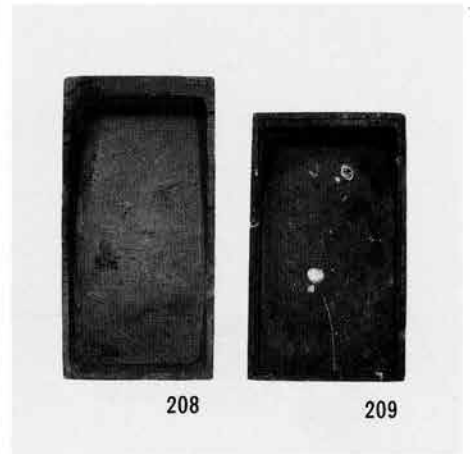
205



199



210



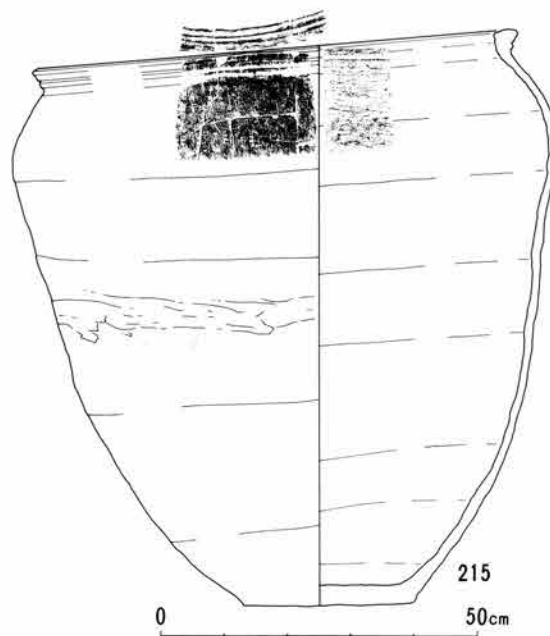
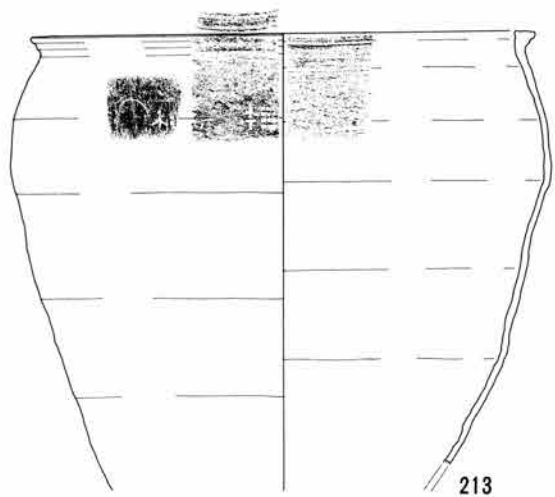
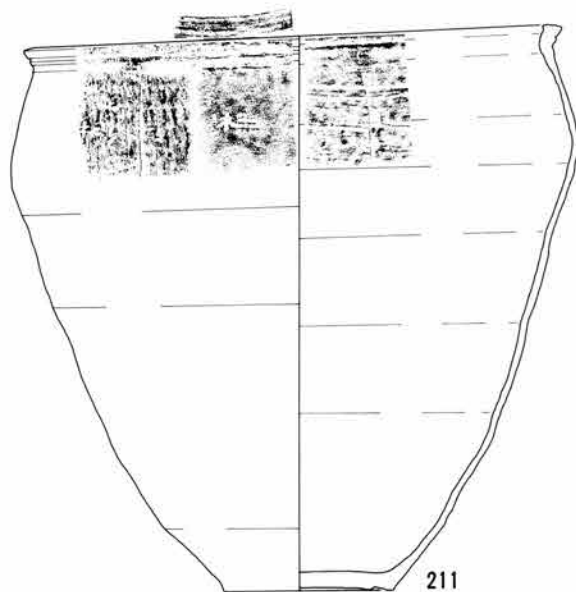
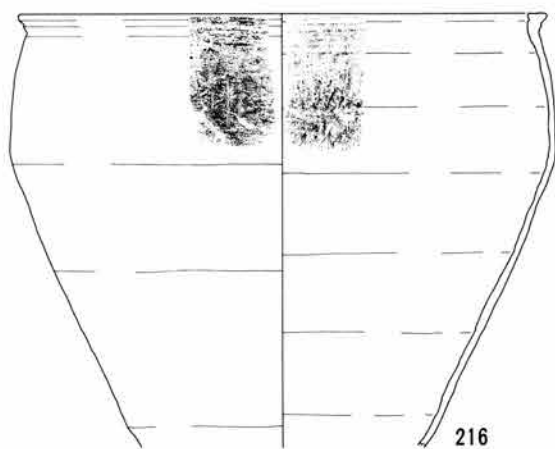
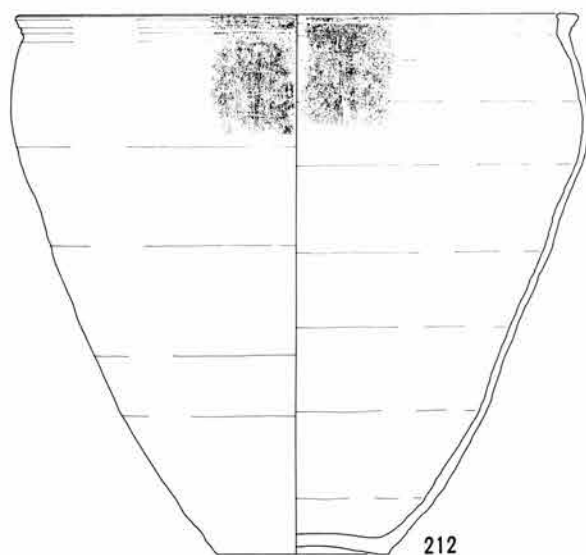
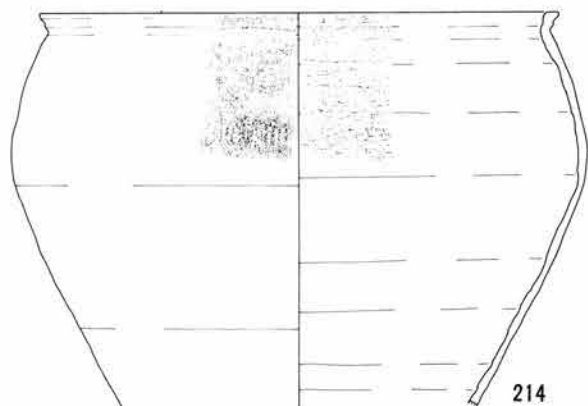
208

209

S K 450 鉄釉瓶195~199 小壺200・201 灰釉皿202~204 染付皿205 金属銅椀206・207 石製品硯208・209 錘状石製品210

第24図 第15・25次調査遺物(10)

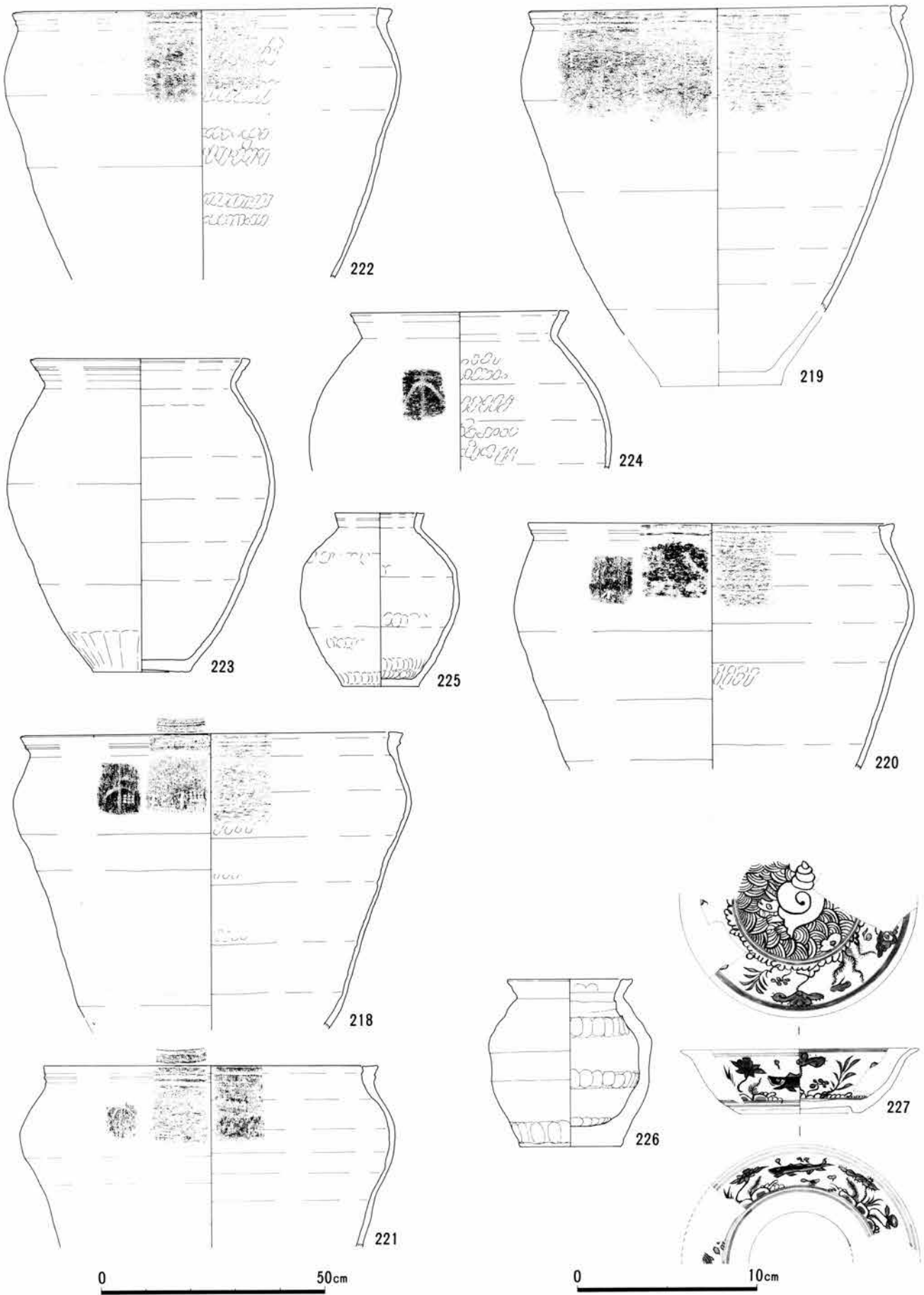
SK452





S K 452 越前焼甕211~217

第25図 第15・25次調査遺物(1)





218



219



220



221



222



223



224



225



226

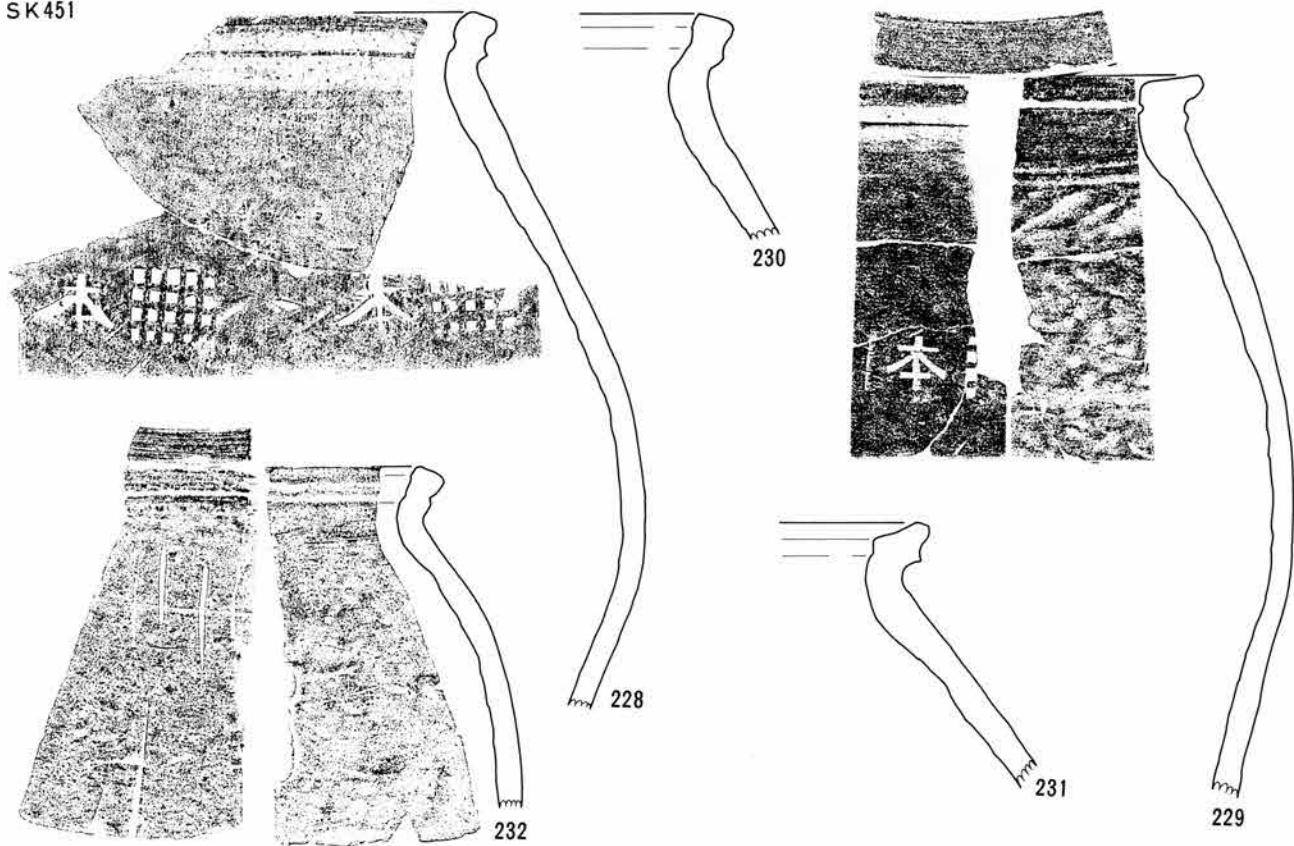


227

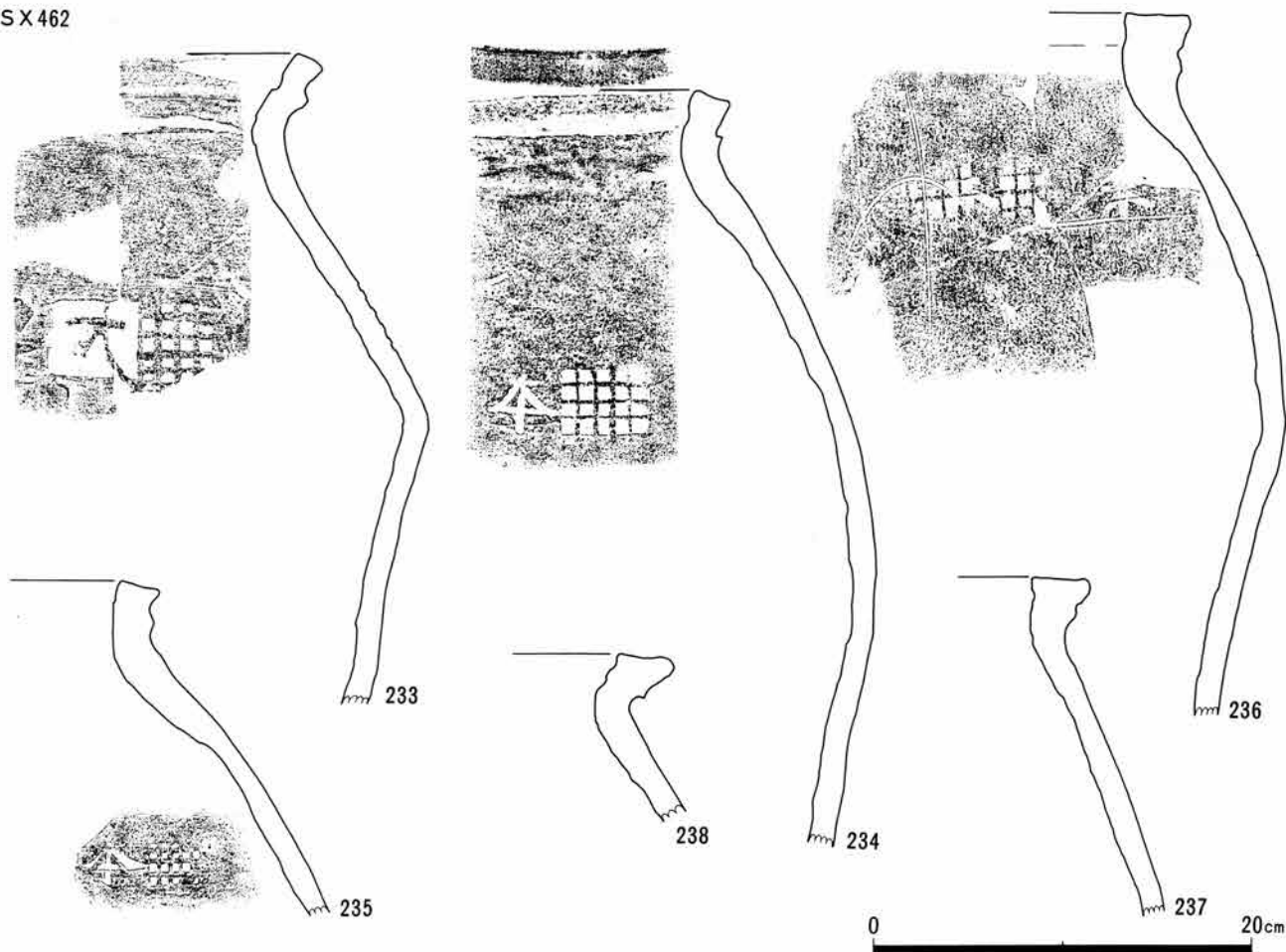


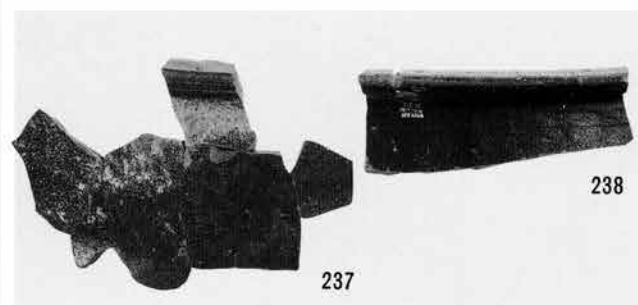
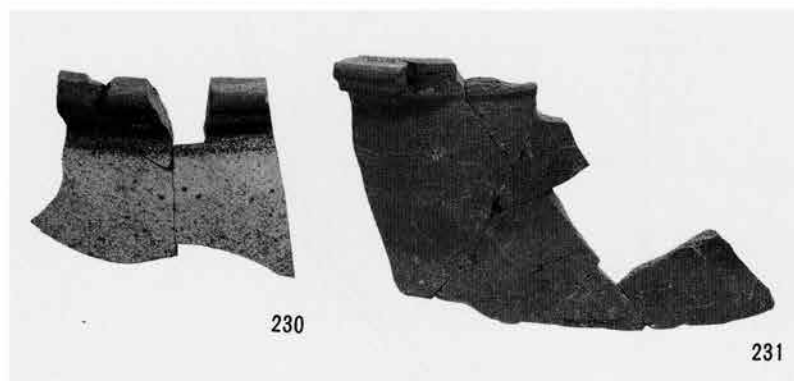
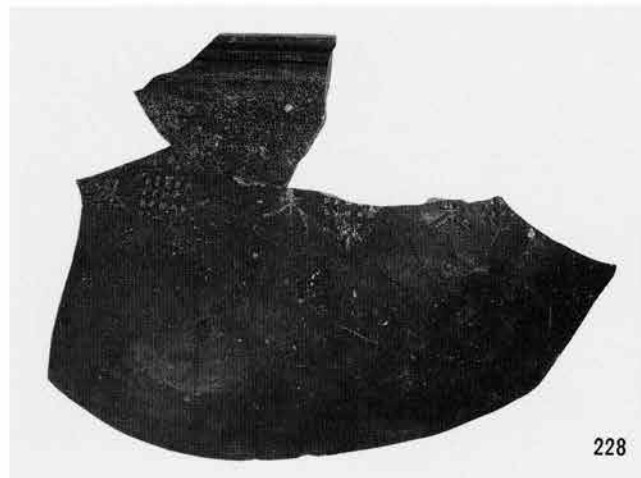
第26図 第15・25次調査遺物(12)

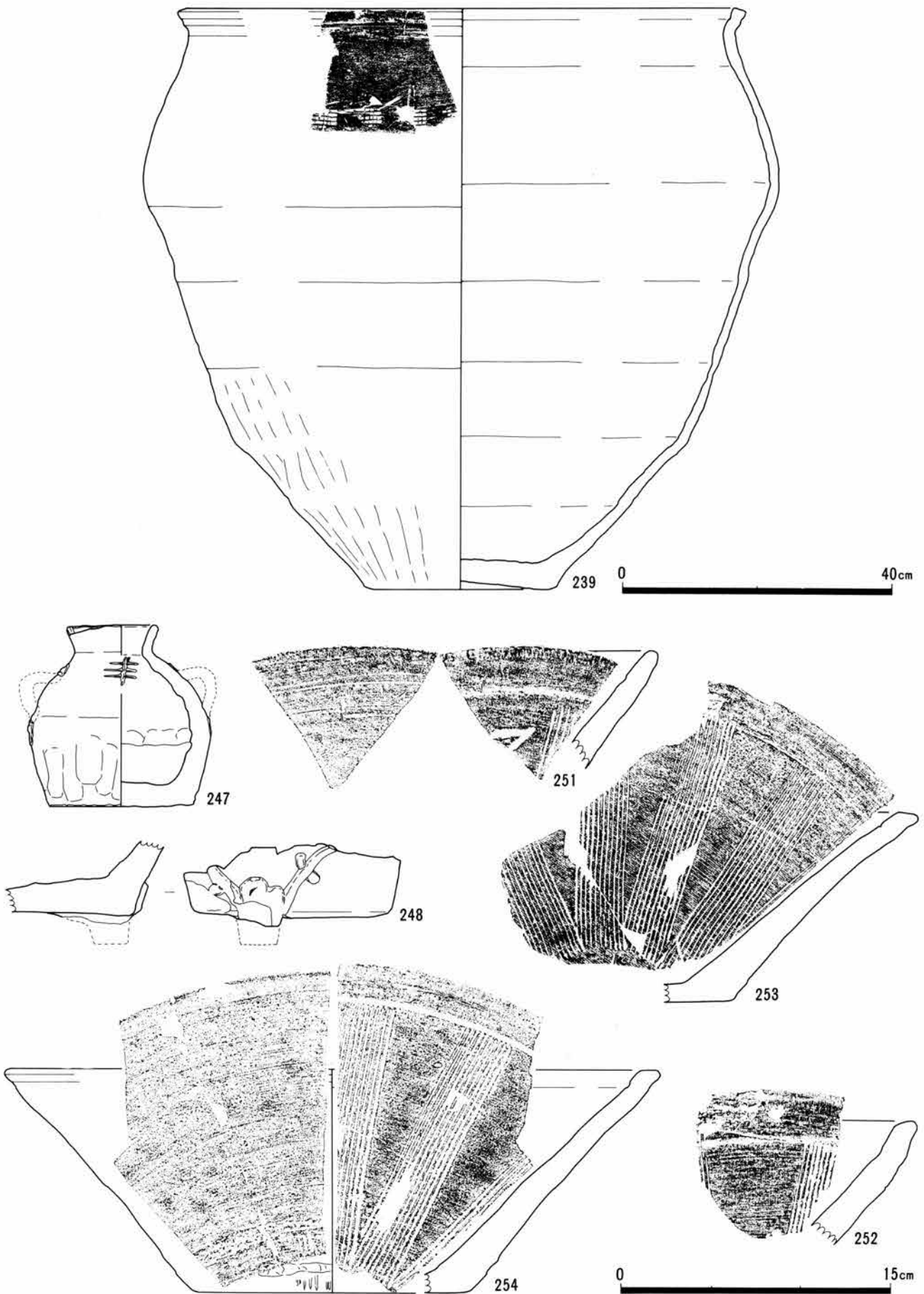
SK 451



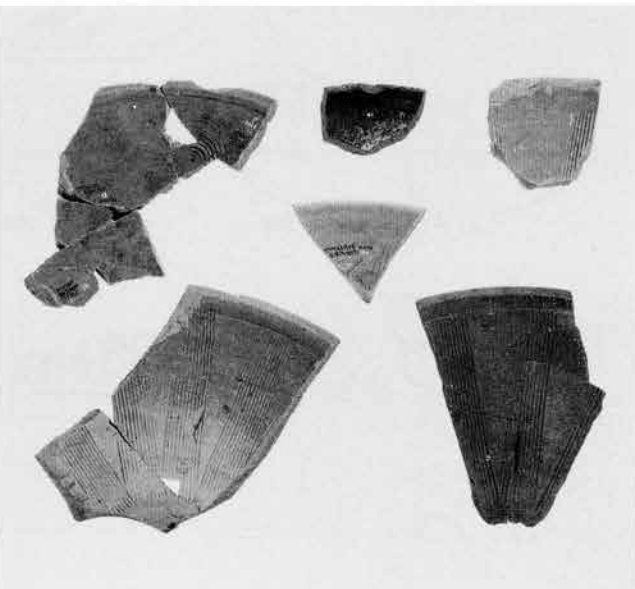
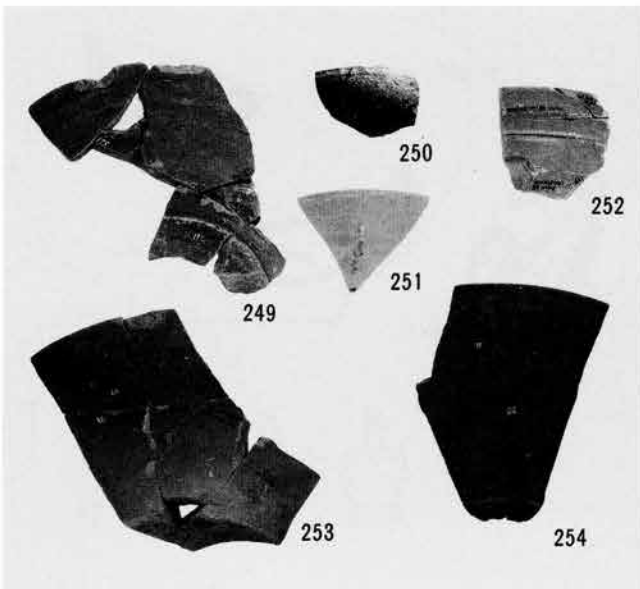
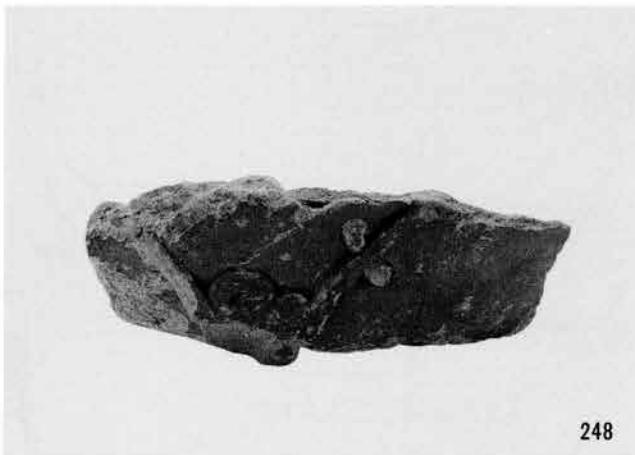
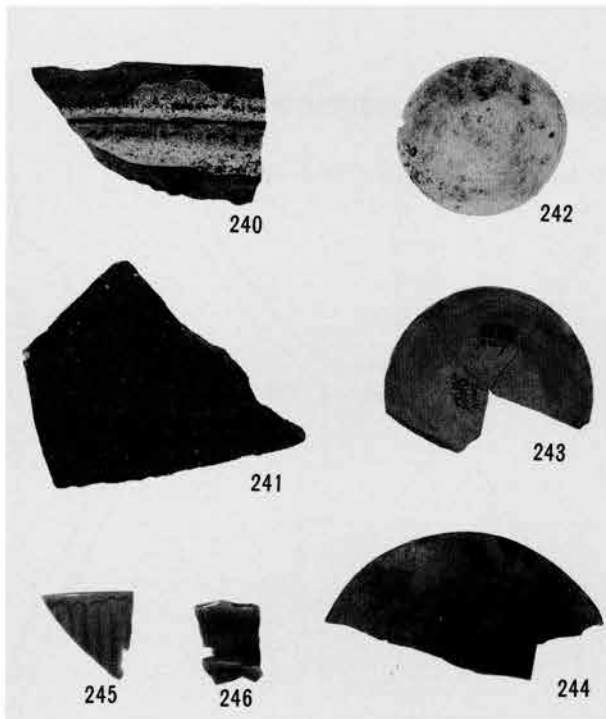
SX 462





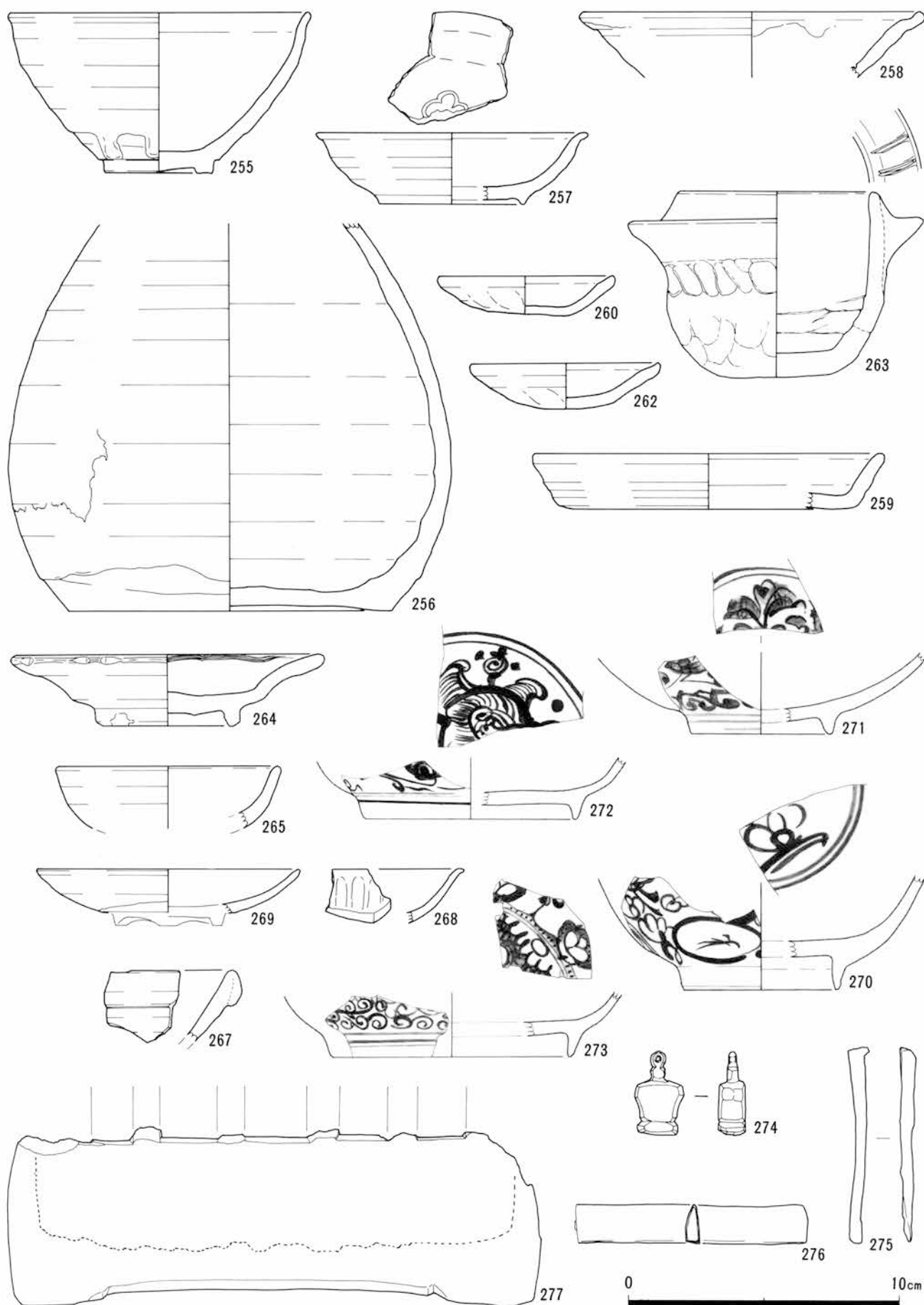


越前焼 甕239 壺247 鉢248 播鉢251~254

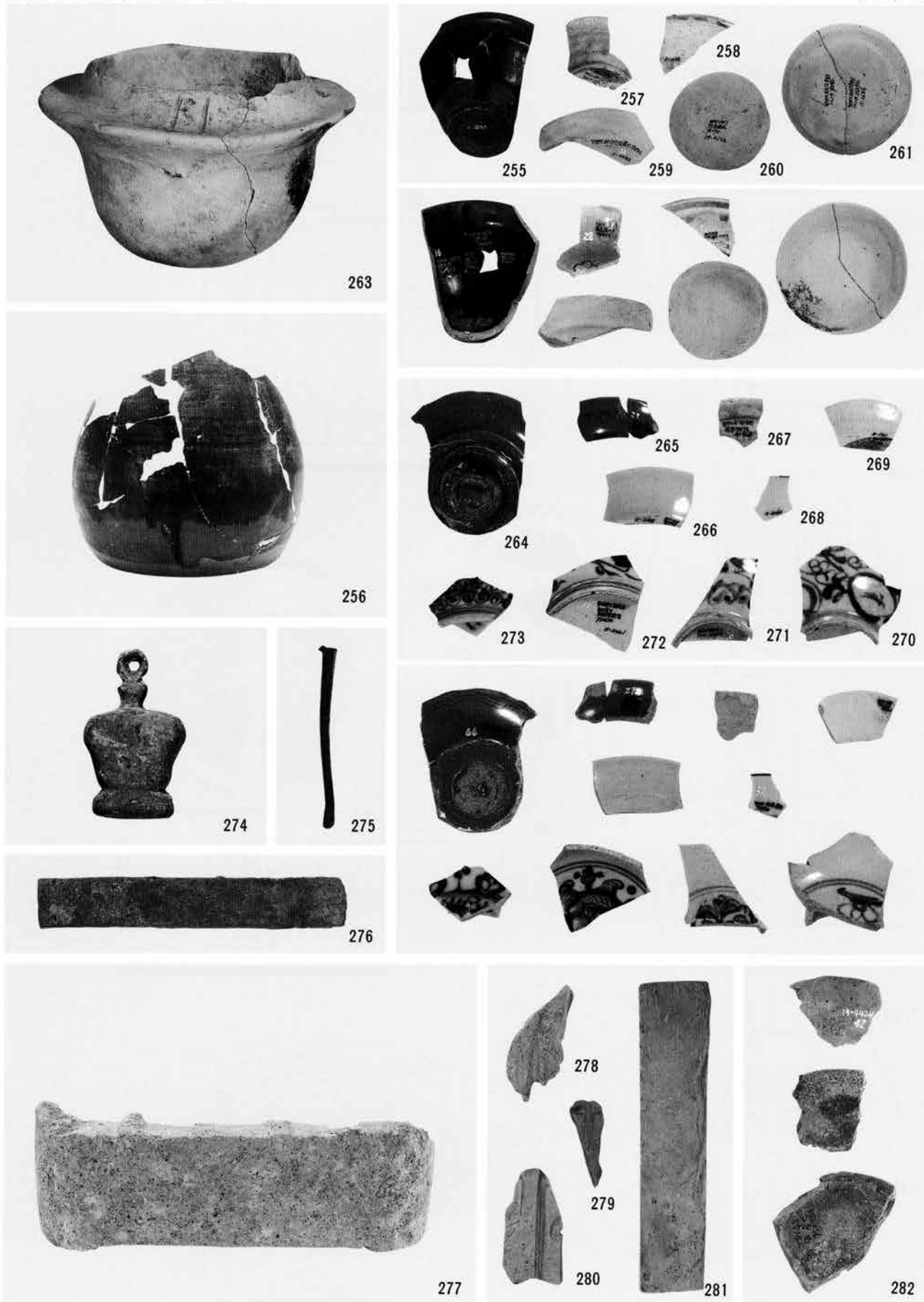


S X 462 越前焼甕239 S F 443 越前焼甕240・241 土師質皿242～244 青磁碗245 皿246 III期整地層 越前焼壺247
鉢248～250 搦鉢251～254

第28図 第15・25次調査遺物(14)



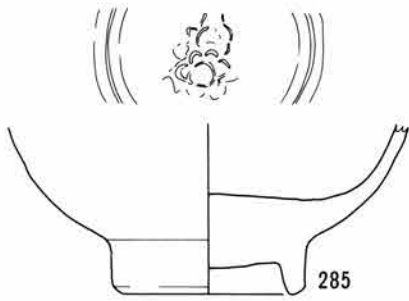
鉄釉碗255 壺256 灰釉皿257 鈿皿258 土師質皿259・260・262 土釜263 青磁皿264・265 白磁碗267 皿268・269 染付碗270・271 皿272・273 金属分銅274 釘275 小柄276 石製品バンドコ277



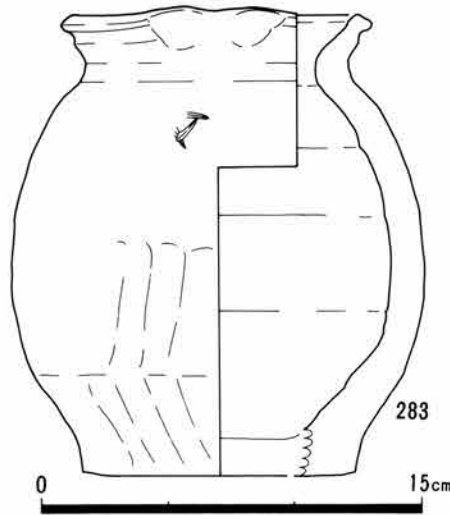
III期整地層 鉄釉碗255 壺256 灰釉皿257 鈿皿258 土師質皿259~261 土釜263 青磁皿264~266 白磁碗267 皿268・269 染付碗270・271 皿272・273 金属分銅274 釘275 小柄276 石製品バンドコ277 砥石278~281 その他ルツボ282

第29図 第15・25次調査遺物(15)

SE 432



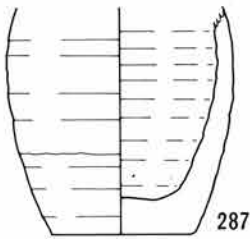
285



283

0 15cm

SE 433



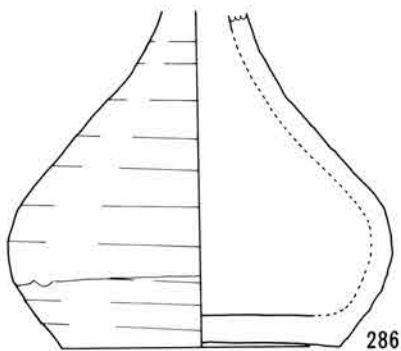
287



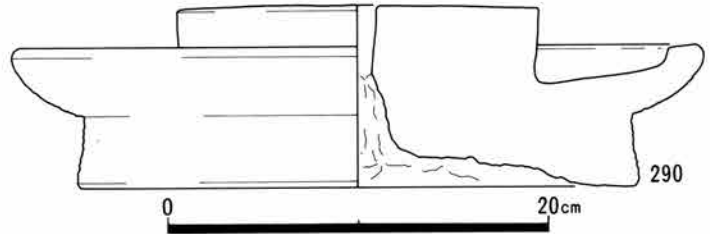
288



289



286



290

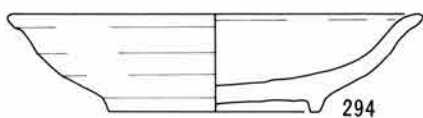
0 20cm

SF 439



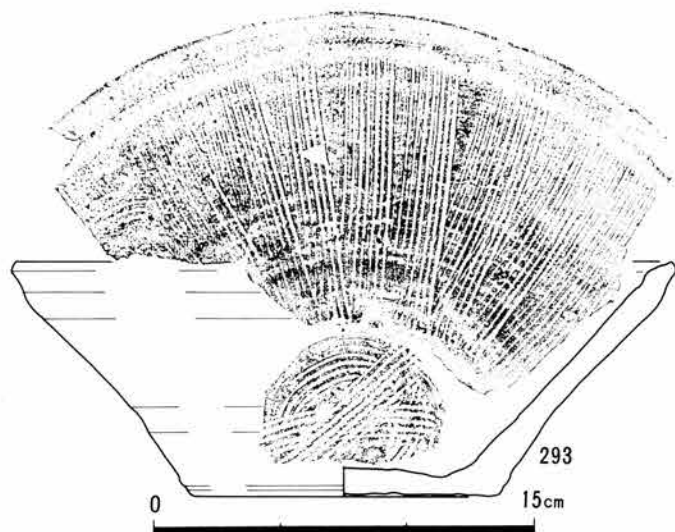
291

SE 358



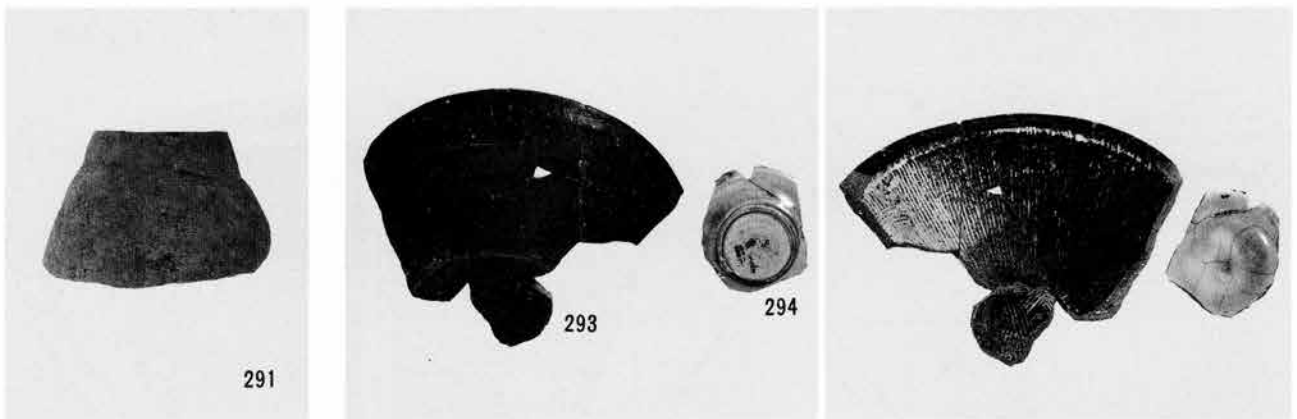
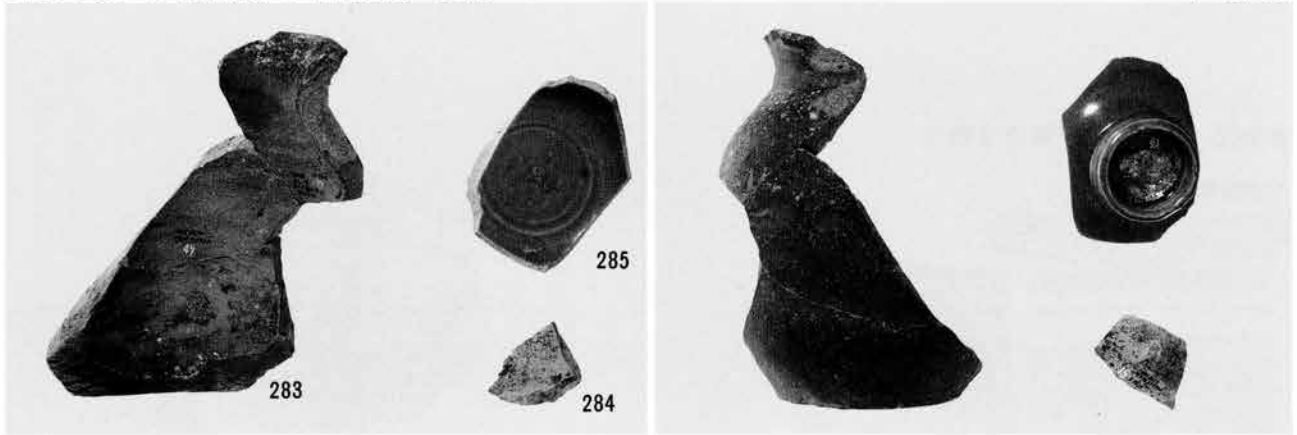
294

0 10cm



293

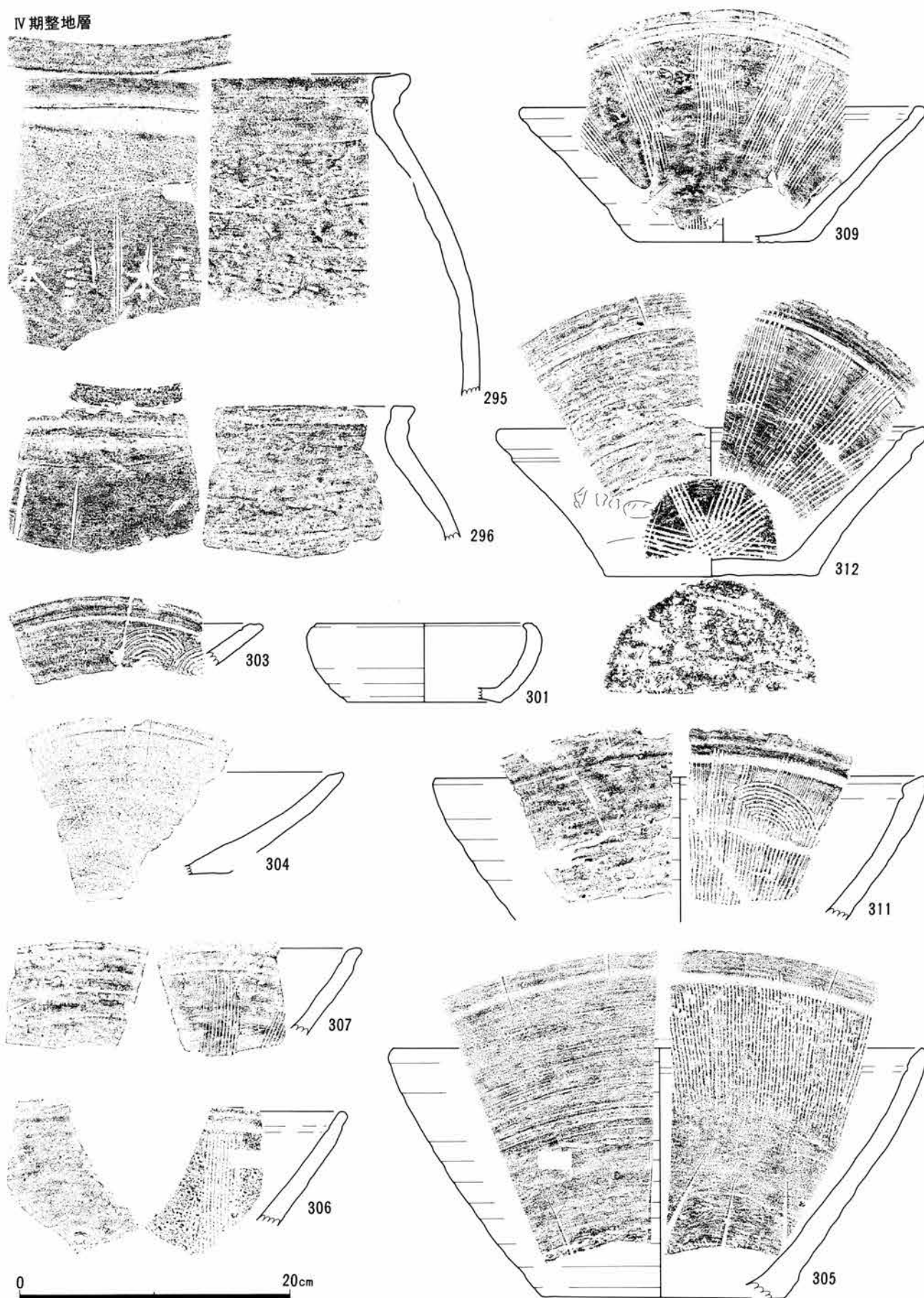
0 15cm



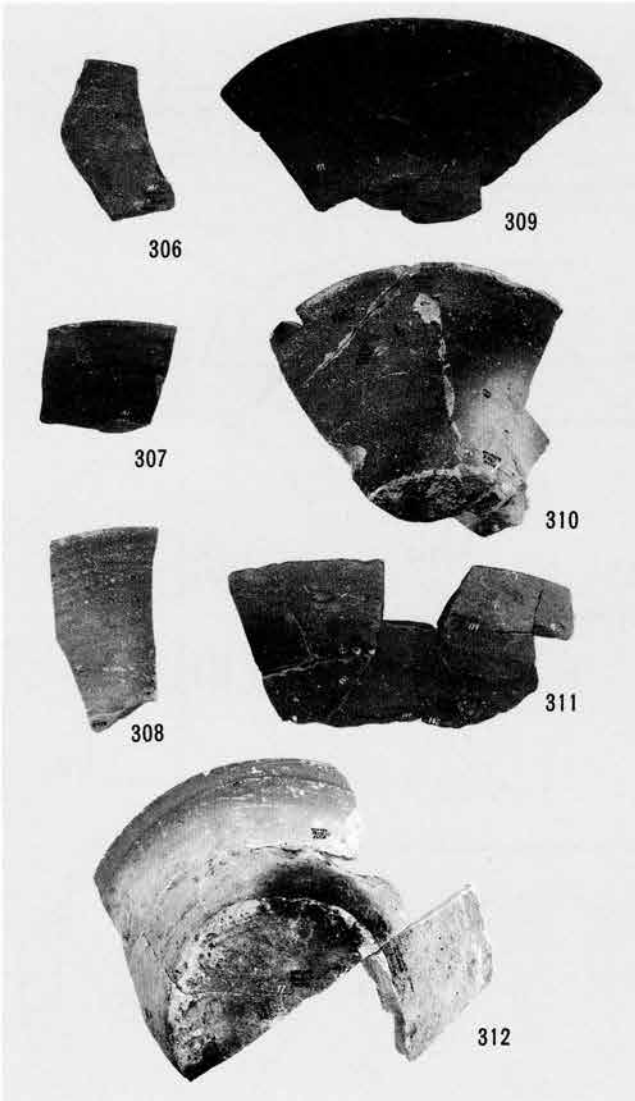
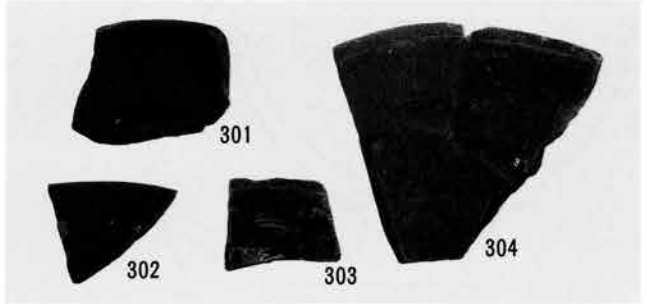
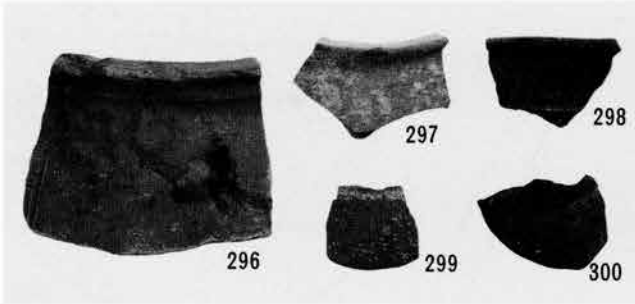
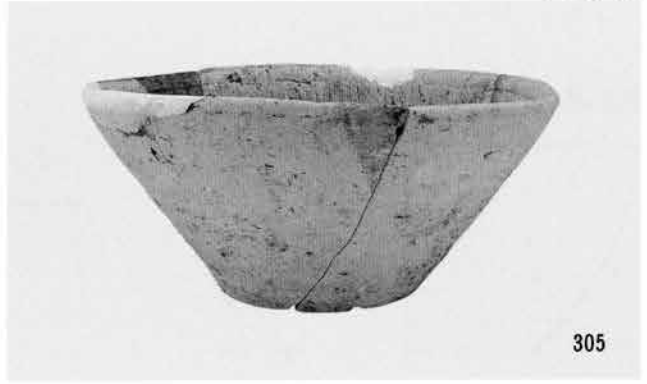
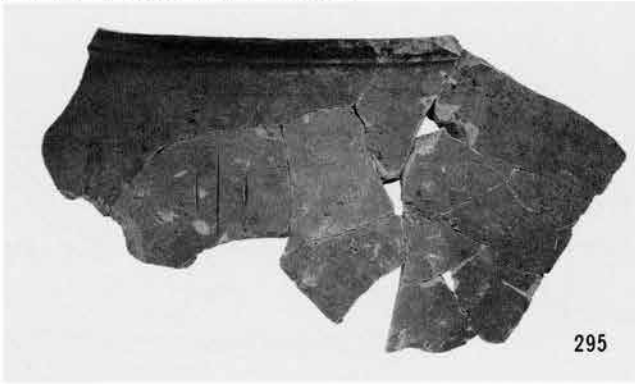
S E 432 越前焼壺283 土師質脚付碗284 青磁碗285 S E 433 鉄釉瓶286 茶入287 染付碗288 坏289 石製品茶臼290
 S F 439 土師質壺291 S F 440 壁土292 IV期 S E 358 越前焼播鉢293 灰釉皿294

第30図 第15・25次調査遺物(16)

IV期整地層

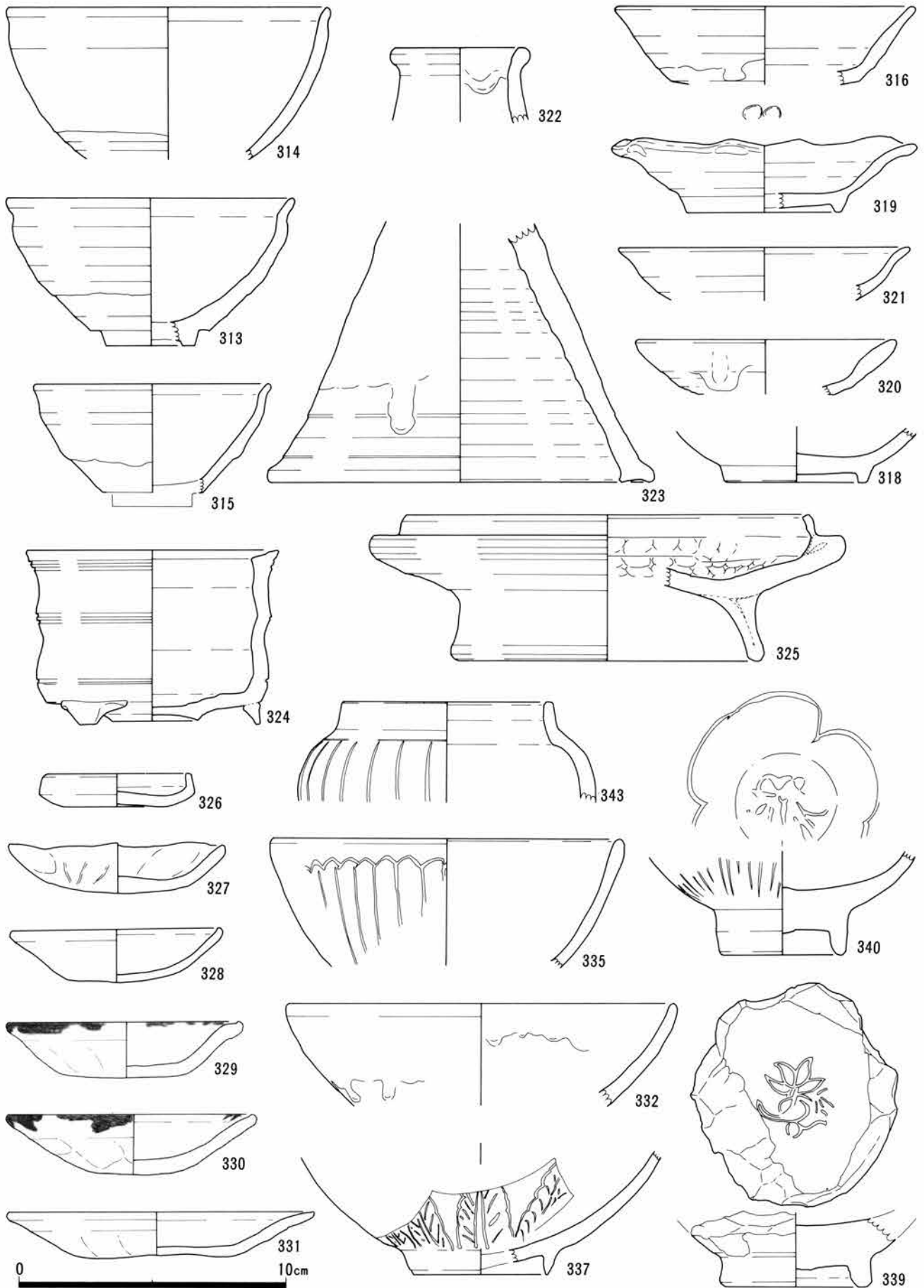


越前焼 甕295・296 鉢301・303・304 播鉢305～307・309・311・312

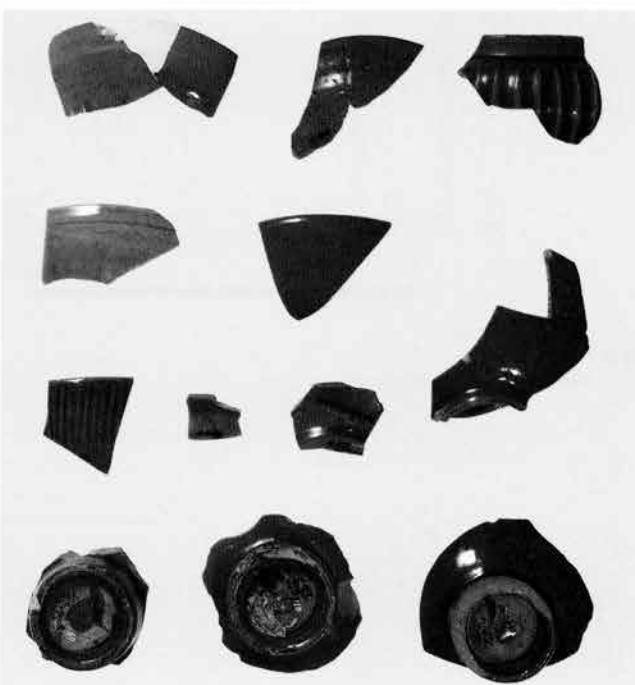
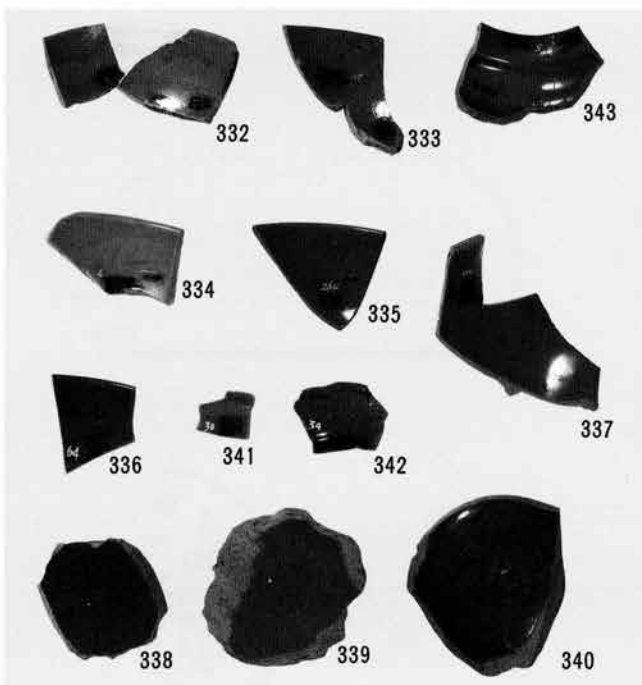
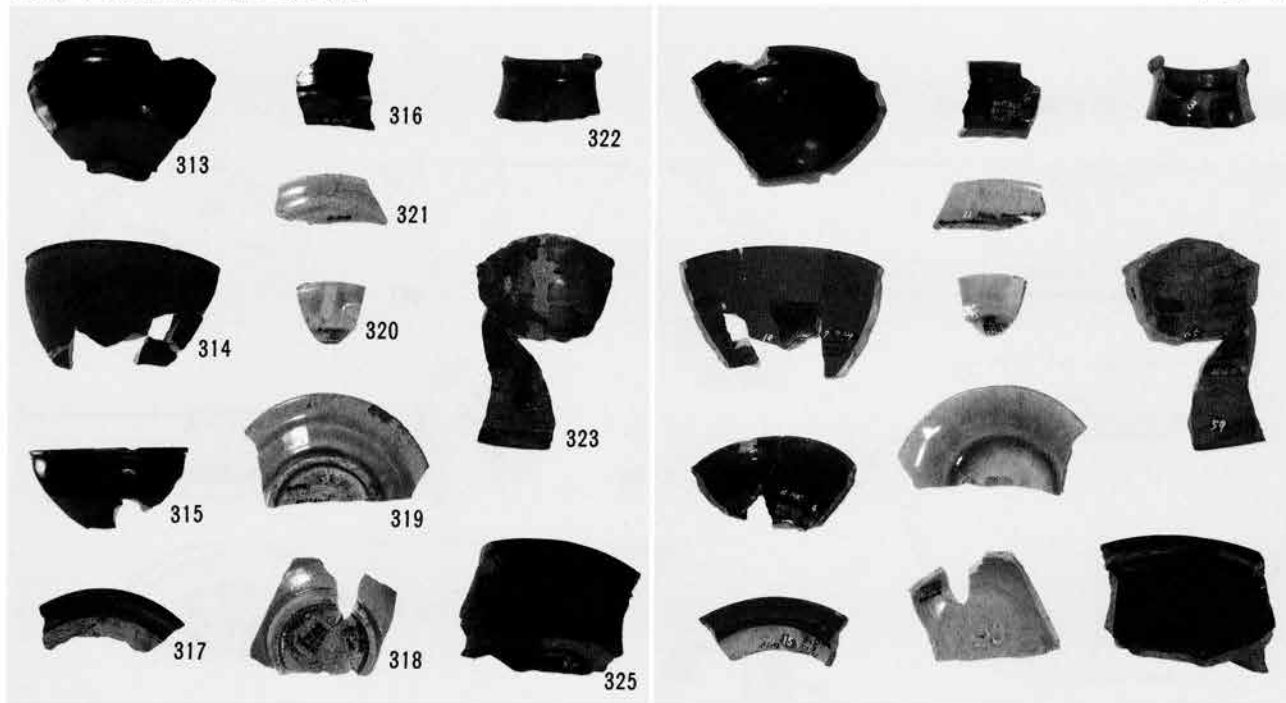


IV期整地層 越前焼甕295・296 壺297・300 鉢301～304 播鉢305～312

第31図 第15・25次調査遺物(17)

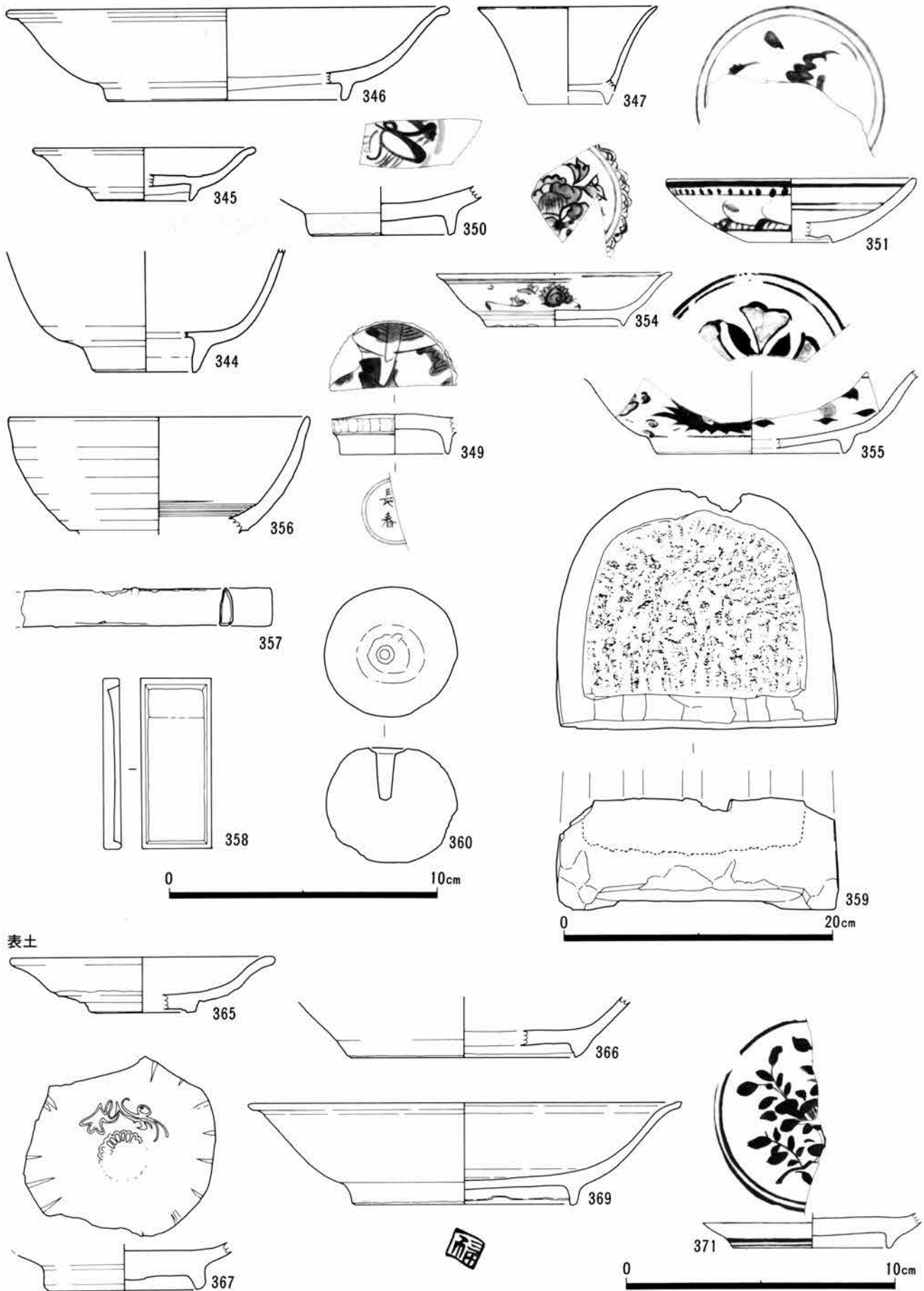


鉄釉碗313~315 皿316 灰釉碗318 皿319~321 瓶322・323 香炉324 瓦質瓦燈325 土師質皿326~331 青磁碗332・335・337 339・340 壺343

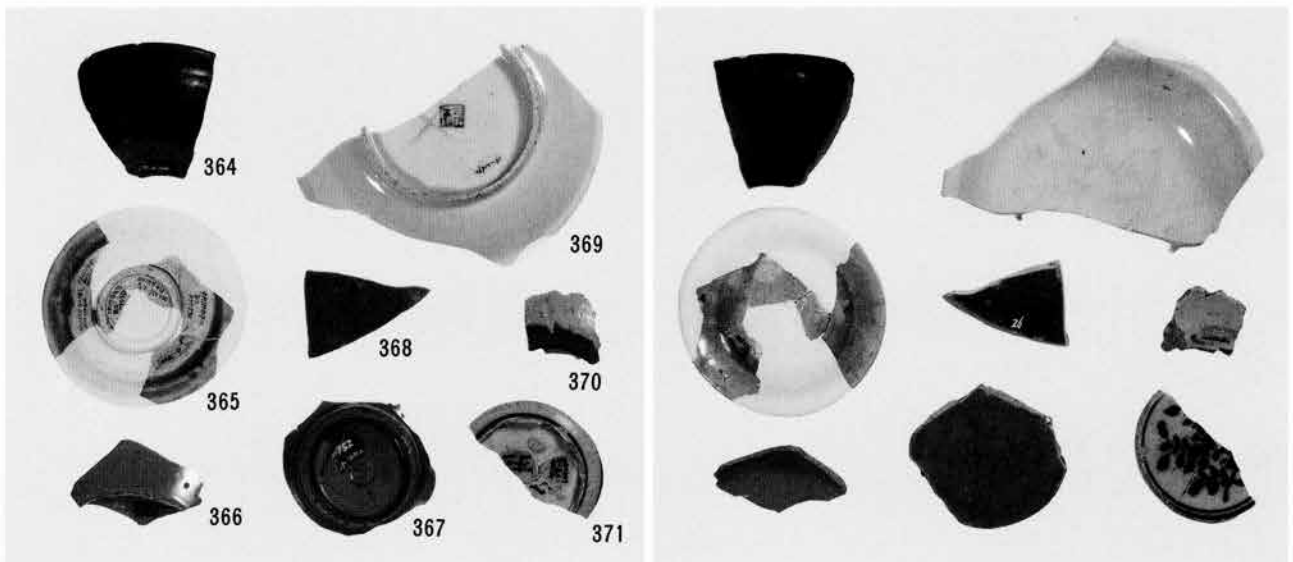
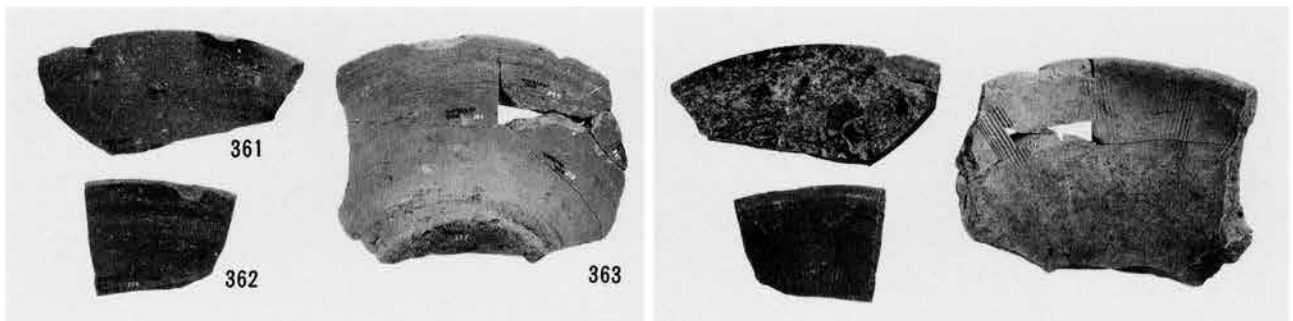
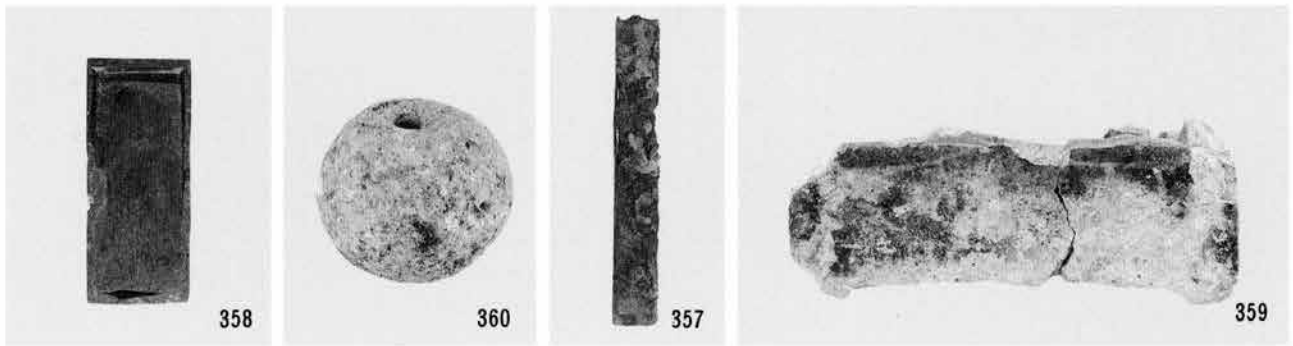
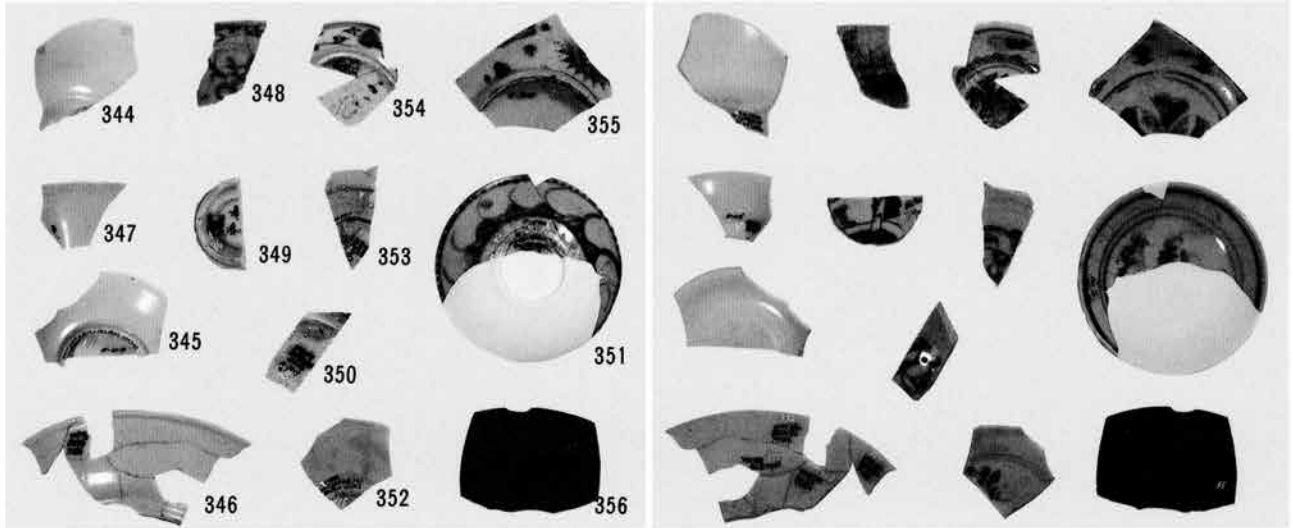


IV期整地層 鉄釉碗313~315 皿316 香炉317 灰釉碗318 皿319~321 瓶322・323 香炉324 瓦質瓦燈325
土師質皿326~331 青磁碗332~340 皿341・342 壺343

第32図 第15・25次調査遺物(18)



白磁碗344 皿345・346 坏347 染付碗349・350 皿351・354 赤絵皿355 朝鮮碗356 金属小柄357 石製品 硯358 バンドコ359
 錘状石製品360 灰釉皿365 青磁皿366・367 白磁皿369 染付皿371



B地区IV期整地層 白磁碗344 皿345・346 坏347 染付碗348・349・350 皿351~354 赤絵皿355 朝鮮碗356 金属小柄357
 石製品硯358 バンドコ359 錘状石製品360 表土 越前焼鉢361 播鉢362・363 鉄釉碗364 灰釉皿365 青磁皿366・367
 鉢368 白磁皿369・370 染付皿371

Ⅲ、第 24 次 調 査

Ⅲ．第24次調査

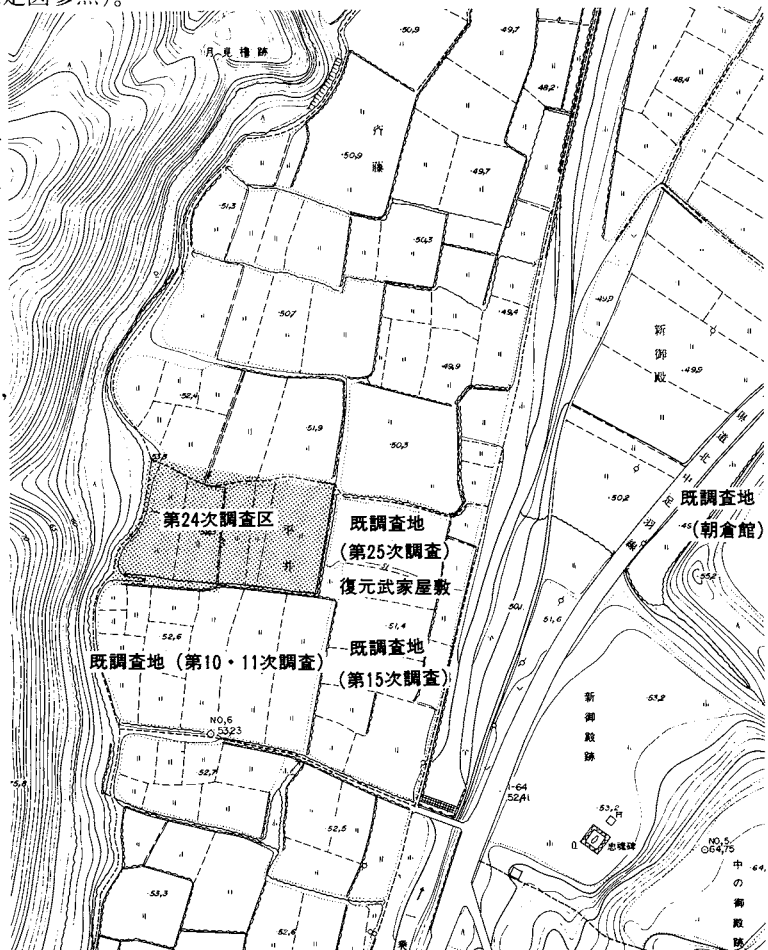
1．調査概要

本調査区は、一乗谷のほぼ中央部、朝倉館が位置するところに近く、川を挟んで西側の緩やかな傾斜地に位置している。既に発掘、報告が終了している「新馬場」、すなわち第10・11次調査区の北側の区画にあたる。又、東側には「復元武家屋敷」があり、今回前半で報告している第15・25次調査区があるところでもある。字番は城戸ノ内町24字平井にあたり、朝倉氏の重臣クラスの屋敷が連続して建ち並ぶ地区である。

発掘調査は動力用の電源工事や作業用の移動式テントの設置等の準備を終えて、耕土とり作業から開始することとし、5月1日より7月31日まで行った。調査面積は、遺構の延長をチェックするためのトレンチ等を含めて、全体で2,200㎡に及ぶ（付図第24次調査全測図、調査日誌抄参照）。地区割りの設定については、先の第10・11次調査において使用した基準点No.6（53.23 m）を使用し、南側から北に向かってB～Pとし、一乗谷川側から山側に向かって20～42のそれぞれに3 m×3 mのグリッドを設定した。土層セクションベルトは南北のセクションを38ラインと27ラインに、東西のセクションをH列に設定した（挿図10調査グリッド設定図参照）。

発掘は川側の南北幹線道路に面する土塁から掘り下げを開始し、順次山側へ平行移動するかたちで行った。一旦折り返して遺構の検出を行いながら、部分的には深掘りのトレンチを入れて土層の確認を行い、下層の有無を見た。特に調査区の中央より川側、すなわち、東半分は水田の耕作によって削平されてしまったのか、遺構の遺存状況は良くなく、この部分については更に下層の掘り下げを集中的に実施した。その結果、中央部分では区画土塁の造成以前の遺構と考えられる、柵列や建物跡が検出された。

一乗谷の発掘調査は、本調査以前に、第10・11次調査地の「新馬場」、第15・25次の「平井」地区、があり、一乗谷川を挟んで東側に



挿図8 第24次調査区位置図

は、当主である朝倉氏の館跡、或は中ノ御殿をはじめ一族の居館群がある。それぞれの調査の成果については『調査概報』、『本報告書』等で明かにされてきている。

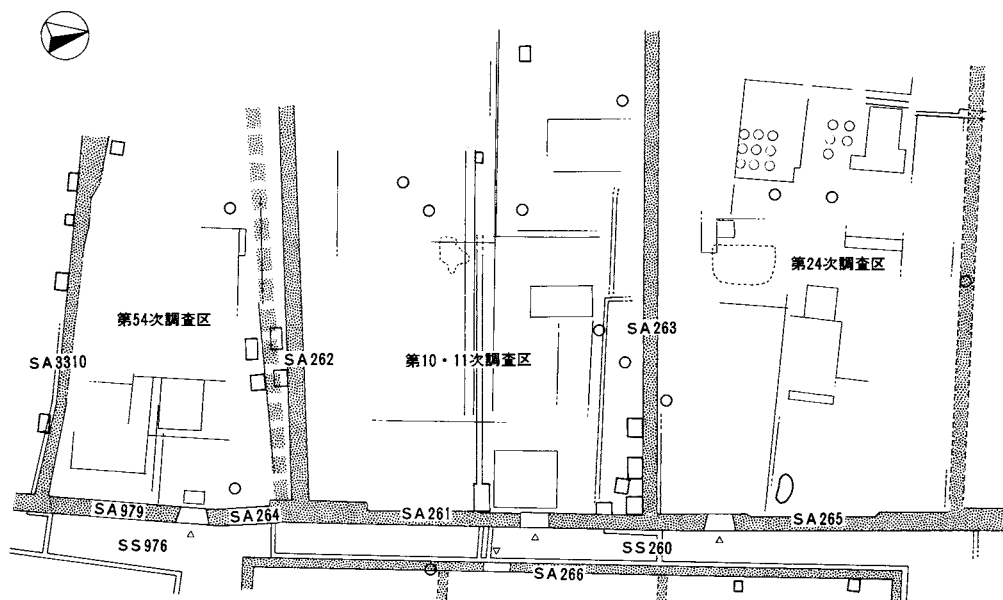
又、本調査区周辺には『一乗谷古絵図』や水田の字名によって知られるように、北から「斉藤治部大輔跡」、「市原」、「鰐淵將監跡」、「平井」、「朝倉角三吾」、「河合安芸守」等の武将名があり、一乗谷川を挟んで東側の「朝倉館」周辺には「中ノ御殿」、「新御殿」、「西御殿」、「前波九郎兵衛」、「三田崎備中守」などがあり谷中央部の屋敷群のおおよその配置についての推定が行われていた。又、歴史地理学的調査によっても、現在まで水田の畔や区割りに朝倉氏時代の屋敷割や土塁等の遺構が遺存していることが推察されていた。今回の調査では、そうした、従来の研究の成果や発掘の結果を受けて、武家屋敷の個々について発掘を実施し、武家屋敷の構造の実態、成立の時期、或は内部の、個別の建物の配置や構造を微細に解明していくことに目的がおかれた。

ここで、南隣に並ぶ武家屋敷の遺構の概要について、第10・11、54次調査の成果を踏まえて略述し、本調査区と関連することに触れてみたい。

第10・11次調査区、すなわち「新馬場」における武家屋敷の様相は、南北に走る幹線道路SS260に面しており、北・東・南の三方に土塁を有する。そのうち北側の土塁は本調査区の南土塁と共有しており、東側の道路に面する土塁もそのまま延長したかたちで本調査区の東土塁を形成している。面積は約3,000㎡に及ぶ。検出された遺構は概ね3時期に区分され、下層のI期は南側土塁が造成される以前の時期と考えられる。II～III期は滅亡期に至るまで継続された、町割にのっている時期である。

調査区の中央には屋敷を東西方向に貫く柵列が走り、これを境として各遺構は南北の2区画に大きく区分される。そして、北側の区画には石積施設、井戸、掘立柱建物など雑舎的な建物や施設が並ぶところから、内向きの空間と考えられる。南側の区画には、後世の攪乱があってはっきりしないことが多いが、庭や礎石建物が見られるところから、表向きの空間と考えられる。

同じようなことが、次の第54次調査区の武家屋敷にも言え、門を入ったすぐの、屋敷の前半分が表向きのいわゆる接客空間、後ろ半分が内向きの空間と考えられる。第54次調査区は「ショーゲドン」と称された場所で、以前から朝倉氏の家臣「鰐淵將監」の屋敷であろうとの予測が立てられていたところでもある。調査の結果は予測通り、武家屋敷であることが確定し、面積こそ1,800㎡足らずで第10・11次



挿図9 第54・10・11・24次調査区遺構模式図

調査区と比較して少ないものの、朝倉氏の有力家臣の屋敷であるという予測とは矛盾しないものである。

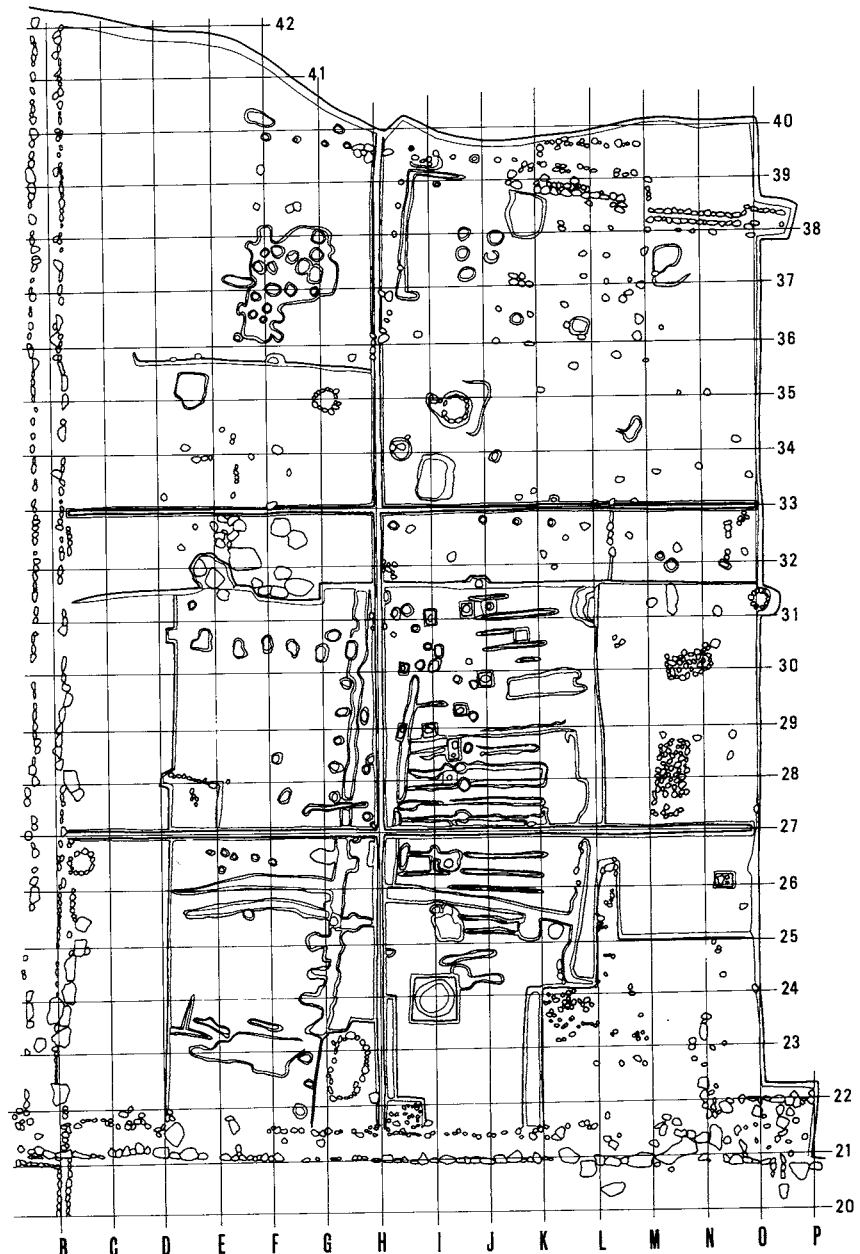
又、前述しているが、本調査区は各遺構の時期が概ね3時期に区分され、I期は土塁築造以前の時期が想定され、続いてII期には北・南・東側の土塁が築造されるが、III期になると北側の土塁が取り払われるというように、区画の移動が見られることがわかっている。同様に第10・11、54次調査区の間でも区画の移動が見られることがわかっている。こうした移動がどのような意味を持っているのか、今後の調査の中で明らかにし、道路や土塁による区画の造成や屋敷の建物との関連、ひいては「町割」の問題へと昇華して行かねばならない。この点については、「小結」のところでも再度取り上げて述べることにしたい。

ここで調査区における基本層序について述べておく。

調査区の東西方向については、ほぼ中央部のH列にセクションを設定した。土層図は第33図に示した通りである。基本的には表土・床土を排除した後に、その下位に山際の方から小礫混じりの「黄灰色土層」があり、下層を検出した調査区の中央部

では一段下位に「暗褐色土層」がある。下層の柵列としたものは、概ねこの暗褐色土層の下位から掘り込まれているが、前述のII期とした時期の柵列が暗褐色土層から掘り込まれている場合もあり、一様ではない。土層は中央部より東側では砂利層となり、東土塁SA265の下位に斜行している。

南北方向のセクションについては27・33ラインの2本を設定した。山側の33ラインでは、床土の下位に「茶褐色土層」がある。東西セクションの「黄灰色土層」に対応する。この層の下位にIII期の遺構が造成されている。調査区の北側、SB838、SX862を境に土層が変



挿図10 第24次調査グリッド設定図

わり、砂を含む「茶褐色土」と炭混じりの「灰色粘土層」になり、レベルも下がる。27ラインでは、床土の下位に砂利を含む「砂質土層」がある。これは後世の攪乱などに伴うものであろう。この層は北半では「暗茶褐色小礫混じり土層」となる。この下位にI期の柵列が掘り込まれる「暗褐色土層」がある。

調査日誌抄

第24次調査(1977年5月1日～7月31日)

- | | | | |
|------|--|------|---|
| 4・26 | ベルト・コンベアー運搬、作業小屋の設置。 | | |
| 4・27 | 動力用電源の配電盤設置。排水用の溝掘り。 | | |
| 4・28 | 排水用溝掘り。石垣の石除去作業。 | | |
| | * * * | | |
| 5・1 | 本日より調査開始。表土・耕土除去作業に入る。 | | |
| 5・16 | 第17次調査区(サイゴージ)の整備写真撮影のため、耕土除去作業中断。 | | |
| 5・19 | 耕土除去作業再開。 | | |
| 5・20 | 地区割り設定。杭うち作業。基準点はNo.6(53.23m)。 | | |
| 5・21 | 石垣除去作業。 | | |
| 5・26 | 南北道路に面する土塁(東土塁)の検出に入る。第15次調査で検出した土塁付近がこの調査区の屋敷における門に相当することが判明する。 | | |
| 5・27 | 門跡の検出。道路に面する土塁の内側を掘り下げる。あまり、遺構の遺存状態は良くない。H22・23付近で小トレンチを入れる。遺物を含む層は確認されず、小礫混り暗褐色土であった。 | | |
| 5・31 | 24～27ラインの床土除去。遺構面の検出を行う。中央の33ラインで柱痕確認。 | | |
| 6・1 | 26～29ラインの掘り下げ。M27で井戸跡確認。O列で礎石を複数確認。 | 6・16 | I35の井戸掘り下げ。排水作業。 |
| 6・2 | 28～30ラインの掘り下げ。礎石確認。 | 6・20 | ガラ石除去作業。 |
| 6・3 | 30・31ラインの掘り下げ。 | 6・21 | 調査区の南側土塁の検出作業。北面は比較的残りが良い。 |
| 6・4 | 32・33ラインの掘り下げ。この付近は東西方向に段差があり、山側が高い。E・F32付近で庭跡を検出。 | 6・22 | 38～41ラインの遺構検出作業。I35井戸掘り下げ。下底で木枠を検出。井戸枠板石、一輪挿し、薬灌の蓋、白磁皿、「いへ」木札3枚出土。J38付近で藜ピット群検出。 |
| 6・6 | 32～35ラインの精査を行う。ガラ石除去。I34で石積施設検出。 | 6・23 | 36～38ラインの掘り下げ。遺構面の検出作業。 |
| 6・7 | 35～38ラインの掘り下げ。石列、礎石建物など確認。K36付近で染付皿、天目台など遺物多数出土。 | 6・27 | 36ラインの掘り下げ。南側の土塁裾に砂を確認。土塁に伴う溝底と考えられるが、上面が削平されておりプランは不明。中央部でピットをいくつか確認する。北側の礎石建物付近に炭層を検出する。東側へ向かって傾斜していることが判明。 |
| 6・8 | 37・40ラインの掘り下げ。本日で調査区全体的上層部分の掘り下げが終了する。F37付近で藜ピット検出。 | 6・28 | 33～36ラインの掘り下げ。タメマスやピット、柱痕などを検出するが、検出面が削平をうけており、はっきりしない。 |
| 6・9 | 調査区西限部分の掘り下げ。山際にある畔は後世につくられたものと判明。G35の井戸を完掘する。 | 6・29 | 32・33ラインの掘り下げ。特に庭跡の砂層の精査を行う。 |
| 6・10 | 調査区西限の畔に接する盛り土部分を除去。 | 7・4 | 庭跡のガラ石除去。O31で井戸を新たに検出する。 |
| 6・13 | 調査区西限の山際で南北方向の溝、敷石部分を検出する。I35の井戸を掘り下げる。 | 7・5 | 30・31ラインの掘り下げ。この部分は庭跡のある部分より一段低くなっている。柱穴を数カ所で検出。 |
| 6・14 | I35井戸の掘り下げ。漆椀や曲物、土器が出土。 | 7・6 | 28～30ラインの掘り下げ。O31の井戸掘り下げ。 |
| 6・15 | I35の井戸掘り下げ。調査区北側の土塁と見られる部分を精査したが現代の製品が含まれて | 7・7 | 26～28ラインの掘り下げ。北側では砂利層があり、遺構は検出できない。南側の端で井戸を検出。 |
| | | 7・8 | 26・27ラインの掘り下げ。北半部分で下層の掘り下げを実施。盲暗渠状の溝を数本検出。又、一段上の層で、石敷面を検出。 |
| | | 7・15 | 21～25ラインの掘り下げを行う。南北道路に面する東土塁は内側の遺存状況が良くない。G22・23で楕円形の石積施設を検出する。中央部分で下層のピット群検出。 |
| | | 7・18 | 調査区北東隅部分の掘り下げ。排水作業。 |
| | | 7・19 | 遺構写真撮影のため、発掘区の清掃作業に入る。 |
| | | 7・26 | 遺構写真撮影実施。 |
| | | 7・27 | 〃 |
| | | 7・28 | セクション、エレベーションの実測作業。 |
| | | 7・29 | 〃 |
| | | 7・31 | 器材の撤収。調査を終了する。 |

2. 遺構 (第33図～第41図, PL.33～PL.43)

検出された遺構には、土塁2、門1、柵列8、礎石建物13、溝10、井戸4、石積施設1、庭1、土壌3、石敷遺構3、甕埋設遺構2などがあり、その他に「布堀」又は「盲暗渠」と見られる溝状遺構が、20本以上確認されている。これらの各遺構は概要の項でも述べたように、それぞれ3期に区分される。今、これらの各遺構を時期別に表にあらわすと、以下のようになるであろう。

表9 時期別遺構一覧

	第I期の遺構	第II期の遺構	第III期の遺構	
			III ₁	III ₂
土塁		<u>S A 263 S A 265</u> 北土塁?		
柵列	S A 836 S A 840 S A 846 S A 879 S A 880	S A 881	S A 845	S A 844
土堀			<u>S A 857</u>	
門		<u>S I 821</u>		
建物	S B 842 S B 843	S B 841	<u>S B 831 S B 832</u> <u>S B 835 S B 837</u> S B 833	S B 830 S B 838 S B 839 S B 890
道路		<u>S S 260</u>		
石組溝	S D 822 S D 823 S D 824 S D 825 S D 868	<u>S D 316 S D 828</u>	S D 826 S D 884	S D 827
暗渠		<u>S Z 275 S Z 913</u>		
井戸		S E 850	S E 848 S E 849	S E 847
石積施設				S F 851
盲暗渠	S X 866 S X 867			
石敷			S X 864 S X 871 S X 873 S X 874	
石列			S X 889	S X 856 S X 859 S X 860 S X 862
庭			<u>S G 829</u>	
土壌				S K 852? S K 853
甕ピット			S X 855	S X 854 S X 861
その他	S X 882 S X 883 S X 869	S X 870? S X 888?		S X 863 S X 872

〔第Ⅰ期の遺構〕

屋敷を区画している土塁築造以前の造成にかかるものである。遺構の切り合い関係や、方向の若干の違いなどから、数度の建て替えが考えられる。概要の項で土層に関して触れたように、Ⅱ期・Ⅲ期の遺構は床土より下位に位置する砂利・礫などを含む「暗褐色土」層上に造成されており、Ⅰ期の遺構は明かに、この「暗褐色土」層の下位に位置する。以下にⅠ期の遺構について述べる。

SX866,867 いずれもほぼ南北に平行に走る浅い溝である。溝は砂利で埋められており、間隔が0.9m前後であることから配水を目的とした、「盲暗渠」とも推定される。合計20本以上が確認されるが、幅や方位がすべて同じではなく、一部のものには建物の壁、土台などの下部に施される「布堀」の可能性もある。これらの溝は概ね南北に走っており、SA881の柵列とはちょうど90度の角度をなす。

SD822 本来、石組の溝であるが、ほとんどが抜き取られた状態でなくなっていた。その一部がわずかに残る。SX874付近で北に曲がっている。西へはセクション用の畔を超えて2.5m分ほど続くようである。

SD825 幅0.6～0.7mの素堀りの溝でSD822に直交して接続している。約22m分を検出した。その北半はガラ石、東西の畔のセクションを超えて南半では川砂利で埋まっていた。SD868が隣接して、東側に走る。SB842付近で検出されたSD823が東側に延びて、このSD825と直交している。

SD824 調査区の中央をE-W23°Sの方向に走る、素掘の溝である。25m分を検出した。その東側部分は柵列SA879、880などで攪乱されている。従って、上下の関係から見るとSA879、880よりは下位とみることができ、少なくとも1時期は古いことが言える。

SA846 前述のSD824を埋め立てて造られた柵列である。床土の下位に安定的に広がっている「暗茶褐色小礫混じり土」層の下位より掘り込まれている（土層図参照）。長さ27.7m(17間×1.63m)を検出した。南側に引き倒した抜き取り穴があり、又、根石が残っている柱穴もある。柱痕数は16カ所である。重複、切り合関係はSA846→SA879。

SA836 SA846にほぼ直交して造成された柵列である。10m分を検出した。

SA840 SA846の北側に7mの間隔をおいてほぼ平行に造成された掘立ての柵列である。柱穴には根石を据えている。5カ所が確認されている(1.87m×4間)。東端で北に折れ曲がっている。

SB842 柵列SA846と方位を同じくしており、2間(3.7m)×1間(3.7m)の掘立柱建物である。この建物はSB843やSA840とも方位を同じくしており、一連の建物と見ることができよう。

SB843 1m×3.4mの礎石建物で、梁行方向に浅い「布堀」を施している。

SX869 溝SD825、868の上に重なるように造成された掘立柱建物と考えられる遺構である。間口3.5m、奥行4.75mをとることができる。柵列SA846と方位を同じくしており、同時期か近い時期の所産と考えられよう。

以上、Ⅰ期の遺構をみてきたが、これらの遺構を整理すると、

- ①まず、直交して交わる溝SD822、825、868がある。建物の周囲に掘られた雨落溝であろうか。
- ②続いて、これらの溝を切るかたちでSD824が造成される。建物の区画はこの溝によって北と南に折半されたようなかたちとなる。
- ③この溝を埋め立てて、柵列SA846を中心にしたSB840やSB842、843、SX869が造成された時期

がある。ただ、S D824とは方位がほとんど同じであることから、時間差をおかずに継続的に造成された印象を受ける。

④方位を変えてS A881を中心に、「盲暗渠」あるいは「布堀」と見られるS X866, 867が造成される、と考えられる。このS A881についてはⅢ₂期としたS B839などと同じことからⅢ期まで下がる可能性もある。

〔第Ⅱ期の遺構〕

屋敷を区画している土塁、南北道路が造られた時期である。南土塁や東土塁はそのままⅢ期にも引続き使用される。門S I821も同様と見られる。この時期に、北土塁が造成されているものと考えられるが、前述したように発掘調査では確認することができなかった。従って、推定の域を出ないことではあるが、S D828とS Z913の間にはほぼ直交して取り付き、S E849の上を通過して山裾に延びていたものと見られる。しかしⅢ期には取り払われて北側の区画と併合されたもの、との考えに立って、以下に個々の遺構について述べることにする。

SA263 第10・11次調査区（新馬場）との境界土塁で、S A261・265と直交して接続している。長さ約60m、基底部幅1.8mを測る。石組は東側で比較的大きな石を組んでいるのに対して、山際部分では小さな石を細かく組んでいる、という違いが見られる。石組溝S D316が並行しており、暗渠S Z275を潜って排水される（第34図 南土塁エレベーション参照）。

SA265 南北道路に面した土塁で、今回検出した長さは40mである。0.75m前後の石を横方向に均等に2段組みしている。この上はやや小振りな石が2～3石乗るものと思われる。門付近の幅は2.1mを測る。北端部では攪乱が見られ、形状をほとんど残さない。

S I821 南側コーナーより北に6.5mの位置に開く門である。屋敷内部と道路とはあまり高低差がなく、階段状の遺構は見られない。この門は外側の幅4m、内側の幅2.6mを測り、台形に開くかたちを取る（第34図 東土塁エレベーション参照）。

発掘区北端ではS D828に続く暗渠S Z913がある。これについては、第25次調査区でも触れているが、溝S D828の存在によって、これに並行する土塁が西側の山裾に向かって延びているものと考え、ここまですべてこの屋敷の北側の範囲とする。間口は40mとなろう。調査段階では北側土塁は明確には検出できず、恐らく次の第Ⅲ期の段階で取り除かれたものであろう。

SS260 既に第10・11次、及び15次調査で検出されている南北道路である。今回はその北側延長部分40m分について発掘した。北側では若干幅が広がっており、幅8mの東西道路と接続している。

SB841 発掘区のほぼ中央に位置する礎石建物である。礎石列4カ所について検出した。1.92mを1間としているようである。その他にも礎石が散見されるが、まとまりはなかつながらない。

SD316 土塁S A263に並行する溝で、井戸S E850付近まで確認できるが、それより西側では不明である。後世の攪乱が考えられる。

SD828 2.3m分を検出した。ゆるく円弧を描きながら西へ延びているようである。土塁に近い方は底石を敷いている。通常、土塁中に造成される暗渠は、排水性向上の目的から溝底に石を敷くことが多い。S D828の場合もそのように考えると、この時期に北土塁がS D828の上を走っていたとも言える。

〔第Ⅲ期の遺構〕

この時期は北土塁を取り払った時期を想定し、調査区の北側部分に拡張されたものとする時期である。西側山裾部分と北側で比較的遺構の遺存度が良い。遺構群の方位や層位の上下関係から、更に小2期に細区分が可能である。

〈Ⅲ₁期の遺構〉

SB831 調査区の西側、山裾に位置する礎石建物で、この付近の主要な建物と見てよい。棟方向は、東西で8.2mを測る。南北はほぼ4mである。東半の南面には1.95m×1.95mの「方形張り出し」が取り付き、北面には3.1m×0.95mの「下屋」が取り付く。この下屋、張り出しが取り付く東半の柱間寸法と西半の柱間寸法は異なっており、東半2分間は1.95m、西半3分間は1.4mである。この建物と恐らく時期的にかなり近い時期のものともみられる、別の建物SB832がある。これは礎石が2、3個しか残存せず、規模や性格などについては不明であるが、何等かの関連があるものと考えられ、小規模の建て替えを想定したほうがよいと思われる。

SA857 SB831の西側には土塀の基礎と考えられる石敷SA857がある。幅0.65mを測り、約5.3mを検出した。更にその西側には礎石列SB833がある。

SD826 「コの字」形の溝で、東西7m、南北3mを検出した。この溝は大甕埋設遺構SX855を納めていた施設の雨落し溝と考えられる。この溝と重複してSB834がある。切り合い関係からⅢ₂期の造成と考えられる。

SX855 大甕埋設遺構はピット計5基が検出された。南北の間隔は少し空き気味の感があるが、東西の間隔は、ちょうど最大径が90cm前後の大甕を据え得る位置にある。この大甕埋設遺構の北には石列SX885がある。

これら西側に集中する建物群は位置や規模等から考えて、日常雑舎的な性格を有するものと考えられる。これに対して後述の庭や付属の建物が調査区中央部に位置している。

SE848 径0.95mの井戸で、深さは完掘できず不明である。天端石はなく、削平によって飛ばされているものと見られる(PL.42)。

SX871 SB839の礎石列で、一時期古い面より検出された。石敷と見られる部分の東端にある。発掘当初は井戸の可能性を考えて深く掘り下げて見たが、下位には石積みは見られなかった。

SX864, 873, 874 いずれもSX871と同じ遺構面上で検出されたもので、SX864, 871は長方形プランを有して一定のまとまりをなす。SX873, 874はあたかも「集石遺構」の状況を呈し、「L字」形にSK853の下位に向かっている。「土層図」では砂利層(「ガラ石」とした層)が東土塁に向かって傾斜している。あるいは地山に近い河川の氾濫による礫層かも知れない。

SG829 典型的な枯山水の形式に属する平庭の遺構である。8m×5mの広がりをもって「白砂」が敷かれていたものと考えられ、この範囲が庭の規模と見られる(挿図11参照)。旧水田の畔に突出していた巨石を除いて、ほとんどが伏石である。西南部には海石を利用した、「蹲踞様」石組が残存しており、手水であろう。この庭の西側には1mほどの距離をおいて「四阿」と見られる礎石建物SB837が付属して建てられていたものと考えられる。2.3m×1.9mの規模で4辺には狭間石が回っていたものと推定される。2畳敷ほどの「草庵風茶室」との見方が行われている(藤原1989)。武家屋敷と見られる遺構か

らの、平庭の検出例はこれまでに第15, 40, 51次調査区などがあるが、今回の遺構は、その形跡を良く残しており注目される。

<Ⅲ₂期の遺構>

SB830 礎石建物で、5.8m(3間)×5.8m(3間)を測る。柱間寸法は1.93mと考えられる。西側で半間分の庇状の張り出しがつくものと考えられる。この建物は前述のSB831と方位をわずかに異にしており(1°2′),別の建物と考えられる。

SD827 ほぼ南北方向に走る溝で、7m分を検出した。調査区北端部で方向がズレており、石敷SA857と直線的に合致した線上にあることから、もともと平行に造られていた可能性がある。Ⅲ₂期の段階で、SB830の雨落し溝に改変されたものと考えられる。

SA844 掘立柱の柵列である。柱間寸法は1.6mで、南北に3間以上を測る。南側で東に折れる。柱穴には丸木の柱痕が残っていた。大甕埋設遺構SX854を取り込んでいた柵列と見られる。

SK852 当初、石積施設として掘り下げてみたものである。しかし、3面に石積みが確認されたものの石積施設として認定するには至らなかった。朝倉氏の時期に攪乱を受けているものと考えられる(PL.43)。

SK853 長径2.2m, 短径2.0mを測る土壌である。中には炭・焼土が充満していた。性格は不明である。

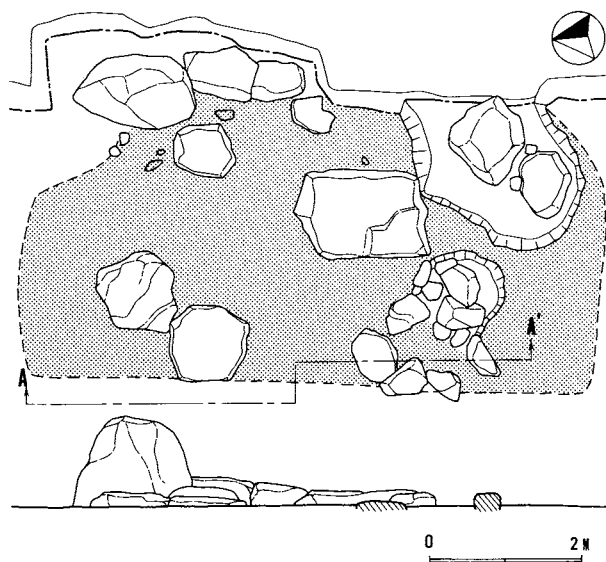
SX854 約20個の土壌が検出された遺構で、大甕埋設遺構、いわゆる甕ピットである。うち1基のピットには甕破片が遺存していた(PL.43)。

SX856 SB831の西側、山裾で検出した遺構である。まとめりから見て不安な要素も残るが、土堀基礎と見られるSA857に平行に造成されたものとする。

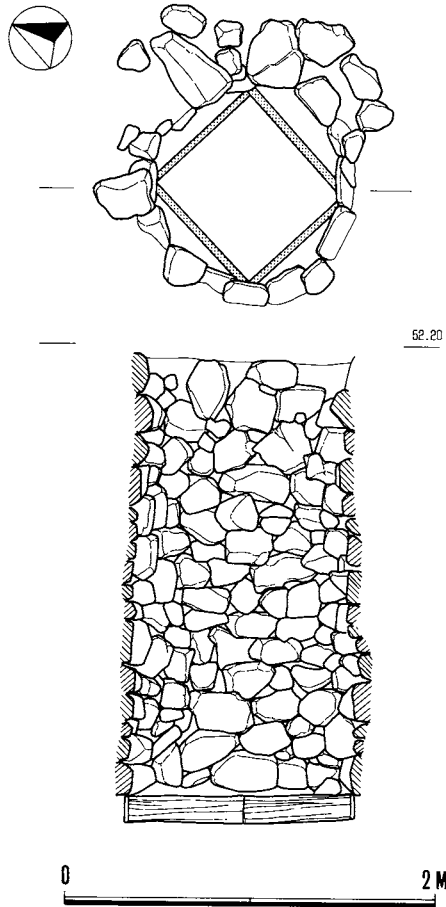
SX860 SB838とほぼ直角方向に延びる石列である。プラン確認の際に、多数の灯明皿が出土している。

SE847 SB831を検出中に確認したもので、深さ5.6mを測る。今回の調査で検出された井戸の中では最も深く、井戸底で「井桁」が検出された(挿図12上)。井戸からは、井戸枠・一輪差し・薬かんの蓋・白磁皿等が多数出土した。又、「いへ」と書かれた木札が3枚出土した。

SF851 従来の石積施設、いわゆるタメマスの形態とはかなり異なり、「楕円形」を呈する。長径3.5m, 深さ1.4mを測る(挿図12下)。従来の石積施設から見れば、かなり大型に属するもので機能的な問題として、「便所」や貯水槽のような機能は考えにくい。別の機能、既ち「地下蔵」のようなものを想定できないであろうか。今回の例のような比較的大型に属する石積施設の検出は、これまでも何例も見られる。第34, 46, 65次などで検出されている。第34次のもは土塁を有する屋敷の一角であり、土塁の下層で検出された。第46次のもは寺院の墓地の一角で検出されたものである。第65次も「南陽寺」の庫裡と見られる一角での検出例である。



挿図11 庭跡 SG829平面図・立面図

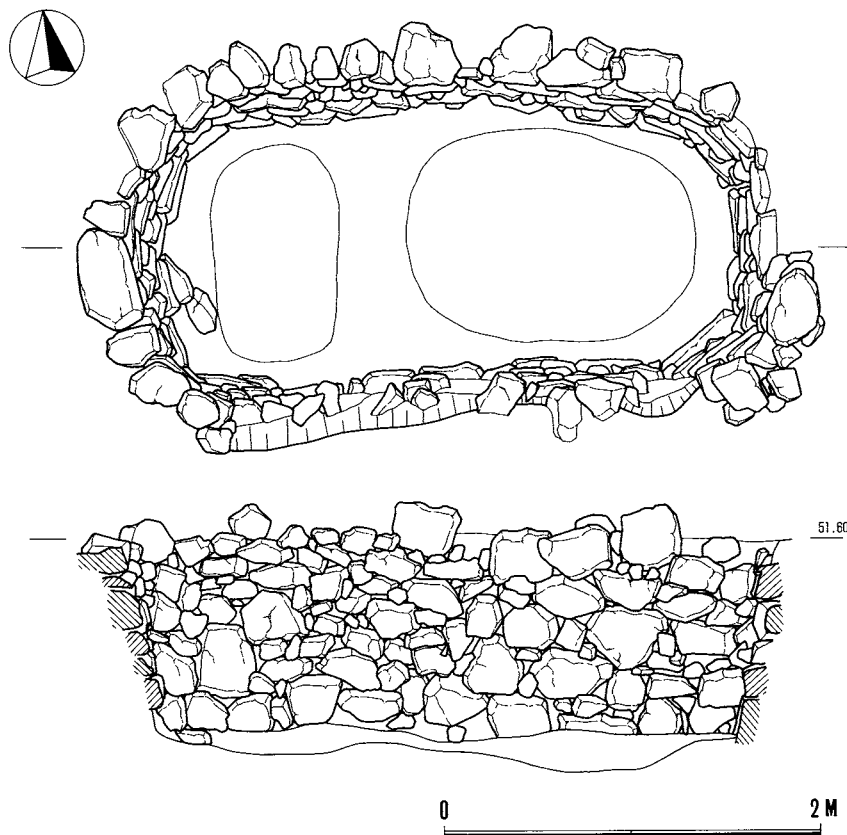


なお今回の調査では、従来の矩形を呈する石積施設は、検出されなかったが、S K852はその可能性が極めて高いものである。

以上、今回の調査によって検出された遺構について、その内容を述べてきたが、成果としては屋敷を区画する土塁以前の遺構が明かにされたことが挙げられる。S A 265は石敷遺構S X874付近より東側の整地と同時に造成されており、又、土塁SA263の下位に、第I期の遺構が位置していることが判明した。そして、「町割」が実施されたと見られる第II期がいつの時期であるかが次に問題となってくる。この点については「小結」で再度取り上げることとし、ここでは成果を述べるに止どめる。

参考文献

藤原武二1989「庭園編」『福井県史資料編14 建築・絵画・彫刻等』福井県



挿図12 上、井戸S E 847平面図・立面図 下、石積施設S F 851平面図・立面図

3. 遺物

今回取り扱う遺物は、「新馬場」と伝えられてきた武家屋敷の北隣の武家屋敷から出土した遺物群である。整理の方法は、これまでと同じく各遺構面ごとに分け、遺構面とそれを覆う整地層を一つの遺物群としてとらえ、さらにその中で井戸・石積施設などから出土した遺物のように遺構単位で扱えるものについては、その遺構ごとにまとめた。写真・図もその意図に沿って作製した。なお、同一個体の遺物が破片として遺構と整地層から出土したり、時期の異なる遺構面や整地層から出土してそれが接合した場合については、原則として破片数が多く出土している方にいれた。今回報告する第24次調査では、遺構の所で報告したように、町割り以前の遺構群をⅠ期とし、町割り以後については2時期の遺構面が確認できたので古い方からⅡ期、Ⅲ期とした。

遺物の分類についてはこれまでの報告書を踏襲した。すなわち、越前焼大甕・播鉢は「県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書」^①、土師質皿は「特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅰ」^②、染付は「15、16世紀の染付碗・皿の分類とその年代」^③による。その他の遺物についても、はっきりした根拠を示した分類はないが、これまで使用してきた分類及び名称による。

第24次調査で出土した遺物の総破片数は、7,580点と少ない。これは遺構がかなり削平されていたことによる。陶磁器の各器種ごとの破片数は表10のとおりで、煩瑣ではあるが各遺構面ごとに構成比も示した。土師質皿が53.67%、越前焼が36.62%、輸入陶磁器が8.07%とこの3種類で98.36%を占める。これら器種ごとの組成比については、小結のところで触れてみたい。

	時 期 種 別	Ⅰ期遺構面		Ⅱ期遺構面		Ⅲ期遺構面		破片数合計	%	
		破片数	%	破片数	%	破片数	%			
越 前 焼	甕	19	11.88%	46	14.79%	1,755	25.21%	1,820	24.49%	
	鉢	13	8.13	8	2.57	612	8.79	633	8.52	
	鉢	3	1.88	2	0.64	64	0.92	69	0.93	
	鉢	11	6.88	27	8.68	160	2.30	198	2.66	
	その他	0		0		2	0.03	2	0.03	
	小計	46	28.75	83	26.69	2,593	37.25	2,722	36.62	
土 師 質	皿	72	45.00	155	49.84	3,740	53.72	3,967	53.37	
	鉢	0		0		4	0.06	4	0.05	
	その他	0		1	0.32	17	0.24	18	0.24	
	小計	72	45.00	156	50.16	3,761	54.02	3,989	53.67	
鉄 釉	碗	4	2.50	5	1.61	36	0.52	45	0.61	
	鉢	0		0		0		0		
	鉢	0		0		3	0.04	3	0.04	
	鉢	0		2	0.64	11	0.16	13	0.17	
	その他	1	0.63	0		4	0.06	5	0.07	
	小計	5	3.13	7	2.25	54	0.78	66	0.89	
灰 釉	碗	5	3.13	4	1.29	3	0.04	12	0.16	
	皿	2	1.25	2	0.64	15	0.22	19	0.26	
	鉢	0		0		2	0.03	2	0.03	
	鉢	16	10.00	5	1.61	12	0.17	33	0.44	
	その他	0		1	0.32	0		1	0.01	
	小計	23	14.38	12	3.86	34	0.49	69	0.93	
白 瓷 系	碗	4	2.50	3	0.96	4	0.06	11	0.15	
	鉢	0		0		0		0		
瓦	鉢	0		3	0.96	7	0.10	10	0.13	
	鉢	0		3	0.96	15	0.22	18	0.24	
	その他	0		0		2	0.03	2	0.03	
	小計	0		6	1.93	24	0.34	30	0.40	
信 楽 焼	鉢	0		0		10	0.14	10	0.13	
珠 洲 焼	鉢	1	0.63	0		0		1	0.01	
日 本 製 陶 磁 器	計	141	88.13	259	83.28	6,433	92.40	6,833	91.93	
青 磁	碗	7	4.38	24	7.72	79	1.13	110	1.48	
	皿	0		1	0.32	53	0.76	54	0.73	
	鉢	0		0		2	0.03	2	0.03	
	鉢	0		1	0.32	2	0.03	3	0.04	
	鉢	0		0		12	0.17	12	0.16	
	鉢	2	1.25	1	0.32	22	0.32	25	0.34	
	その他	0		0		0		0		
	小計	9	5.63	27	8.68	170	2.44	206	2.77	
	白 磁	碗	4	2.50	0		6	0.09	10	0.13
		皿	5	3.13	12	3.86	161	2.31	178	2.39
鉢		0		0		11	0.16	11	0.15	
その他		0		0		1	0.01	1	0.01	
小計		9	5.63	12	3.86	179	2.57	200	2.69	
染 付	碗	1	0.63	3	0.96	39	0.56	43	0.58	
	皿	0		10	3.12	80	1.15	90	1.21	
	鉢	0		0		8	0.11	8	0.11	
	小計	1	0.63	13	4.08	127	1.82	141	1.90	
中 国 製	その他	0		0	4.18	38	0.55	38	0.51	
	計	19	11.88	52	16.19	514	7.38	585	7.87	
朝 鮮 製 陶 磁 器	碗	0		0	16.72	5	0.07	5	0.07	
	皿	0		0		10	0.14	10	0.13	
	鉢	0		0		0		0		
	小計	0		0		15	0.22	15	0.20	
輸 入 陶 磁 器	計	19	11.88	52	16.19	529	7.60	600	8.07	
	合計	160	100.00%	311	100.00%	6,962	100.00%	7,433	100.00%	

表10 第24次調査出土陶磁器組成表

a. I期出土の遺物

I期とは、柵列SA 846、溝SD 824、溝状遺構SX 867がある遺構面とそれを覆う整地層のことである。時期的には、I期の遺構面は、町割りの基礎となっている土塀のレベルより明らかに低く、「町割り以前」の遺構群と考えられる。このI期からは遺構単位で扱える遺物がなかったので、遺構面及びそれを覆う整地層出土の遺物を一括して報告する。

I期の遺構面・整地層出土の遺物（PL.44・45、第42・43図）

越前焼 甕は19点出土したが、時期がわかる口縁部はない。しかしⅢ群とⅣ群とは胎土・焼成等が異なっているところから体部の破片でもある程度判別は可能で、やや曖昧にはなるが判別を行うと、Ⅲ群の破片は少なくⅣ群の破片の方が多い。

壺は13点しかなく、口縁部などは出土していない。(401)は「大」の篋記号が見られ、(402)は高さ20cmほどの壺の底部である。

播鉢も出土点数としてはⅢ・Ⅳ群の方が多いが、口縁部に沈線、底部に付け高台を持つⅠ群(403～409)が数点見られる。これらⅠ群はⅢ・Ⅳ群に比較して深い片口を有する。播目がないもの(405)もある。(409)は7条の播目が広い間隔で入り、内面に篋記号が見られる。(403・409)とも付け高台がすっかり低くなって、消失する直前の形態を示している。(410・411)はⅣ群に属する播鉢で、(410)はよく使用されて見込み近くの播目がすっかり摩滅して消失している。

土師質 (427・428)は、口径が14～15cm、高さが3cm前後の厚手の皿である。わりあい平らな底部から内湾気味に立ち上がり口縁端部は紡錘形になる。胎土は細かく焼成も良好である。表面が溶けているので成形技法はよくわからないが、外面に2段のナデが施されている。(433)はその小形で、口径が10cm前後である。灯芯跡がわずかに残る。(429)は、比較的丸い底部からそのまま開くように立ち上がり、口縁部でかく外反する。成形技法は、表面が荒れているため明確ではないが、外面に2段のナデ跡が認められる。胎土はやや荒く細かい砂や雲母片が均一に混じっている。口径は15cm前後である。(430・431)は基本的な成形技法が同じで、底部が平らで口縁部が強く外反するタイプであろう。(432)はD類、(434・437・438)はC類である。C類の場合、底が丸みを帯びるタイプ(438)と比較的平らなタイプ(437)とがある。(435)は基本的な成形技法は、C類と変わらないが、口縁部が面取りされたような形態になっている点異なる。口径は7.5cm前後で、胎土が赤味を帯びているものが多い。(439)も基本的な成形技法はC類と同じで、口径が5cm前後と小さい。

瀬戸・美濃製品 天目茶碗は4点出土している。(412)は口縁の屈曲が小さく全体に直線的である。釉は流れた感じがあり安定性を欠く。大窯以前の所産^④と考えられる。(413)は天目茶碗の底部で、削り出し高台の豊付けが広く露胎となっている。(414)はいわゆる縁釉の皿で、内外面とも口縁部のみに釉がかかけられその他は露胎である。

灰釉は、出土点数は鉄釉より多く23点ある。(415)は天目茶碗型の灰釉碗で、これも口縁部の屈曲が小さく、全体の器形としては割合直線的で、腰部は露胎である。大窯以前のものとしては最後の時期に属する。(416・417)は高台部からわずかに内湾しながら立ち上がり口縁部は直線状に開く灰釉碗である。(419)は口縁部の内側に返りを有する卸皿である。釉は内面には口縁部だけに、外側は体部中程までかけられている。なお、釉はすっかりかせている。胎土は白く緻密である。(421～423)は3足の鉢で、口縁部に受部がつき(421)、口縁から体部中程にかけて灰釉が施されている。(423)は焼き歪のた

め実際より大きく図化されている。

(424～426)は白瓷系統で、小さく退化した付け高台からわずかに内湾しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。(425)も白瓷系統で(424)より丸い器形である。体部には轆轤成形の跡が残る。いずれも白瓷系^⑤Ⅳ期のもと考えられる。

珠洲焼 小形の壺(440)が1個体出土した。体部の下半分を欠く。肩が張り、外反する頸部が付く。

中国製陶磁器 (441)は青磁碗で、碗なりの器形で口縁部がわずかに外反する。釉調はくすんだ青緑である。(442)は、見込みの釉を輪状に拭き取った鉢であろう。(443)は盤で高台裏の釉を軽く拭き取って重ね焼きをしている。

白磁は、軟質の内碗する皿(444～449)の割合が高い。小片のため全体の形を図化することは出来ないが、釉は半透明な乳白色で、全体に細かい貫入がはいる。

染付は数点出土しているが、小破片がほとんどで全体が窺えるものは少ない。皿の場合、端反りで体部外面には宝相華唐草文、見込みには玉取り獅子文が描かれるB₁群(451・452)が多い。(450)は口縁部内側に四方襷が巡る端反り皿である。(453)は染付皿で、高台部が高く畳付けの釉は削り取りである。小破片のため文様のモチーフは不明であるが、濃いコバルトで雲が描かれているように見える。

石製品 (455)は砥石で、石材はいわゆる「浄慶寺砥石」である。裏表に使用痕がみられる。(454)は石製の硯で、平面形は長方形で側面も直立する。底に挟が入り脚が付いたようになる。水野分類によればIBaになる。

b. II期出土の遺物

II期は町割りに従ってこの屋敷が形成された時期で、屋敷内の遺構はS B 841、SD 316などがある。II期の遺構面とその整地層から出土した遺物の量は少なく、326点しかない。

II期の遺構面及び整地層出土遺物(PL.46, 第44図)

越前焼 口縁を有する甕の破片はなく、壺も良好な資料がない。(456)は口縁部に沈線を有する播鉢で、片口が付く。口縁から播目までかなり離れており、播目の単位ははっきりしないが7～8本である。播目の数が多いことや口縁部全体の形態からI期出土の播鉢(403～409)より一時期新しいと考えられる。

土師質 (460)は比較的丸い底部から外反しながら立ち上がる皿である。薄手で胎土は長石や雲母の細かい粒子が多数混入している。表面が荒れているので成形技法は確認できないが、外面は2段の横ナデの痕が認められる。口径は15.1cm、高さは2.6cmを測る。(464)は形態や胎土からその小形のタイプと考えられるが、外面の横ナデは1段のようである。(462)は胎土が(460・464)と同じで、器形は比較的平らな底部から段を持って横に開くように立ち上がる。(458・459)は内側に墨書がある。文字を読みとめることは出来ないが、まじないに関連した文字のようである。器形はD類とも考えられるが、見込みの段が認められないことや底部が上げ底ふうになっているところから、あるいはD類直前の形態を留めているのかも知れない。(463・465)はC類の皿である。

瓦質陶器 (457)は瓦質の頸部が立ち上がるタイプの風炉である。頸部に四菱花文のスタンプが巡る。

瀬戸・美濃製品 鉄釉は天目茶碗5点と壺2点だけである。(466)は腰から下を欠いているが、全体に厚手で丸みを有する。口縁部の屈曲はほとんどなく、腰部は露胎である。釉はややむらがあり、安定感に欠ける。(467・468)の場合は口縁部の屈曲は小さく、直線的に作られている。双方とも腰部から下は露胎である。釉は黒く均一である。(469)は天目茶碗の高台部で、高台脇の削り幅が少ない。外面は露

胎であるが体部の釉が高台部まで流れてきている。

灰釉は碗が4点出土しているが、皿は1点しかみられない。(472)は天目茶碗と同じ形態の灰釉碗で口縁部の屈曲部はほとんどないが、口縁端部が強く外反する。(471)は灰釉鉢で、復元口径19cmを測る。釉は全体に薄く外面は釉にむらがある。(473)は灰釉香炉で、上号と脚を欠く。口縁部の内側に返りが付き、口縁・中央・底部の3カ所が膨らみ、細い横線が入るタイプである。

(474)は白瓷系の碗で、腰部が丸い。自然釉が降りかかっている。

中国製陶磁器 中国製陶磁器では青磁碗が多い。(475・476)は線刻の蓮弁文碗で、緑色の釉が施されている。一乗谷出土の青磁碗では最も出土例が多いタイプである。(479)は口縁部が外反する青磁碗、(477)は篋刻の蓮弁文碗で、蓮弁が二重になっている。(478)はそのタイプの高台である。(480・481)は「竹の節」形の香炉で、灰釉香炉の原型である。(482)は釉が厚くて青い。

(483～485)は白磁皿で、口縁部は端反りとなり高台部の釉は削り取り(485)のタイプが多い。(486)は内湾する白磁皿の高台部である。

(487)は染付碗の高台部である。見込みが広く、高台の作りは薄く高い。見込みの文様は草花文で、鮮やかな藍色を呈する。小野分類によれば染付碗D群に分類できる。(488)は口縁部外面に波濤文が巡るD群の碗である。(490)は見込み、外面とも草花文のC群の碗である。(491・492)は端反りの皿で、外面は宝相華唐草文、見込みは羯磨文である。B₁群に分類される。

c. III期出土の遺物

III期はSF 851・SG 829・SE 848・SB 831などの遺構が存在する遺構面である。東半分は削平されてほとんど遺構がなく、遺構面自体も少し削平されているようである。これに対してSG 829から西はSB 831を中心とする遺構群が検出されている。III期として扱った遺物群は、発掘調査の時、耕土・床土を除去して最初に検出した遺構面から出土した遺物群とIII期の遺構とした井戸や石積遺構から出土した遺物群である。

SE 848 出土遺物 (PL.47～49, 第45～47図)

この井戸からは大量に遺物が出土した。これらの遺物群は、同一個体の甕・壺や白磁皿が井戸以外からも出土しているところから、一乗谷滅亡後一括して投げ込まれたようである。

越前焼 甕は136点出土しているが、時期の分かる口縁部は少なく12点に過ぎない(494)は口縁部が最も肥厚したIV群cである。肩部のスタンプは格子の部分しかなく「本」を欠いている。(495)は口縁部の肥厚の仕方からIV群bに位置づけられる。(496)は口縁部が立ち上がるタイプである。時期的には、大甕ほど細分されていないが、大甕のIII群に相当すると考える。大甕は基本的には高さ90cm、口径90cmのサイズがほとんどで、大甕と同じ形で口径・高さとも50cmと小形のものが第36次調査で1個出土しているだけである。これに対して口縁が立ち上がるタイプは口径が約70cmを最大に、高さ50cm、口径20cmまで4クラスくらいサイズがある。(496)はその最大クラスの甕である。

壺は33点出土している。(498)は、口径12cmほどの壺で、口縁頸部が軽く膨らみそれに続く肩部はなだらかである。(500)は壺の下半分で、底部から体部にかけてナデ上げて整形した痕が窺える。

(501)はIII群bに属する播鉢で、片口を有する。口縁端部から播目までが広く、口縁端部は軽く外反する。胎土はやや粗く長石の粒子が目立つ。(502)は播目が口縁下の凹線を越えて口縁端部まで延びており、一乗谷では最も新しいタイプの一つである。(504)は播鉢と同じ形の鉢で、底部から直

線的に開き口縁端部が立ち上がる。内面は降灰で白くなっている。

土師質 (505)は割合平らな底部から口縁部に向かって大きく外反する皿で、外面に2段の横ナデが認められる。胎土も(430)と同じくやや粗く長石や雲母の粒子が混じる。(508~513)はC類で(508~512)は底部が平らなタイプ、(513)は底部が丸いタイプである。口縁部の返りに強弱があり、底部が丸いタイプの方が口縁部の返りが弱い傾向が窺える。(514)は粘土円盤から皿状に成形した後特にナデ調整などを行わないB類の皿で、内部はタールで黒くなっている。またその際かなり高温になったと見えて胎土の内部まで灰褐色になっている。(515)は基本的な成形技法はC類と同じであるが、底部を突き上げたいわゆるへソ皿である。この(515)は器壁が厚い。(516)もC類と同じ成形技法であるが、口縁部外側を面取りしており、器壁が厚い。(517)はC類の小形であろう。(518)はC類と基本的に同じ成形技法によるが口縁部のナデ調整が行われていない。(519)はC類と同じ成形をした後口縁部の両側を軽く摘んでナデ調整を行っている。(520)は非常に薄く作られており、丸い底部から内湾するように立ち上がる。

この他、銅が薄く融着した土師質皿(521~525)が多数出土した。すべて細かく割られている。(521~523)は2枚くっついており、下の皿にも銅が融着している。(524・525)は、高温のため土師質皿がすっかり変形している。

瀬戸・美濃製品 この井戸から出土した瀬戸・美濃製品は割合少なく天目茶碗が10点、灰釉皿が15点、小壺が1個体出土したに過ぎない。(530)は口縁部の屈曲が緩い天目茶碗である。

(531)は線刻蓮弁文青磁碗を写したスタンプ蓮弁文灰釉碗である。(532・533)は灰釉皿で、口縁が外反し付け高台がつく。口径は(532)が12cm、(533)は11cmあり、細片からの復元実測のため差が出たが、12cm前後に集束する。このような外反する灰釉皿は一乗谷では最も普遍的にみられる。(534)は腰部の立ち上がりがなだらかになり、口縁部の外反が緩くなった灰釉皿である。高台は同じく付け高台である。(535)はさらに口縁部が外反しなくなった灰釉皿で、一乗谷ではこの形式まで出土する。(536)は無頸の灰釉小壺で、肩が張り底部には回転糸切りの痕跡を残す。底部以外全面に灰釉が施されている。(538)は無釉の香炉で、口縁内側に返りが付き、口縁部・中央・底部に数条の凹線が回る。この形式の香炉は普通灰釉が掛かるが、このように無釉のものも時折出土する。胎土は灰釉の香炉とは異なり緻密で、堅く焼き締まっている。

中国製陶磁器 この井戸からは中国製陶磁器が多数出土した。特に青磁皿、白磁皿が多い。(540)は径が小さく見込み部分が厚いので、線刻蓮弁文碗かそれに相当する無文の内碗する碗の口縁部であろう。

(541~546)は青磁皿で、碁笥底ふうの底部からほぼ直線的に立ち上がり、口縁部は波形に、外面は鎬状に彫って成形している。釉調は灰色がかつたくすんだ青緑で、部分的に虫喰い状態になっている。全体はよく似ているが、口縁端部の波形とか外側の蓮弁の形とかが少しづつ違っている。この種の皿は7個体出土した。(547)は内湾する青磁皿で無文である。釉調は透明感のある青緑である。(548~555)は端反りの青磁皿である。(550~555)は器壁も薄く白磁皿に似ているが、釉調が少し青みがかっているため青磁に分類した。また釉に透明感がなくくすんだ黄緑色したのものもある。口縁部の外反の仕方が折れ曲がるようになっている点と、口縁端部が角張っている点が白磁皿とは異なる。また見込みと立ち上がりの境にわずかに段が付くもの(553・554)も見られる。(555)はこれら青磁端反り皿の高台と考えられ、高台は削り出して、畳付けと高台裏が露胎になっている。(556~558)は口縁部が波形になった内湾する輪花皿で、くすんだ青磁釉が掛かり、(557)は畳付けから高台裏にかけてが露胎である。作り

はあまり良くない。(559)は酒会壺の蓋である。鏝も含めた最大径は24.6cmあり、口径が20cmほどの壺の蓋になる。鏝より上には鎬が入り、鏝の下と返りが露胎になっている。釉調は緑の強い青緑で厚く掛かる。(560)は筒状の香炉である。(561)は体部に鎬が巡る小形の青磁壺で、器形は酒会壺と同じである。

白磁はほとんどが皿で、中でも菊皿(562~566)が多数出土した。これらもサイズ、形態ともほとんど同じであるが、(563)だけがやや深い作りになっている。全面に白磁釉が施され、畳付け部分だけ釉が拭き取られている。(569~571)のような白磁端反り皿が一乗谷では最も多く出土する。口径12cm前後のものが最も多い。畳付けの部分は砂高台になっているもの、釉を削り取っているもの、拭き取っているものなどがある。

染付は以外に少なく、13点ほどしかない。(572~574)は染付碗である。(572)は口縁部に波濤文が巡り、体部の文様は欠失しているが芭蕉文が描かれていたと推定される。文様構成から蓮子形の碗でC群に属する。(573)は口縁部に雷文が巡り体部には唐草文が描かれる。(575)は外面に宝相華唐草文が巡るB₁群の端反り皿である。(576)は唐草文が渦巻状に変化した文様の皿で15世紀末頃盛んに用いられた文様である。(575)は外面に草花文、口縁部内側に四方禪文が巡る。(578)は碁笥底の皿で腰部から体部にかけて芭蕉文が巡るC群の皿である。(579)は染付杯であるが、文様構成は不明。

(580~584)は四耳壺で、砂の目立つ粗い胎土に鉄釉が腰部から上に施され底部は露胎である。底部はⅢ期の整地層から出土したものであるが、同一個体と考えられたのでここに載せた。(583・584)は同じく鉄釉壺であるが、鉄釉が厚く掛かり、胎土も細かい。

朝鮮製陶磁器 朝鮮製陶磁器は6点出土した。(585)は灰釉系の碗で腰部が丸みを帯びる。灰色の釉が斑に掛かる。(586~589)は、いわゆる「そば茶碗」である。(587)は重ね焼きの際下の碗が融着したが、下の碗を割ってこの碗を製品としたものである。釉調はいずれも灰色の釉の中にそばかす状の小さく黒い斑点が散らばる。

金属製品 (590)は鋳物の鉄鍋である。直径が21.0cmと比較的小形で、釣り手を持ち底部には3本の足が付く。底部中央には直径2cmほどの湯口が残る。一乗谷では煮沸容器はこの形式の鉄鍋だけで、土鍋、石鍋などは出土していない。(591)は桔梗のつまみを持つ銅製の蓋で、直径は13.2cm、内側に返りがある。おそらく茶釜の蓋であろう。(592)は銅製の花瓶で、高さ9.7cm、耳も含めた幅は6.4cmある。耳を付けた壺形の銅板に、打ち出して作った壺を張り付けている。裏には小さい穴が穿たれており壁や柱に掛ける一輪挿しである事がわかる。(593~602)は銅製の飾り金具の一部である。(593)は隅金具と考えられ、(598~602)は小さい穴が穿たれている。(602)は鋌である。銅銭は6点出土し、(603~605)は銭種がわかる。(603)は永樂通寶、(604)は弘治通寶、(605)は元豊通寶である。弘治通寶の初鋳年は1488年で一乗谷の城下が本格的に形成され始めた頃にあたる。

木製品 「いへ」と墨書された付け札が4点出土した。(609)以外は長さ6.2cm前後で、幅は最も形を残している(607)の場合1.4cmある。(609)は下半分が折れてなくなっている。頭部にはくくりつけるための刻みがあり、形態的に朝倉館濠出土の「少將」と墨書された付け札に似ている。「いへ」は解釈が困難だが、人名と考えられ「伊部」とも推定される。ただこの人名は、古文書や「朝倉始末記」などには見あたらない。

このほか木製品では漆器碗と曲物(挿図13)が出土している。漆器碗は高台部が高いタイプで、内面は朱色の漆が薄く塗られ、外面は黒い漆を薄く塗った上に朱色の漆で文様が描かれている。曲物の材は檜で、桜の

皮で端を止めている。直径は20cm前後である。

SE 849出土遺物 (PL.50, 第48図)

この井戸からは、15世紀前半に位置づけられる土師質皿がまとまって出土した。

土師質 (610)は口径15.0cm、高さ2.7cmを測る。厚手で丸い底部から内湾しながら立ち上がり、口縁端部は紡錘状になる。表面が荒れているため制作技法はわからないが、外面は指痕がほぼ全面に残り、内側はナデ調整を施した痕が見られる。(611)は、(610)の小形で、口径9.3cm、高さ2.3cmを測る。これも内面には方向性のないナデの痕がみられ、外面は指痕が面として残る。(612~614)はそれぞれ口径20.0cm、17.8cm、15.1cmを測る。いずれも底部を欠いている



挿図13 井戸 SE 848 出土漆器碗・曲物

が(612・614)はわりあい丸い底部を持ち、(613)は平らな底部となるようである。胎土はやや粗く長石と雲母の粒子が目立つ。外面には2段の横ナデが認められる。(618)は、底部を突き上げたいわゆるへソ皿であるが、A類のへソ皿とは成形技法が異なり内面にナデは認められるが、ナデ抜く技法は取っていない。そのため口縁端部の返りも認められない。胎土もやや粗く長石や雲母の粒子が認められる。(615~617)は、胎土が同じところから(611~613)とセットになるタイプと推定される。(616・617)は口径がそれぞれ9cmと8.2cmあり、平らな底部からはっきりと屈曲して外反するように立ち上がる。外面ナデは、小形のせいか(612)などとは異なり1段だけである。(617)は口径が8.2cmで、底部がやや丸く外面のナデも2段ある。(619)は底部と体部の境に段が認められる。内面は見込み部分を残して右回転のナデ調整、外面は体部に同方向のナデ調整があり、底部は細かく篋で削ったような痕がある。

SD 827出土遺物 (PL.51, 第48図)

越前焼 (620)は口径が15.5cm、現存する最大径が35.7cmあり、越前焼壺では最も大きい部類に属する。大きく丸い肩から小さめのかかる外反する口頸部がつく。肩部には「H」の篋記号が刻まれている。

瀬戸・美濃製品 (621)は口縁部内側に受部つく灰釉三足鉢である。釉は内外面とも口縁部のみでその他は露胎である。胎土はボソボソしたいわゆる「もぐさ土」である。体部には轆轤成形の痕を残す。

SX 845出土遺物 (PL.51, 第49図)

越前焼 (622・623)は甕ビット群SX854出土の甕であるが、元位置を保った状態では出土していない。いずれも口縁で、口縁部が肥厚したIV群cに属する。(622)は肩部に凹字の「本」と格子の組合わさったスタンプが巡り、傘の上に横一の篋記号が刻まれている。(624)は口縁端部を失っているが、播目の状態などからIII群cの播鉢であろう。(625)はよく使用されて見込み付近の播目が摩滅している。

SX 854出土遺物 (PL.51, 第49図)

瀬戸・美濃製品 (632)は、口縁部の屈曲がほとんどなく、全体の器形が丸い。また鉄釉の調子や腰部から下が露胎になっているところから大窯以前の天目茶碗と考えられる。(633)は口縁部の屈曲部がはっきりしているところから大窯期の天目茶碗と考えられる。

中国製陶磁器 (634)は線刻蓮弁文青磁碗で、線刻ではあるが蓮弁の形はしっかりしている。

SX 855 出土遺物 (PL.51, 第49図)

瀬戸・美濃製品 (635) は天目茶碗で、口縁部の屈曲が緩く全体に丸みを帯びる。

中国製陶磁器 (636) は青磁花生の底部と推定される。碁笥底状になっており、融着を防ぐための砂が付着している。釉調は白くくすんだ黄緑である。

SB 890 内ピット出土遺物 (PL.51, 第49図)

中国製陶磁器 (637・638) は見込みの羯磨文が崩れたいわゆる十字花文が描かれたB₁群の染付皿である。

SF 851 出土遺物 (PL.51, 第49図)

このSF 851からは古いタイプの土師質皿がまとまって出土した。

土師質 (626) は口径が18.2cmあり、丸い底部から開くように立ち上がり、口縁部で外反する。外面は2段のナデ調整が認められる。(630)はその小形で口径は9.0cmを測る。(627~629)はその中間のサイズで口径は約14.5cmある。(631)は平らな底部から屈曲して外反しながら立ち上がるタイプで、内外面ともに1段のナデ調整が認められる。

III期遺構面・整地層出土遺物 (PL.52~57, 第50~55図)

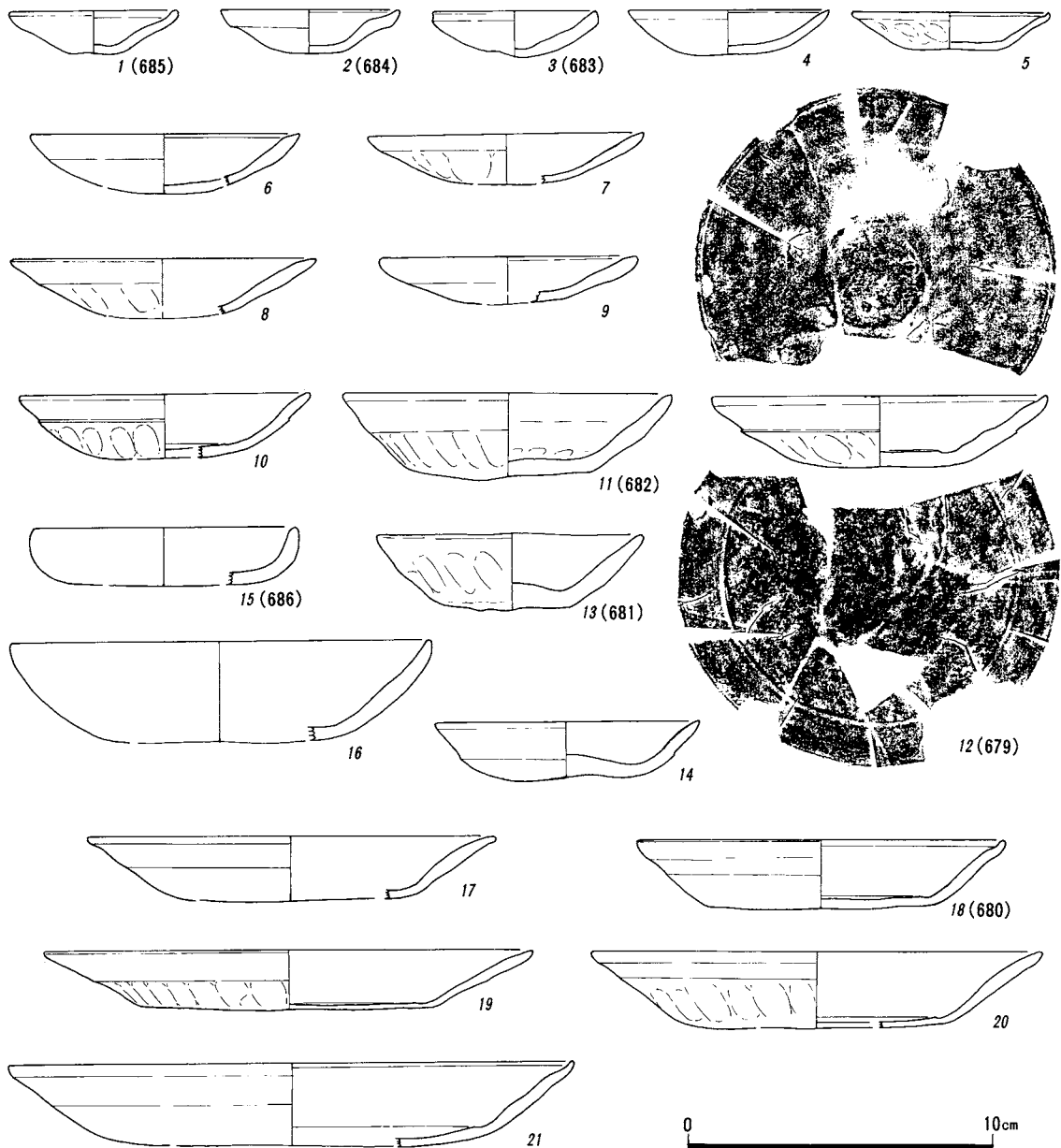
越前焼 越前焼甕は1500点出土しており、その内口縁部は54点ある。大部分は口縁部が肥厚したIV群cもしくはIV群d(643・644)に属する。(639)は口縁端部が肥厚し始める直前III群cの形態を示している。スタンプの組み合わせが不明であるが、格子は窓の部分が大きい古い形式を保っている。(641・642)は、口縁部が肥厚し始めた段階のIV群aである。(642)には傘と十(?)の筧記号が刻まれている。なおこのIV群aの段階の大甕が最も容積が大きく、口縁部から15cmまでの容量を他の完形品の甕で計算すると約250ℓ入る。ちなみにIV群dでは約220ℓ入る。(646)は口縁部が立ち上がる甕である。(645)は甕ピットと思われるSX854付近から出土したが据わった状態ではなく、口縁部が下になり底部も失われていた。このほか(648~651)は大甕の底部で、窯詰めの際融着を防ぐための砂が付着したもの(648・649)や、焼台とした越前焼甕の破片が融着したもの(650・651)である。

越前焼壺は550点出土している。(652)は口径7cm、高さ28.6cmの壺で肩から体部にかけてよく膨らみ、口頸部が割合小さい壺である。表面は黒く肩には降灰がかかる。(653~655)は口頸部の作りが(652)と同じで、口径が10cm前後と一回り大きく、口端部の形態がそれぞれ少しずつ異なる。(657)はいわゆるお歯黒壺で、口径4.4cm、高さ8.3cmを測る。この種の壺は大ききの割に器壁が厚く、口縁が片口になるのが一般的(657は復元実測のため片口を図化していない)である。(661)は無頸壺として壺に分類してきたが、よく似た形態のより大きい甕がある。したがってこれも甕に入れた方がよいのかも知れない。断面逆三角の口縁がつく。(663)も甕に分類した方がよいのかもしれない。

播鉢は150点出土している。(664~667)は口縁部に沈線が入るI群の播鉢で、(664・665)には片口がついている。(668~670)は口縁部の形態に違いはあるが、口縁から播目までの距離が長く、播目の間隔も広いところからII群に属すると考える。(671)も口縁の形態と播目の間隔からII群と見て良い。(672~675)は口縁部直下に段が付きそこまで播目が上がってきているところがIII群と推定される。(678)は、小片ではあるが、口縁下の段が失われ、播目が口縁の上まで上がってきている点からIV群に属すると考える。IV群は一乗谷の調査地点のほとんどで出土するが、最上層に限られ出土点数も極少ないところから、一乗谷が滅亡する直前から生産が始まったと考えられる。

土師質 土師質皿は多数出土しているが、これまで一乗谷の調査であまり確認できていなかったものを

中心に報告する。(斜体の番号は挿図14の番号) 1～3は基本的にはC類と同じ技法で成形された小形の皿である。口径は6cm以下である。表面が摩滅していて成形技法を十分確認できないが、手づくねで皿状に成形し、一段階ナデ調整を行った後、内面は中央まで親指を入れ、口縁部はその親指と人差し指の根元で挟むようにして右回転にナデ1回転したところでそのままナデ抜く。1は底が窪んだ「へそ皿」状になっている。これらの皿は井戸 SE 848から出土した銅が融着した皿と同じである。5・7はC類の皿で、5の口径は8cm、7のそれは9.3cmある。4・6・9は基本的な成形技法はC類と同じであるが、口縁部の上端部だけを摘んでナデているため口縁部の返りが無い。この点がC類と異なっている。8・17・21は井戸 SE 849出土の(612～614)と同じ形式の皿で、薄い器壁がやや外反に伸び、内外面ともナデ調整が2段になる。雲母片が混じったやや粗い胎土を使用している。ただ8の場合は基本的な形は17と同じであるが、小形のためかナデ調整が1段で、胎土も赤く細かい土が使われている。11・12はやや深い器形で、内側は見込みとの境と口縁部付近に2段のナデ調整。外側は口縁部に1段のナデ調整が



挿図14 III期遺構面・整地層出土の土師質皿

見られる。12の場合見込みと外面のナデ調整が強くD類の様に段がつく。13・14もやや深く、見込みが中央で盛り上がるようになっているのが特徴である。内面と外面口縁部にかけてナデ調整が施されている。14の場合体部が小さくかなり摩滅していたためナデ調整は認められない状態であった。また、底部は表面に凹凸がありしわのようにになっている。18～20はD類の皿である。19は底が平で非常に薄く丁寧に作られている。胎土も白くいわゆる「白かわらけ」の部類にはいる。16は皿というより碗形態で、口縁部が内側に返っている。表面がすっかり摩滅しているため成形技法は不明である。15は底部から直立して口縁部が丸くおさまり、これまで土師質小壺の蓋としてきたものと同じ形態をしている。また内部が黒いことや胎土から瓦質土器の可能性もある。

瀬戸・美濃製品 瀬戸・美濃製品の内、天目茶碗は29点出土している。(687)は口縁部の屈曲が弱く、全体に丸みを帯びているところから大窯初期の製品と考える。(688～693)は全体に直線的で口縁部の屈曲がはっきりしている。(689)にその傾向が強くなり高さもやや低い点など、美濃尼ヶ根窯出土の天目茶碗に形態的によく似ている。(694)は、口径7.2cmと広い口を持つ鉄釉小壺で、よく張った肩から短く外反する口縁部が付く。下半分を欠いているが、内外面ともに鉄釉が施されている。なお火を受けて釉が膨れている部分がある。(695)はその底部であろう。(703)は、胴径4.2cm、高さ2.5cmと小さい鉄釉水滴である。水注の一部と底部の一部を欠いているがほぼ完形である。鉄釉は内側全面と外面は腰部まで施され、底部は露胎で回転糸切りの痕が残る。

(704)は口縁部に向かって直線的に開く灰釉鉢で、外面にはかるく轆轤轆きの痕を残す。破片が小さかったので正確ではないが、口径は18.2cmある。(705)は鉄釉天目茶碗に似た形態の灰釉碗であるが、やや器壁が薄い。(706)は口縁部が軽く外反する縁釉皿で、内外面ともほんの口縁部に灰釉が施されているだけである。(707)も縁釉皿の1種であるが、釉がムラムラと(706)より広く施されている。(708・709)は灰釉端反り皿で、(709)は口縁端部と見込みを欠いているが、器壁が厚く付け高台もしっかりしているところから、端反りの皿でも古い部類に属する。(710)は口縁部に返りの付く卸皿で、釉は口縁部だけに施されている。卸皿としては深い部類に属する。(715)は灰釉の壺と考えられ、上半分が欠けているが、筒形で外側の腰の部分まで釉が施されている。内側は露胎であるが、あまり轆轤成形の痕が目立たない。高台は削り出し高台である。

(716～718)は白瓷系の碗で、高台が退化した(717・718)白瓷系Ⅳ期のものである。内湾気味に立ち上がり、口縁はわずかに外反(716)する。

瓦質陶器 (723・724)は瓦質の火鉢である。平面形は四角く口縁部近くに小さい突帯に囲まれて菱形(724)と巴(723)のスタンプ文が巡る。(725・726)は瓦質風炉、(727・728)は瓦質花瓶であろう。

信楽焼 (719～721)は壺で、明灰色の表面に長石が吹き出している。口径は15.8cmとかなり大きい。

中国製陶磁器 青磁碗は61点出土しているが、その大部分は内湾する無文の碗か(730・731)、線刻の碗(729)である。(732)は口縁部が外反する碗で、一乗谷では出土例が少ない。釉調は少し灰色がかかった緑である。(729)は線刻の蓮弁文碗であるが、器形やや開き気味な点、山梨県荒巻本村出土の青磁碗の中に同例を見ることが出来る。(733～735・737)は青磁碗の底部で、(737)は角張った低い高台、見込みの文様、やや褐色がかかった青磁釉などから13世紀末の龍泉窯系青磁碗であろう。(735)は外面に蓮弁文が巡り、見込みには印花がある。高台は低い削り出し高台である。一乗谷ではあまり見ない青磁碗である。(733・734)は(732・729)にそれぞれ対応する高台である。底部が厚く高台裏は重ね焼きするために蛇の目状に釉を拭き取っている。またその際の輪トチンが付着(734)していることもある。(738

～740)までは内湾する青磁皿である。見込みの部分が少し盛り上がり、腰の部分の器壁がもっとも薄い。(741)は稜花皿の口縁部で、器壁は厚く胎土はやや粗い。(742)は口縁部が稜花になった盤で体部は蓮弁状の膨らみをもつ。(743～746)は青磁香炉で、(744)は足が体部から張り出して付き、釉調は深みのある青緑である。(743)は竹の節状の香炉で口縁部には返りが付く。一乗谷ではこのタイプが最も多く出土する。(745)は筒状の体部に細い沈線が数条刻まれている。(750)は青磁托である。天目台と同じ形態で、口径5.7cm、鐙の径は12.8cmある。一部に火を受けて釉が荒れている。(747)は不遊環の青磁花瓶で、高さは27.5cmある。口縁は方形で、山形の文様がある。やや偏平な体部に長い頸部が付く。頸部の文様は芭蕉文と雷文で、体部は連続花文である。これらの文様は型押しによる。高さ5.5cmほどのしっかりした高台が付く。釉調は透明感のある緑色を呈する。この花瓶は庭園SG829から出土したものであるが、第15次調査地区からも破片が出土し接合した。(749)は鶴首の花瓶であろう。最大径は11.0cmあり、腰部に文様が刻まれているがはっきりしない。底部は碁笥底状で露胎である。釉調はうすい緑を呈する。

白磁の場合、皿が96点とほとんどで、杯が13点と碗が1点混じるだけである。(752)は内湾する白磁碗で、薄く作られ口縁部が釉の厚みでわずかに膨らむ。(753～756)は端反りの白磁皿で、(754・755)は口径が18.6cmと大きくその分高台も高くなっている。なお端反り白磁皿の普通の大きさは12cm前後である。(760)は内湾する白磁皿である。釉調は灰色で全面に貫入がはいる。(762・763)は内湾する白磁皿で、胎土は磁質化しておらず、釉も乳白色である。一乗谷ではたいていの調査地区で出土するが、その量は少なく、15世紀中ごろの製品である。(761)も端反りの皿ではあるが、(753～756)とは形態が全くことなりやや厚い底部から大きく屈曲して直立するように立ち上がり口縁部が外反する。胎土などは(762)の硬質のものと同じである。(767・768)は白磁杯で碁笥底状の底部かららっぱ状に開く。(767)は非常に薄く作られている。胎土や釉調は(753)の皿と同じである。(769)も白磁杯で小さい高台部から腰部で大きく屈曲して開き気味に直線的に立ち上がる。見込みは重ね焼きのため蛇の目状に釉が拭き取られている。(770)も白磁杯の底部であるが、これは厚手の底部に小さい高台が付く、体部は丸い腰部から内湾風に立ち上がる器形である。

染付は碗が37点、皿が64点出土している。(771)は、口縁部が外反する染付碗で、小片のため文様はよくわからないが「ふくろう」が描かれているように見える。(772)は高台が高くしっかりしており、畳付けの釉は削り取っている。見込みにねじ花が描かれる。(771・772)は一乗谷で出土する碗としては古い部類に属する。(773～774)はいずれも蓮子碗タイプの染付碗である。(775・776)は同じ文様で、唐草文が退化した小さい斑点状の文様が全面に散らばる。(778・779)は外面に唐草文が描かれ、腰部に蓮弁状の文様が巡る碗であろう。(783・784)は腰部に芭蕉文が巡り、文様構成は碁笥底の染付皿C群と同じである。(780～782)は饅頭心タイプの碗で(782)は高台裏に銘がある。染付皿は(783・784)のように外面の文様が宝相華唐草文をもつB₁群が多い。(784)のように焼成の際の砂が付着したままのものも時たま見受けられ、これらの皿が廉価な日常用の皿として使用されていたことがわかる。(787)は形態は端反りであるが、文様を描くとき縁取りをして中を塗るようにしており、(783)などとは文様構成だけでなく文様の描き方も異なる。(788～790)は内湾する口径19.2cmの皿である。全面に崩れた牡丹唐草文が早いタッチで描かれている。(791～795)は平面形が不正形な合子で、(776)の部分では内側に窪んでいる。文様は丁寧な描かれ、呉須の色も濃い。

朝鮮製陶磁器 (796～799)は粉青沙器壺で、胴中央部に白象嵌による文様が施されている。

鉄製品 鍛造の和釘が多数（800～806）出土している。断面は四角で頭部をたたいて扁平にして、さらに巻き込んでいる。すっかり錆びて原型を止めていないものが多い。（825）は鉄の鉋滓で、重量が250gあり、一乗谷で出土した鉋滓では最も大きいものの一つである。

銅製品 簪（807）が1点出土した。原型をよく止めているが、飾りの部分がなくなっているのは、薄い金属か、有機質でできていたためであろう。（808）は銅製の切羽で、周りに細かい飾りが付く。（809）は、箱状になった飾り金具であろう。釘で止められていたらしく側面に小さい釘穴がある。銅銭は15点出土し、開元通寶から永樂通寶までである。最も多いのは北宋銭で、わずか15点であるが一般的な出土傾向と合致している。大定通寶の出土は珍しい。

石製品 硯は2点出土しており、（826）は長さ6.1cm、幅3.4cmの小形硯である。底が平で水野の分類によれば長方硯IBcにあたり、16世紀以降の硯である。（827）も同じ形式の硯であろう。（828）は花崗岩系の茶臼で、鏝も含めて1石から彫り出されている。臼の部分の径は17cmあり、鏝も含めた直径は34cmある。臼の刻み目は7本8分割であろう。（829～834）は、福井県地方では「バンドコ」と呼ばれる行火である。「バンドコ」にはその平面形から「O」型と「D」型があるが、これらはいずれも「O」型である。（829～831）はその蓋で、（832・833）は身の部分である。身には前面に細い長方形の窓が数個開けられる。（834）は前面が開く「バンドコ」で（第15次調査PL 22—186参照）「O・D」型の古い形式と考えられている。

注

- ① 福井県立朝倉氏遺跡資料館
『県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書』1983
- ② 福井県教育庁朝倉氏遺跡調査研究所
『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告』I
- ③ 小野正敏『15、16世紀の染付碗・皿の分類とその年代』
『貿易陶磁研究』No.2 1982
- ④ 榎崎彰一・美濃古窯研究会
『美濃の古陶』編年表（井上喜久男作製）1976
- ⑤ ④に同じ

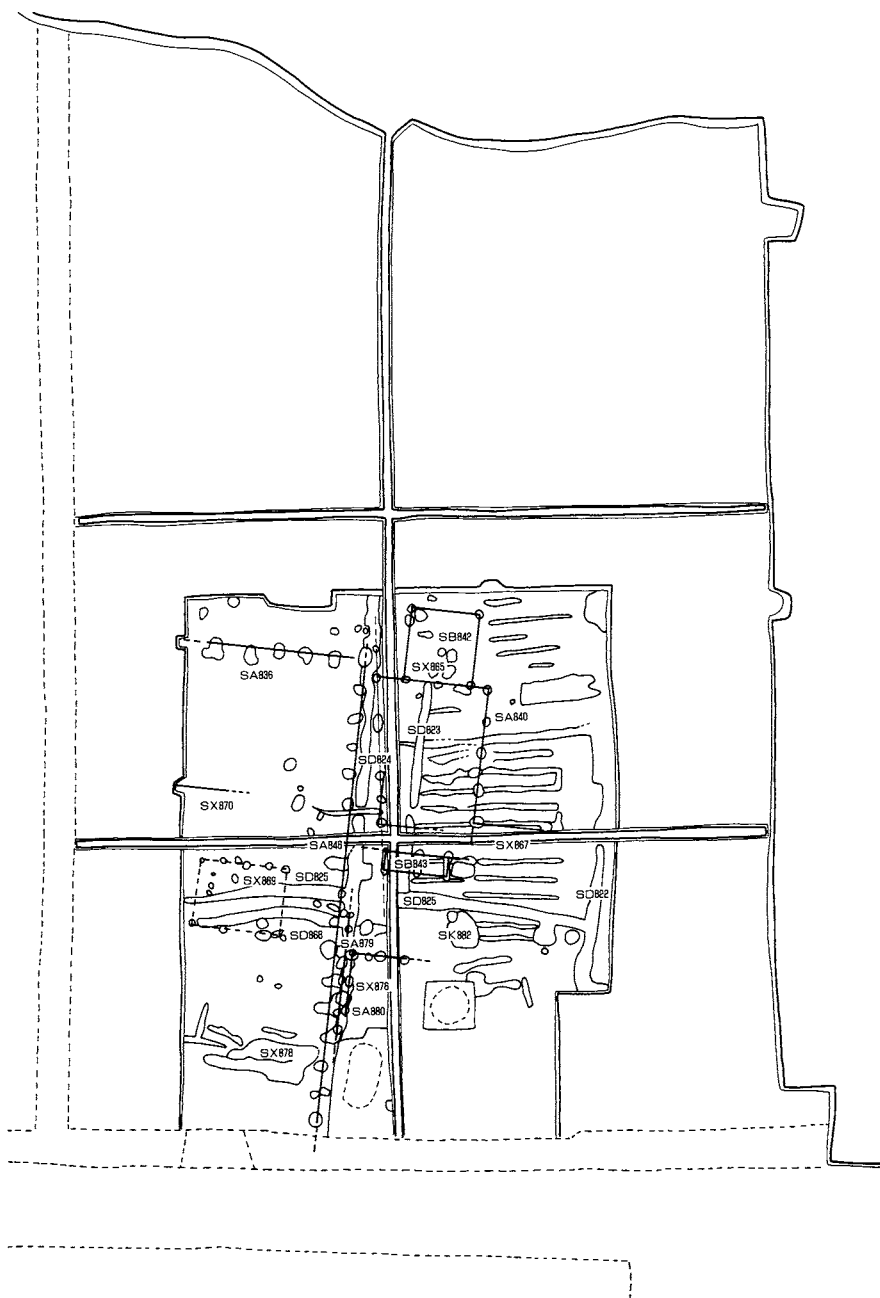
4. 小 結

a 遺 構

前項では、検出された各遺構の規模や性格などについて述べた。本項では、それらの各遺構について、第Ⅰ期～第Ⅲ期までの時期的な区分の問題や、各時期における遺構の面的なつながりについて分析する。そして本調査区における武家屋敷としての性格を、可能な範囲で考察することで若干のまとめをしたい。

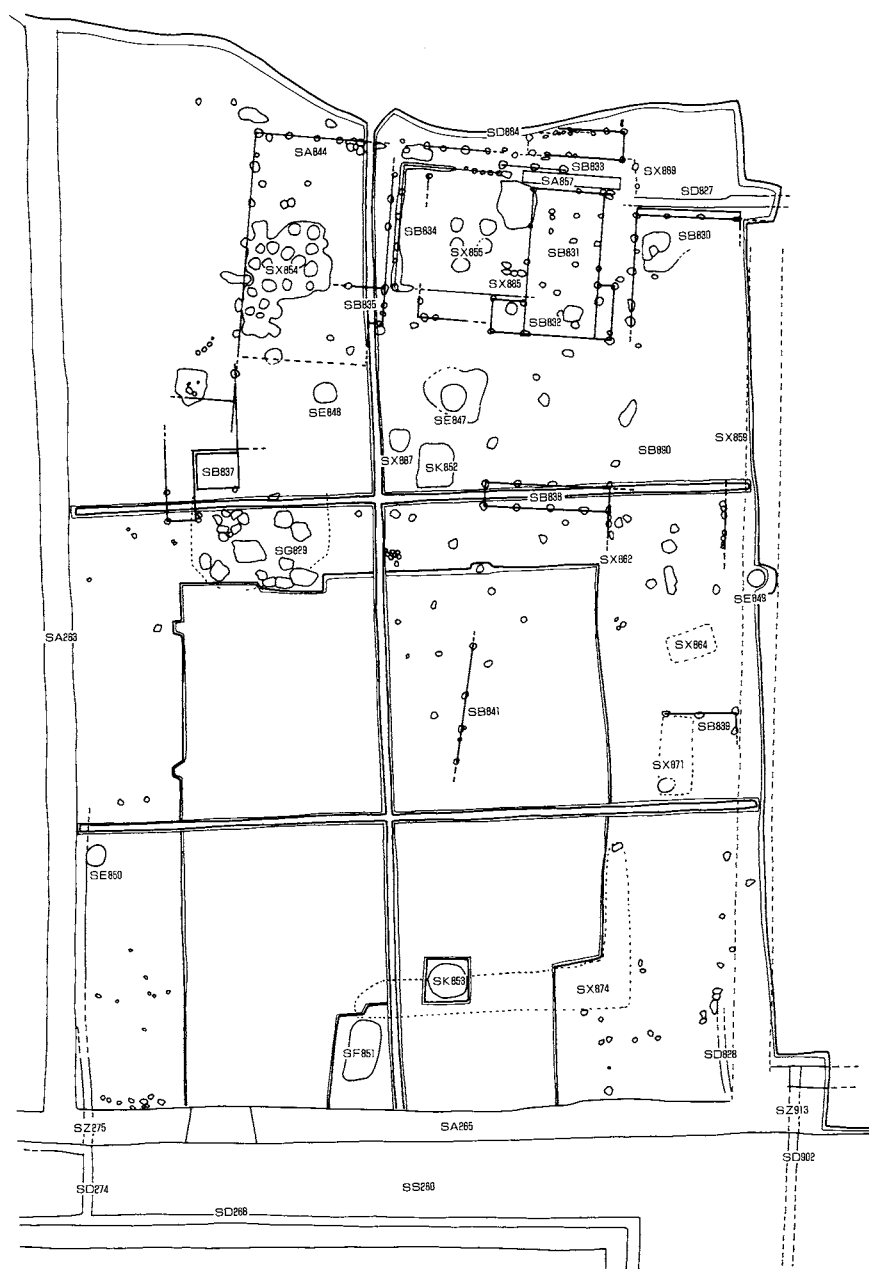
第Ⅰ期の遺構

各遺構の概要については、既に触れてきたとおりであるが、柵列、礎石建物、溝が錯綜しており時期の判断に苦しむところがある。ただ、おおまかな流れとしては先行的にSD822、825、868がある。これを切るかたちでSD824が造成されるが、この継続期間は短く、継起的に造成されたものと見られる。更にこの溝を埋め立てて、柵列SA846が造成される。この柵列が造成された時期に礎石建物SB842、843などが造成されており、この段階になってようやく、第Ⅰ期の主要な遺構が出そろったかたちとなる。この柵列SA846は第Ⅰ期の各遺構の方位、軸線と概ね一



挿図15 第Ⅰ期遺構配置図

致しており、基本的な遺構であることがうなづける。ただ、これらの軸線とかなりずれる遺構としては、先に「盲暗渠」としたS X 866やS X 867があり、先行的に営まれるS D 822・S D 825などがある。いずれにしても、屋敷の中央を縦断するかたちで、溝ないしは柵列が造成されるようなパターンは、南隣している区画、「新馬場」でも見られたとおりであり、I期、II期としているような、古い時期に造成されているということも一致している、というように隣合う区画どうしの造成方法は無関係ではありえず、第10・11次調査区である「新馬場」の、東西に縦断する柵列および溝から、今回の第24次調査区の柵列S A 846までが、いわゆる町割以前のひとつの「広がり」ではないかと推測する。この広がりの間口規模は約36mとなり、今回の調査区である、第24次の区画の間口とほぼ同規模である。この広がりには更に第15次調査区にも及び、「新馬場」の溝S D 312の東側延長上には、門S I 279があり、溝S D 387がある。第24次調査区の柵列S A 846の東側延長上には、現「復元武家屋敷」の「主殿」とされる礎石建



挿図16 第II・III期遺構配置図

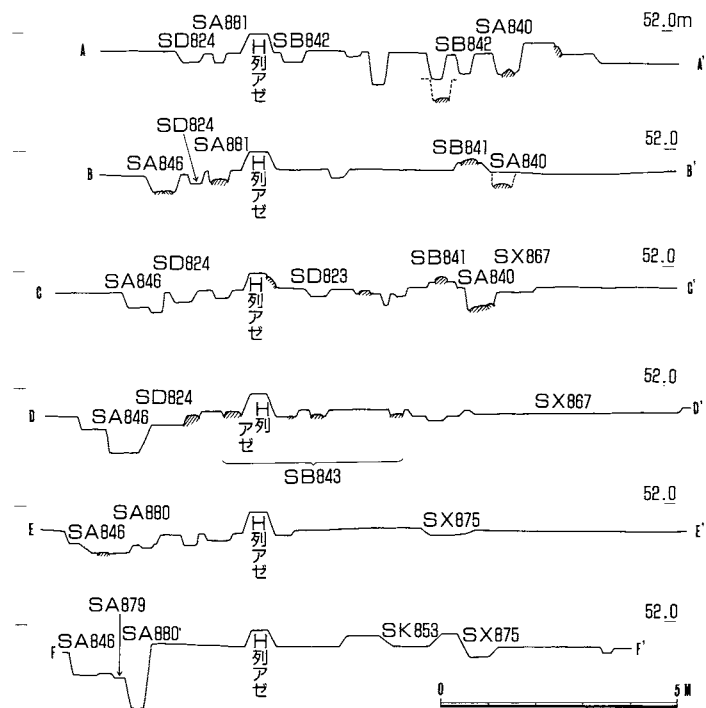
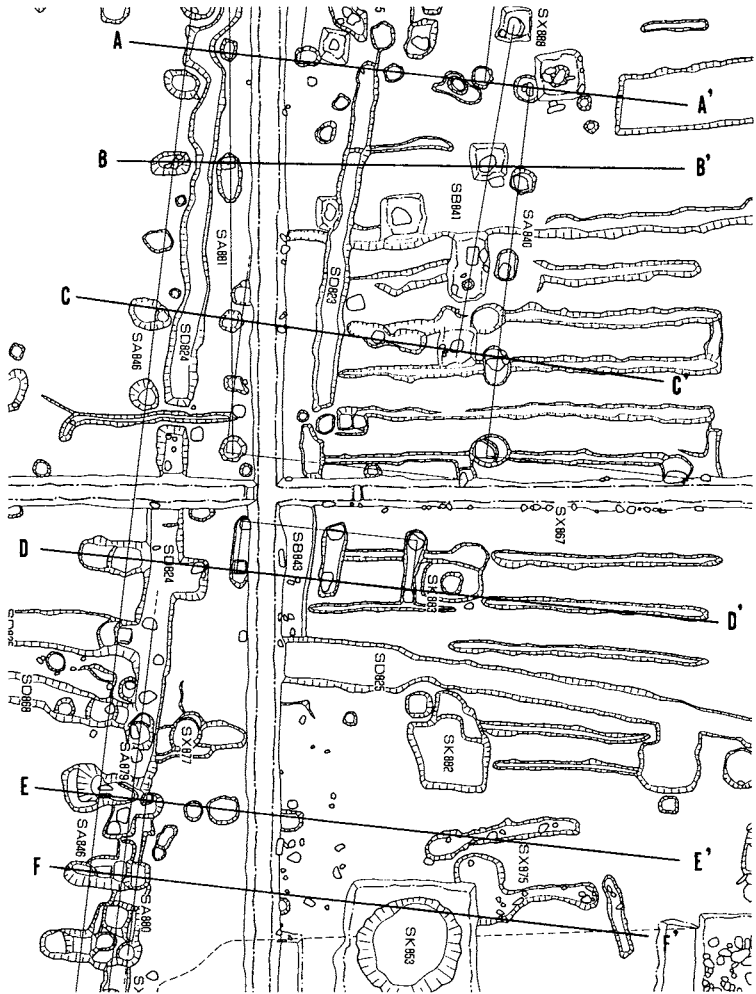
物S B 405があり、塀S A 895やS D 897が一直線上に連なる、というように、时期的な点では合致しないが、ひとつの区割り線を形成している、と思われるのである。この点については、更に広い範囲をカバーして検討しなければならず、紙数の制限もあり、これ以上の憶測は差し控えない。

挿図17には第I期遺構における主要部分の断面図を呈示した。柵列S A 846、S A 879、S A 880の切り合関係や、S D 824、S B 843、或はS A 840、S B 842の上下関係を再度見てみれば、特にD・E・Fの断面においてS A 846がS D 824を切っている関係が

読み取れる。更に S A 840 と S B 843 は方位を同じくする遺構であるが、その掘り込みの深さは両者で異なることから、時期を別にして造成されたものと判断される。

第II・III期の遺構

調査区の東側半分は上層の遺存度が良くなく、その内容については不明としなければならない。しかしながら、II・III期の遺構を併せてながめると、遺構の造成にかかる方位から、大きく2つに分けることが可能である。即ち、II期の造成と見られる、土塁の方位に沿った建物群と、III期の山際に集中する建物群との2分類である。中央部の庭跡を中心とする建物群は S E 849 の東側で検出された S B 839 などとはほぼ同じ方位になり、同時期に造成されたものと見ことも可能である。いずれも III₁、III₂ 期とした遺構群であり、他のIII期の建物群とは方位がズレており、特に雑舎群とされる山際の建物群とははっきり分かれる。この分類は、南側土塁 S A 263 の石垣の積み方が、東側半分と西側（山際）半分とが異なっており、西側半分は比較的小振りの河原石を細かく積み上げていることと関連しているのではないかと（P L. 40）。II期からIII期のある時期に、山際に敷地を拡張し、山際を中心とした建物群が造成されたことが考えられるのである。



挿図17 第I期遺構主要部断面図

b. 遺物

遺物組成について

第24次調査地区の武家屋敷から出土した陶磁器の破片数は表10の通りである。土師質皿が最も多く53.62%を占める。土師質皿の用途は、灯明皿と酒杯と考えており、その比率については第35次調査の結果から3:1と推定している。次に多いのは越前焼で36.76%を占める。越前焼は甕・壺の貯蔵用具と鉢・播鉢の調理用具とに別れるが、中でも甕が24.64%と多く、壺が8.56%ある。調理用具は鉢・播鉢合わせて2.71%と少ない。破片数で集計しているため、器形の大きい甕が多くなっているが、個体数ではこれほどの差はなく、むしろ播鉢の個体数の方が多くなるかも知れない。次に多いのは青磁・白磁・染付などの中国製陶磁器で、7.60%を占める。青磁は碗が多く、白磁は大半が皿で、染付は皿の方が多。中国製陶磁器で注目されるのは、青磁不遊環花生と青磁托である。2点とも明時代の製品であるが、なかなか立派なもので、この屋敷の規模、ひいてはこの屋敷の住人の地位を現しているといえよう。朝鮮製陶磁器は碗が5点と象嵌壺が1個体出土している。朝鮮製陶磁器は量は非常に少ないが、一乗谷内の各地から確実に出土する。日本製陶器では、瀬戸・美濃製の鉄釉碗（天目茶碗）が45点、灰釉碗12点、皿18点、鉢29点出土しているだけで、あとは1桁の出土点数である。日本製施釉陶器である瀬戸・美濃製品は全体で1.71%を占めるに過ぎない。

南北道路SS976より西の武家屋敷を1992年度分も含めて5区画発掘調査してきた。これらは立地や規模からほぼよく似た地位の武將の武家屋敷だったと推定される。そこでこれらの武家屋敷から出土した陶磁器の組成を比較してみよう。さらに他の地区の武家屋敷や町屋・寺院、朝倉館なども比較してみたい（表11）。最も多いのは土師質皿で、次に越前焼、中国製陶磁器、瀬戸美濃焼の順序は、これら4区画の武家屋敷も朝倉館、町屋でも変わらない。しかし、土師質皿の割合を見ると「ショーゲドン」が83.59%と最も高く、次に「新馬場」・「第77次武家屋敷」が約76%あり、「第24次武家屋敷」が53%とかなり低く50%を越えている。しかし「第78次武家屋敷」にいたっては49%しかない。これらの武家屋敷群は全体に遺構の残存状態が良くない点では共通しており、この差が遺構、遺物の残存状況によるものではない。「第24次武家屋敷」と「第78次武家屋敷」は屋敷内に数個の甕が据わっていた跡があり、他の屋敷の甕の割合が13%未満なのに対してこれらの屋敷では24%ある。このことから土師質の割合が低いのは甕の割合が高いことによる。たとえ甕の割合が低かったとしても、この2区画の武家屋敷の土師質の割合は、60%を少し越える程度であろう。ただ、これら同規模の屋敷について土師質の割合が違うことに付いては明確な考えを持ち合わせていない。

朝倉館では土師質皿が90%近く占め、表にはないが義景の母光徳院の屋敷と伝えられる「中の御殿」、朝倉氏代々の子女がはいったと伝えられる「南陽寺」も同じ傾向を示し、「40次寺院」では72%を占める。これに対して赤淵・奥間野地区の町屋群では50%近くまで下がる。武家屋敷や一般の寺院の場合は、朝倉氏に関連した館・寺院群と町屋との中間に位置する。なお、一乗谷から出土する土師質皿は数種類あるが、中心となるC類・D類は、京都で出土する土師質皿とよく似ており、一乗谷の土師質皿が京都の影響を受けていることは間違いない。

こうした土師質皿の割合は、公家を中心とする京都の土師皿（カワラケ）文化との遠近を示していると考えられている。それは京都を中心に同心円状に広がりを見せ、京都から離れるほどその文化は薄くなり、東北地方や九州地方にカワラケがほとんど見られなくなる。また、それは地理的な距離だけでな

	朝倉館	%	中の御殿	%	南陽寺	%	40 大 寺院地区	%	24 大 武家屋敷	%	新馬場	%	鱒淵將監	%	77 大 武家屋敷	%	78 大 武家屋敷	%
越前焼壺	1,744	2.67	712	2.33	1,047	2.93	2,649	7.41	1,820	24.37	1,155	9.74	900	5.76	316	13.60	1,798	24.19
掃鉢	692	1.06	260	0.85	141	0.40	1,662	4.65	633	8.48	225	1.90	537	3.43	10	0.43	250	3.36
鉢	586	0.90	322	1.05	210	0.59	1,523	4.26	67	0.90	292	2.46	200	1.28	51	2.20	187	2.52
鉢	216	0.33	105	0.34	56	0.16	303	0.85	198	2.65	65	0.55	45	0.29	4	0.17	559	7.52
他	11	0.02	6	0.02	3	0.01	28	0.08	2	0.03	10	0.08	3	0.02	0	0.00	22	0.30
越前焼計	3,249	4.97	1,405	4.60	1,457	4.08	6,165	17.24	2,720	36.42	1,747	14.73	1,685	10.78	381	16.40	2,816	37.89
土師質皿	60,000	91.82	27,770	90.94	33,349	93.48	25,897	72.42	3,967	53.11	8,963	75.55	13,070	83.59	1,765	75.98	3,675	49.44
他	0	0.00	15	0.05	71	0.20	180	0.50	22	0.29	33	0.28	55	0.35	26	1.12	20	0.27
土師質計	60,000	91.82	27,785	90.99	33,420	93.68	26,077	72.92	3,989	53.41	8,996	75.83	13,125	83.95	1,791	77.10	3,695	49.71
瓦質日常	13	0.02	1	0.00	53	0.15	36	0.10	10	0.13	10	0.08	27	0.17	10	0.43	13	0.17
瓦質文化	3	0.00	4	0.01	14	0.04	40	0.11	17	0.23	5	0.04	60	0.38	2	0.09	83	1.12
瓦質計	16	0.02	5	0.02	67	0.19	76	0.21	27	0.36	15	0.13	87	0.56	12	0.52	96	1.29
鉄釉碗	267	0.41	124	0.41	53	0.15	462	1.29	45	0.60	102	0.86	43	0.28	5	0.22	58	0.78
皿	0	0.00	5	0.02	0	0.00	20	0.06	0	0.00	1	0.01	1	0.01	0	0.00	1	0.01
他	42	0.06	46	0.15	31	0.09	224	0.63	19	0.25	23	0.19	18	0.12	4	0.17	36	0.48
鉄釉計	309	0.47	175	0.57	84	0.24	706	1.97	64	0.86	126	1.06	62	0.40	9	0.39	95	1.28
灰釉碗	16	0.02	9	0.03	24	0.07	46	0.13	12	0.16	48	0.40	27	0.17	8	0.34	27	0.36
皿	83	0.13	17	0.06	10	0.03	372	1.04	18	0.24	35	0.30	23	0.15	10	0.43	9	0.12
鉢・卸皿	26	0.04	11	0.04	38	0.11	2	0.01	31	0.42	38	0.32	18	0.12	6	0.26	12	0.16
香炉・他	18	0.03	6	0.02	0	0.00	25	0.07	2	0.03	2	0.02	11	0.07	0	0.00	1	0.01
灰釉計	143	0.22	43	0.14	72	0.20	445	1.24	63	0.84	123	1.04	79	0.51	24	1.03	49	0.66
瀬戸・美濃焼計	452	0.69	218	0.71	156	0.44	1,151	3.22	127	1.70	249	2.10	141	0.90	33	1.42	144	1.94
国産陶器	0	0.00	42	0.14	0	0.00	29	0.08	11	0.15	90	0.76	4	0.03	0	0.00	25	0.34
日本製品計	63,717	97.51	29,497	96.59	35,100	98.39	33,527	93.76	6,885	92.18	11,187	94.30	15,046	96.23	2,217	95.44	6,801	91.50
青磁碗	115	0.18	51	0.17	75	0.21	112	0.31	110	1.47	80	0.67	107	0.68	32	1.38	113	1.52
皿	134	0.21	85	0.28	45	0.13	167	0.47	54	0.72	66	0.56	24	0.15	7	0.30	59	0.79
鉢	73	0.11	14	0.05	22	0.06	20	0.06	2	0.03	20	0.17	22	0.14	3	0.13	8	0.11
他	145	0.22	19	0.06	28	0.08	75	0.21	40	0.54	59	0.50	5	0.03	3	0.13	13	0.17
青磁計	467	0.71	169	0.55	170	0.48	374	1.05	206	2.76	225	1.90	158	1.01	45	1.94	193	2.60
白磁碗	0	0.00	12	0.04	4	0.01	16	0.04	10	0.13	7	0.06	11	0.07	0	0.00	11	0.15
皿	478	0.73	550	1.80	180	0.50	784	2.19	178	2.38	257	2.17	224	1.43	24	1.03	258	3.47
他	111	0.17	36	0.12	30	0.08	49	0.14	12	0.16	0	0.00	24	0.15	3	0.13	14	0.19
白磁計	589	0.90	598	1.96	214	0.60	849	2.37	200	2.68	264	2.23	259	1.66	27	1.16	283	3.81
青花碗	254	0.39	116	0.38	88	0.25	226	0.63	43	0.58	67	0.56	76	0.49	4	0.17	59	0.79
皿	161	0.25	116	0.38	89	0.25	606	1.69	90	1.20	95	0.80	82	0.52	24	1.03	82	1.10
他	65	0.10	13	0.04	5	0.01	40	0.11	8	0.11	0	0.00	13	0.08	3	0.13	3	0.04
青花計	480	0.73	245	0.80	182	0.51	872	2.44	141	1.89	162	1.37	171	1.09	31	1.33	144	1.94
中国製品他	26	0.04	4	0.01	2	0.01	50	0.14	15	0.20	13	0.11	0	0.00	2	0.09	1	0.01
中国製品計	1,562	2.39	1,016	3.33	568	1.59	2,145	6.00	562	7.52	664	5.60	588	3.76	105	4.52	621	8.35
朝鮮製碗	28	0.04	2	0.01	2	0.01	10	0.03	5	0.07	3	0.03	1	0.01	0	0.00	1	0.01
皿	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	1	0.04	0	0.00
その他	37	0.06	22	0.07	5	0.01	72	0.20	17	0.23	9	0.08	0	0.00	0	0.00	10	0.13
朝鮮製計	65	0.10	24	0.08	7	0.02	82	0.23	22	0.29	12	0.10	1	0.01	1	0.04	11	0.15
船載陶磁器	0	0.00	0	0.00	0	0.00	6	0.02	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00
輸入陶磁器	1,627	2.49	1,040	3.41	575	1.61	2,233	6.24	584	7.82	676	5.70	589	3.77	106	4.56	632	8.50
合計	65,344	100.00	30,537	100.00	35,675	100.00	35,760	100.00	7,469	100.00	11,863	100.00	15,635	100.00	2,323	100.00	7,433	100.00

	復元 武家屋敷	%	49 大 武家屋敷	%	50 大 武家屋敷	%	46 大 A地区	%	医師の家	%	36 大 I地区	%	36 大 N地区	%	36 大 O地区	%	36 大 P地区	%
越前焼壺	2,147	25.05	896	12.43	1,235	36.37	2,148	27.96	1,699	12.59	4,337	25.30	3,317	16.19	3,902	19.11	1,318	43.92
掃鉢	152	1.77	301	4.18	184	5.42	893	11.62	831	6.16	1,168	6.81	1,592	7.77	716	3.51	79	2.63
鉢	330	3.85	293	4.07	325	9.57	431	5.61	359	2.66	988	5.77	1,069	5.22	793	3.88	108	3.60
鉢	69	0.80	82	1.14	0	0.00	108	1.41	169	1.25	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00
他	5	0.06	2	0.03	3	0.09	31	0.40	34	0.25	30	0.16	30	0.15	9	0.04	0	0.00
越前焼計	2,703	31.53	1,574	21.84	1,747	51.44	3,611	47.01	3,092	22.91	6,521	38.04	6,008	29.32	5,420	26.54	1,505	50.15
土師質皿	5,247	61.21	4,789	66.46	1,124	33.10	1,568	20.41	7,821	57.94	7,758	45.25	11,264	54.97	13,249	64.88	1,312	43.72
他	57	0.66	49	0.68	17	0.50	19	0.25	95	0.70	64	0.37	135	0.66	108	0.53	1	0.03
土師質計	5,304	61.88	4,838	67.14	1,141	33.60	1,587	20.66	7,916	58.65	7,822	45.63	11,399	55.62	13,357	65.40	1,313	43.75
瓦質日常	8	0.09	0	0.00	13	0.38	57	0.74	7	0.05	40	0.23	100	0.49	31	0.15	4	0.13
瓦質文化	12	0.14	17	0.24	0	0.00	1	0.01	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00
瓦質計	20	0.23	17	0.24	13	0.38	58	0.76	7	0.05	40	0.23	100	0.49	31	0.15	4	0.13
鉄釉碗	40	0.47	99	1.37	45	1.33	90	1.17	130	0.96	160	0.93	305	1.49	150	0.73	15	0.50
皿	2	0.02	11	0.15	5	0.15	17	0.22	9	0.07	10	0.06	17	0.08	7	0.03	0	0.00
他	27	0.31	27	0.37	18	0.53	152	1.98	60	0.44	147	0.86	154	0.75	68	0.33	13	0.43
鉄釉計	69	0.80	137	1.90	68	2.00	259	3.37	199	1.47	317	1.85	476	2.32	225	1.10	28	0.93
灰釉碗	15	0.17	24	0.33	5	0.15	11	0.14	19	0.14	33	0.19	17	0.08	69	0.34	3	0.10
皿	31	0.36	61	0.85	13	0.38	38	0.49	78	0.58	327	1.91	320	1.56	206	1.01	14	0.47
鉢・卸皿	3	0.03	2	0.03	22	0.65	18	0.23	5	0.04	19	0.11	25	0.12				

く、同じ一乗谷においても、朝倉館を筆頭に身分的に低くなるほど土師質皿の割合が低くなることは、その生活様式が京都のカワラケ文化との距離を現しているといえよう。

古手の土師質皿について

この第24次調査地区では、これまで報告してきた土師質皿とは形式的に異なる土師質皿が数種類見つかった。これらの内いくつかのタイプについては断片的には知られていたが、それらは小破片であったので十分検討することが出来なかった。しかし、今回はそれらが完形もしくはそれに近い形で出土したので報告することができた。

それらは、本文のところで報告しているが、改めてまとめると挿図18のようになる。分類の名称については、これまでの名称を考慮して取り敢えず仮称ということにしておきたい。これまでの名称がG類まで付けられているのでH類からとする。

H類 1・2は器壁がやや厚めで、平らな底部から腰部で屈曲して口縁部が立ち上がる。内側は見込みを残して、外面は体部から上を親指と曲げた人差し指で挟んでナデ回している。

I類 3～6は器壁が薄く平らな底部から腰部で屈曲して斜め上方に直線的に開く。内側は見込みをのぞいた部分に、外側は口縁部のみにナデ痕がみられる。胎土はやや荒く胎土のなかに雲母や長石の粒子が混じる。

A類 7・8は底部を突き上げたいわゆる「ヘソ皿」ということで一括した。7は口径が5.6cm前後と小さいが、基本的な成形技法はこれまでのC類と同じであろう。8はB類の底部を突き上げたものと推定される。

J類 9・10は底部の中央が厚くなるのが特徴で、内側は厚い見込みをのぞいて、外側は体部中程から上にナデが施されている。9の方が深く胎土も細かい。

K類 11・12は基本的な成形技法はこれまでのD類に似るが、底部が少し上げ底状で、内面の横ナデが2段になっている。その分D類より深い。13・14はやや深く、器壁も厚いことと口縁部が丸く収まっている点がJ類と異なり胎土もやや赤い。

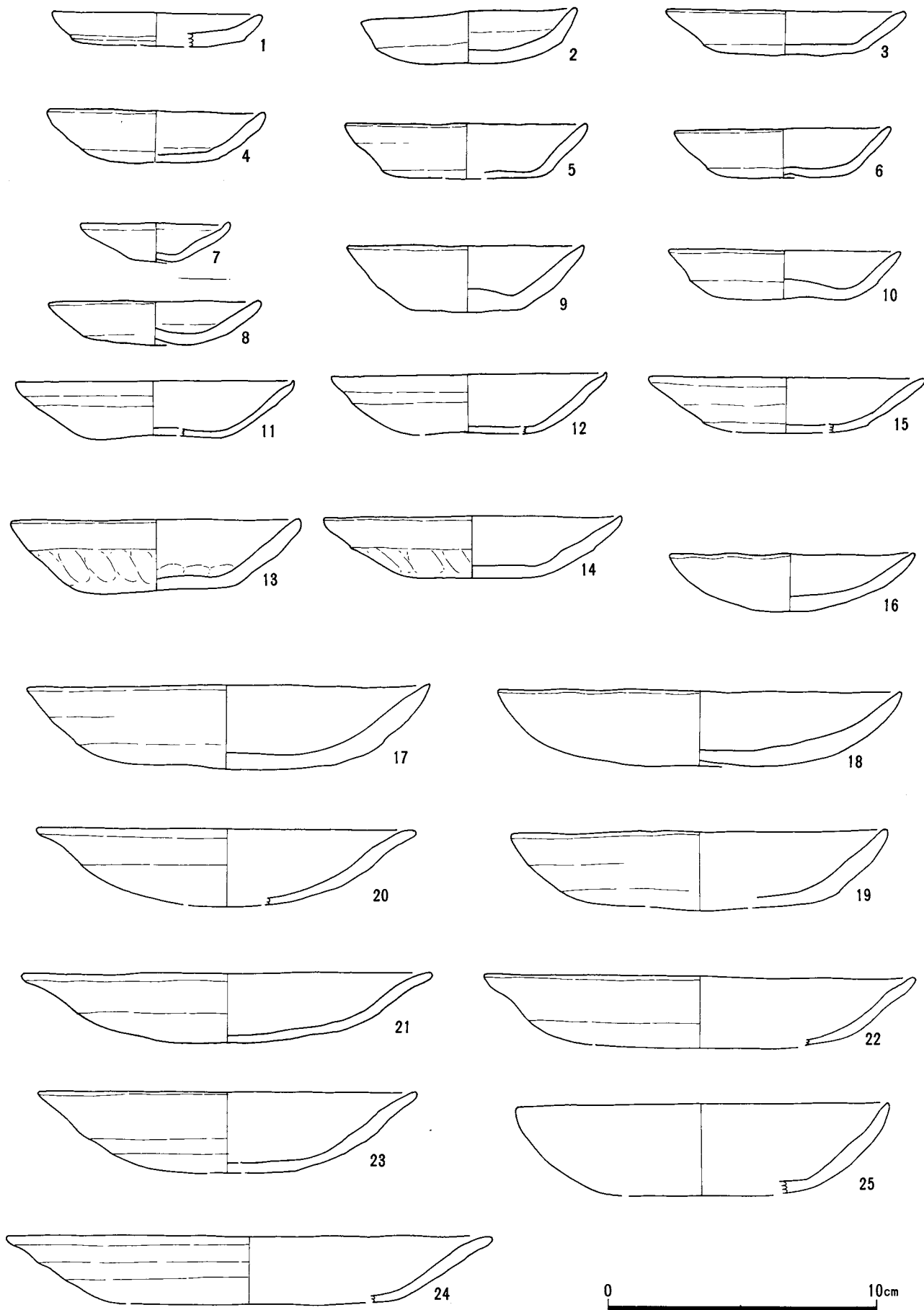
L類 16はまるい底部から内湾気味に立ち上がり口縁端部は紡垂形になる。胎土は細かいが灰色を呈する。17～19は16の大型で口縁部の直径は15cmほどである。

M類 20～24は比較的丸い底部から外反するように立ち上がり、見込みをのぞく内側と外側口縁部はナデが施され、23・24の場合は外側のナデが2段になる。胎土はやや荒く長石や雲母の粒子が混じり、3～6と同じ胎土である。23・24は胎土も細かい。25は皿というより杯であろう。

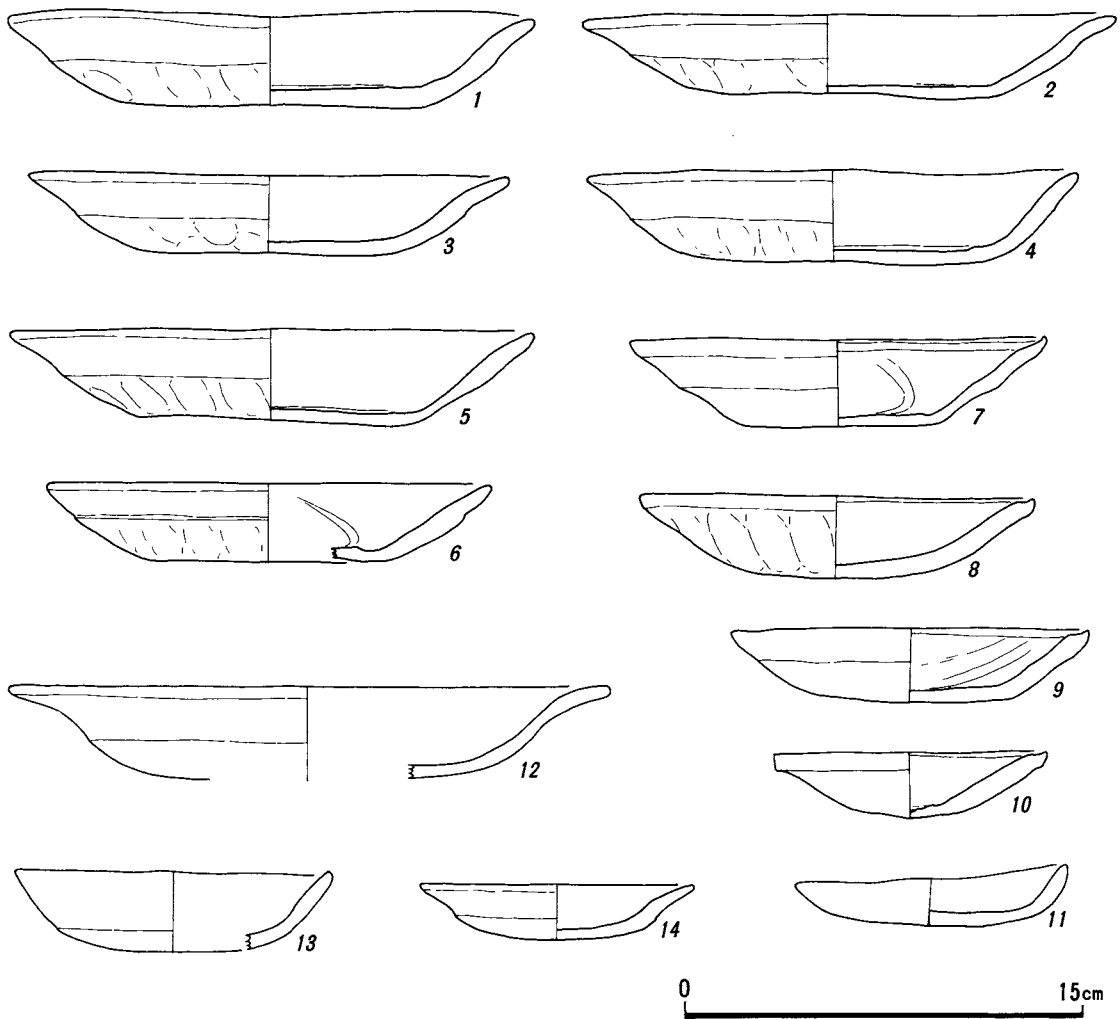
また、挿図19の1～6は平成4年度に実施した第77次調査の下層から出土した土師質皿で、図にするとこれまでのD類・C類と基本的な成形技法は変わらないが、口縁部の端部がナデによって内湾していない点が異なっている。7は内面のナデが2段になっている。12～14は挿図18と対応する。なお8～10は口縁端部が内湾しており、D類・C類と同じである。

これらはかならずしもこれまでに分類してきたA～G類より古く位置付けられるものばかりではないが、L・M類は興行寺跡遺跡の炭化面からも出土しており、これらは確実に15世紀前半に位置付けられるものである。そのほかのものも、一乗谷の長い調査でも出土してこなかったことから、これまでの土師質皿より一時期古いものとみて良いのではないか。

越前の土師質皿の研究状況は、これまで中世の遺跡の調査例が一乗谷に片寄っていたこともあって、



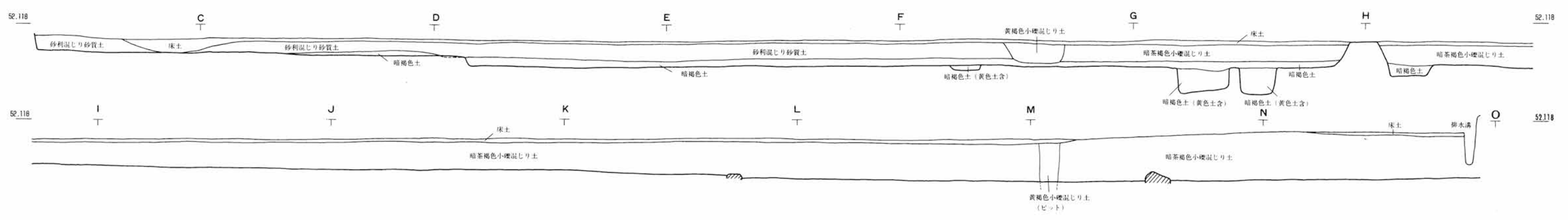
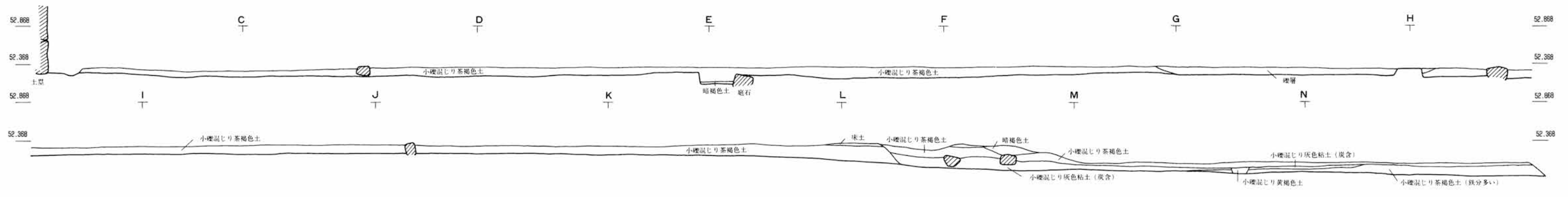
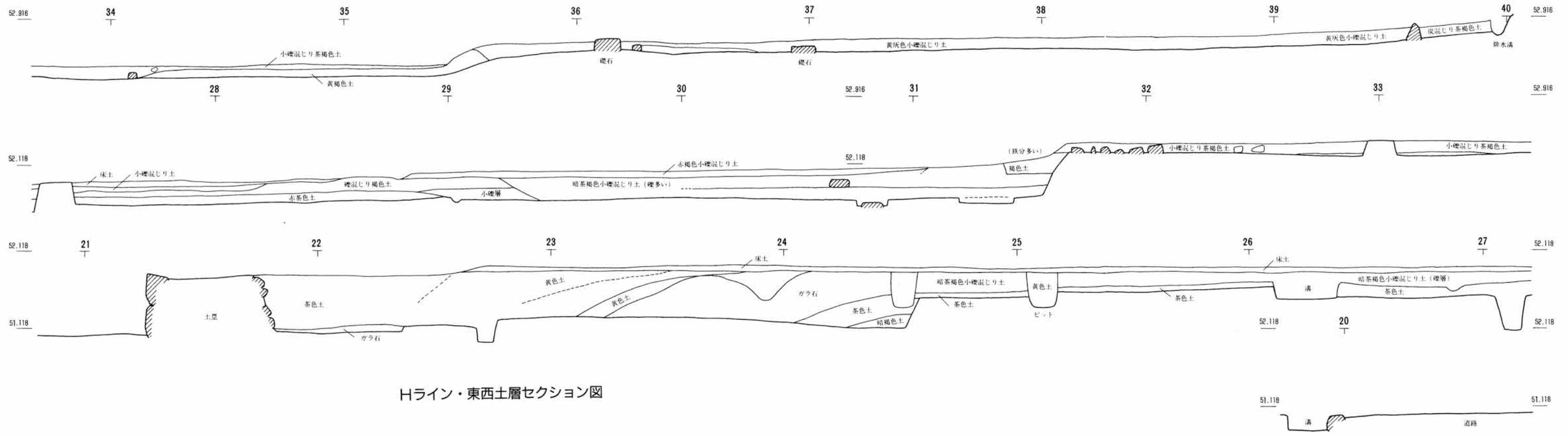
挿図18 第24次調査出土の土師質皿



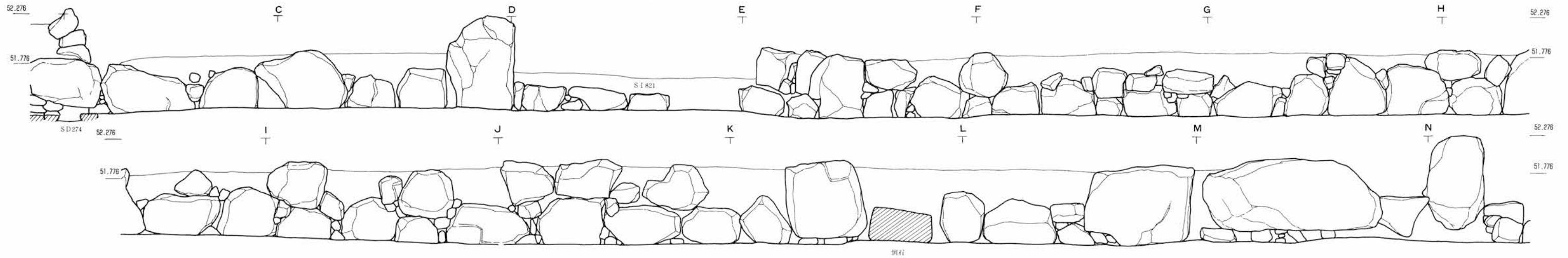
挿図19 第77次調査出土の土師質皿

中世前期から15世紀までについては小野正敏が「豊原寺跡II華蔵院跡第2次発掘調査概報」の中で、その大まかな見通しを示している。ところが、福井県埋蔵文化財調査センターが、1989年から92年にかけて福井県吉田郡永平寺町諏訪間54字奥ノ谷にある興行寺遺跡を調査したところ、15世紀前半代の資料が発掘された。この資料は火事で焼けた灰・炭層の中から出土したもので、ほとんど時代の異なる遺物を含んでいない非常に良好な一括資料である。また、大野市の新庄遺跡でも鍛冶関係の遺構から13世紀後半代の資料を得ることが出来た。これらの資料によって、南洋一郎は北陸中世土器研究会の発表資料の中で小野の見通しに定点を与えた。一乗谷の土師質土器の編年も、こうした越前全体の中でとらえていきたい。

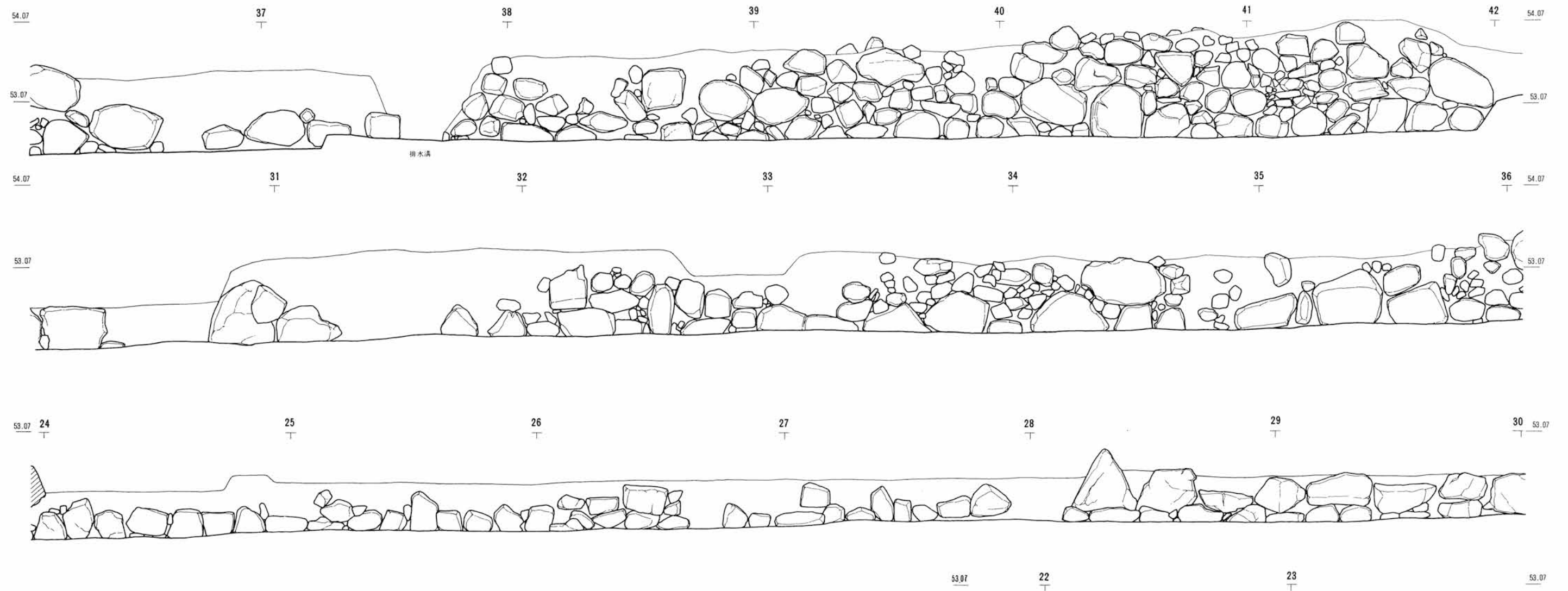
第33図 土層図



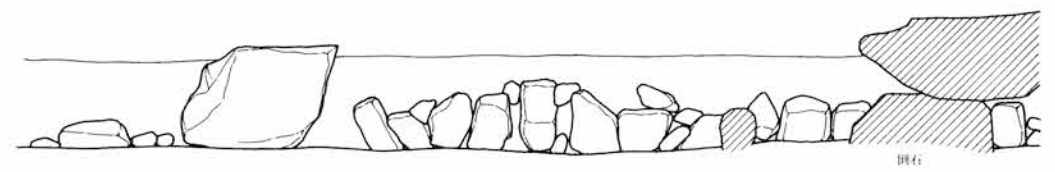
第34図 石垣立面図



東土塁エレベーション (東面)



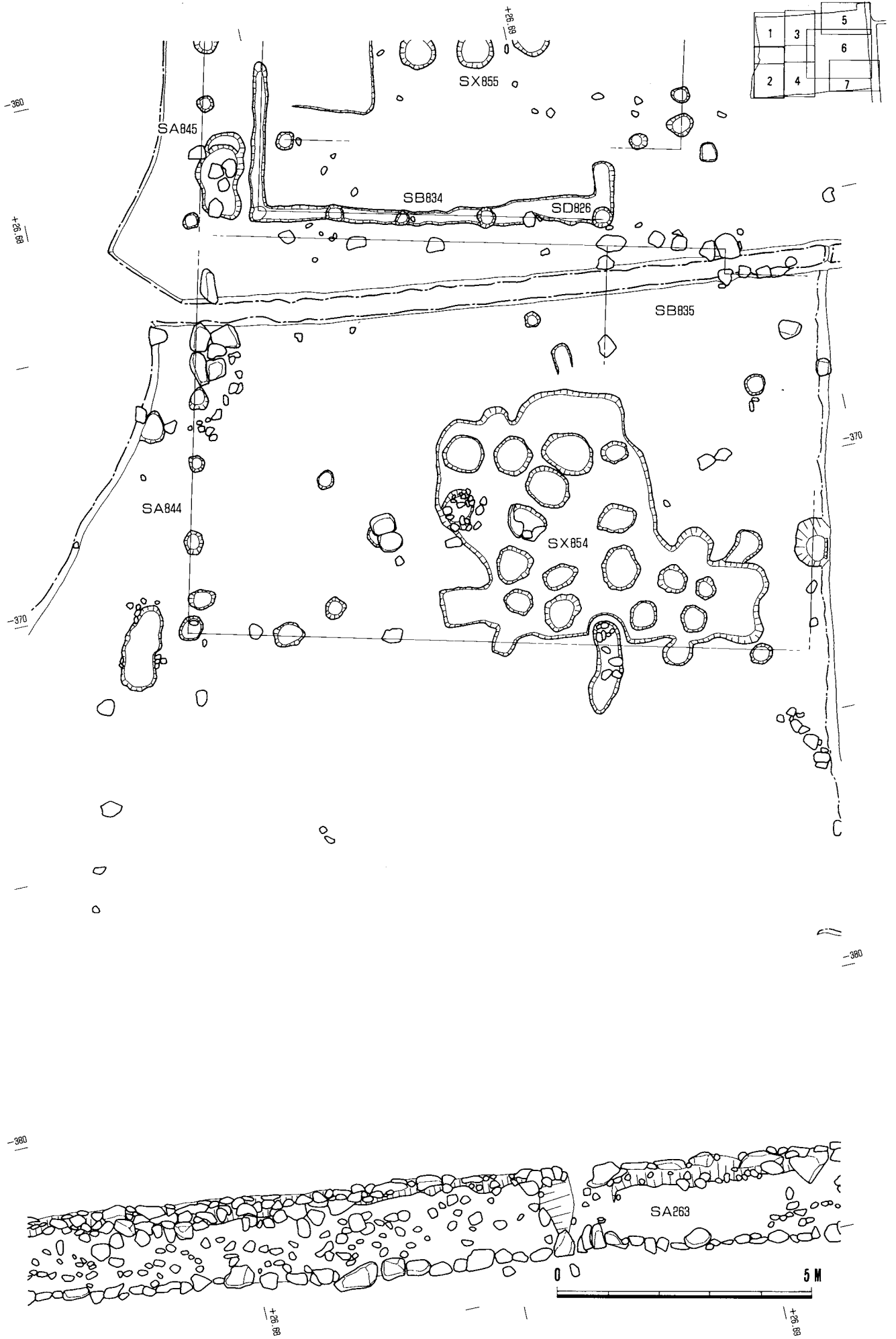
南土塁エレベーション (北面)



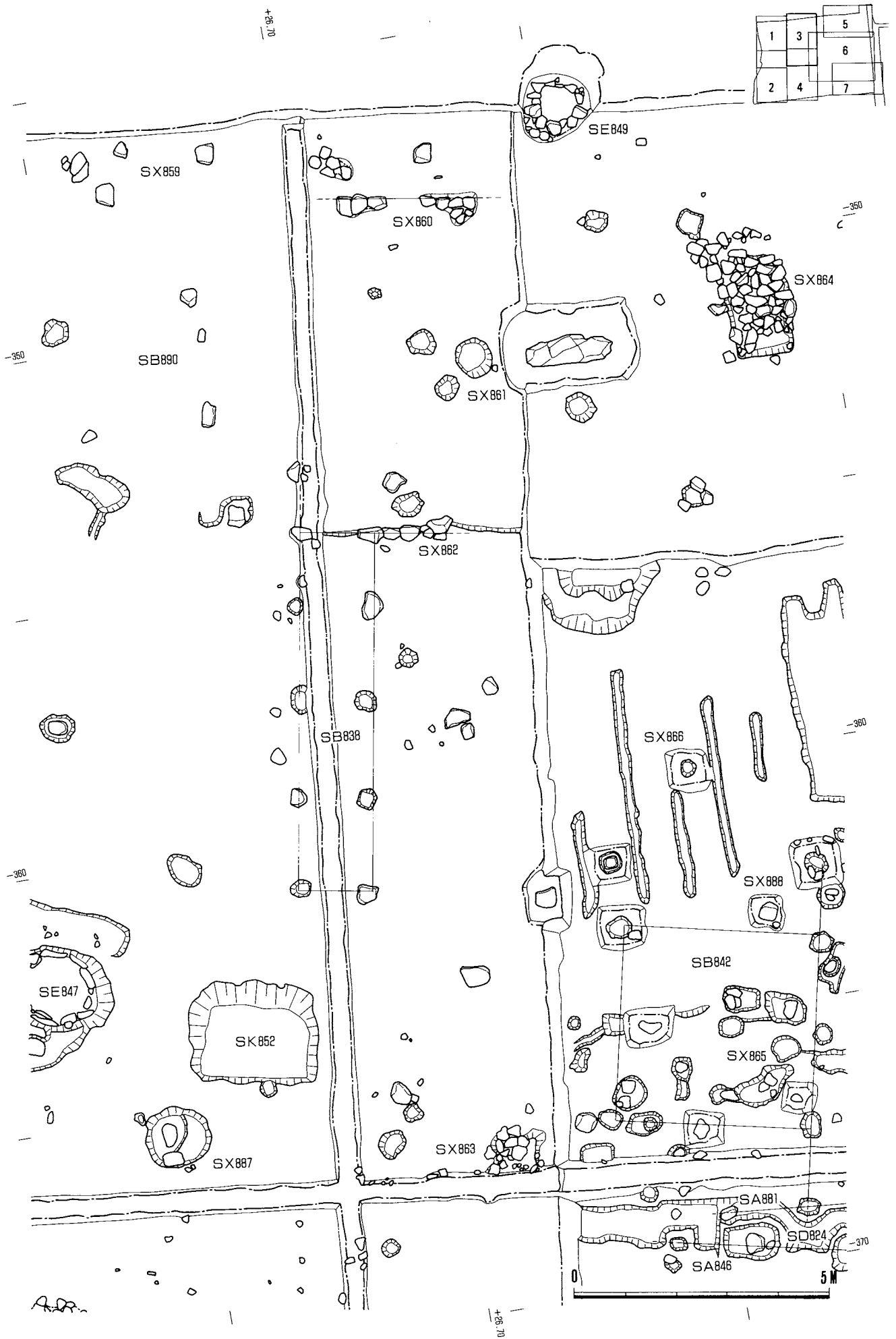
第35図 遺構詳細図(1)



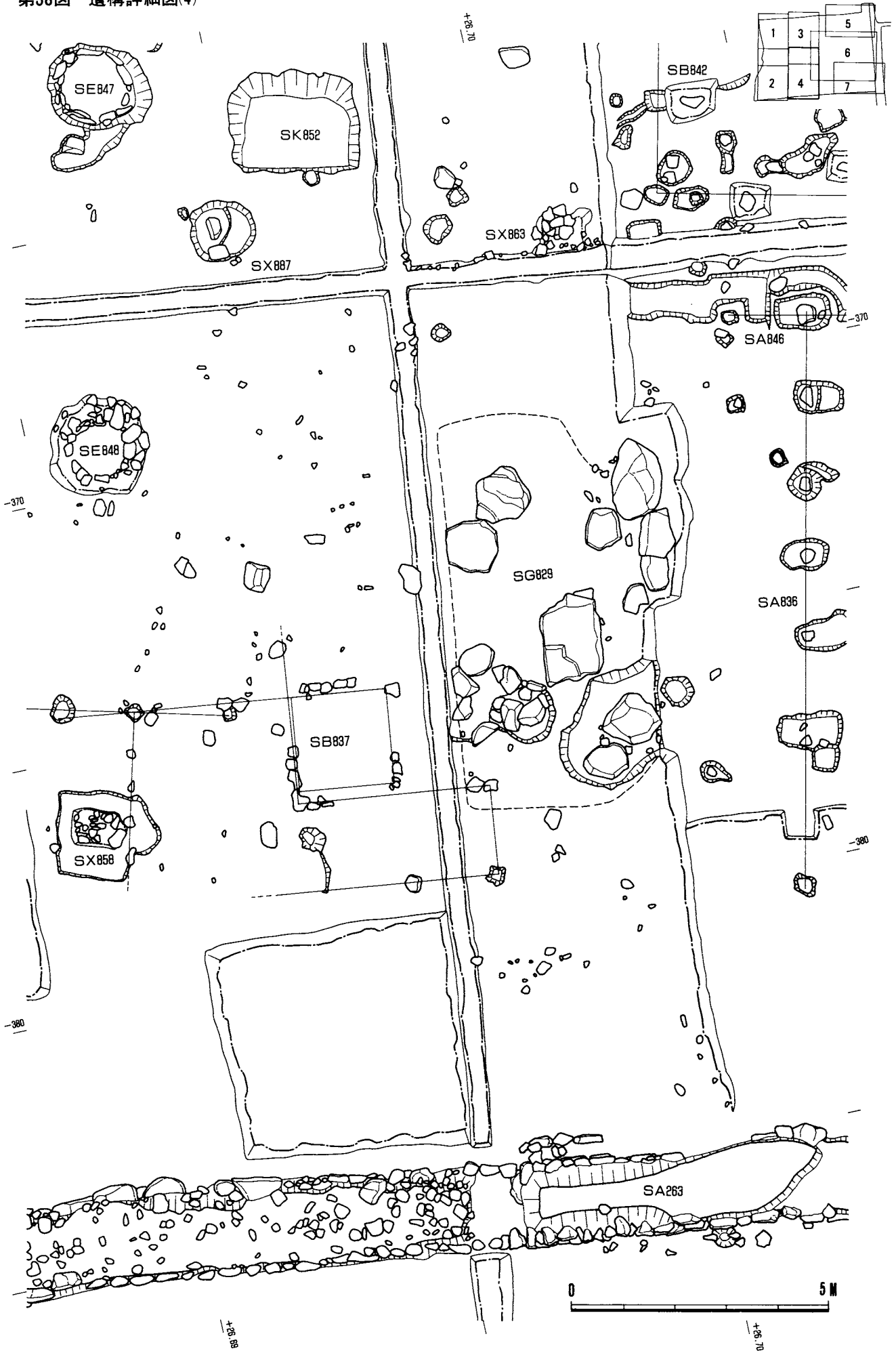
第36図 遺構詳細図(2)



第37図 遺構詳細図(3)



第38図 遺構詳細図(4)



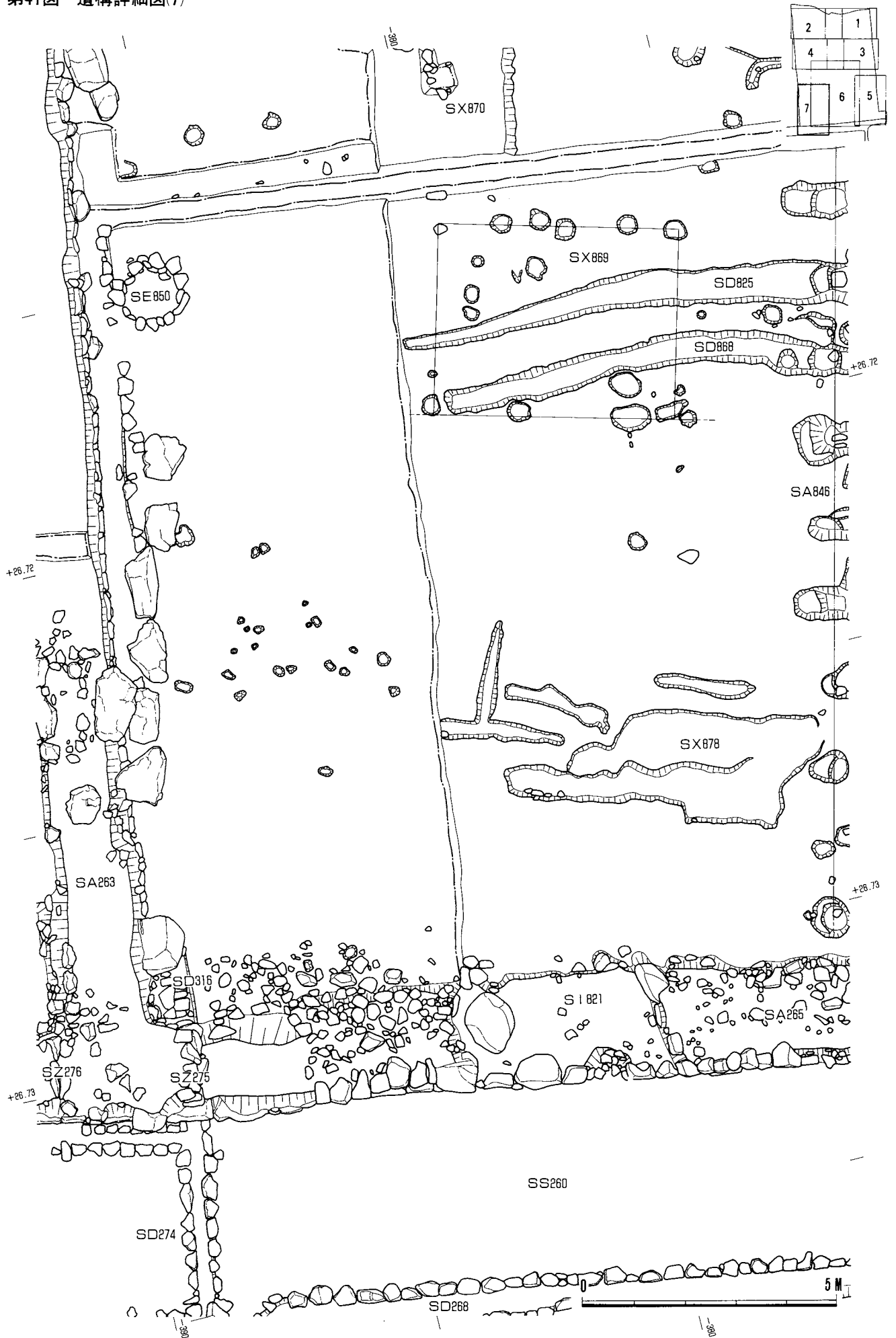
第39図 遺構詳細図(5)



第40図 遺構詳細図(6)



第41図 遺構詳細図(7)

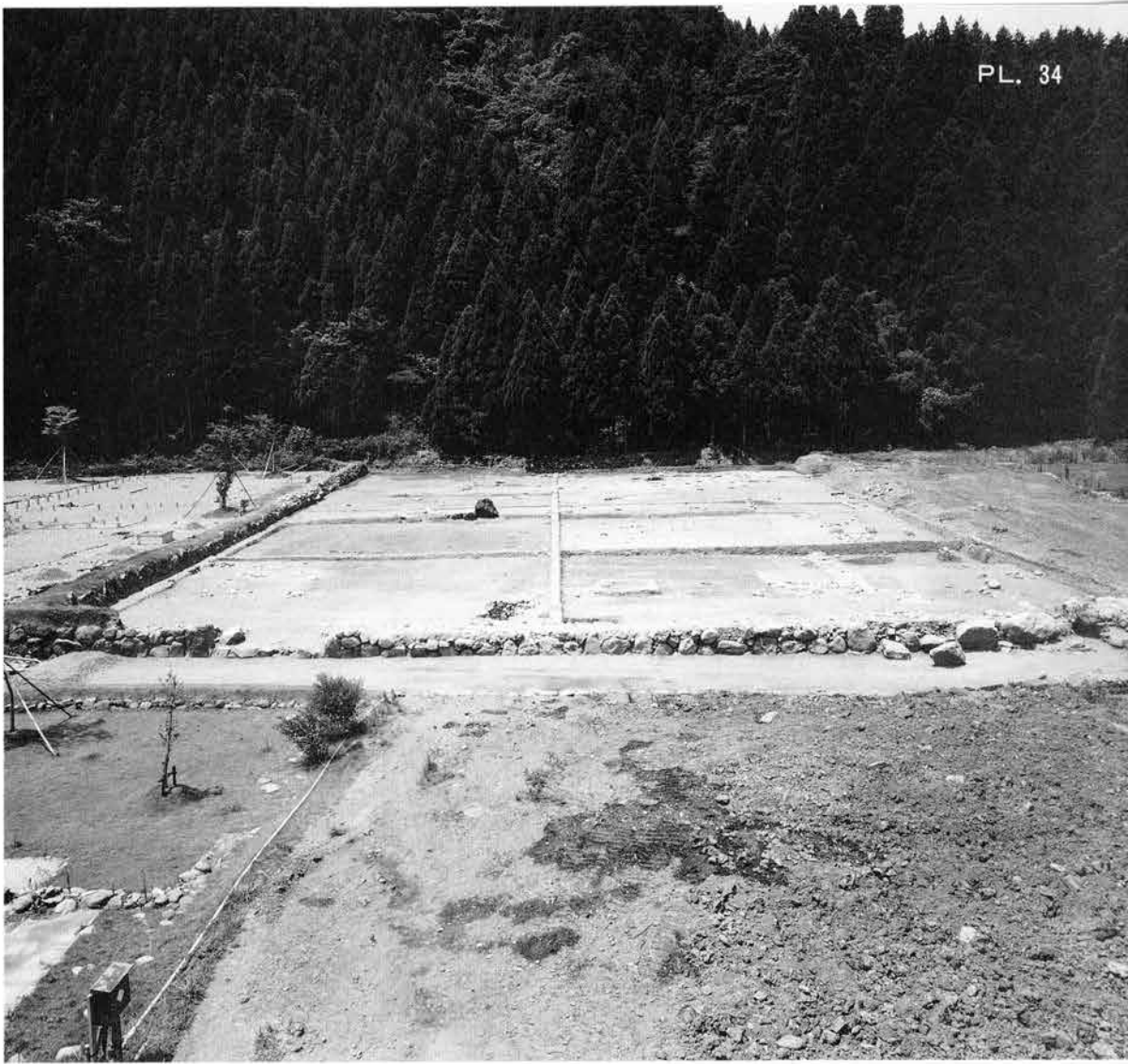


調査区全景

全 景
(北東から)



全 景
(東から)



◀土塁 SA 265
道路 SS 260
(北から)
▶ (南から)



礎石建物 SB 830・
SB 831

礎石建物 SB830
SB831
(北から)



(東から)



礎石建物 SB 835 他

礎石建物 SB 835
S X 854 他
(北から)



礎石建物 SB 830
SB 831 他
(南から)



大甕埋設遺構
SX 854 (南から)



庭 SG 829他

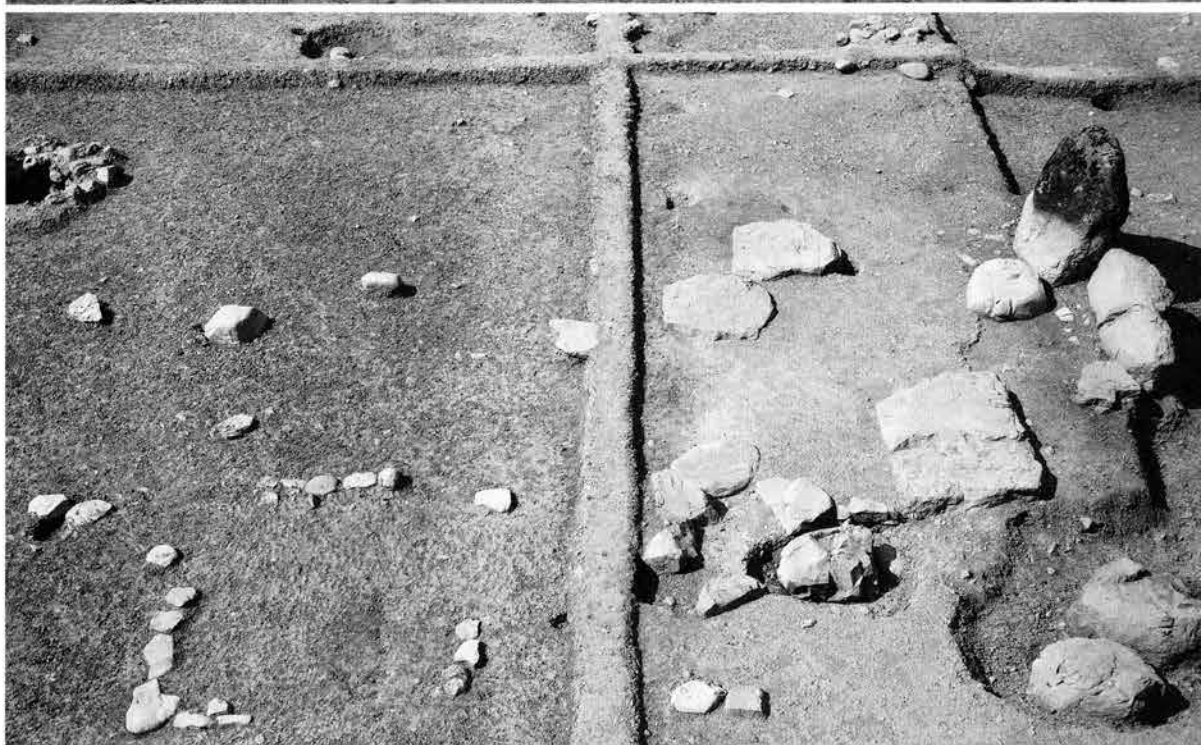
礎石建物 SB838
(南から)



礎石建物 SB837
庭 S G829
(西から)



(南から)



土壇・石敷・盲
暗渠

SX 867・SX 853
(南から)



SX 864・SX 874
(南から)



SX 871・SX 867
SX 866

(北から)



柵列 SA 846他

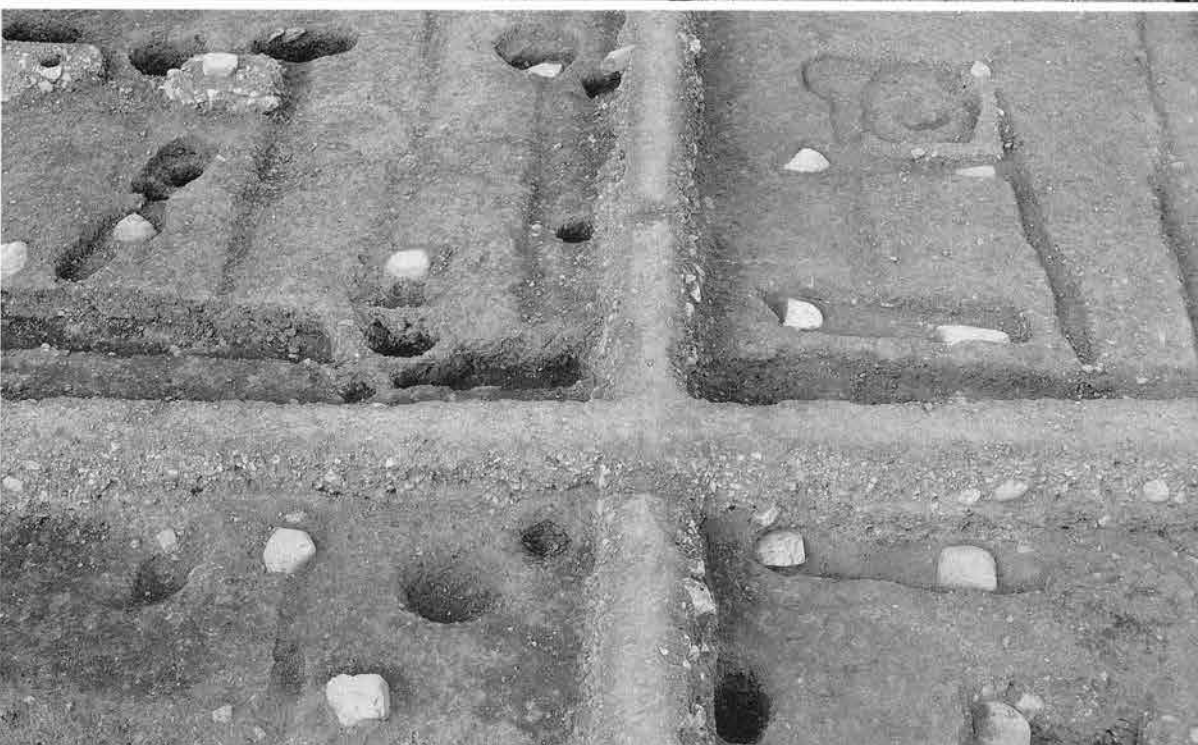
SF 851・SK 853他
(東から)



柵列 SA 846
溝 SD 824他
(西から)



礎石建物 SB 843他
(南から)



門S1821
(東から)



(西から)



土塁SA263
(西半・北面)



溝・柵列・石敷

◀石敷 SA857
(南から)



▶溝 SD 827
(南から)



◀礎石建物 SB841
柵列 SA840
(西から)

▶柵列 SA846
(東から)

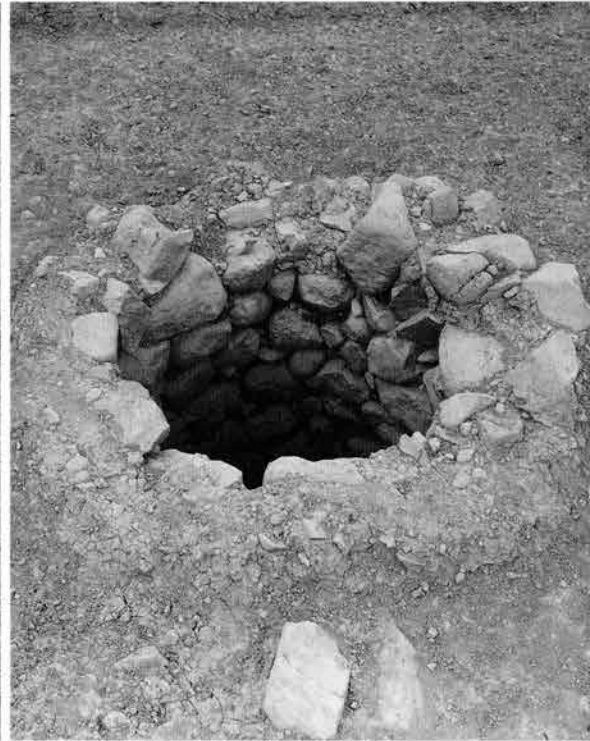


SF 851
(南から)



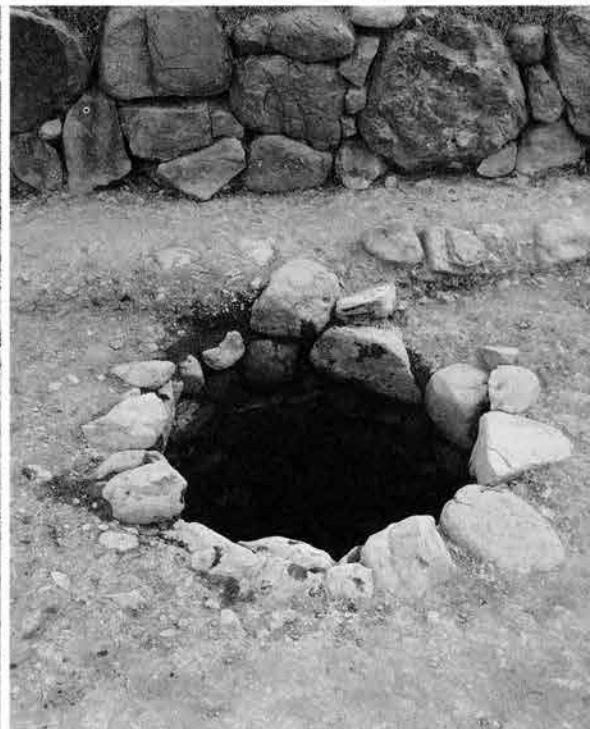
◀ SF 851
(西から)

▶ SE 848
(南から)



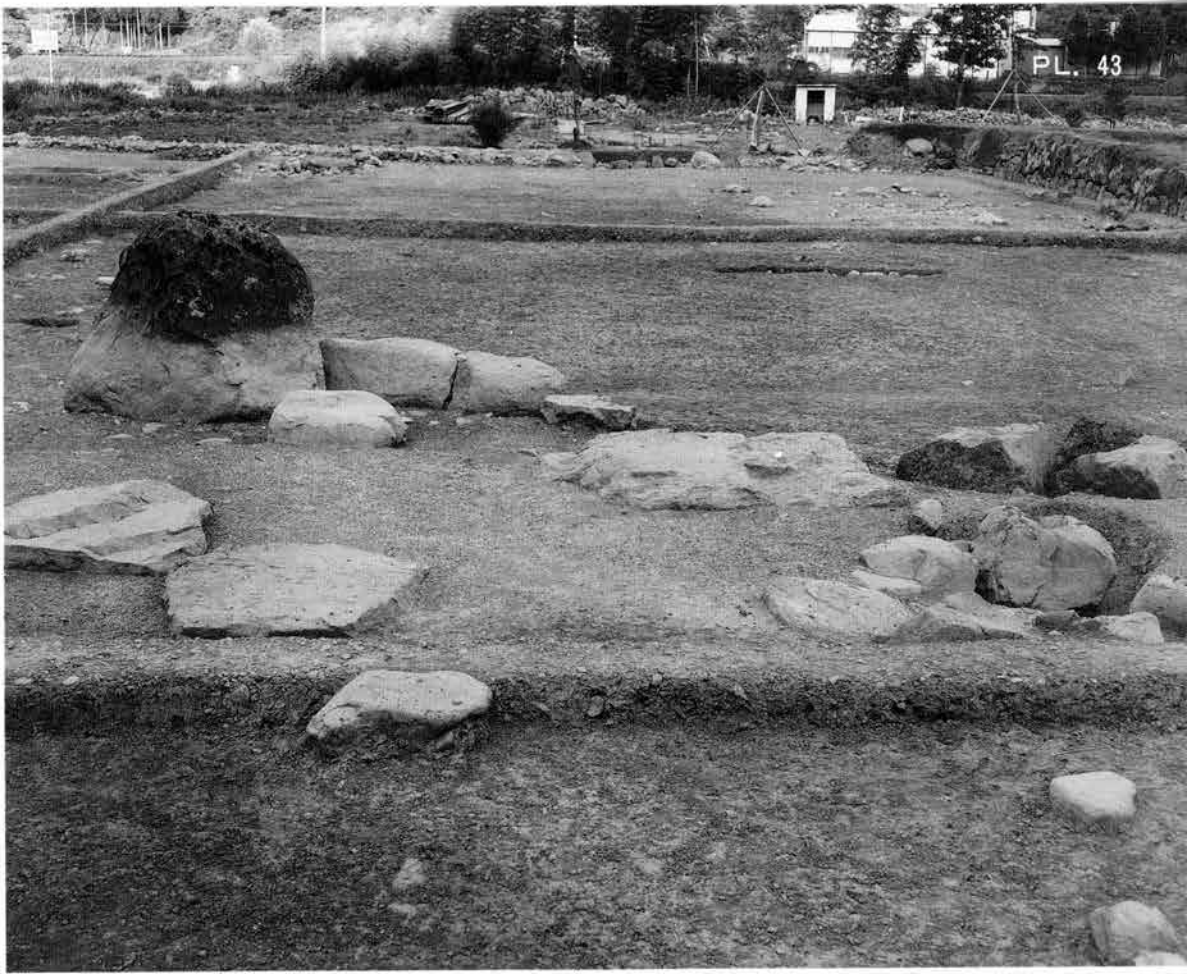
◀ SE 849
(南から)

▶ SE 850
(北から)



庭・甕埋設遺構他

庭跡 SG829
(西から)



▼ SG829
(北から)

▼ SX854
(南から)

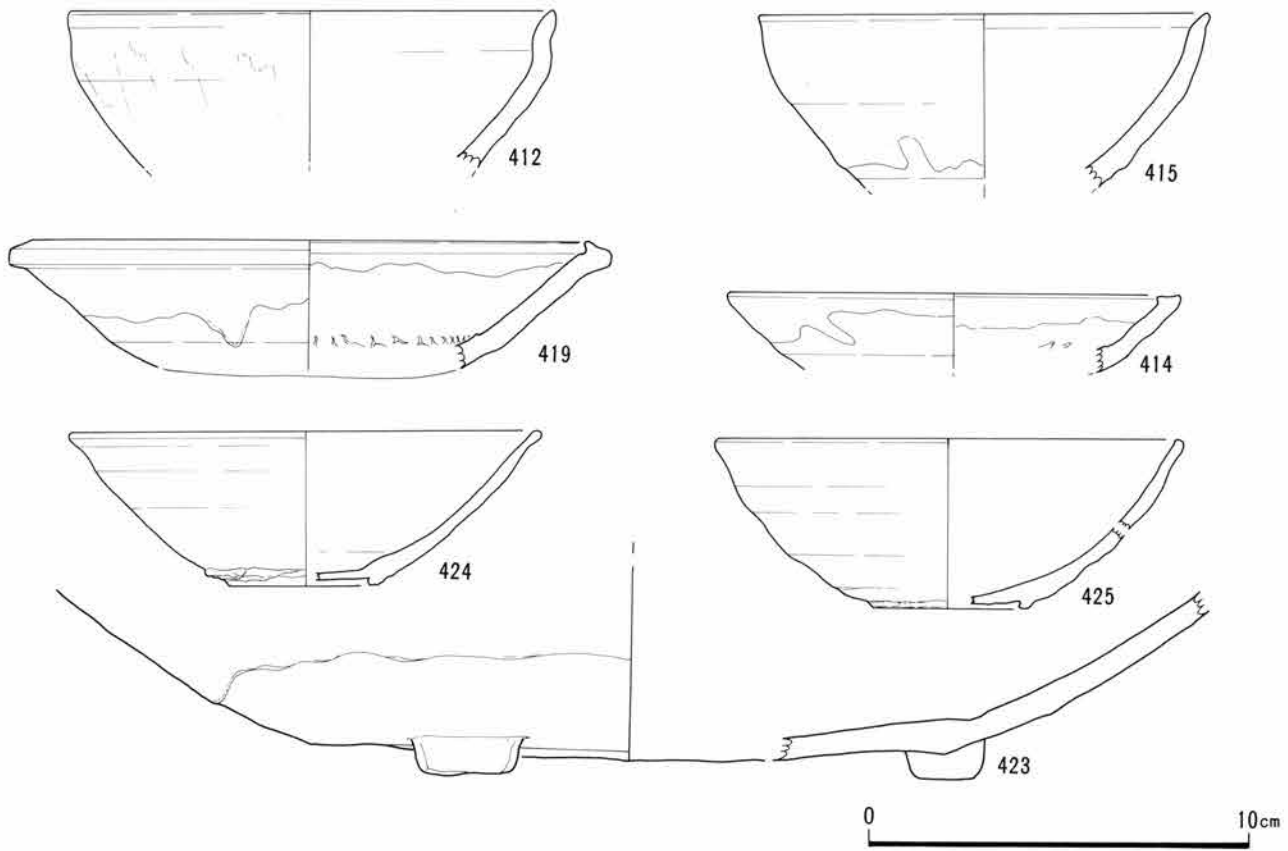
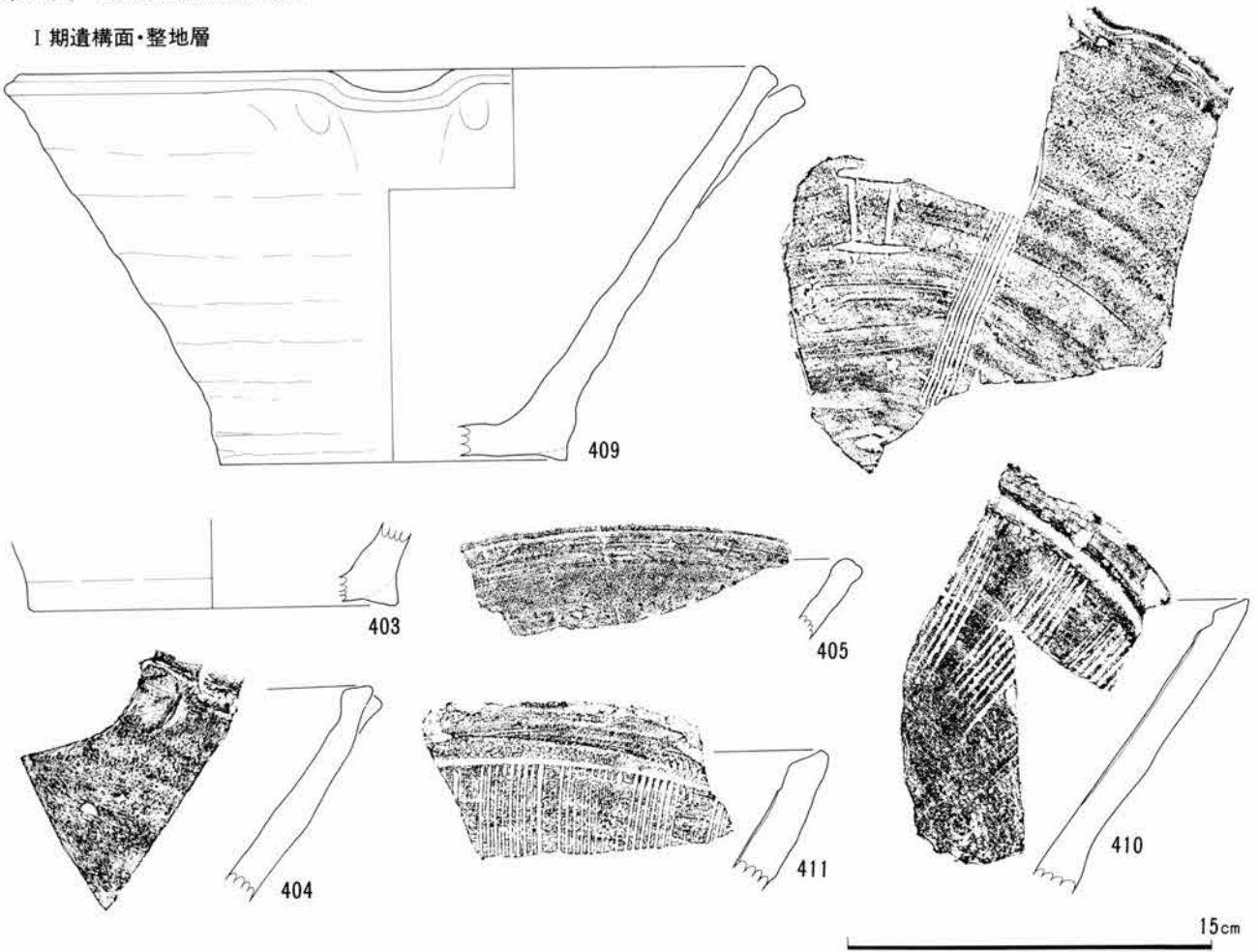
▶ SX870
(東から)

▲ SK852
(東から)

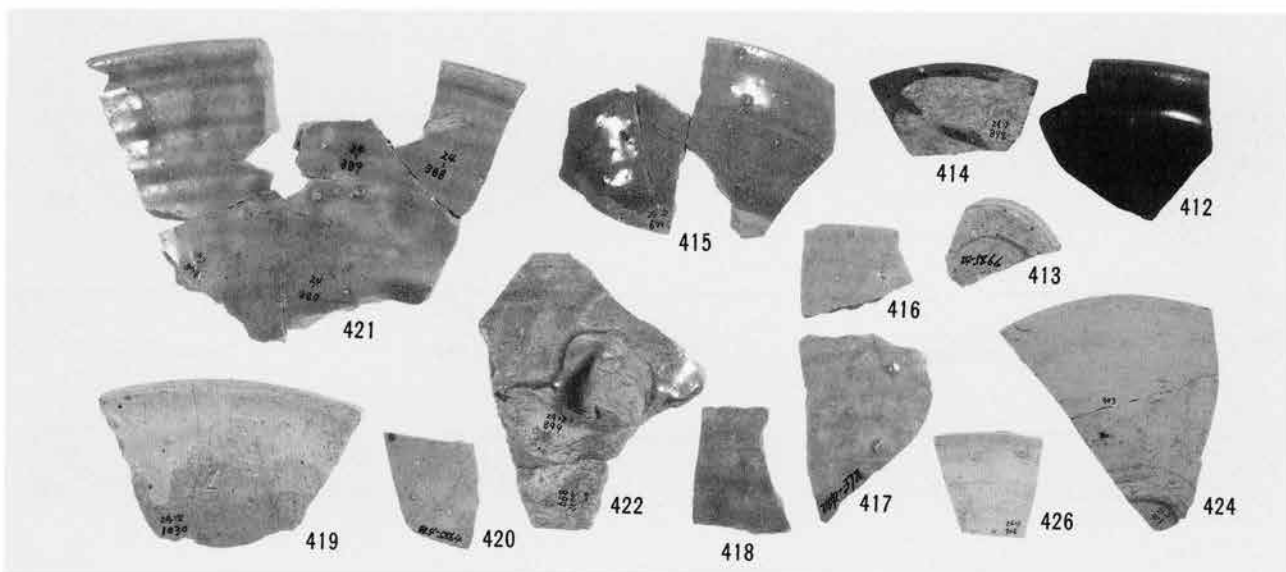
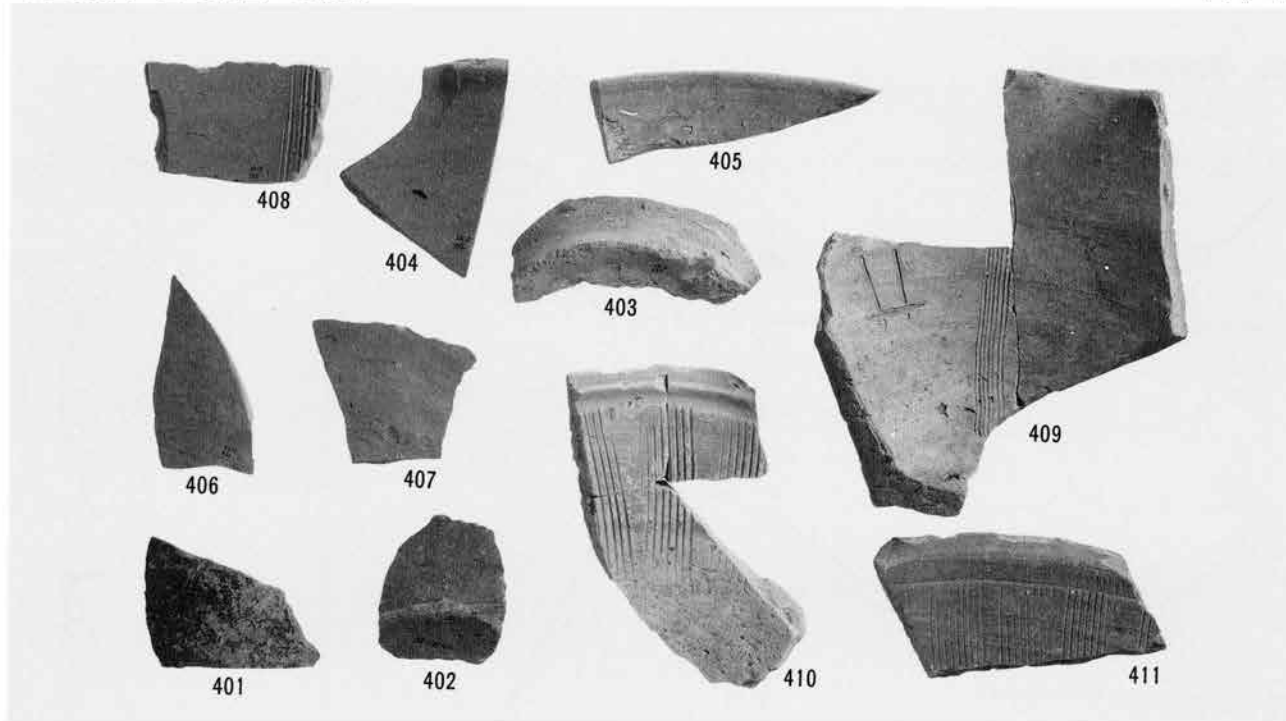


第42図 第24次調査遺物(1)

I期遺構面・整地層

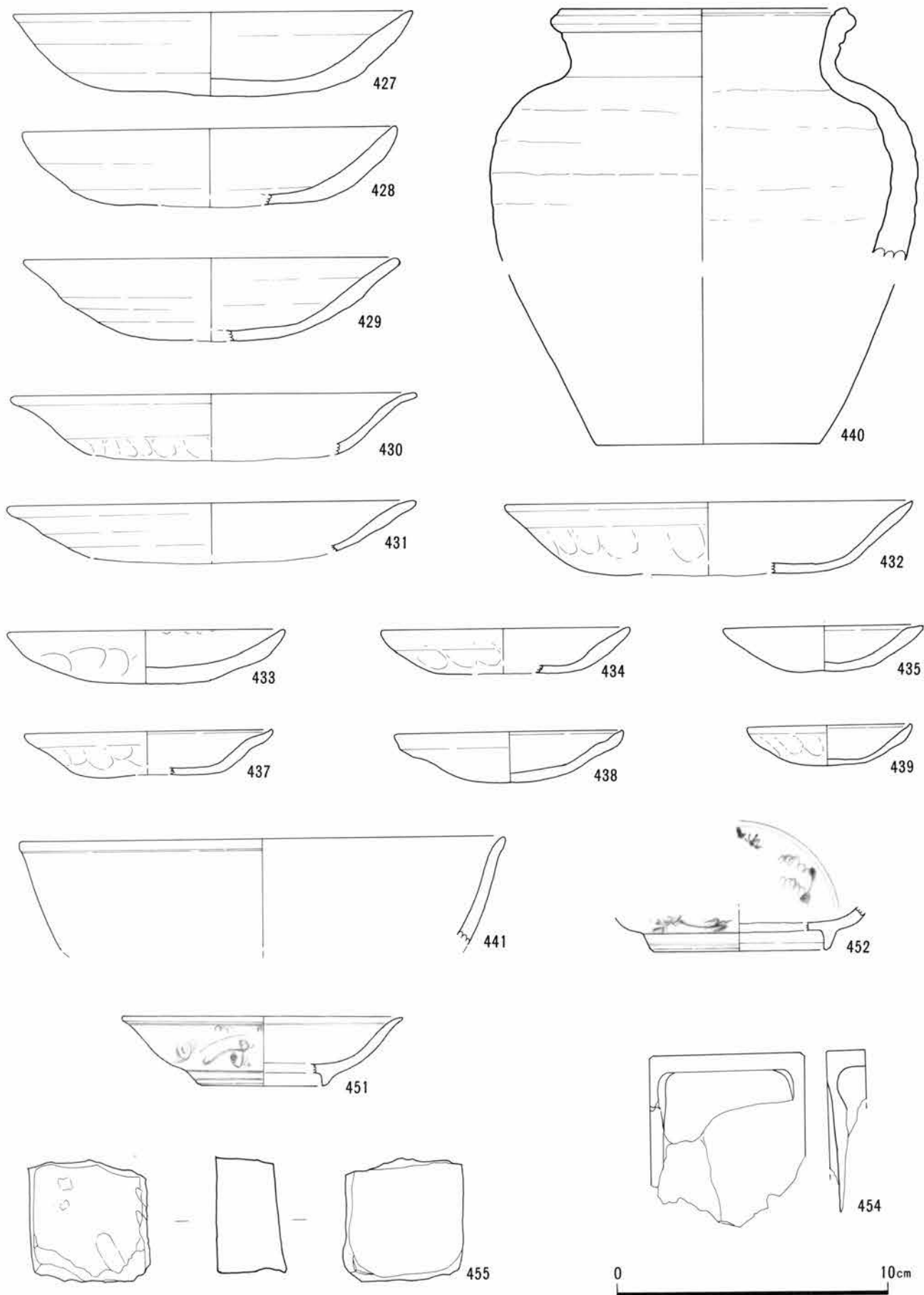


越前焼鉢403~405 播鉢409~411 鉄釉碗412 卸皿414 灰釉碗415 卸皿419 三足鉢423 白瓷系碗424・425

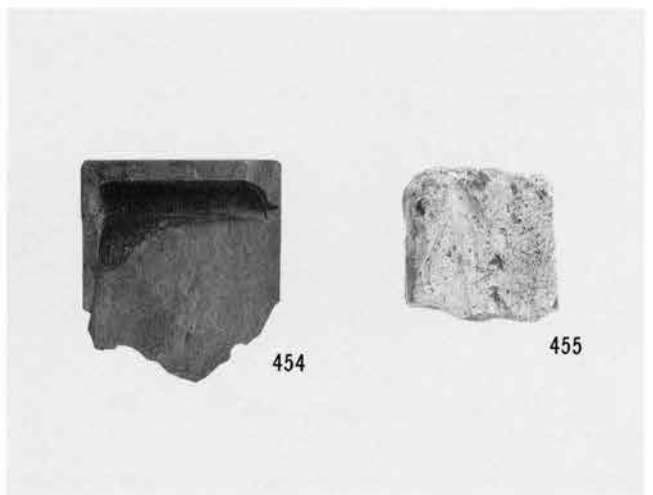
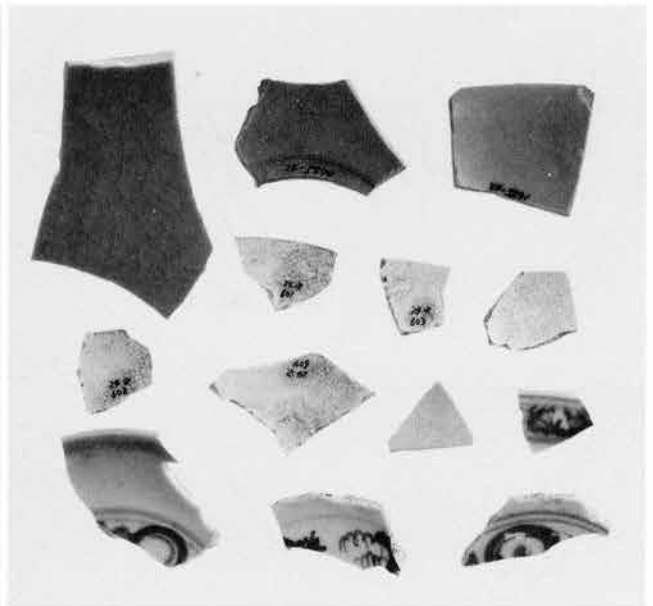
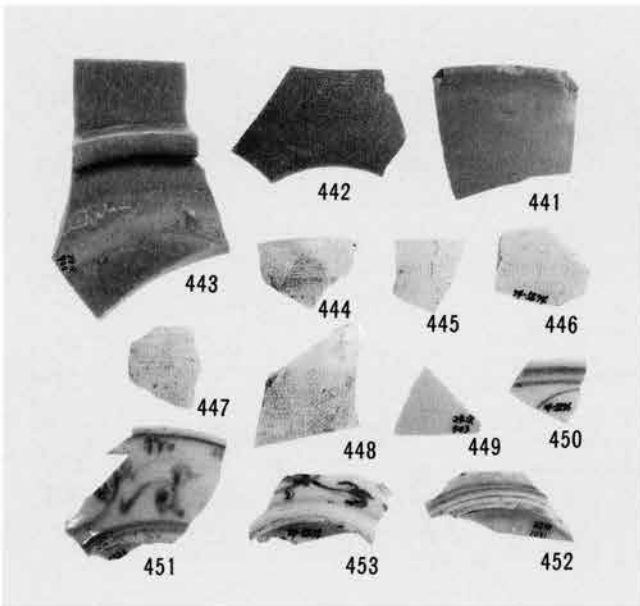
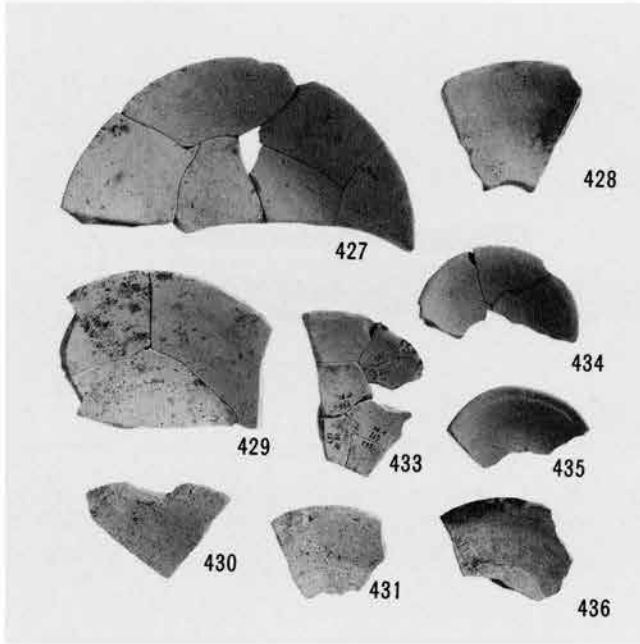


I 期遺構面・整地層 越前焼壺401・402 鉢403~407 播鉢408~411 鉄釉碗412・413 卸皿414 灰釉碗415・416
鉢417~418 卸皿419・420 三足鉢421・422 白瓷系碗424・426

第43図 第24次調査遺物(2)



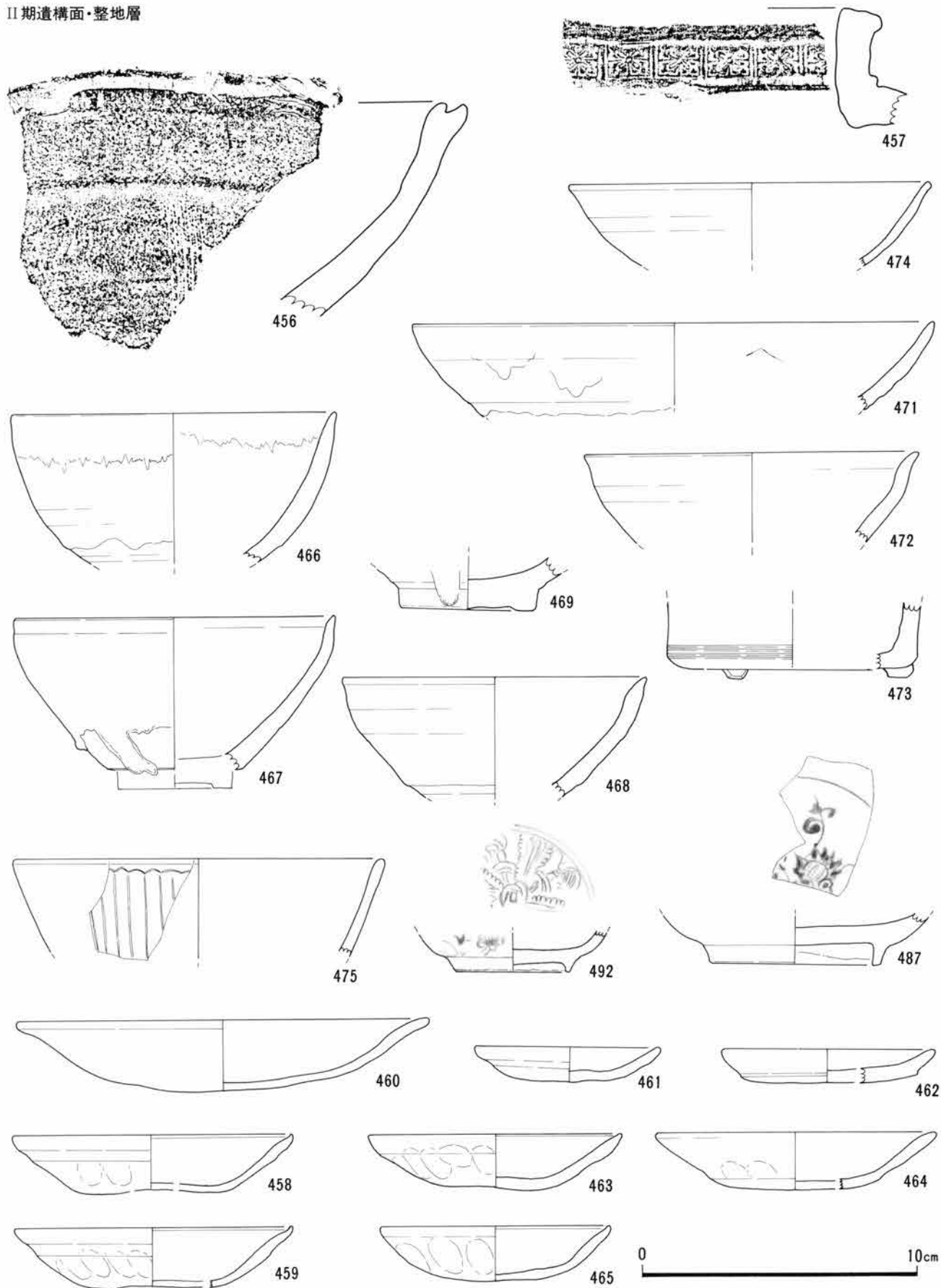
土師質皿427~435・437~439 珠洲壺440 青磁碗441 染付皿451・452 石製品硯454 砥石455



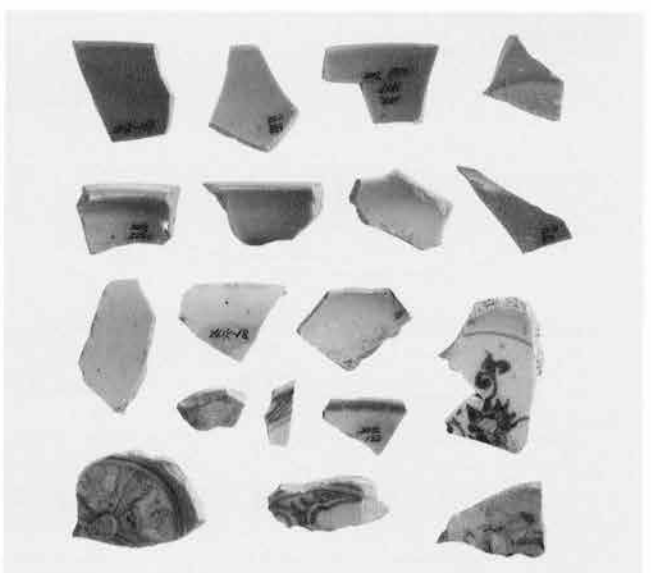
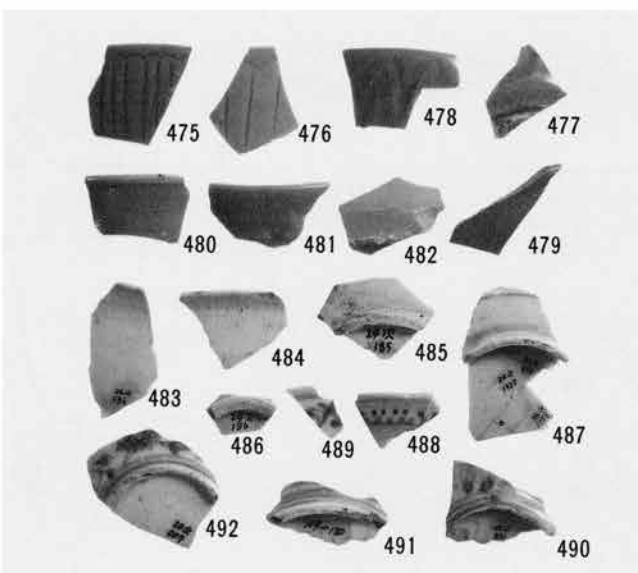
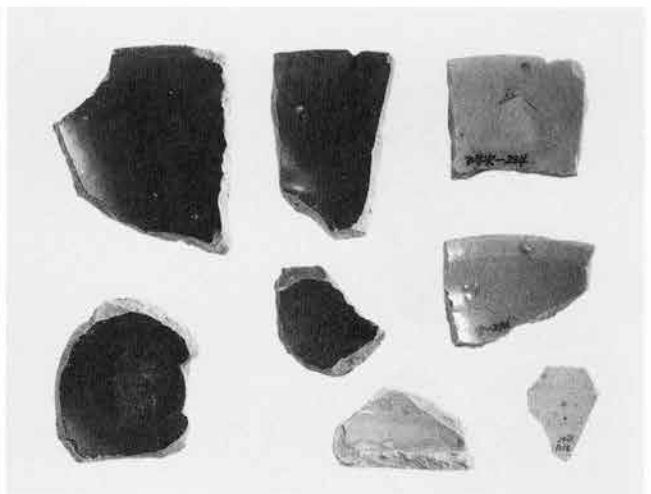
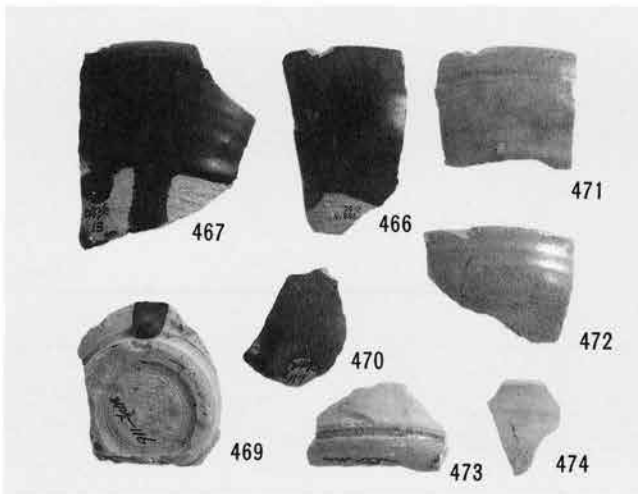
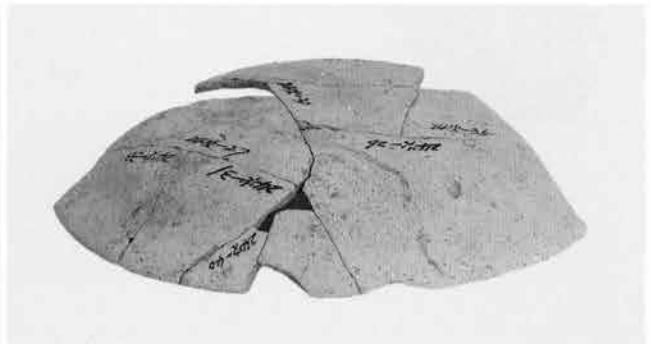
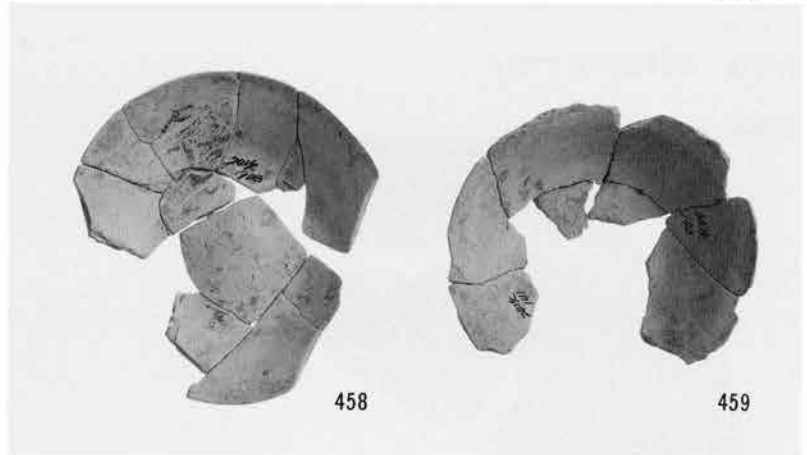
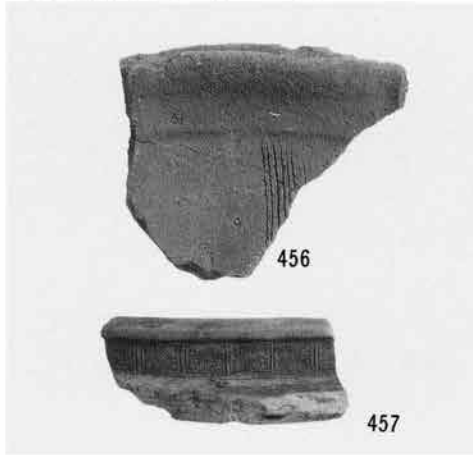
I 期遺構面・整地層 土師質皿427~431・433~436 珠洲壺440 青磁碗441 鉢442・443 白磁皿444~449 染付皿450~453 石製品硯454 砥石455

第44図 第24次調査遺物(3)

II期遺構面・整地層



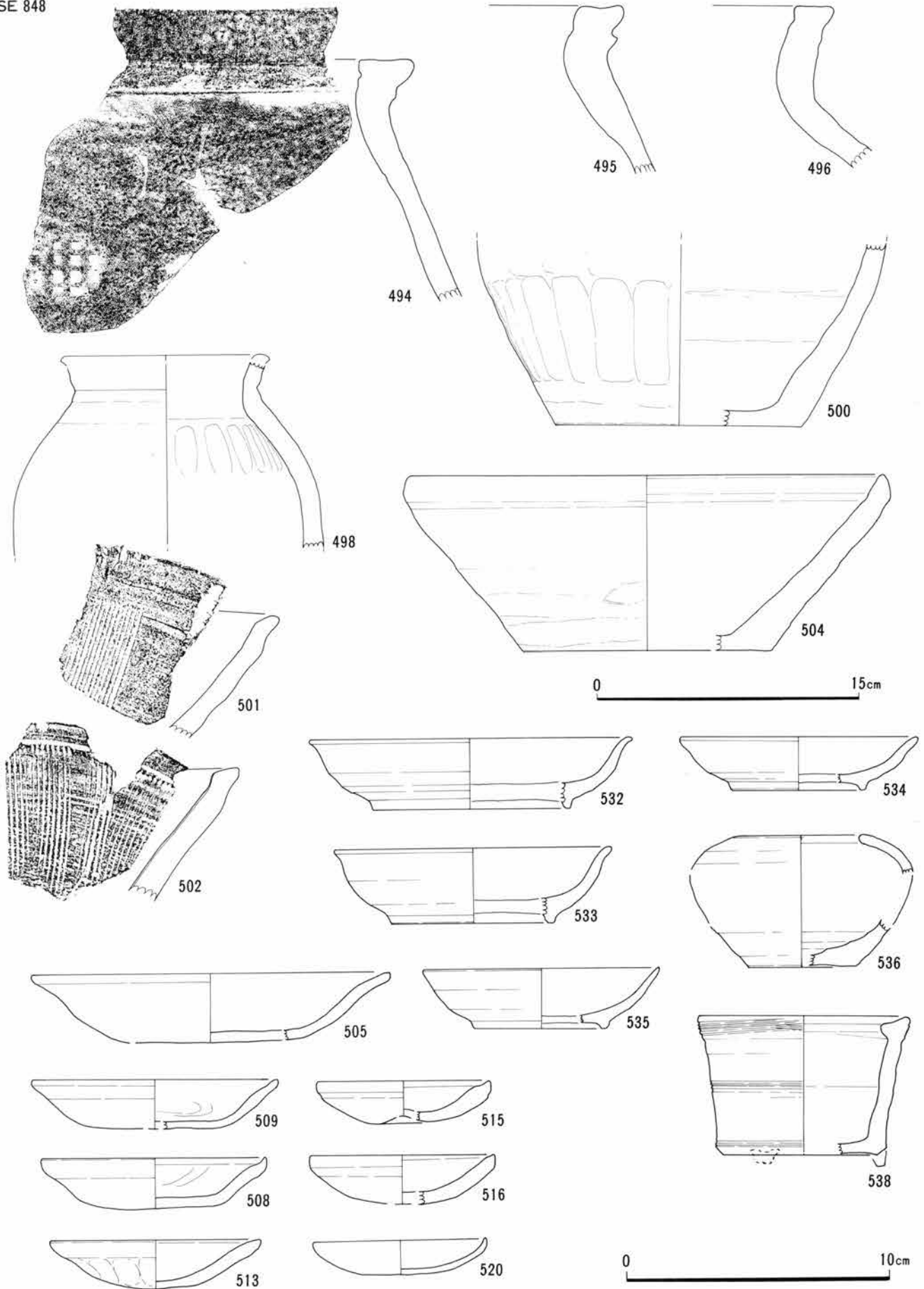
越前焼播鉢456 瓦質風炉457 土師質皿458~465 鉄釉碗466~469 灰釉鉢471 碗472 香炉473 白瓷系碗474
青磁碗475 染付碗487 皿492



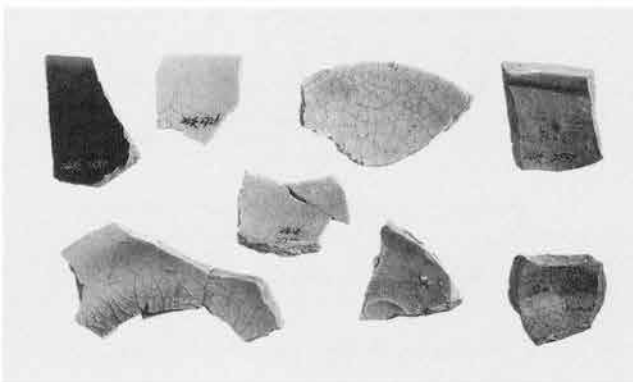
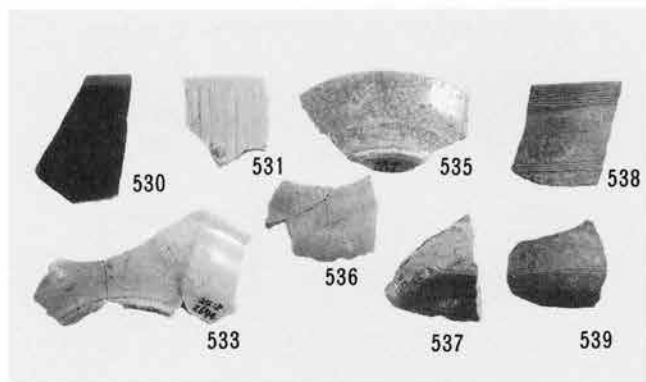
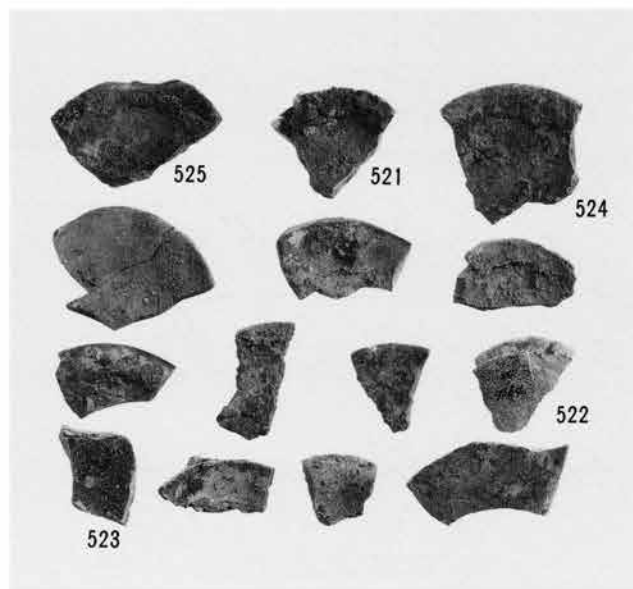
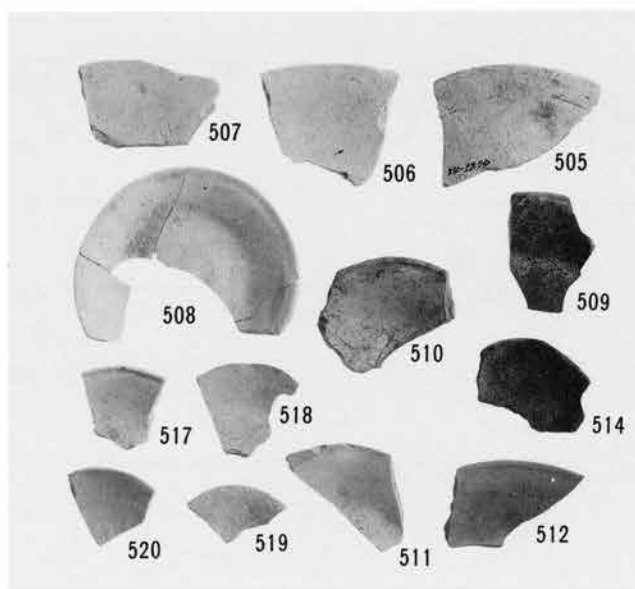
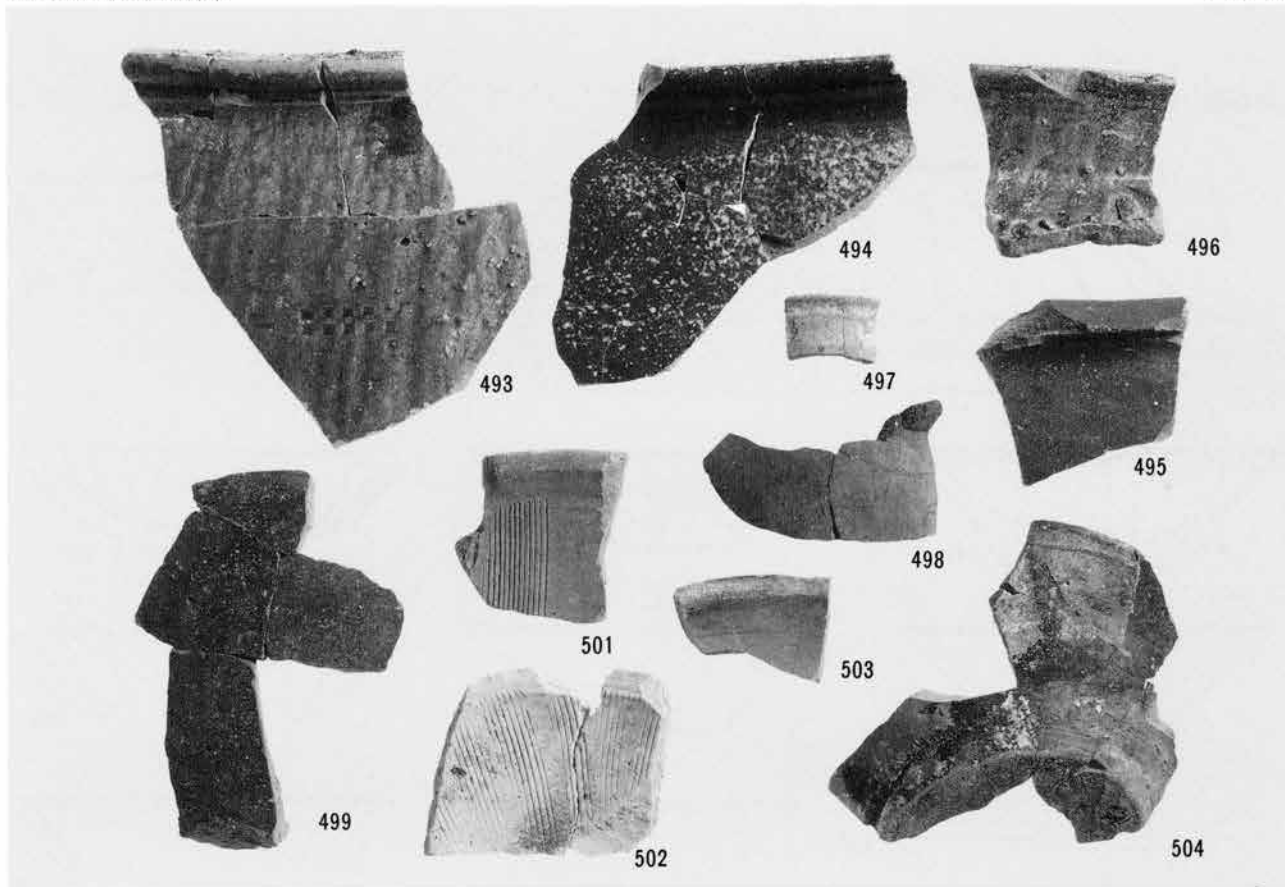
II期遺構面・整地層 越前焼播鉢456 瓦質風炉457 土師質皿458~460 鉄釉碗466~469 小壺470 灰釉鉢471 碗472 香炉473 白瓷系碗474 青磁碗475~479 香炉480~482 白磁皿483~486 染付碗487~489 皿490~492

第45図 第24次調査遺物(4)

SE 848

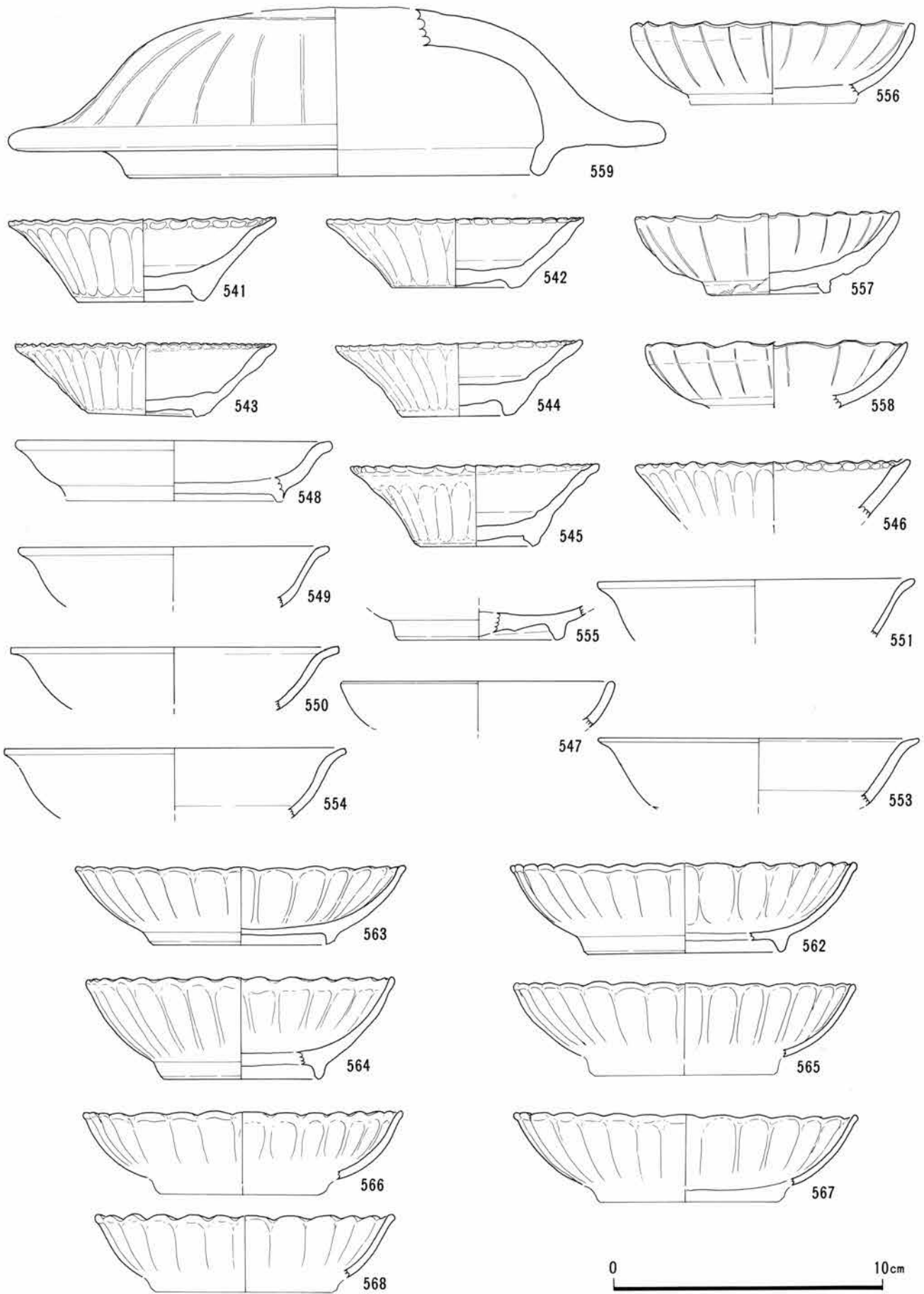


越前焼壺494~496 壺498・500 播鉢501・502 鉢504 土師質皿505・508・509・513・515・516・520 灰釉皿532~535 小壺536 無釉香炉538



SE 848 越前焼裏493~496 壺497~499 播鉢501・502 鉢503・504 土師質皿505~517 金属が融着した皿521~525
鉄釉碗530 灰釉碗531 皿533・535 小壺536・537 無釉香炉538・539

第46図 第24次調査遺物(5)



青磁皿541～551・553～558 酒会壺蓋559 白磁皿562～568



541



543



542



557



562



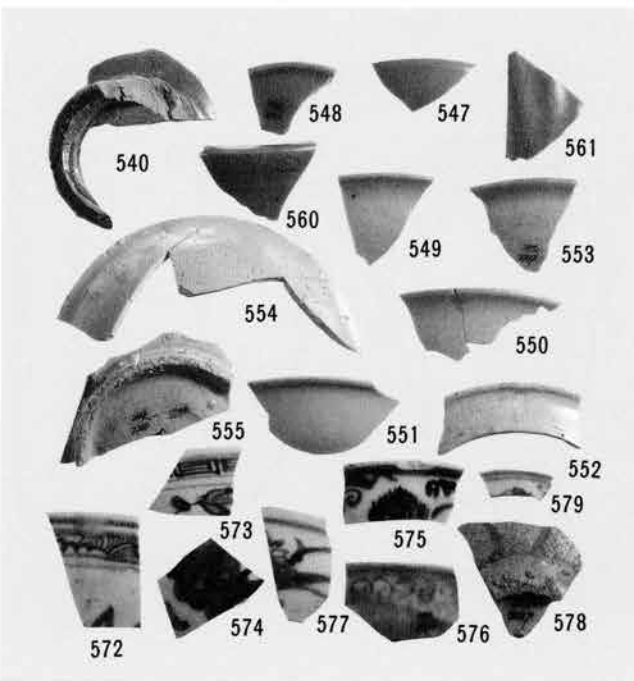
563



569

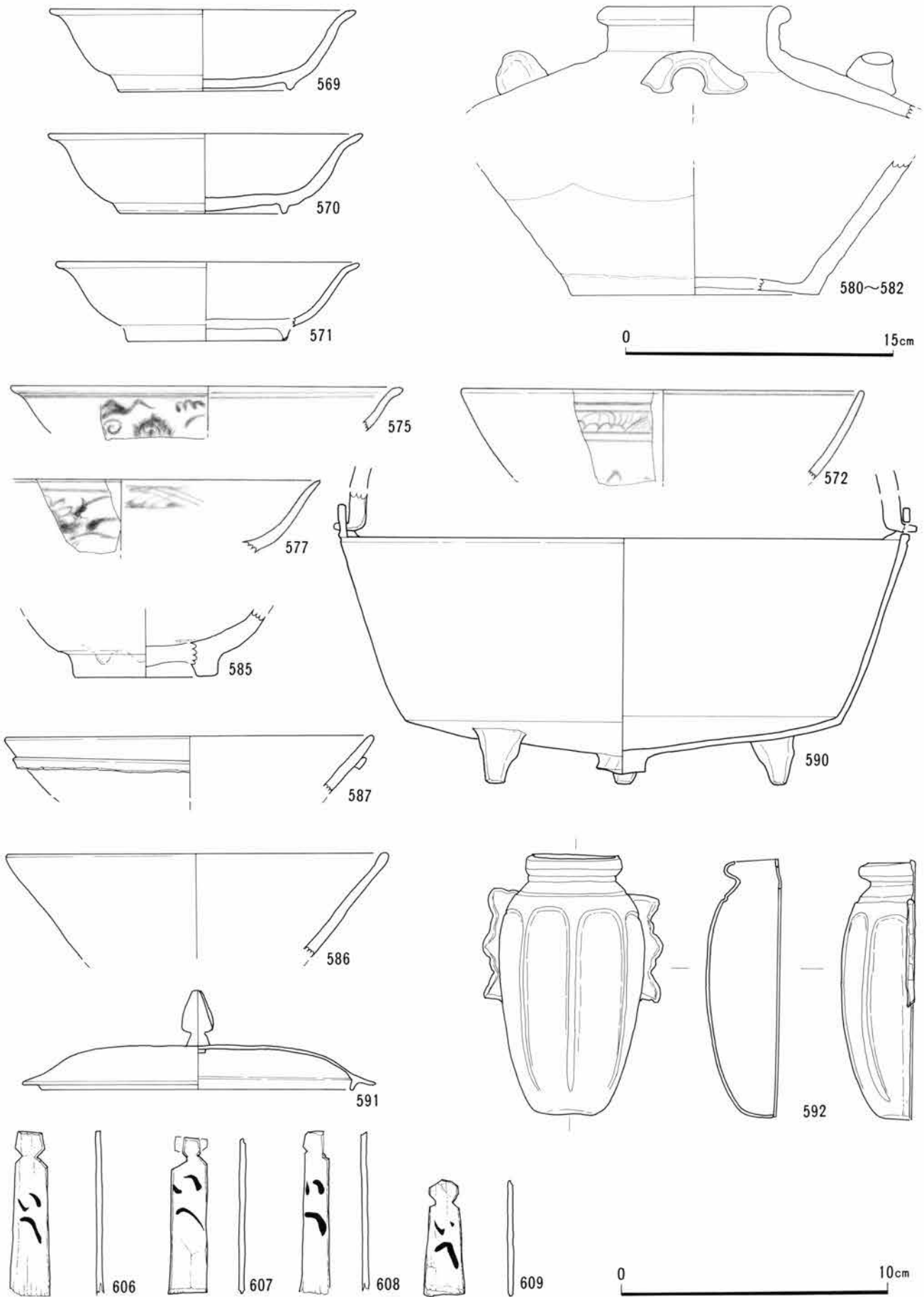


570

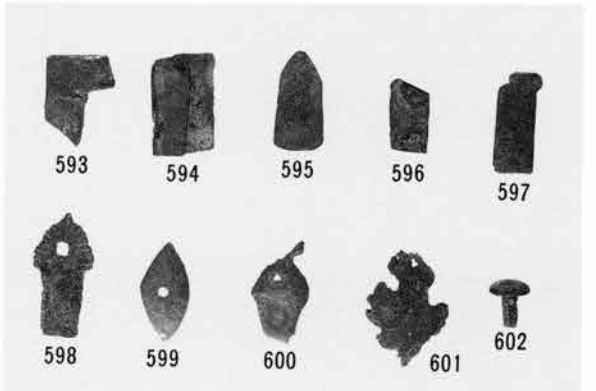
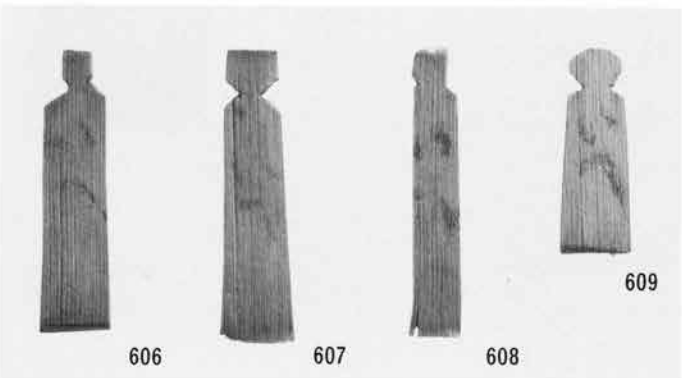
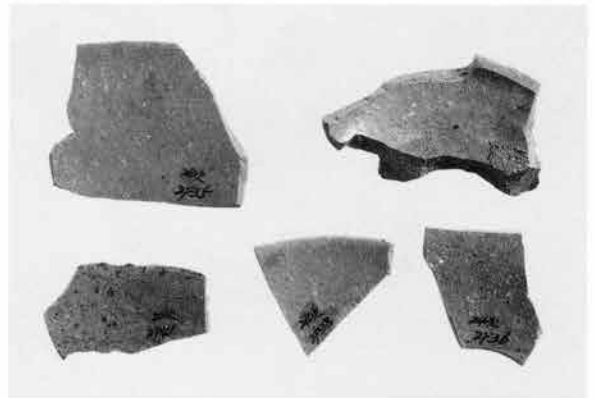
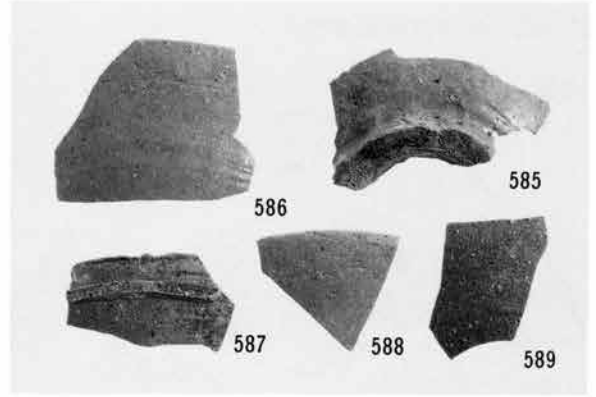
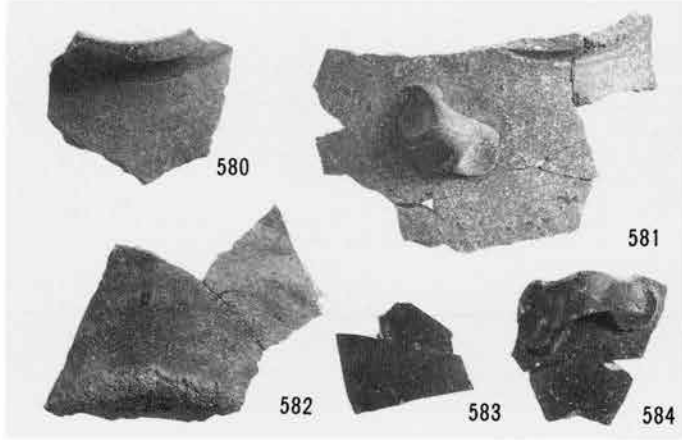


SE847 青磁碗540 皿541~543・547~555・557 香炉560 壺561 白磁皿562・563・569・570 染付碗572~574 皿575~578 杯579

第47図 第24次調査遺物(6)



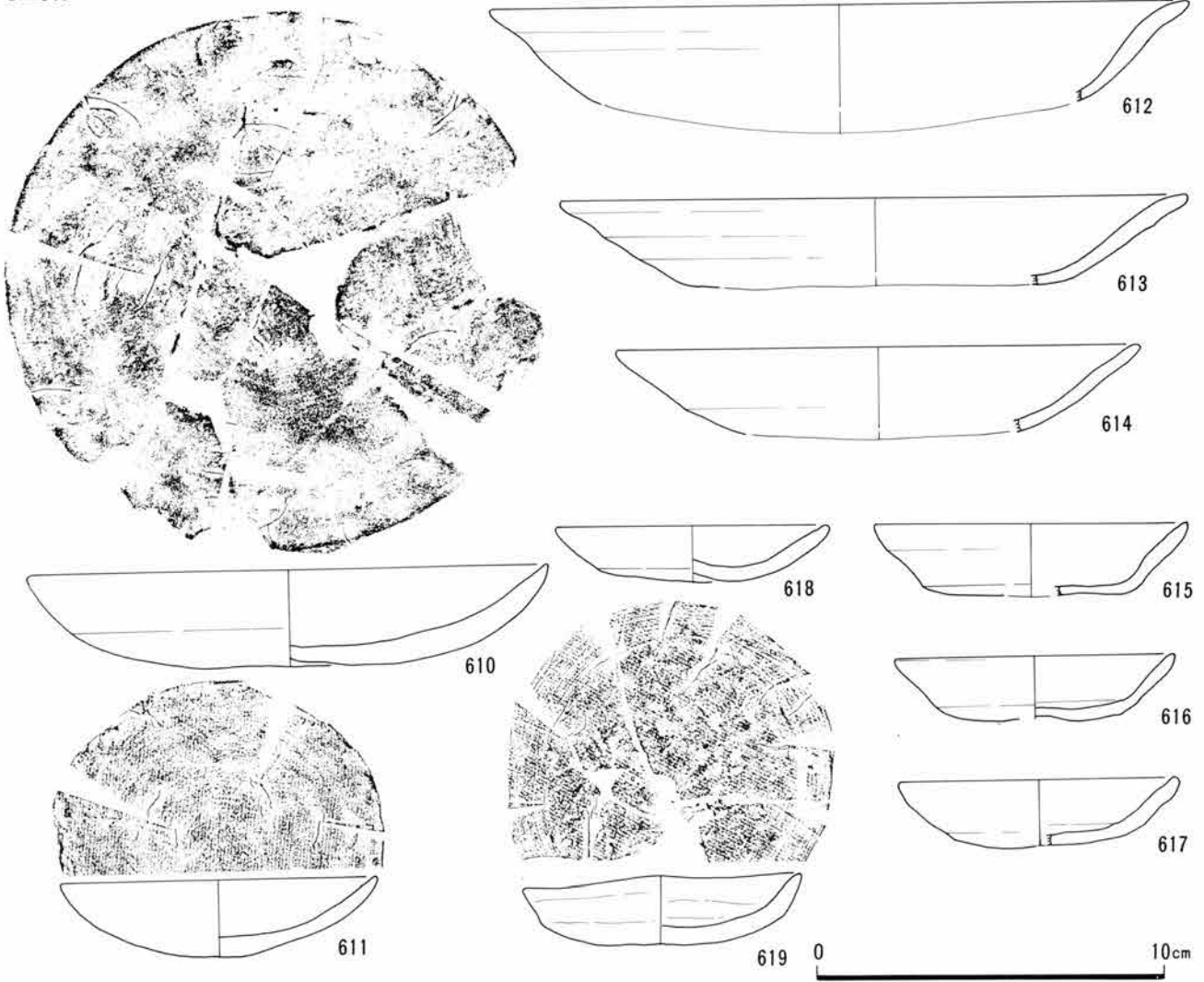
白磁皿569～571 染付碗572 皿575・577 中国製褐釉壺580～582 朝鮮製碗585～587 鉄製品鉄鍋590
銅製品茶釜蓋591 花瓶592 木製品付札606～609



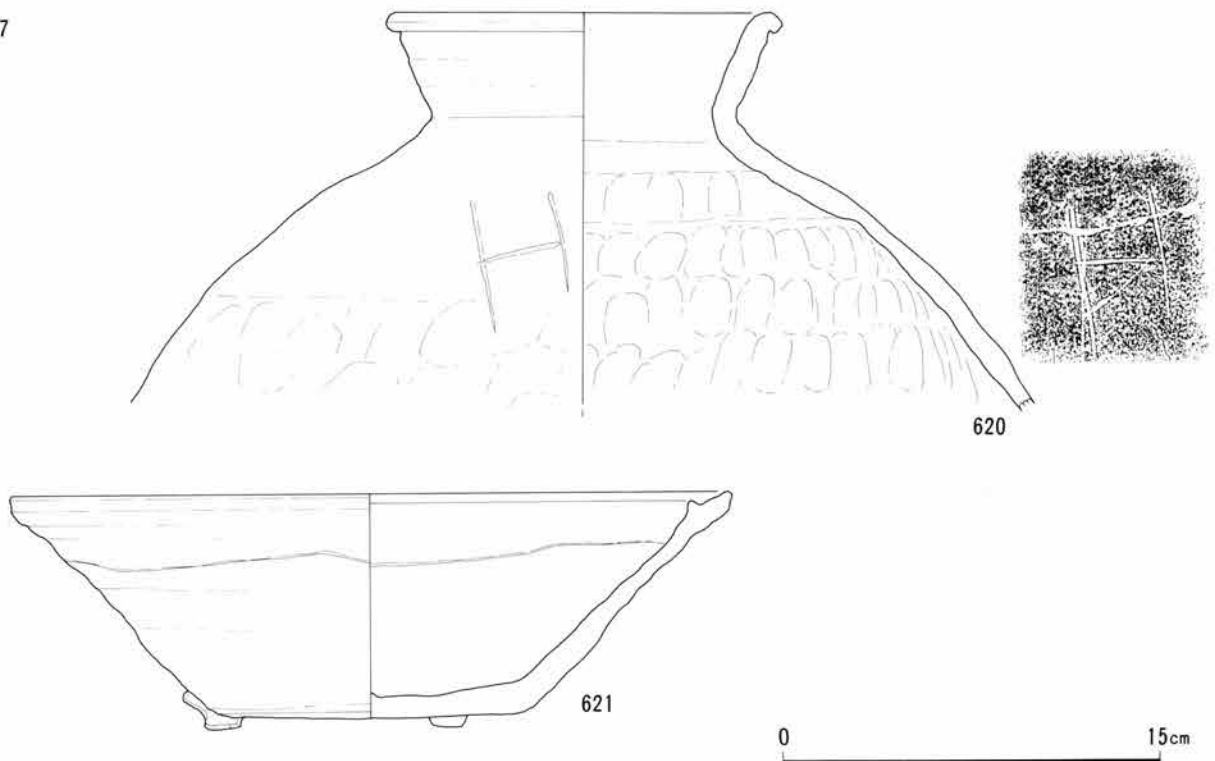
SE847 中国製褐釉壺580~584 朝鮮製碗586~589 鉄製品鉄鍋590 銅製品茶釜蓋591 花瓶592 飾金具593~602
銅錢603~605 木製品付札606~609

第48図 第24次調査遺物(7)

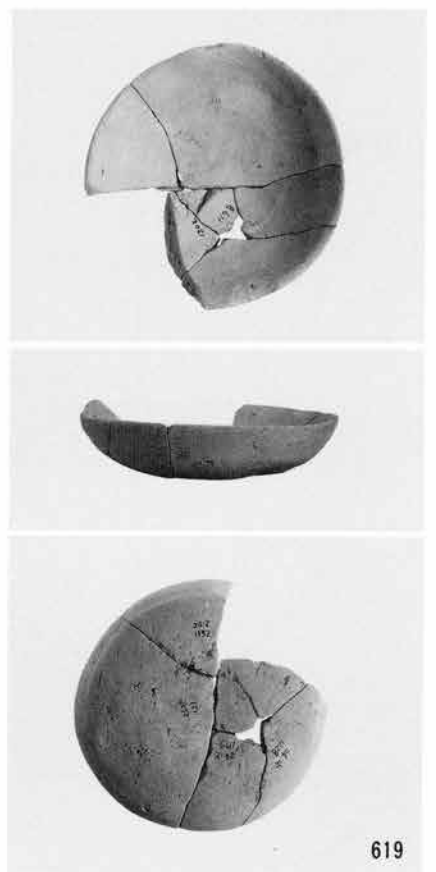
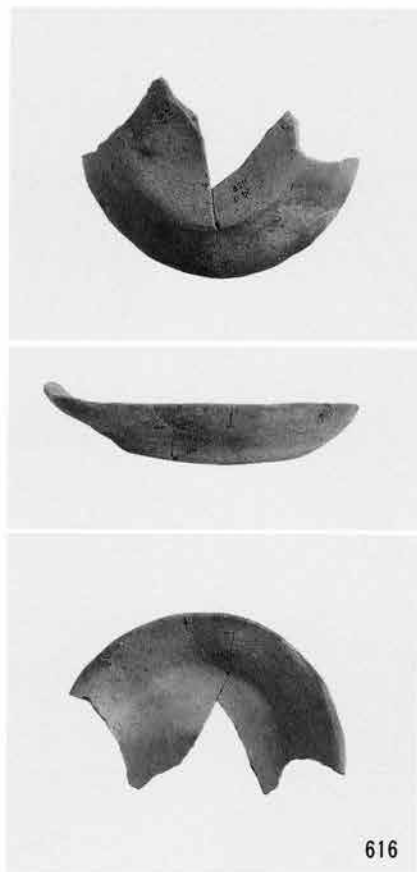
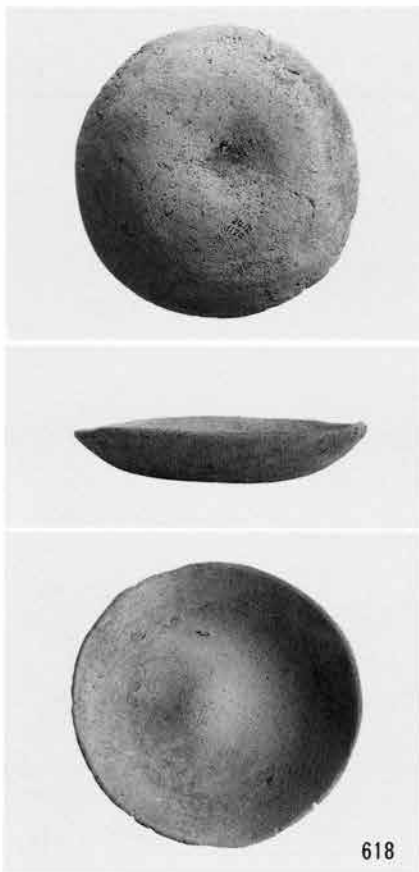
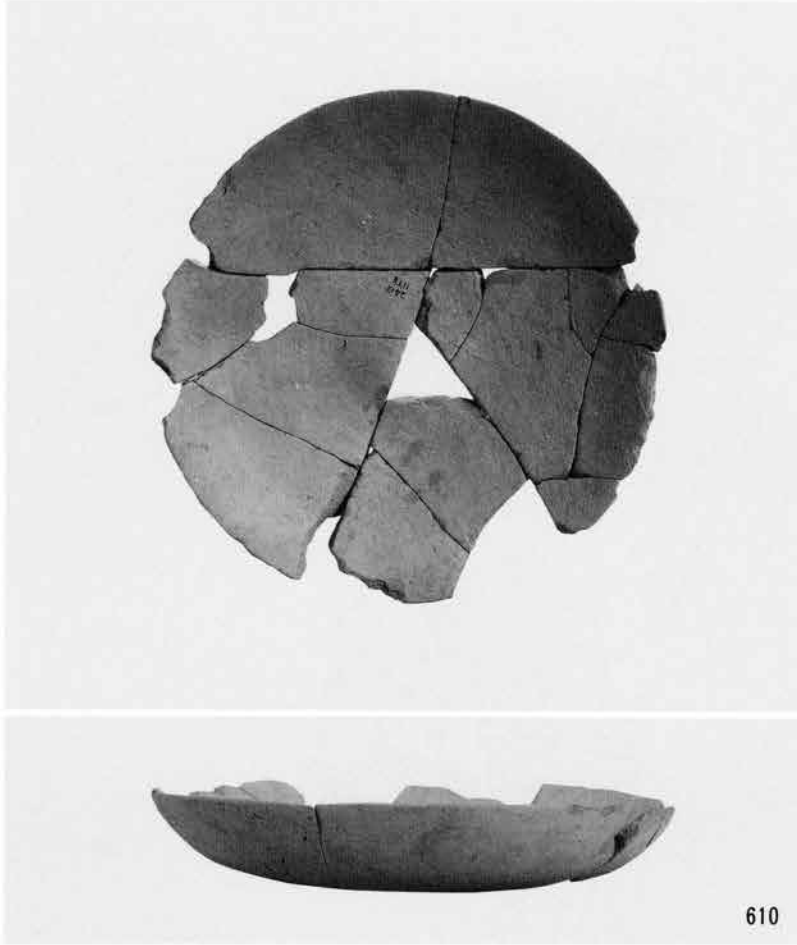
SE849



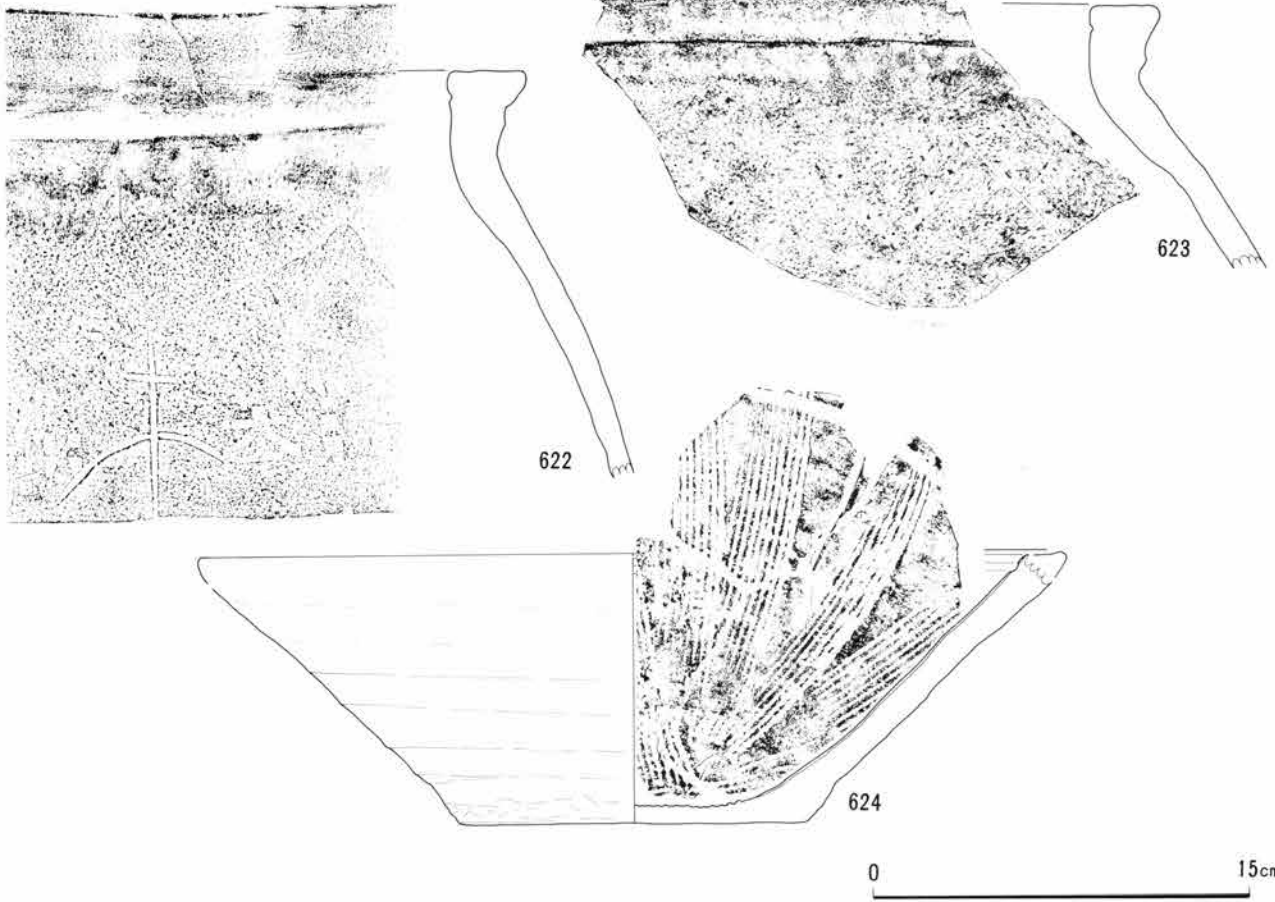
SD827



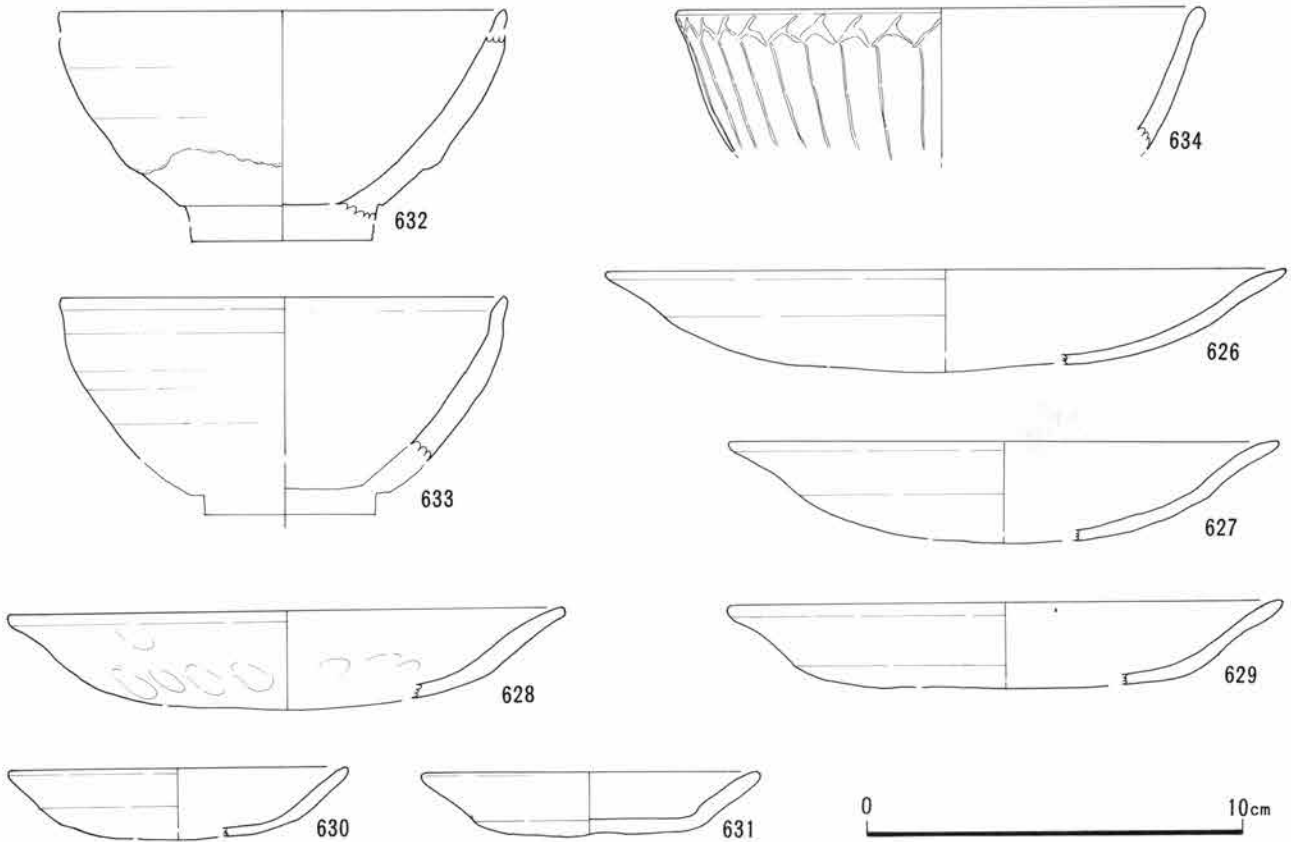
土師質皿610~619 越前焼壺620 灰釉三足鉢621



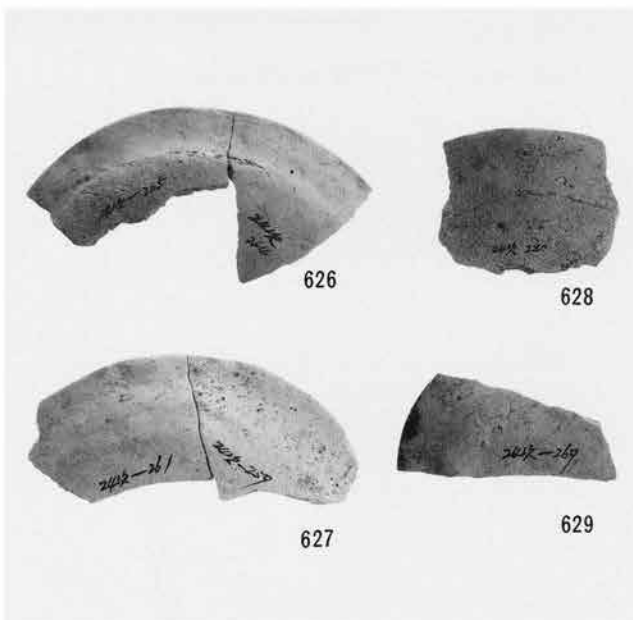
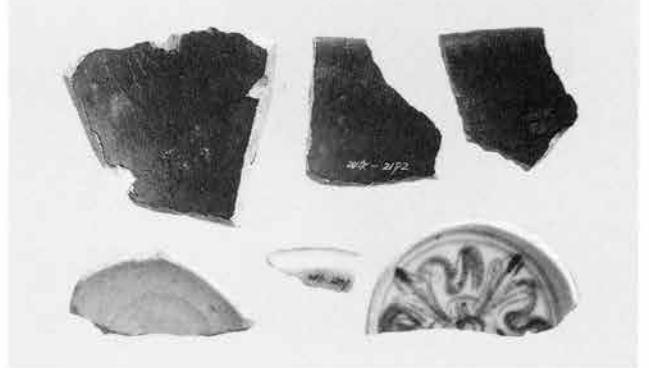
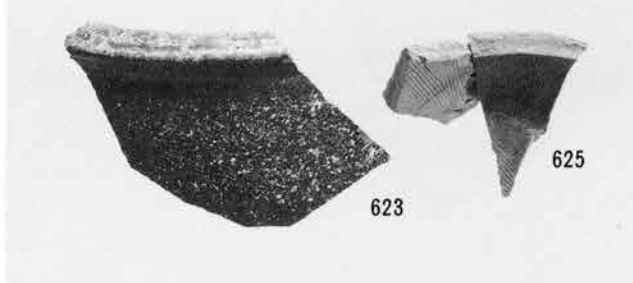
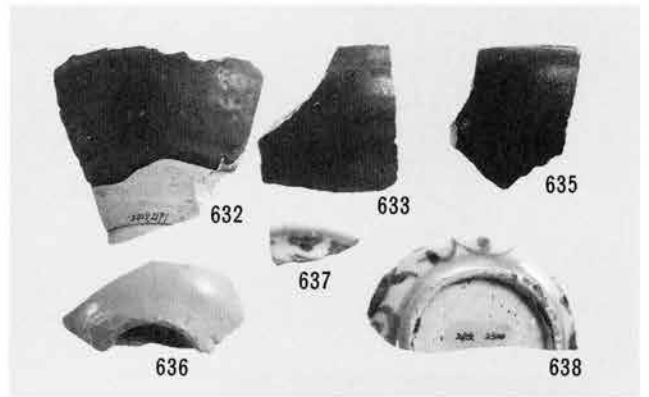
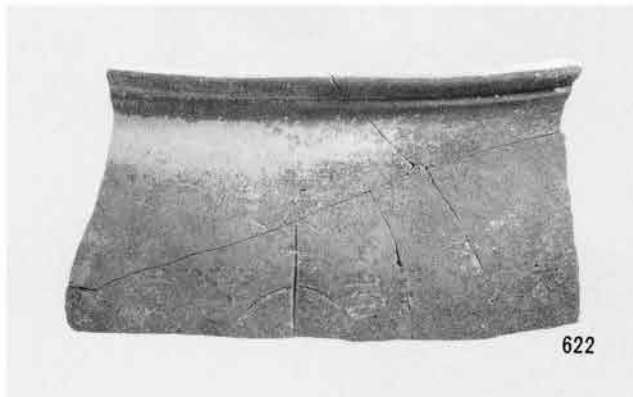
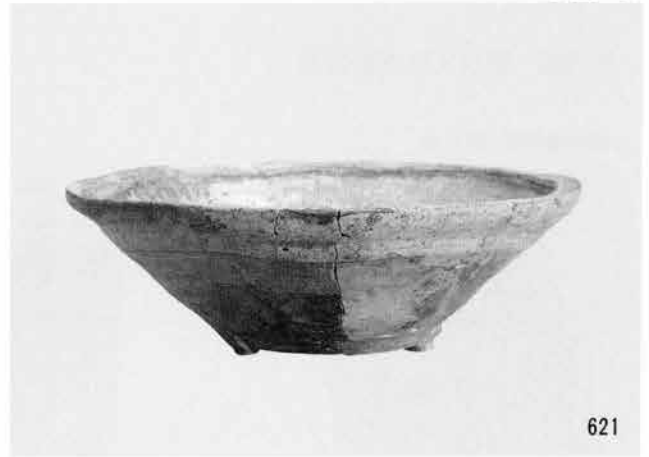
SX 845



SX 854・SF 851



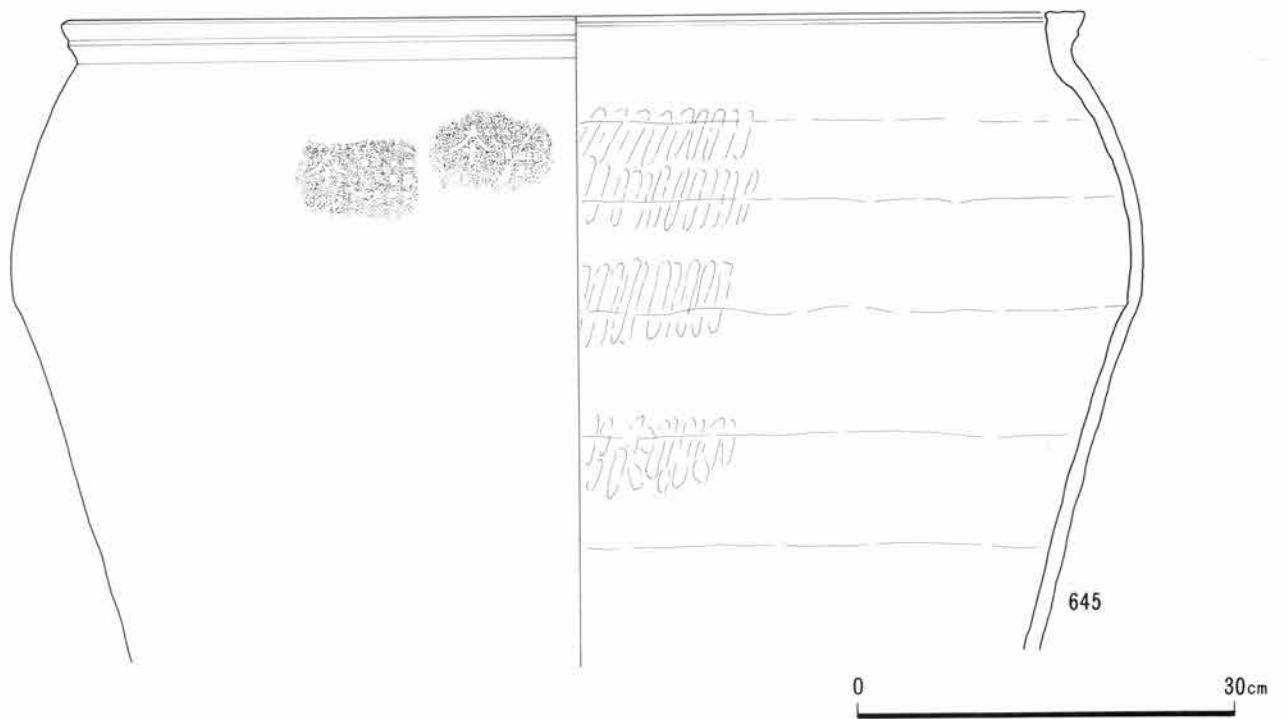
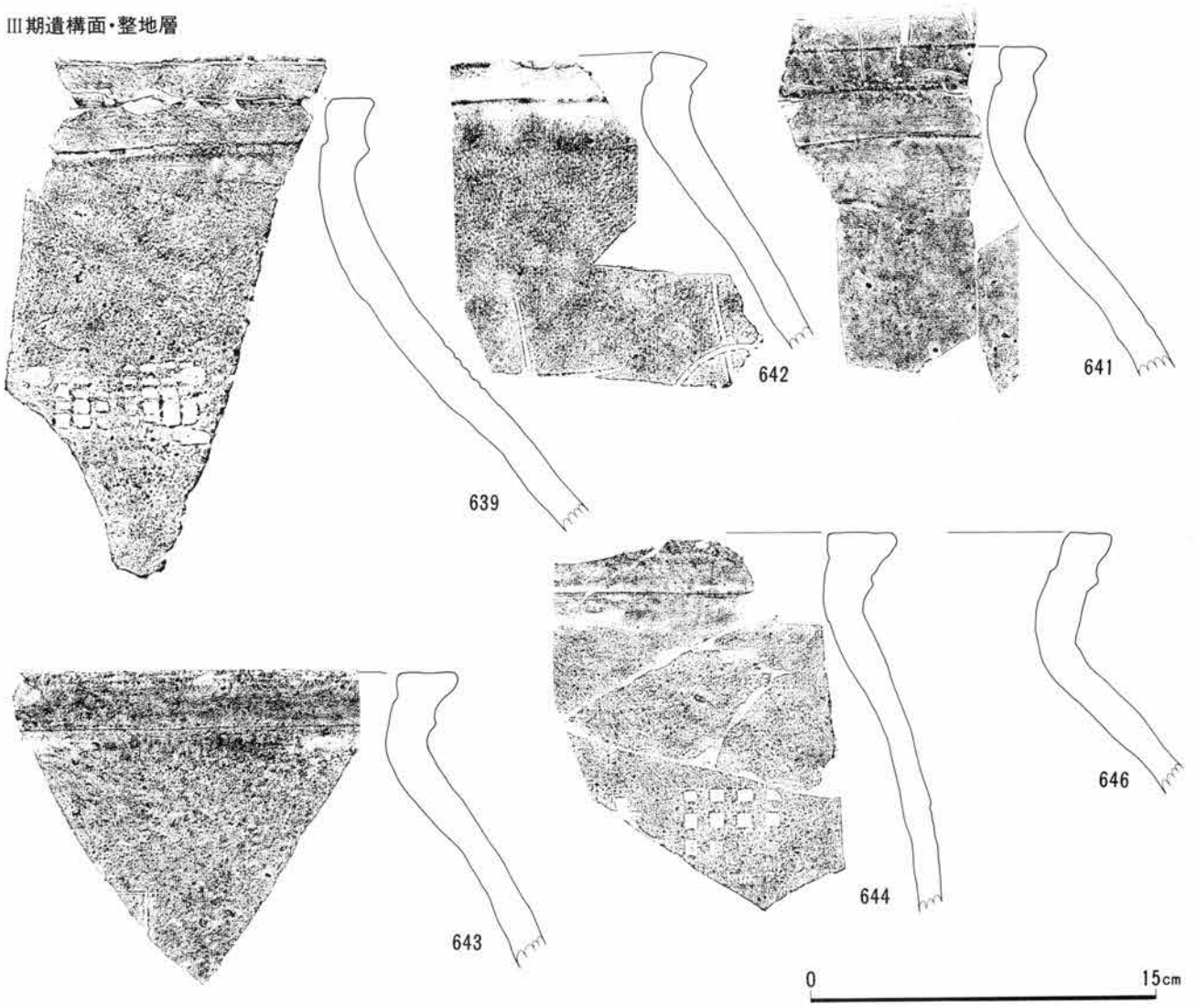
越前焼壺622・623 播鉢624 鉄釉碗632・633 青磁碗634 土師質皿626～631



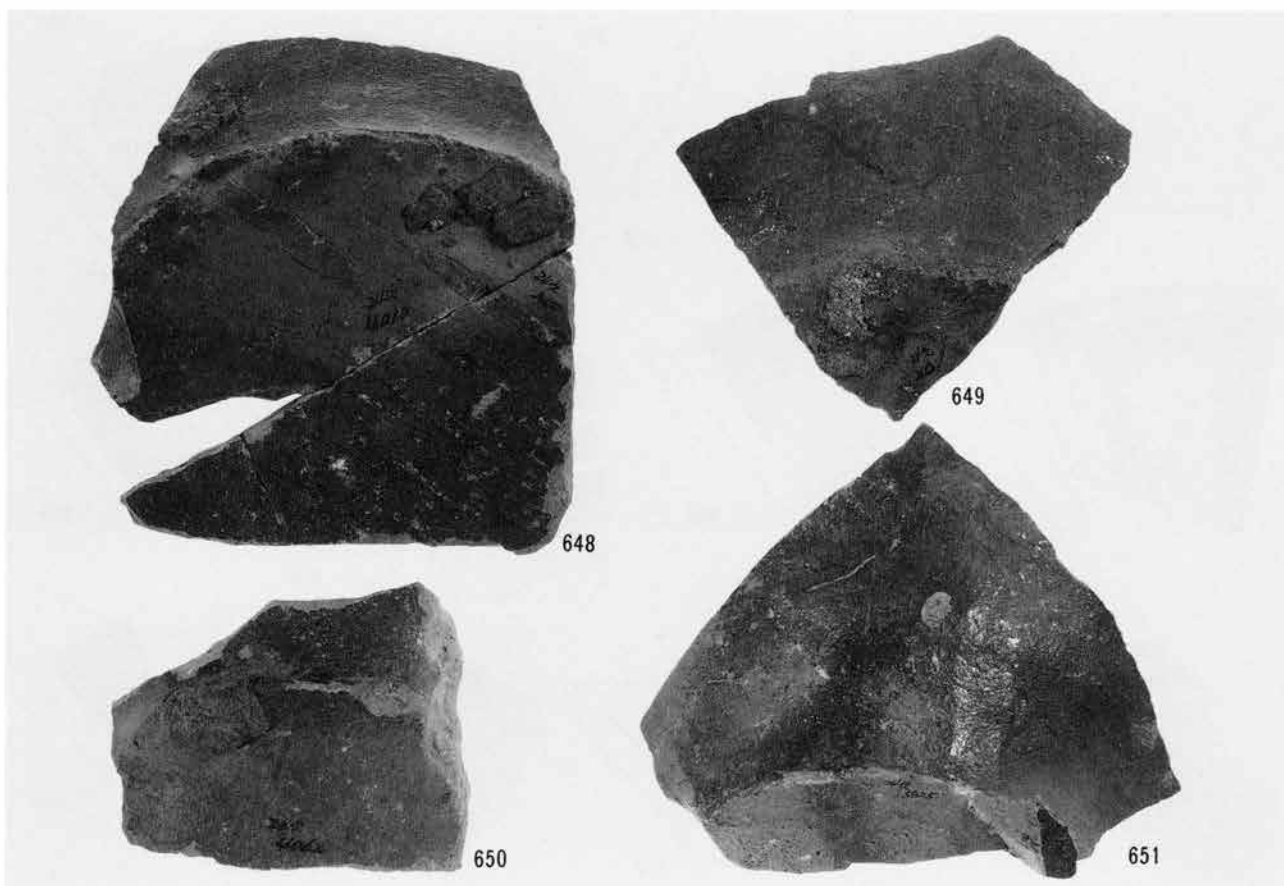
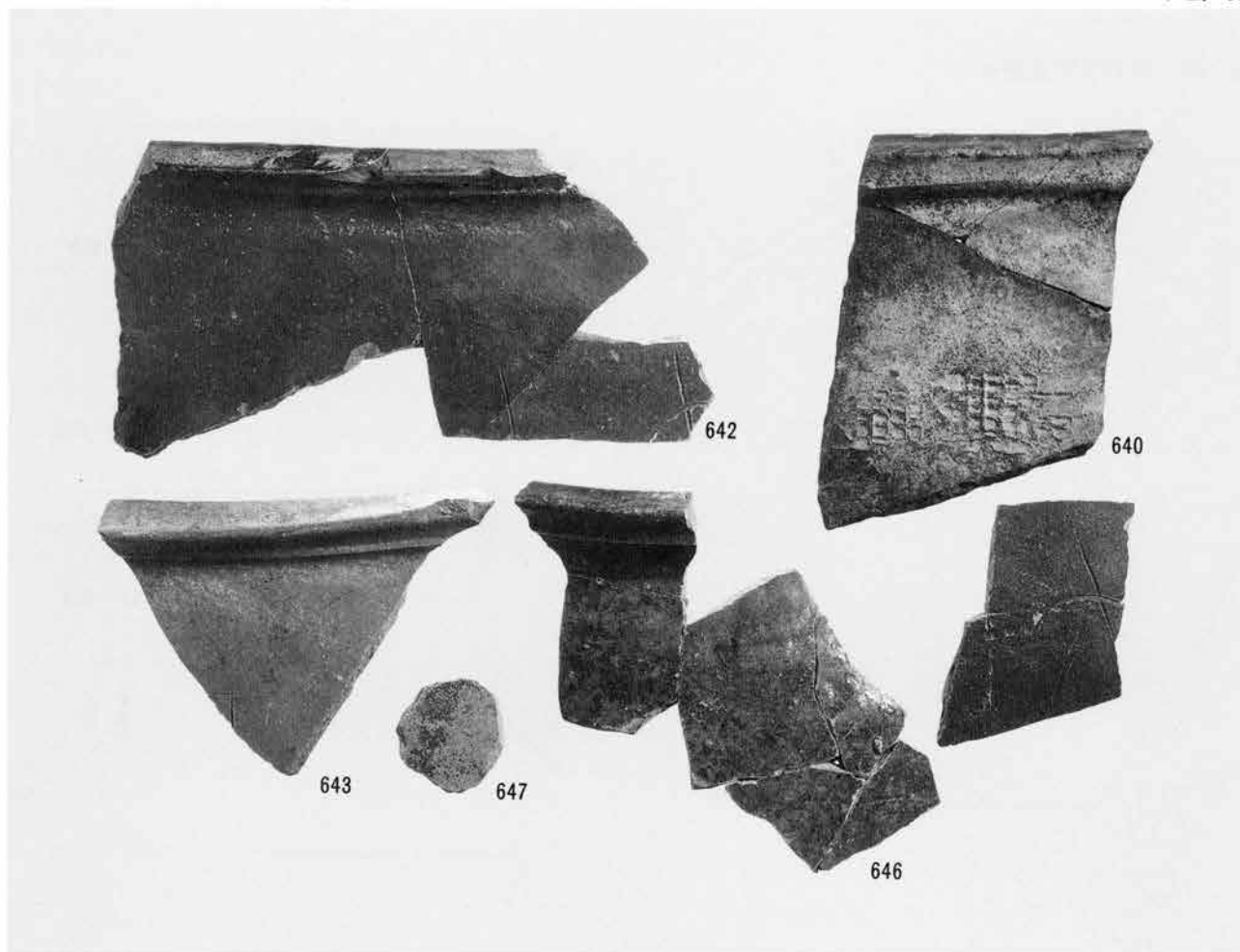
SD827 越前焼壺620 灰釉三足盤621 SK855 越前焼甕622・623 播鉢624・625 SX858 鉄釉碗635 青磁瓶636
SB890内ビット 染付皿637・638 SF851 土師質皿626～629

第50図 第24次調査遺物(9)

III期遺構面・整地層

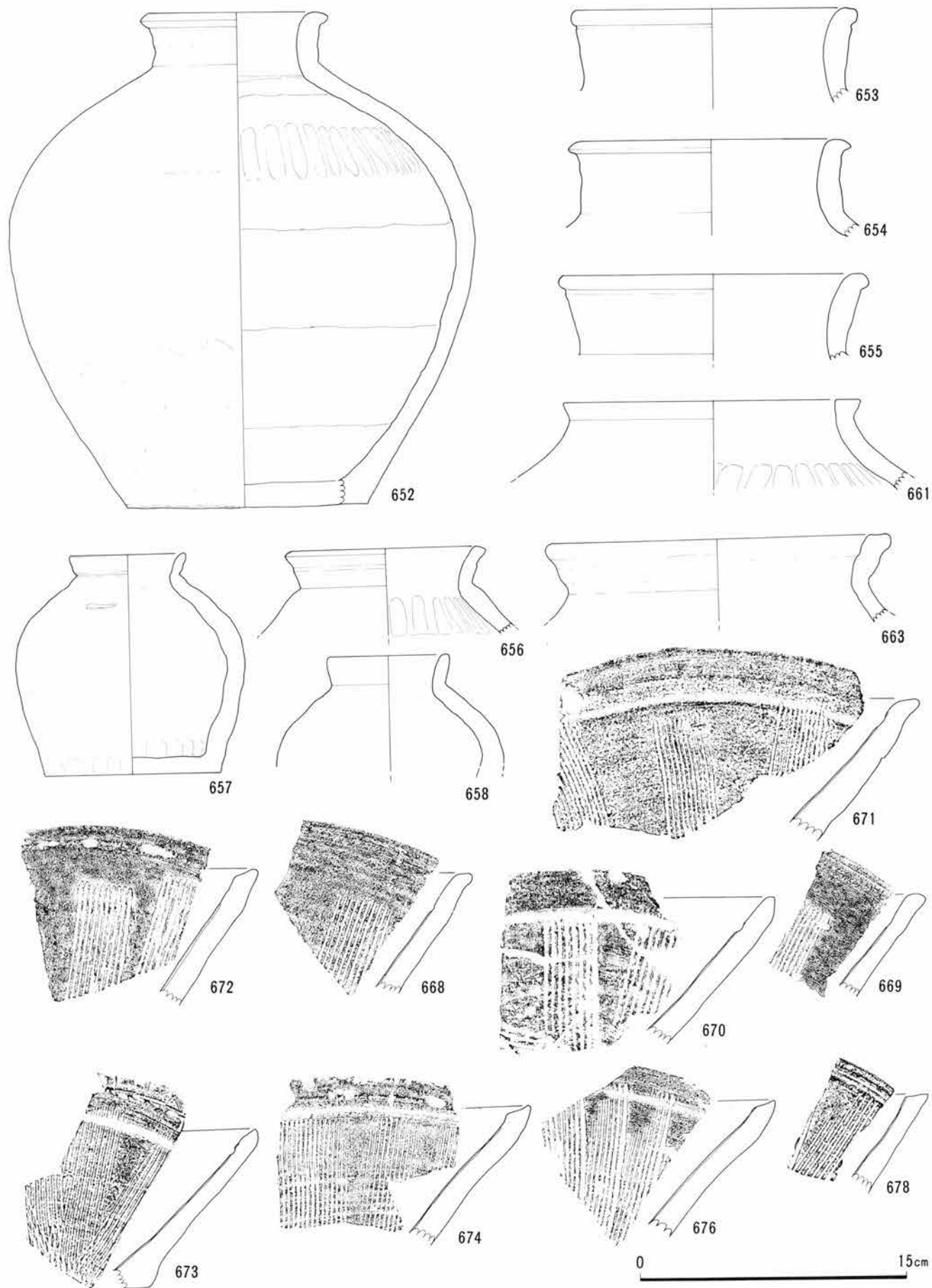


越前焼 639・641～646

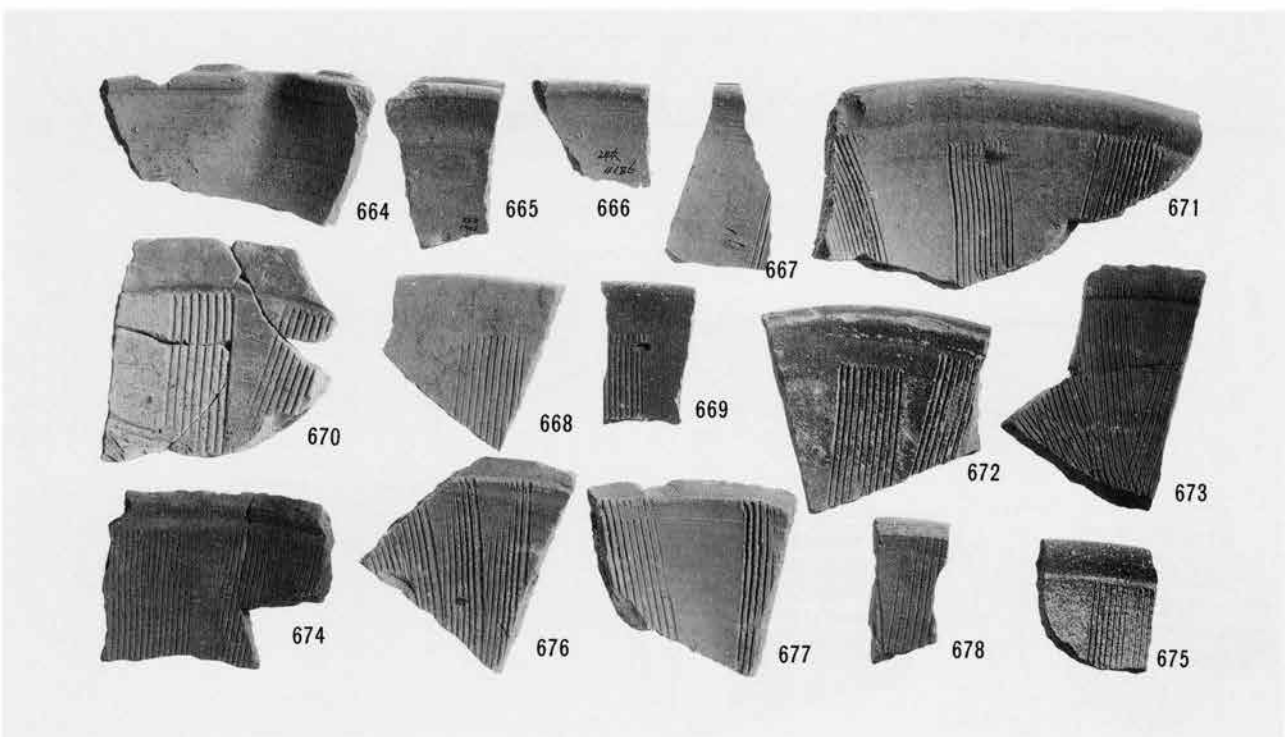
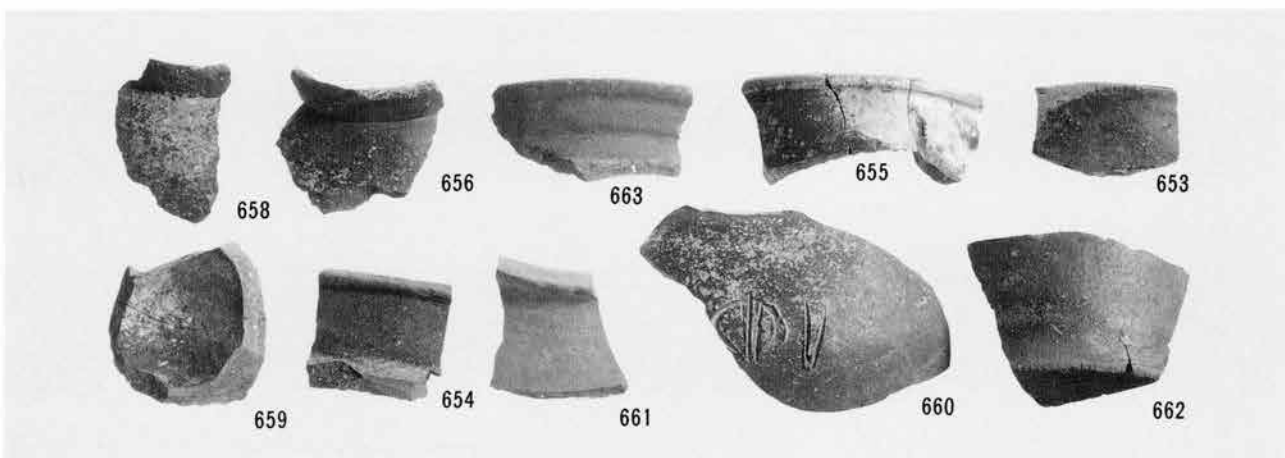


III期遺構面・整地層 越前焼 640・642・643・646～651

第51図 第24次調査遺物(10)

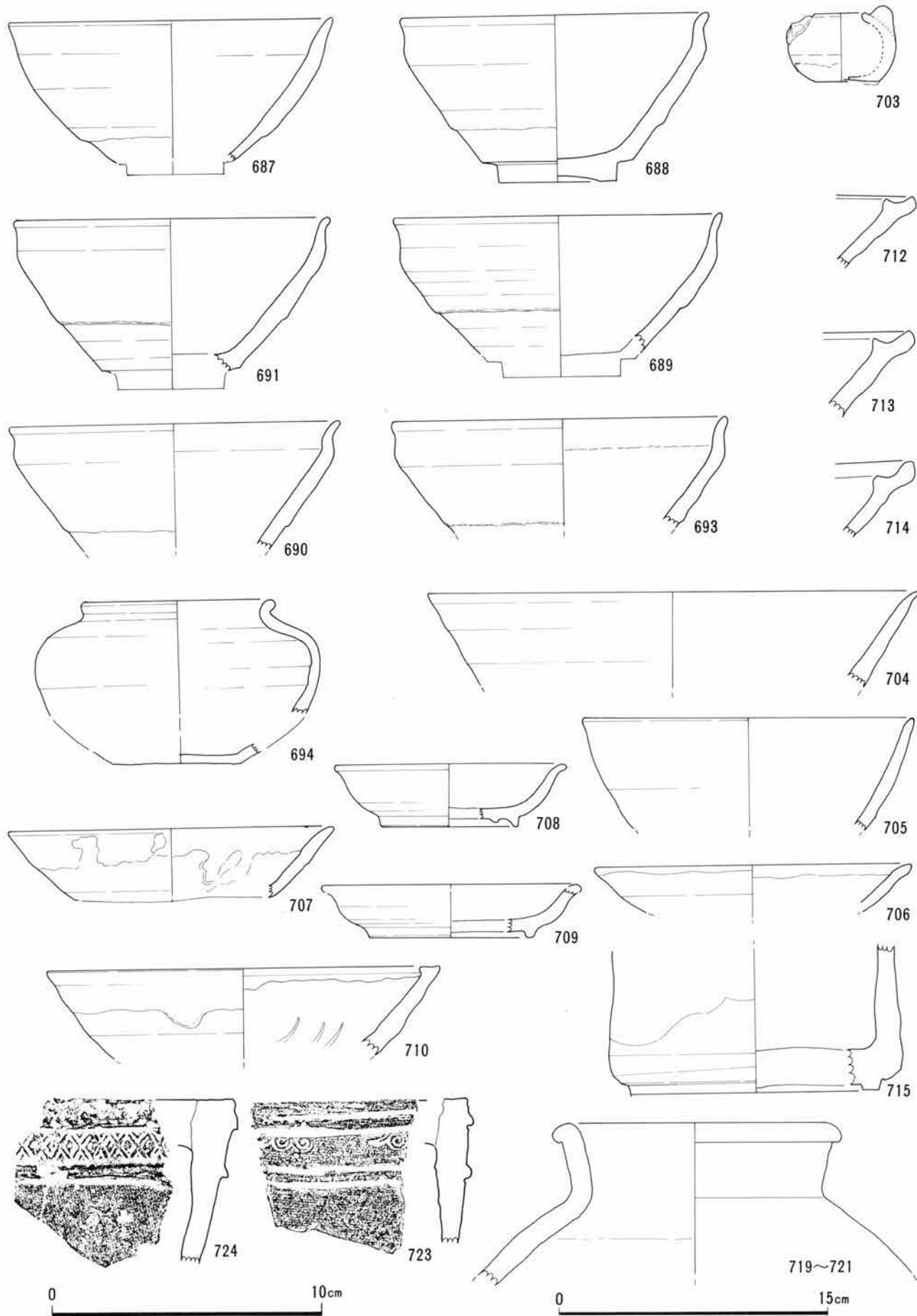


越前焼壺652・658・661・663 播鉢668・674・676・678

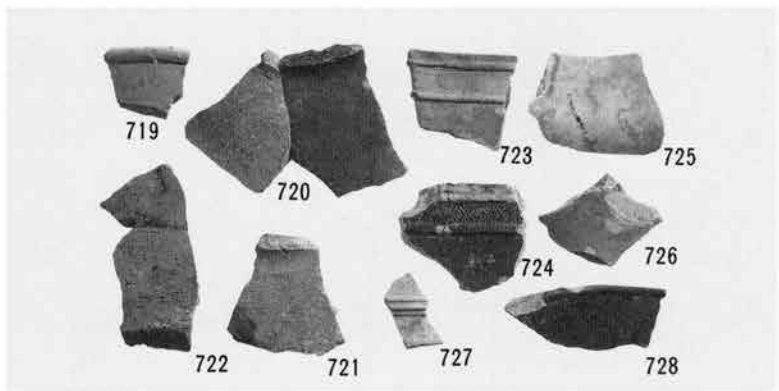
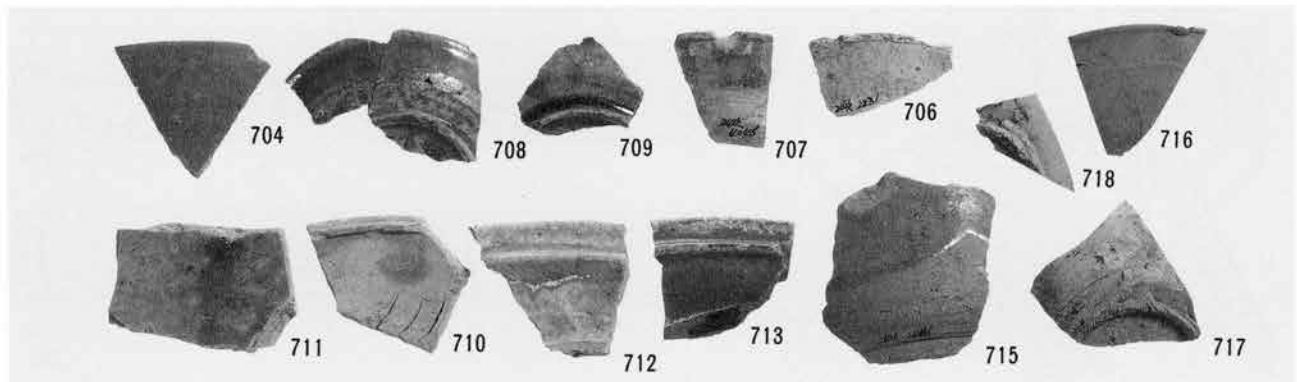
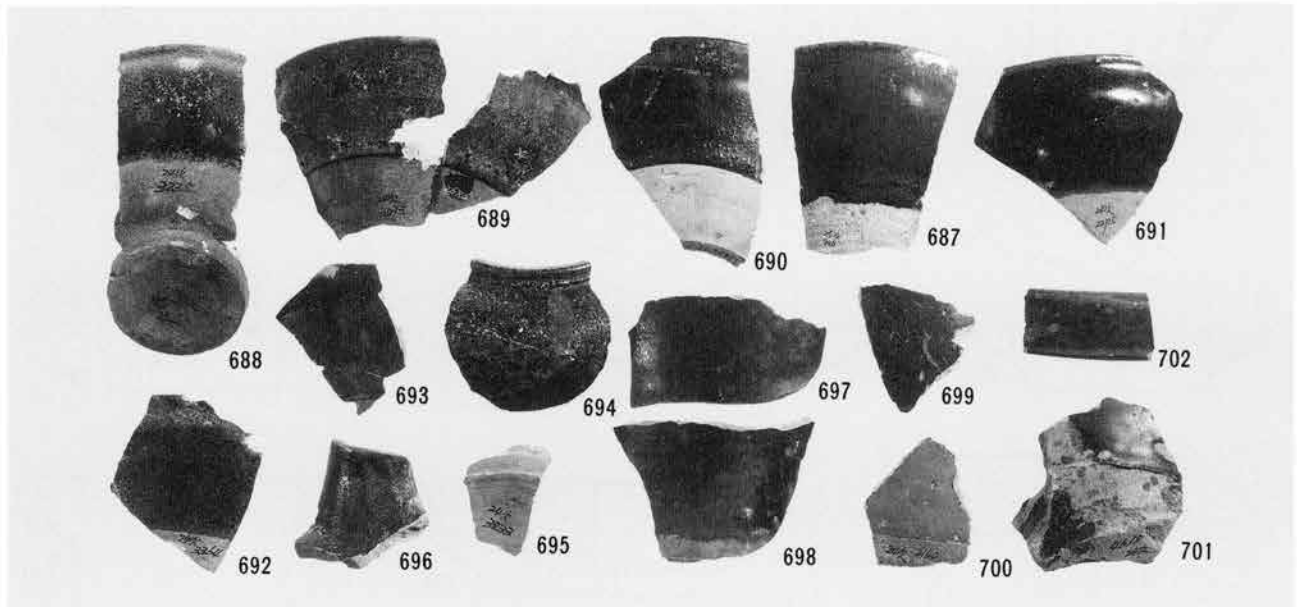
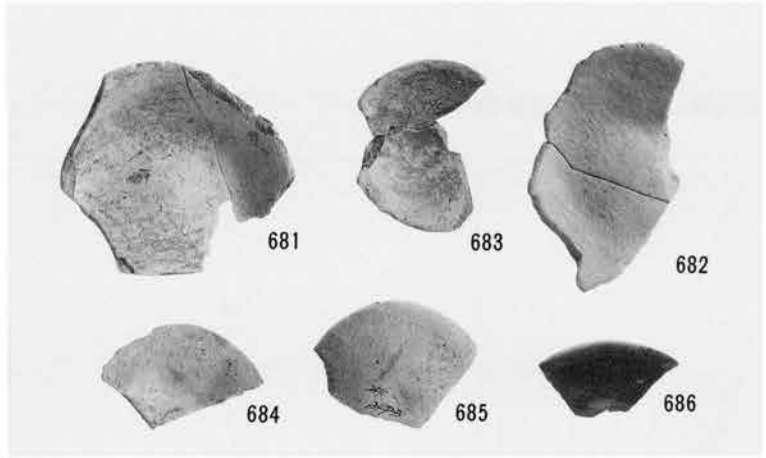
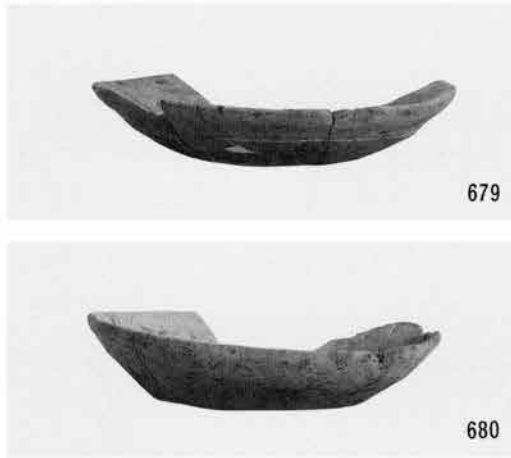


III期遺構面・整地層 越前焼壺652～663 鉢664～666 播鉢667～678

第52図 第24次調査遺物(11)

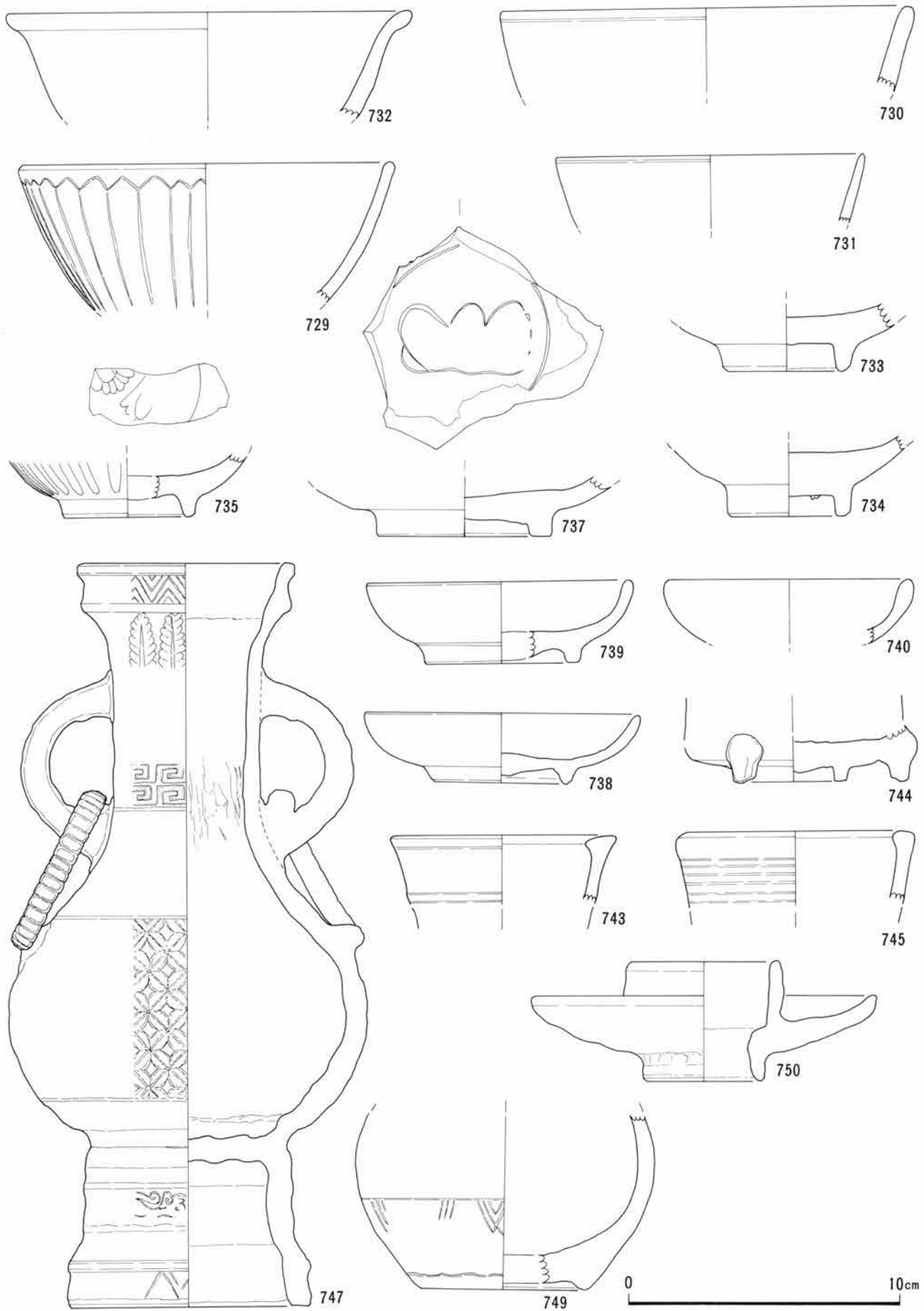


鉄釉碗687~691・693 小壺694 水滴703 灰釉鉢704 碗705 皿706~709 卸皿710 盤712~714 壺715 瓦質火鉢723・724
信楽壺719~721

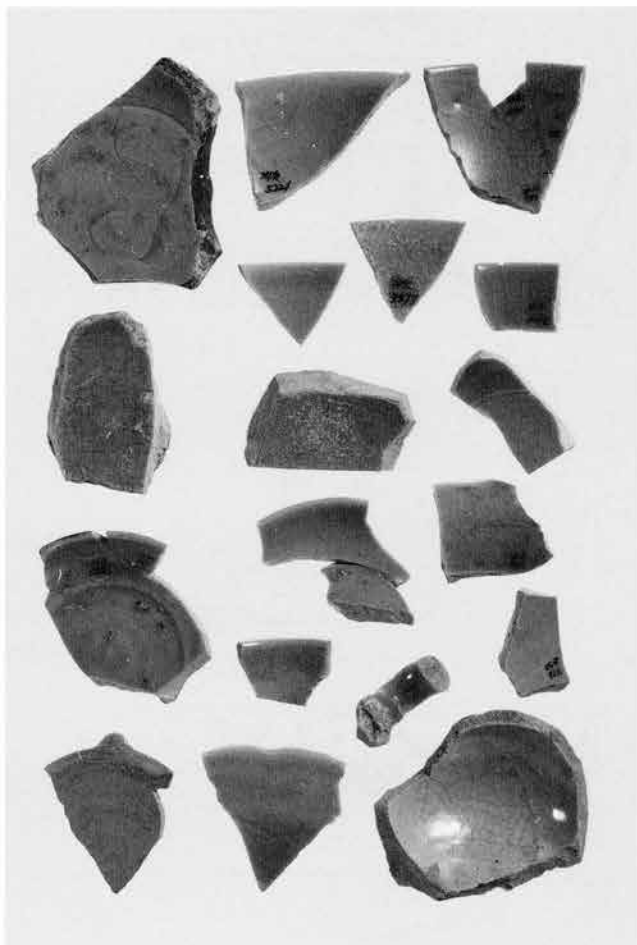
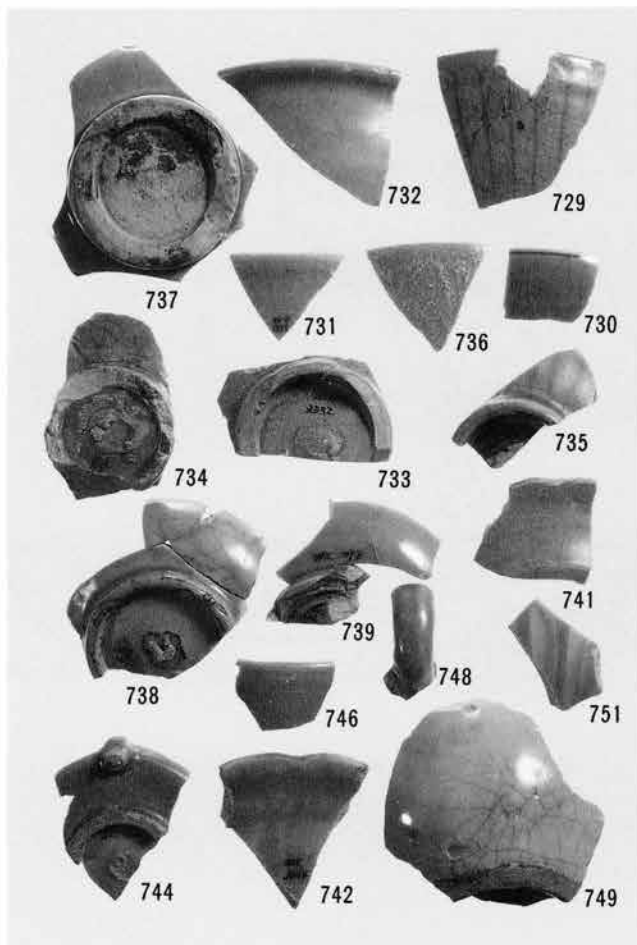


III期遺構面・整地層 土師質皿679~686 鉄釉碗687~693 小壺694・695 片口696 壺697~701 水注取手702 水滴703 灰釉鉢704 皿706~709 卸皿710 盤711~713 壺715 白瓷系碗716~718 信樂壺719~722 瓦質火鉢723・724 風炉725・726 花生727・728

第53図 第24次調査遺物(12)

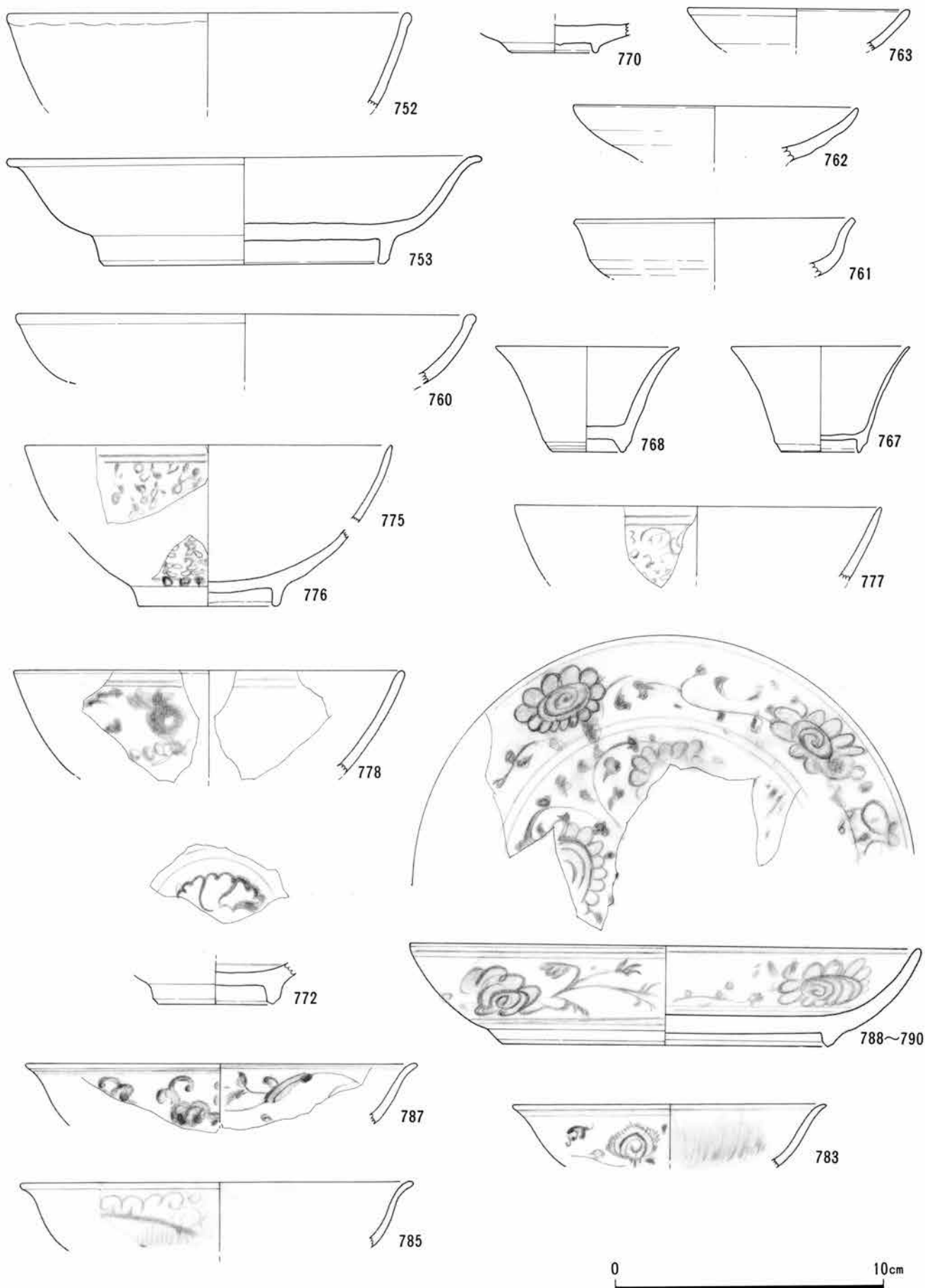


青磁碗729～735・737 皿738～740 香炉743～745 花生747・749 托750

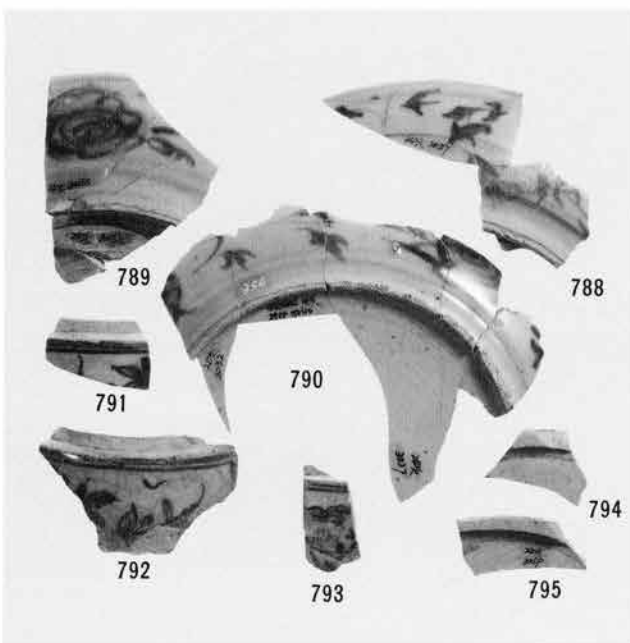
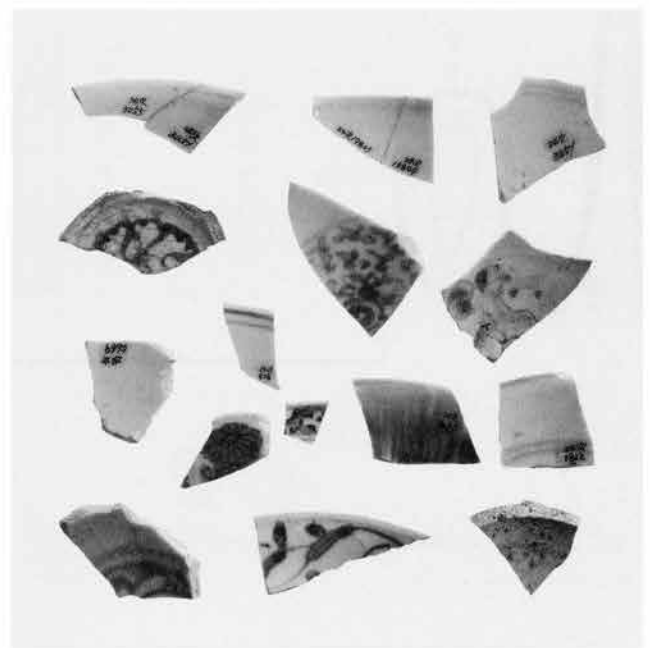
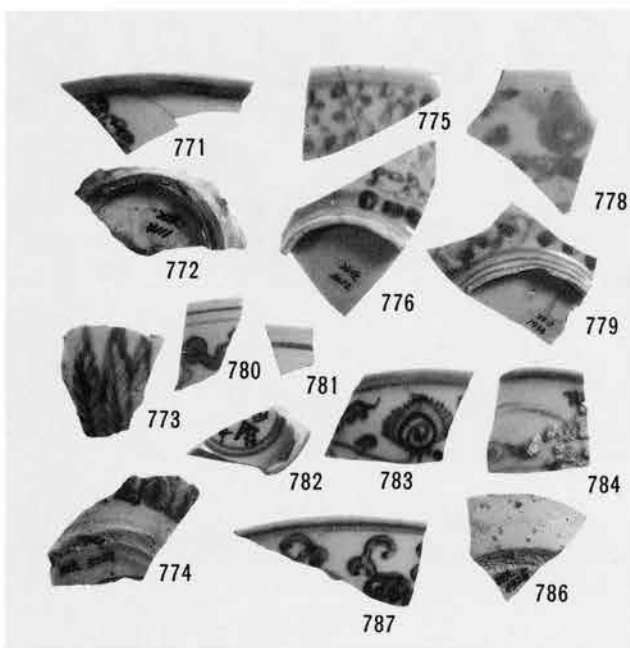
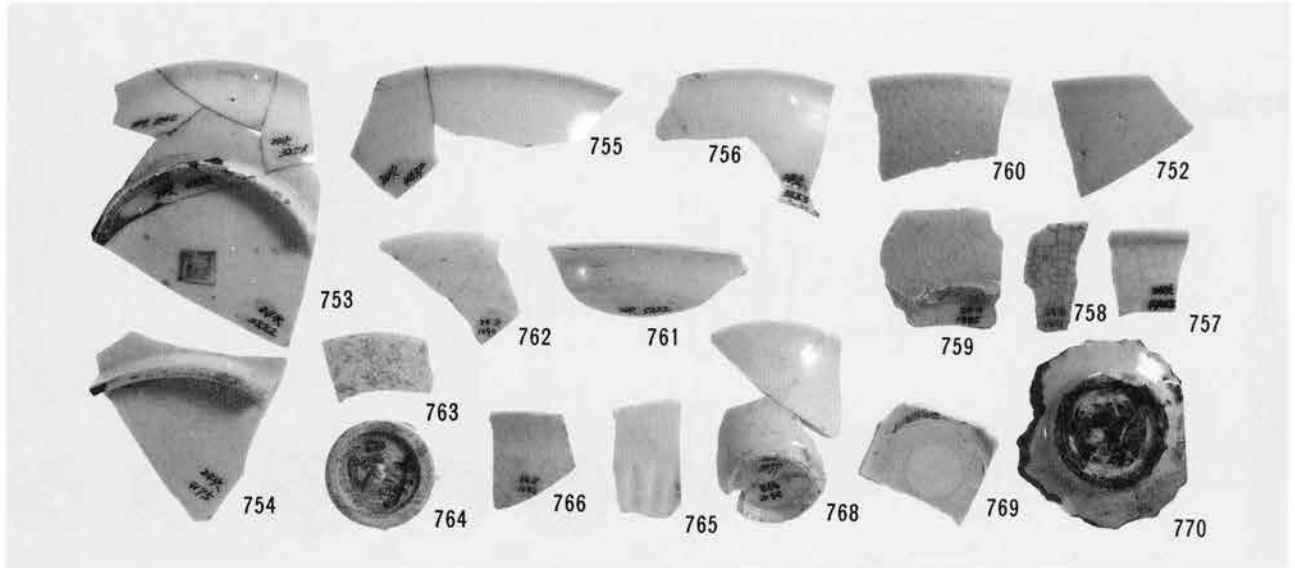


III期遺構面・整地層 青磁碗729~737 皿738・739・741 盤742 香炉744・746 花生747~749 托750 小壺751 白磁杯767

第54図 第24次調査遺物(13)

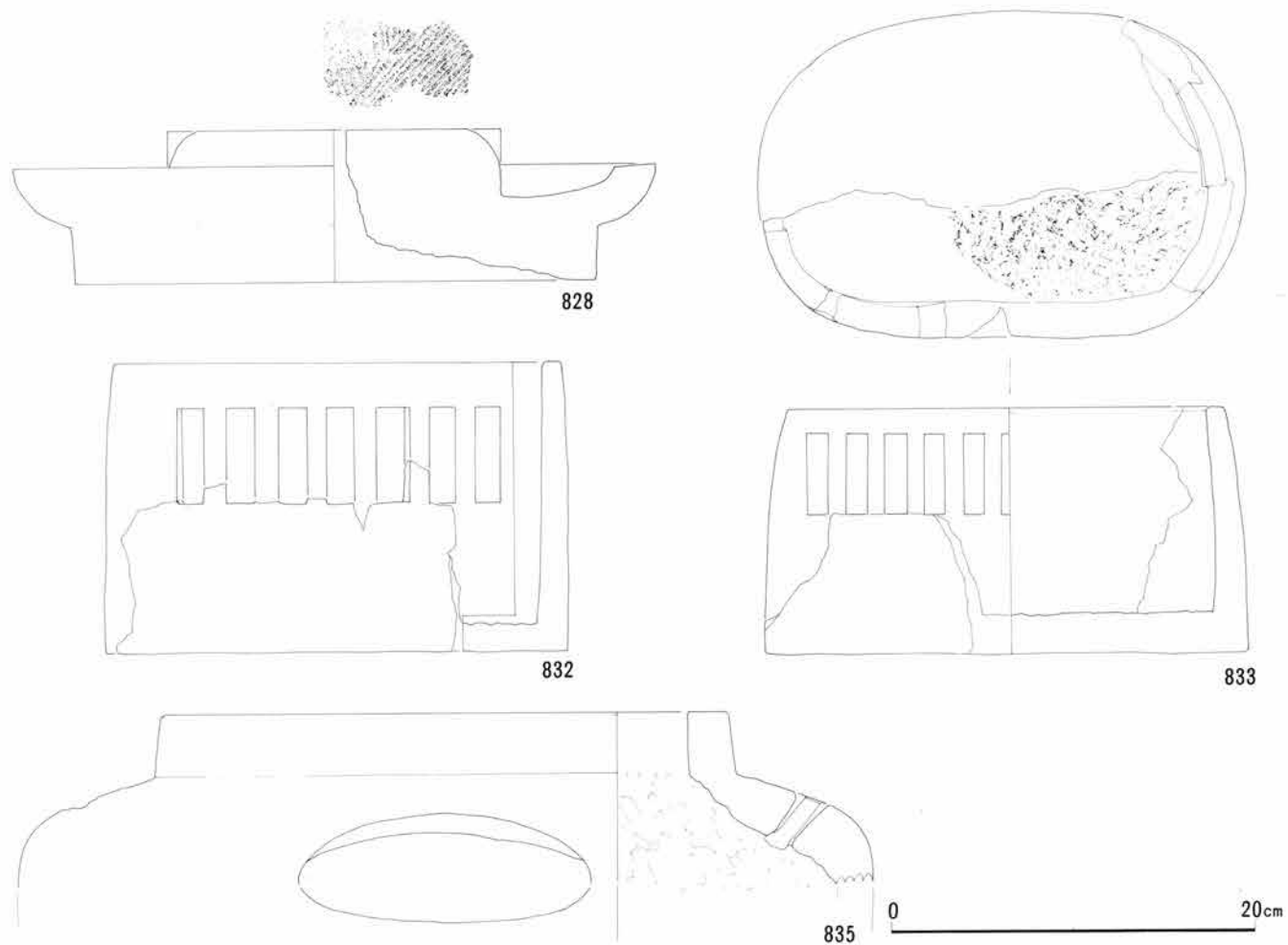
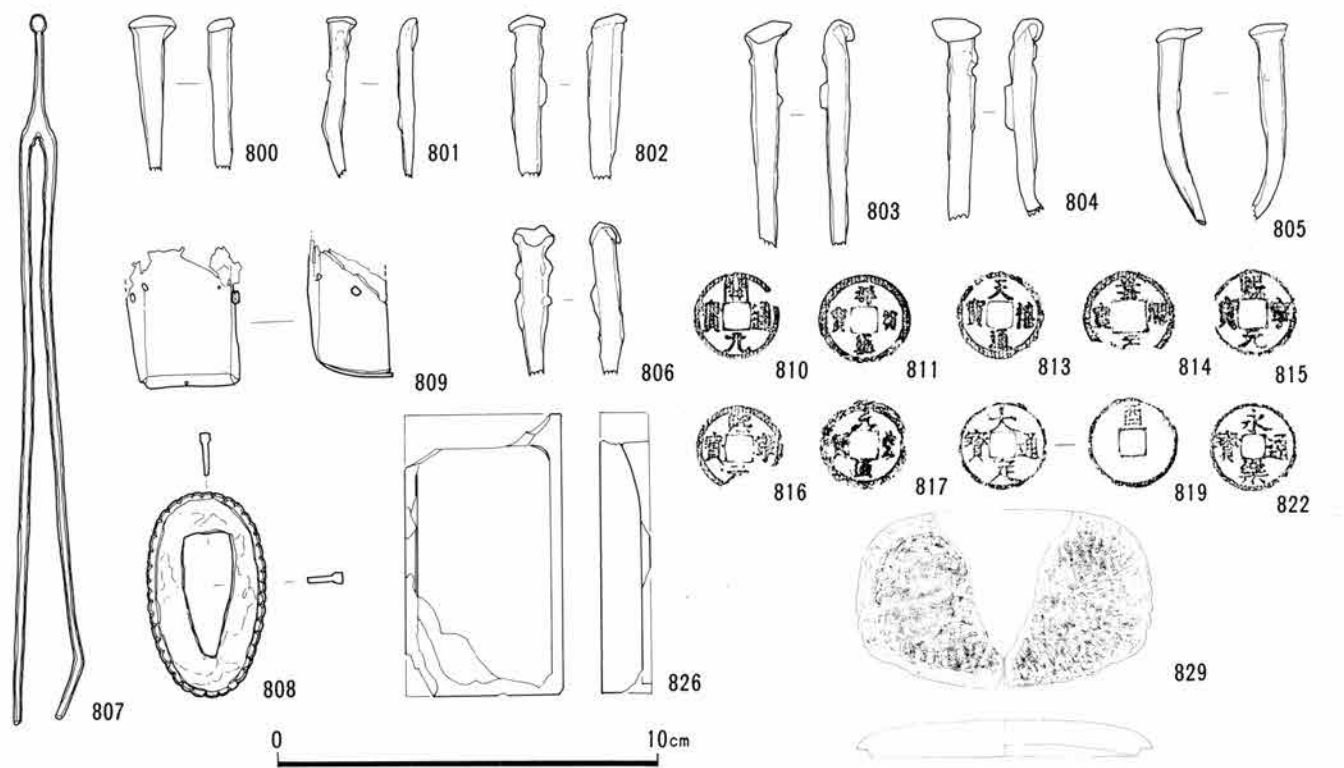


白磁碗752 皿753・760~763 杯767・768・770 染付碗772・775~778 皿783・785・787~790

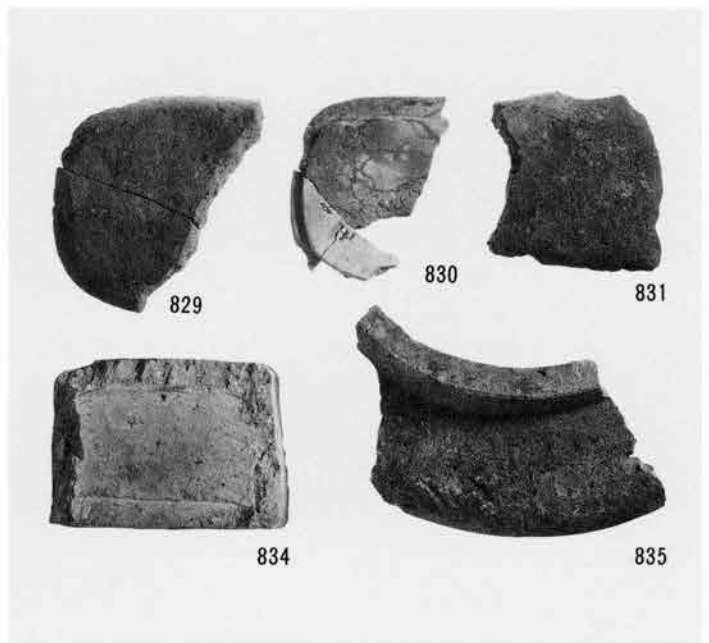
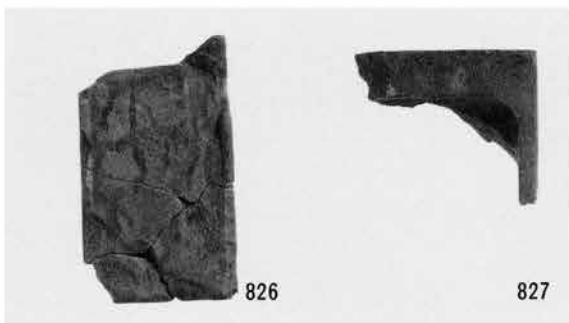
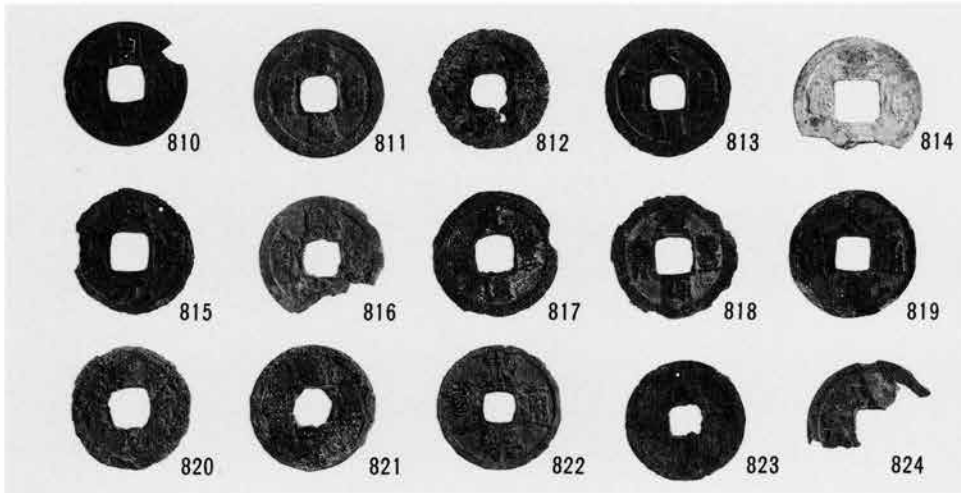
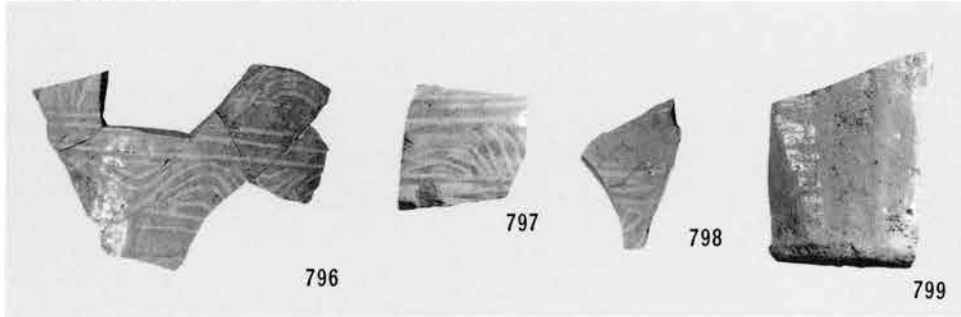


III期遺構面・整地層 白磁碗752 皿753~766 杯768~770 染付碗771~776・778~782 皿783・784・786~790 合子791~795

第55図 第24次調査遺物(14)



鉄製品 釘800~806 銅製品 かんざし807 切羽808 飾金具809 銭810・811・813~817・819・822 石製品 硯826 茶臼828
バンドコ829・832・833 風炉835



III期遺構面・整地層 朝鮮製陶磁器 象嵌壺796~799 銅製品かんざし807 切羽808 飾金具809 銭810~824 鉄鋳滓825
 石製品 硯826・827 茶臼828 バンドコ829~831・834 風炉835

平成5年3月20日 印刷
平成5年3月31日 発行

特別史跡

一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅳ

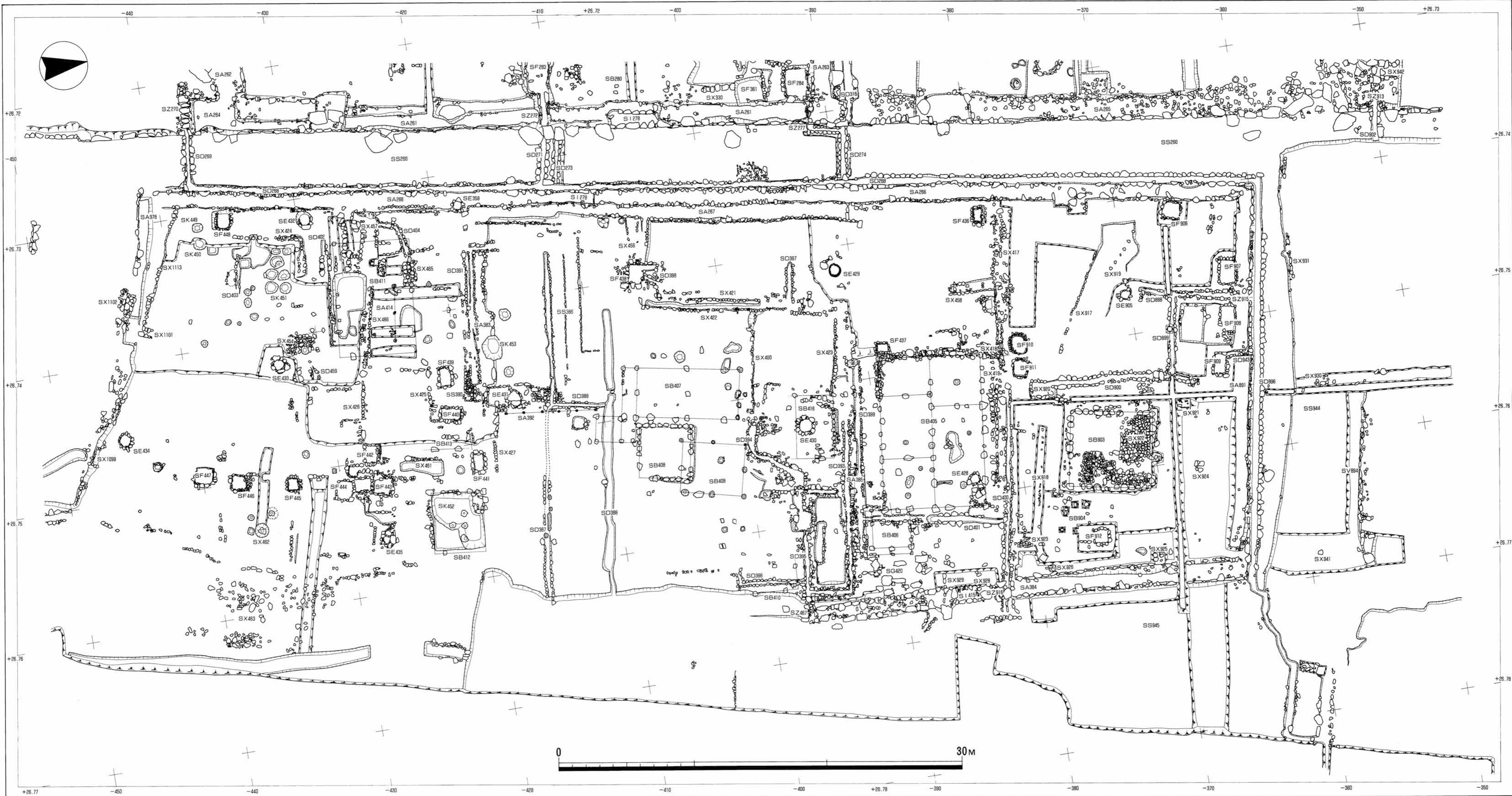
第15・25次、第24次調査

執筆・編集 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
発行 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
福井市安波賀町4-10
印刷 河和田屋印刷株式会社

特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡



付図2 第15・25次調査遺構全測図



付図3 第24次調査遺構全測図

